

目 录

本 经 上 品

人參..... (1)	巨胜子 (22)
甘草..... (4)	赤箭 (23)
黄芪..... (5)	干地黄 (24)
白朮..... (7)	麦门冬 (26)
苍朮(附) (9)	天门冬 (28)
薯蕷..... (9)	葳蕤 (29)
石斛 (11)	牛膝 (31)
酸枣仁 (13)	杜仲 (32)
大枣 (14)	枸杞 (34)
芡实 (15)	枸杞苗(附) (35)
莲实 (16)	地骨皮(附) (36)
莲花(附) (17)	枸杞子(附) (36)
莲蕊须(附) (18)	女贞子 (36)
莲房(附) (18)	五加皮 (37)
莲蕒(附) (19)	肉苁蓉 (39)
荷叶(附) (19)	巴戟天 (41)
荷鼻(附) (20)	五味子 (43)
薏苡仁 (20)	蛇床子 (44)
大麻仁 (21)	复盆子 (45)

菟丝子	(46)	桑寄生实(附)	(82)
沙参	(47)	柏子仁	(82)
泽泻	(49)	侧柏叶(附)	(84)
菖蒲	(51)	松脂	(85)
远志	(53)	松节(附)	(86)
细辛	(55)	松花(附)	(87)
柴胡	(57)	茯苓	(88)
升麻	(60)	赤茯苓(附)	(90)
桂	(62)	茯神(附)	(90)
羌活	(63)	茯苓皮(附)	(91)
防风	(65)	茯神木(附)	(91)
紫苏	(67)	蔓荆子	(92)
苏子(附)	(68)	小荆实(附)	(93)
苏枝(附)	(68)	槐实	(94)
橘皮	(69)	槐花(附)	(95)
青橘皮(附)	(71)	槐枝(附)	(96)
橘核(附)	(71)	槐叶(附)	(96)
橘叶(附)	(72)	槐胶(附)	(97)
辛夷	(72)	干漆	(97)
木香	(73)	黄连	(99)
续断	(74)	蒲黄	(101)
蒺藜	(76)	菊花	(102)
桑根白皮	(77)	茵陈	(103)
桑叶	(78)	天名精	(104)
桑枝(附)	(79)	鹤虱(附)	(105)
桑椹(附)	(80)	土牛膝(附)	(106)
桑花(附)	(80)	石龙刍	(106)
桑上寄生	(81)	车前子	(107)

冬葵子.....	(108)	太一余粮.....	(125)
地肤子.....	(109)	空青.....	(126)
决明子.....	(110)	紫石英.....	(127)
茺蔚子(附).....	(110)	白石英.....	(128)
茺蔚茎叶花穗 (即益母草).....	(111)	龙骨.....	(129)
丹砂.....	(112)	鹿茸.....	(131)
云母.....	(114)	鹿角胶.....	(132)
赤石脂.....	(114)	鹿角.....	(134)
滑石.....	(117)	牛黄.....	(135)
硝石.....	(118)	阿胶.....	(137)
消石、朴消.....	(119)	麝香.....	(139)
朴硝.....	(120)	龟甲.....	(140)
矾石.....	(121)	牡蛎.....	(142)
石胆(胆矾).....	(122)	桑螵蛸.....	(144)
石钟乳.....	(123)	蜂蜜.....	(145)
禹余粮.....	(124)	蜜蜡.....	(147)

本 经 中 品

玄参.....	(149)	紫草.....	(164)
丹参.....	(150)	泽兰.....	(165)
紫参.....	(151)	茜草根.....	(165)
白前根(附).....	(152)	秦艽.....	(166)
当归.....	(153)	防己.....	(167)
芍药.....	(155)	木通(通草).....	(170)
芎藭.....	(158)	葛根.....	(172)
牡丹.....	(160)	葛谷(附).....	(174)
地榆.....	(163)	葛花(附).....	(175)

葛叶(附)	(175)	赤小豆	(212)
葛蔓(附)	(175)	大豆黄卷	(213)
麻黄	(176)	白薇	(213)
白芷	(178)	败酱	(214)
荆芥	(179)	白鲜根皮	(214)
贝母	(181)	蓼实(附)	(215)
苍耳子	(183)	微衔	(216)
款冬花	(184)	土瓜根	(217)
紫苑	(188)	厚朴	(217)
知母	(188)	黄蘗	(220)
栝蒌根	(189)	梔子	(222)
瞿麦	(191)	杏仁	(224)
苦参	(192)	桃仁	(226)
青蒿	(193)	桃胶(附)	(228)
石苇	(194)	乌梅	(228)
海藻	(195)	枳实	(230)
水萍	(196)	枳壳(附)	(232)
草薺	(197)	山茱萸	(233)
白茅根	(198)	吴茱萸	(236)
狗脊	(199)	猪苓	(239)
淫羊藿	(200)	芫蕪	(241)
紫葳	(202)	皂荚	(242)
薤白	(203)	皂荚刺(附)	(243)
龙胆	(204)	皂荚子(附)	(243)
黄芩	(205)	肥皂荚(附)	(244)
藁本	(207)	秦皮	(244)
百合	(208)	薑竹叶	(245)
干姜	(209)	竹沥(附)	(246)

竹茹.....	(247)	蟹壳(附).....	(266)
石膏.....	(248)	炸蝉.....	(266)
磁石.....	(251)	蝉蜕(附).....	(267)
石硫黄.....	(252)	白僵蚕.....	(268)
阳起石.....	(253)	原蚕沙(附).....	(270)
雄黄.....	(254)	鸚鸡.....	(270)
雌黄.....	(255)	虻虫.....	(271)
水银.....	(256)	虻虫.....	(272)
铁落.....	(257)	蛞蝓.....	(273)
犀角.....	(258)	蜗牛.....	(274)
羚羊角.....	(261)	露蜂房.....	(274)
羖羊角.....	(262)	乌贼鱼骨.....	(275)
猬皮.....	(263)	文蛤.....	(277)
鳖甲.....	(264)	发鬣.....	(278)
蟹.....	(265)		

本 经 下 品

附子.....	(280)	天南星.....	(299)
天雄.....	(284)	大戟.....	(301)
乌头(附).....	(285)	泽漆.....	(302)
乌啄(附).....	(286)	常山.....	(304)
大黄.....	(286)	蜀漆.....	(305)
半夏.....	(289)	葶苈子.....	(306)
连翘.....	(292)	芫花.....	(308)
翘根.....	(294)	芫花.....	(310)
桔梗.....	(295)	蒹葭.....	(311)
白头翁.....	(297)	商陆根.....	(312)
甘遂.....	(298)	藜芦.....	(313)

旋复花.....	(314)	郁李仁.....	(333)
青箱.....	(315)	巴豆.....	(334)
贯众根.....	(317)	雷丸.....	(335)
蛇含草.....	(317)	代赭石.....	(335)
狼毒根.....	(318)	铅丹.....	(337)
狼牙根.....	(319)	铅粉.....	(339)
羊蹄根.....	(319)	戎盐.....	(339)
羊躑躅花.....	(320)	石灰.....	(340)
瓜蒂.....	(321)	天鼠屎.....	(341)
葇荑子.....	(322)	虾蟆.....	(342)
夏枯草.....	(324)	蜈蚣.....	(343)
蚤休.....	(326)	蚯蚓.....	(344)
白芨根.....	(327)	蛇蜕.....	(346)
白薇根.....	(328)	斑蝥.....	(347)
鬼白.....	(329)	螯螂.....	(348)
梓白皮.....	(330)	鼠妇.....	(349)
柳花.....	(330)	水蛭.....	(350)
柳叶(附).....	(331)	雀瓮.....	(351)
杨柳枝及根白皮(附)		萤火.....	(352)
.....	(332)	衣鱼.....	(354)

本 经 上 品

人 参

气味甘微寒，无毒。主补五脏，安精神、定魂魄、止惊悸、除邪气，开心、明目、益智。久服轻身延年。

张隐庵曰：人参气味甘美，甘中稍苦，故曰微寒。凡属上品，俱系无毒。独人参秉天宿之光华；钟地土之广厚；久而成人形，三才俱备，故主补人之五脏。脏者，藏也，肾藏精，心藏神，肝藏魂，肺藏魄，脾藏智。安精神、定魂魄，则补心肾肺肝之真气矣。夫真气充足，则内外调和，故止惊悸之内动，除邪气之外侵。明目者，五脏之精，上注于目也。开心者，五脏之神，皆主于心也。又曰益智者，所以主脾也。上品之药，皆可久服，兼治病也，补正气也。故人参久服，则轻身延年。

叶天士曰：人参气微寒，秉天秋令太阴之气，入手太阴肺金；味甘无毒，秉地中正之土味，入足太阴脾经。气厚于味，阳也。肺为五脏之长，百脉之宗，司清浊之运化，为一身之橐龠，主生气。人参气寒清肺，肺清则气自旺，而五脏俱补矣。

精者，阴气之光华；神者，阳气之英灵也。微寒清肺，肺旺则气足而神安。脾统血，人身阴气之源，味甘益脾，脾血充，则阴足而精安。“随神往来者谓之魂，并精出入者谓之魄”，精神安，魂魄自定矣。

气虚则易惊，血虚则易悸。人参益气，味甘益血，惊悸自止。“邪之所凑，其气必虚”，人参益气，正气充足，其邪气自不能留，故能除邪气。

五脏得甘寒之助，则精气上注于目，而明目矣。心者，神之处也，神安所以心开。肾者，精之舍也，精充则技巧出而智益。久服则气足，故身轻；气足则长生，故延年矣。

陈修园曰：《本经》只此三十七字，其提纲云：主补五脏，以五脏属阴也。精神不安、魂魄不定、惊悸不止、目不明、心智不足，皆阴虚亢阳所扰也。今五脏得甘寒之助，得有安之、定之、止之、明之、开之、益之之效矣。曰邪气者，非指外邪而言，乃阴虚而壮火食气，火即邪气也，今五脏得甘寒之助，则邪气除矣。

余细味经文，无一字言及温补回阳，故仲景于汗、吐、下阴阳之症，用之以救津液，而一切回阳方中，绝不加此阴柔之品，反缓姜附之功。故四逆汤、通脉四逆汤，为回阳第一方，皆不用人参。而四逆加人参汤，以其利止亡血而加之也；茯苓四逆汤用之者，以其在汗下之后也。今人侈云以人参回阳，此说倡自宋元以后，而大盛于薛立斋、张景岳、李仕才辈，而李时珍《本草纲目》，尤极杂沓，学者必于此等书焚去，方可与言医道。

仲景一百一十三方中，用人参者，只有一十七方。新加汤、小柴胡汤、柴胡桂枝汤、半夏泻心汤、黄连汤、生姜泻心汤、旋覆代赭石汤、干姜黄连黄芩人参汤、厚朴生姜半夏人参汤、桂枝人参汤、四逆加人参汤、茯苓四逆汤、吴茱萸汤、理中汤、白虎加人参汤、竹叶石膏汤、炙甘草汤，皆是因汗吐下之后，亡其阴津，取其救阴。如理中、吴茱萸汤，以刚燥剂中阳药太多，取人参甘寒之性，养阴配阳，以臻于中和之妙也。

又曰：自时珍之《纲目》盛行，而神农之《本草经》遂废。即如人参《本经》明说微寒，时珍说生则寒、熟则温，附会之甚。盖药有一定之性，除是生捣取汁冷服，与蒸晒八、九次色味俱变者，

颇有生熟之辨；若入煎剂，则生者亦熟矣。况寒热本属冰炭，岂一物蒸熟不蒸熟间，遂如许分别乎？尝考古圣用参之旨，原为扶生气安五脏起见，而为五脏之长、百脉之宗、司清浊之运化、为一身之橐龠者，肺也。人参微寒清肺，肺清则气旺，气旺则阴长，而五脏安。古人所谓补阳者，即指其甘寒之用，不助壮火，以食气而言，非谓其性温补火也。

陶宏景谓“功同甘草”，凡一切寒温补泻之剂，皆可共济成功。然甘草功兼阴阳，故《本经》云“主五脏六腑”。人参功专补阴，故《本经》云“主五脏”。仲景于咳嗽病去之者，亦以形寒饮冷之伤，非此阴寒之品所宜也。

黄杰熙评：张、叶、陈三大名医，遵经注解，曲尽其妙，注不破经，好古典范。然《本经》相传为神农所作，据历代考证，实系后人假托，可能是东汉末的作品，经魏吴普辑述，始成专著，宋时已经散佚。惟历代各书，多有引据，今之《神农本草经》，乃从各书辑出而成，有4种不同辑本，即明卢复本、清顾观光本、清孙星衍本，以及日本人森立辑本等。古经重辑，难免不出讹误。今人出一书，经过再一、再二、再三校对，仍有错别讹漏字出现，可以互证。

《本经》云“人参味甘微寒”，实则味甘苦性温，何也？阳热之人服之很快口鼻干燥、眼睛充血、头晕，多服久服脱头发；阴寒之人服之，如雪里送炭，身体温暖，神清气爽。到底是性寒，还是性温，此则可证。

《说文》云“参、人参，药草，出上党。”党参味甘苦性微温，可见古之人参出上党，非辽东也。余行医近50年，治过的病人以10万计，人次则要加几倍，该用人参之处方应有几万张，除几张处方用过人参外，其余皆以党参代之，疗效非常满意，可证古之人参即今之党参也。

遵经注解，曲尽其妙，说明功底深厚，甚至炉火纯青。但过

于迷信神人、圣人，属教条主义，缺乏开拓进取精神。三位大儒医，忘了孟子“尽信书，不如无书”的教导。

甘 草

气味甘平无毒，主五脏六腑寒热邪气，坚筋骨、壮肌肉、倍气力、金疮肿解毒。久服轻身延年。

张隐庵曰：甘草味甘，气得其平，故曰甘平。《本经》凡言平者，皆谓气得其平也。主治五脏六腑之寒热邪气者：五脏为阴，六腑为阳；寒病为阴，热病为阳。甘草味甘，调和脏腑，通贯阴阳，故治理脏腑阴阳之正气，以除寒热阴阳之邪气也。

坚筋骨、壮肌肉、倍气力者，坚肝主之筋、肾主之骨；长脾主之肌肉；倍肺主之气、心主之力。五脏充足，则六腑自和矣。金疮乃刀斧所伤，因金伤而成疮。金疮肿，乃因金伤而高肿也；解毒者，解高肿无名之毒。土性柔和，如以毒物埋土中，久则无毒矣。脏腑阴阳之气，皆归土中，久服则土气有余，故轻身延年。

叶天士曰：甘草气平，秉天秋凉之金气，入手太阴肺；味甘无毒，秉地和平之土味，入足太阴脾经。气降味升，阳也，肺主气，脾统血，肺为五脏之长，脾为万物之母，味甘可以解寒，气平可以清热。甘草甘平，入肺入脾，所以主五脏六腑寒热邪气也。

肝主筋，肾主骨，肝肾热则筋骨软。气平入肺，平肝生肾，筋骨自坚矣。

脾主肌肉，味甘益脾，肌肉自长；肺主周身之气，气平益肺，肺益则气力自倍矣。

金疮热则肿，气平则清，所以治肿。味甘缓急，气平清热，故又解毒。久服肺气清，所以轻身；脾气和，所以延年也。

陈修园曰：物之味甘者，至甘草为极。甘主脾，脾为后天之本，五脏六腑，皆受气焉。脏腑之本气则为正气，外来寒热之气，

则为邪气，正气旺则邪气自退矣。

筋者，肝所主也；骨者，肾所主也；肌肉者，脾所主也；力者，心所主也，但使脾气一盛，则五脏皆循环受益，而得其坚之、壮之、倍之之效矣。

金疮者，乃刀斧所伤而成疮，疮甚而肿，脾得补而肉自满也。能解者，如毒物入土，则毒化也。土为万物之母，土健则轻身延年也。

黄杰熙评：张氏据经文，一一平铺注释；叶氏突出肺脾二经以解经文；陈氏综合张、叶二氏之精华，突出于脾土以解经文。三氏皆据《内经》之义以解《本经》，理出正统，阐发精微，完全可遵，但尤未达到化境，剩有余蘊，请参阅余评注之《本草问答评注》，自能得其全。比较之下，陈氏似“继往者易成，后来者居上”。

黄 芪

气味甘微温无毒，主痈疽久败疮，排脓止痛，大风，癩疾，五痔鼠瘻，补虚，小儿百病。

张隐庵曰：黄芪色黄，味甘微温，秉火土相生之气化。土主肌肉，火主经脉，故主治肌肉之痈，经脉之疽也。痈疽日久，正气衰微，致三焦之气，不温肌肉，则久为败疮。黄芪助三焦出气，以温肌肉，故可治也。痈疽未溃，化血为脓，痛不可忍，黄芪补气助阳，阳气化血而排脓，脓排则痛止。

大风癩疾，谓之疔疡，乃风气客于脉而不去，鼻柱坏而色败，皮肤溃癩者是也；五痔者，牡痔、牝痔、肠痔、脉痔、血痔，是热邪淫于下也；鼠瘻者，肾脏水毒上淫于脉，至颈项溃肿，或空或凸，是寒邪客于上也。夫癩疾五痔鼠瘻，乃邪在经脉，而证见肌肉皮肤，黄芪内资经脉，外至肌肉，是以三证咸宜。

又曰补虚者，乃补正气之虚，而经脉调和，肌肉充足也。小儿经脉未盛，肌肉未盈，血气皆微，故治小儿百病。

叶天士曰：黄芪微温，秉天春升少阳之气，入足少阳胆经、手少阳三焦经；味甘无毒，秉地和平之土味，入足太阴脾经。气味俱升，阳也。脾主肌肉，甘能解毒，温能生肌，所以主痈疽久败疮，排脓生肌也。

风湿热壅于经脉筋肉中，则筋坏肉败，而成大麻疯癩疾矣。脾主湿，胆主风，三焦主热，“邪之所凑，其气必虚”，黄芪甘温，补益血气，故治癩疾也。肠癖为痔，肠者，手阳明也，太阴脾为阳明行津液者也，甘温益脾，脾健运，则肠癖行而痔愈也。鼠痿者，瘰疬也，乃少阳经风热郁毒，黄芪入胆与三焦，甘能解毒，温能散郁，所以主之。

人生之虚，万有不齐，不外乎气血二端。黄芪气味甘温，温之以气，所以补形之不足也；补之以味，所以益精之不足也。小儿稚阳也，稚阳为少阳，少阳生气条达，小儿何病之有！黄芪入少阳，补生生之元气，所以概主小儿百病也。

陈修园曰：黄芪气微温，秉少阳之气，入胆与三焦；味甘无毒，秉太阴之味，入肺与脾。

其主痈疽者，甘能解毒也。久败之疮，肌肉皮毛溃烂，必脓多而痛甚，黄芪入脾而主肌肉，入肺而主皮毛也。

大风者，杀人之邪风也。黄芪入胆而助中正之气，俾神明不为风所乱；入三焦而助决渎之用，俾窍道不为风所壅；入脾而救受克之伤；入肺而制风木之动，所以主之。癩疾，又名大麻风，即风毒之盛也。

五痔者，五种之痔疮，乃少阳与太阴之火陷于下，而此能举其陷。鼠痿者，瘰疬之别名，乃胆经与三焦之火郁于上，而此能散其郁也。

其曰补虚者，是总结上文，诸证久而致虚，此能补之，非泛

言补益之品也。余细味经文，俱指表证而言。如六黄汤，寒以除热，热除则汗止；芪附汤，温以回阳，阳回则汗止；玉屏风散之散以驱风，风平则汗止。诸方皆藉黄芪走表之力，领诸药速达于表而止汗，非黄芪自能止汗也。诸家固表，及生用发汗，炒用止汗等说，贻误千古，兹特正之。

黄杰熙评：三家之注，皆从气味入手。张氏则归土与经脉；叶氏归三焦胆与足太阴；陈氏归太阴与三焦胆，义颇相近。陈氏补入手太阴肺，似后来居上，及末论“补虚”，却具一些发明。但三家始终不明“水即气也”，黄芪补益之力在于使膀胱之水化为气，循三焦外出为卫气；上于胸为大气，肺行呼吸赖此气之力也。气足血行，血气流畅，所列诸病自退矣。卫气充则表实，所以黄芪有补表、实表、固表之力。表虚夹热而自汗出者，配以凉药可止汗；表虚夹寒而自汗出者，配以热药可止汗；表虚夹风而自汗出者，配以祛风药可止汗等等。所以陈氏之说，对者固多，然欠透达全面。

白 术

气味甘温无毒，治风寒湿痹、死肌、疮疽，止汗、除热、消食。作煎饵久服，轻身延年不肌。

张隐庵曰：白术气味甘温，质多脂液，乃调和脾土之药也。主治风寒湿痹者，《素问·痹论》云：“风寒湿三气杂至，合而为痹。”白术味甘性温，补益脾土，土气运行，则肌肉之气外通皮肤，内通经络，故风寒湿之痹症皆可治也。

夫脾主肌肉，治死肌者，助脾气也。脾主四肢，疮者，四肢强而不和；脾主黄色，疽者，面目黄而土虚，白术补脾，则疮疽可治也。

止汗者，土能胜湿也；除热者，除脾土之虚热也；消食者，助

脾土之转运；作煎饵者，言白术多脂，又治脾土之燥，作煎饵则味甘温而质滋润，土气和平矣！故久服则轻身延年不饥。

愚按：太阴主湿土而属脾，为阴中之至阴，喜燥恶湿，喜温恶寒。然土有湿气，始能灌溉四方，如地得雨露，始能发生万物，若过于炎燥，则止而不行，为便难脾约之症。白术作煎饵，则燥而能润，温而能和，此先圣教人之苦心，学者所当体会者也。

叶天士曰：白术气温，秉天阳明燥气，入足阳明胃经；味甘无毒，秉地中正之土味，入足太阴脾经。气味皆升，阳也。

风寒湿三者合成痹，痹者，拘挛而麻木也。盖地之湿气，感则害人皮肉筋骨也。死肌者，湿邪侵肌肉也；痉者，湿流关节而筋劲急也；疸者，湿乘脾土，肌肉发黄也，皆脾胃湿症，术性燥味甘，所以主之。胃土湿，则湿热交蒸而自汗发热，术性燥湿，故止汗除热也。脾者，为胃行其津液者也，脾湿则失其健运之性，而食不消矣，术性温益阳，则脾运而食消也。煎饵久服，则胃气充足，气盛则身轻，气足则不饥，气纳则延年，所以轻身延年不饥也。

陈修园曰：此为脾之正药，其为风寒湿痹者，以风寒湿三气合而为痹也。三气杂至，以湿为主，死肌者，湿侵肌肉也；痉者，湿流关节也；疸者，湿郁而为热，热则发黄也。湿与热交蒸，则自汗而发热也。脾受湿则失其健运之常，斯食不能消也。白术功在除湿热，所以主之。

作煎饵三字另提，先圣大费苦心，以白术之功在燥，而所以妙处在于多脂。张隐庵曰：“土有湿气，始能灌溉四旁，如地有雨露，始能发生万物。”今以生术刮去皮，急火炙至熟，则味甘温而质滋润，久服有延年不饥之效。可见今之炒熟、炒黑、土蒸、水漂等制，大失经旨。

黄杰熙评：白术甘温无毒，而多油脂，甘则归脾经，温则驱寒兴阳，合为补脾阳燥湿之品。而三焦网油上之油，乃脾之物，此

油润之脂正可补之。油可涤水垢，今之肥皂猪胰皂之类，乃油脂作成，可以为证。虽三家之解可取，惟对三焦网油不知，实属遗憾。

苍 术 (附)

· 气味苦温无毒，主治风寒湿痹，死肌，痲瘰，除热消食。作煎饵，久服轻身，延年不饥。（《别录》）

张隐庵曰：白术性优，苍术性劣，凡欲补脾，则用白术；凡欲运脾，则用苍术；欲补运相兼，则相兼而用。如补多运少，则白术多而苍术少；运多补少，则苍术多而白术少，品虽有二，实则一也。《本经》未分苍白，而仲祖《伤寒》方中，皆用白术，《金匱》方中，又用赤术，至陶宏景《别录》则分而为二。须知赤白之分，始于仲祖，非宏景始分之也。赤术即是苍术，与白术功用略同，故仍以《本经》“术”之主治为本。故白术味甘，苍术味苦；白术止汗，苍术发汗，故“止汗”二字节去不录。后人谓苍术之味苦，其实苍术之味甘而微苦也。

黄杰熙评：苍白二术实则皆甘苦微辛性温，而苍术之辛燥气大于白术，燥湿之功雄于白术，使湿化为汗而外解。仲景《伤寒》《金匱》皆用白术，不用赤术即苍术，取其性纯良也。至刘宋时陶宏景总结前代名医用药经验始分苍、白二术，《本经》只言“术”而苍白不分。

张氏之解含混不清，欲明反晦，欲精反粗。

薯 蕷

· 味甘平无毒，主伤中，补虚羸，除寒热邪气，补中

益气力，长肌肉，强阴。久服耳目聪明，轻身不饥延年。

张隐庵曰：山药气味甘平，始出中岳，得中土之专精，乃补太阴脾土之药。故主治之功，皆在中土。治伤中者，益中土也；补虚羸者，益肌肉也；除寒热邪气者，中土调和，肌肉充足，则寒热邪气自除矣。夫治伤中则可以补中而益气力，补虚羸则可以长肌肉而强阴，阴强则耳目聪明，气力益则身体轻健。土气有余，则不饥而延年。

叶天士曰：薯蕷气温平，秉天春升秋降之和气，入足厥阴肝经、手太阴肺经；味甘无毒，秉地中正之土味，入足太阴脾经。

气升味和，阳也。脾主中州而统血，血者阴也，中之守也，甘平益血，故主伤中。脾主肌肉，甘温益脾，则肌肉丰满，故补虚羸。肺主气，气虚则寒邪生；脾统血，血虚则热邪生，气温益气，味甘益血，血气充则寒热邪气除矣。脾为中州，血为中守，甘平益脾血，所以补中。脾主四肢，脾血足则四肢健，肺气充则气力倍也。

阴者，宗筋也。宗筋属肝，气温秉春升之阳，所以益肝而强阴也。久服气温益肝，肝开窍于目，目得血则明；气平益肺而生肾，肾开窍于耳，耳得血则聪。味甘益脾，脾气充则身轻；脾血旺则不饥，气血调和，故延年也。

陈修园曰：此药因唐太宗名蕷，避讳，故改为山药，生捣最多津液而稠粘，能补肾填精，精足则阴强，目明耳聪。不饥，是脾血之旺，身轻是脾气之充，延年是夸其补益之效也。

凡上品俱是寻常服食之物，非治病之药，故神农另提出“久服”二字，可见今人每取上品之药如此物及人参、熟地、阿胶、蕤蕤、菟丝子、沙苑蒺藜之类，合为一方，以治大病，误人无算。

盖病不速去，元气日伤，伤极则死。凡上品之药，法宜久服，多则终身，少则数年，与五谷之养人相佐，以臻寿考。若大病而需用此药，如五谷为养脾第一品，脾虚之人，强令食谷，即可毕

补脾之能事，有是理乎？然操此术者，未有不得盛名，薛立斋、张景岳、冯楚瞻辈倡之于前，而近日之东延西请，日诊百人者，无非是术，良可慨也。

黄杰熙评：张、叶二氏之斛平易无奇；陈氏之斛有矫枉过正之弊。盖山药色白补肺气；味甘补脾阴；多汁而稠粘，补肾精益肝阴，总之，为滋阴益气之品。若虚羸气少而喘促者，重用之，亦可扶危救颠，余累用之，皆获奇效。

若不虚而用之，如锦上添花，怎么能显现出来。陈氏连同所有上品，一概鄙弃之，实属过分，不可取。

石 斛

气味甘平无毒，主伤中，除痹下气，补五脏虚劳羸瘦，强阴益精。久服厚肠胃。

张隐庵曰：石斛生于石上，得水长生，是秉水石之专精而补肾；味甘色黄，不假土力，是夺土中之气化而补脾。斛乃量名，主出主入。治伤中者，运行其中土也。除痹者，除皮肤脉肉筋骨五脏外合之痹证。

夫治伤中则下气，言中气调和，则邪气自下矣。除痹则补五脏虚劳羸瘦，言邪气散除，则正气强盛矣。脾为阴中之至阴，故曰强阴。肾主藏精，故曰益精。久服则土气运行，水精四布，故厚肠胃。

《本经》上品，多主除痹，不曰风寒湿，而但曰痹者，乃五脏外合之痹也。盖皮者肺之合；脉者心之合，肉者脾之合，筋者肝之合，骨者肾之合，故除痹即所以除五脏之虚劳羸瘦，是攻邪之中而有补益之妙用。治伤中即所以下气，是补益之中而有攻邪之神理也。

叶天士曰：石斛性平，秉天秋降之金气，入手太阴肺经；味

甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经；甘平为金土之气味，入足阳明胃经、手阳明大肠经。

气降味和，阴也。阴者中之守也，阴虚则伤中，甘平益阴，故治伤中。痹者，闭也，血枯而涩，则麻而痹，甘平益血，故又除痹。肺主气，肺热则气上，气平肺清，所以下气。

五脏藏阴者也，阴虚则五脏俱虚，而不胜作劳，劳则愈伤其元气矣。五脏之阴，脾为之厚，脾主肌肉，故五脏虚劳，肌肉消瘦也，甘平益阴，所以主虚劳而生肌肉也。

阴者，宗筋也，太阴阳明之所合也，石斛味甘益脾胃，所以强阴。精者，阴气之精华也，甘平滋阴，所以益精。肠者手阳明大肠也，胃者足阳明胃也，手足阳明属燥金，燥则阳明薄矣，久服甘平清润，则阳明不燥，而肠胃厚矣。

陈修园曰：痹者脾病也，风寒湿三气，而脾受于先，石斛甘能补脾，故能除痹。上气肺病也，火气上逆，则为气喘，石斛平能清肺，故能下气。五脏皆属于阴，而脾为至阴，为五脏之主，石斛补脾而荫及五脏，则五脏之虚劳自复，而肌肉之消瘦自生矣。阴者，宗筋也，精足则阴自强；精者，阴气之精华也，纳谷多，则精自储也。

黄杰熙评：张氏能从石斛之所生入手，是抓住了药性之根本。论痹能列风寒湿三痹之范围，列立五脏外合之痹，是合乎此药之治疗特性，故张氏之论合乎实际与创造性。

叶氏之论在归经上是全面周到的，能从“血枯而涩”上阐发痹证，可补张氏论痹之不足，落实了此痹专在血分上，实属难能可贵之好注。张叶二氏其他各论颇相近，亦切实。

陈氏之注此条之痹，守教条与实际不合，不可取。上气、水火之气上逆，皆可形成气喘，不单火气也。其他各注与张叶二氏，大同小异，故可相互参考，无多大发明。

酸 枣 仁

气味酸平无毒，主治心腹寒热，邪结气聚，四肢酸痛湿痹。久服安五脏，轻身延年。

张隐庵曰：枣肉味酸，肝之果也，得东方木味，能达肝气上行，食之主能醒睡。

枣仁形圆色赤，秉火土之气化，火归土中，则神气内藏，食之能主寤寐。《本经》不言用仁，而今人多用之。

心腹寒热，邪结气聚者，言心腹不和，为寒为热，则邪结气聚。故枣仁赤象心，能导心气以下交；肉黄象土，能助脾气以上达，故心腹之寒热邪结气聚可治也。

土气不达于四肢，故四肢酸痛；火气不温于肌肉，故周身湿痹，枣仁秉火土之气化，故四肢酸痛，周身湿痹可治也。

久服安五脏轻身延年，言不但心腹和平，且能安五脏也。五脏既安，则血气日益，故又可轻身延年。

叶天士曰：枣仁气平，秉天秋敛之金气，入手太阴肺经；味酸无毒，得地东方之木味，入足厥阴肝经、手厥阴风木心包络经。气味俱降，阴也。心者胸膈之分，手厥阴心包络脉起之处；腹者中脘之分，足厥阴肝经之地，心包络主热，肝主寒，厥阴主散，不能散则寒热邪结气聚矣，枣仁味酸入厥阴，厥阴和则结者散也。

四肢者手足也，两厥阴经之地也。酸痛湿痹，风湿在厥阴络也，枣仁味酸益血，血行风息；气平益肺，肺理湿行，所以主之也。心包络者心之臣使也，代君行事之经也；肝者生生之脏，发荣之主也，久服枣仁，则厥阴阴足，所以五脏皆安；气平益肺，所以轻身延年也。

黄杰熙评：张氏之解长于形象；叶氏之解长于经络，皆能通达经义，但枣仁之用，主要在安心神、敛肺魄、藏肝魂上，《本

经》未提，恐有遗漏。生用则生发之气旺，则能寤；炒熟用则安敛收藏之性强，则能寐。

大 枣

气味甘平无毒，主心腹邪气，安中养脾气，平胃气，通九窍，安十二经，补少气，少津液，身中不足，大惊，四肢重，和百药。久服轻身延年。

张隐庵曰：大枣气味甘平，脾之果也。开小白花，生育熟黄，熟极则赤，烘爆则黑，秉土德之专精，具五行之色性。《经》云“脾为孤脏，中央土以灌四旁。”主治心腹邪气，安中者，谓大枣安中，凡邪气上干于心，下干于腹，皆可治也。

养脾气，平胃气，通九窍，助十二经者，谓大枣养脾则胃气自平，从脾胃而行于上下，则通九窍；从脾胃而行于内外，则助十二经。补少气，少津液，身中不足者，谓大补身中之不足，故补少气而助无形，补少津液而资有形，大惊，四肢重。

和百药者，谓大枣味甘多脂，调和百药。故大惊而心主之神气虚于内；四肢重而心主之神气虚于外，皆可治也。四肢者，两手两足，皆机关之室，神气之所畅达者也。

久服，则五脏调和，血气充足，故轻身延年。

叶天士曰：大枣气平，秉天秋收之金气，入手太阴肺经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气味升多于降。阳也。

心腹者，太阴经行之地也。“邪之所凑，其气必虚”，阴阳形气不足者，宜调以甘药，大枣味甘，可以调不足，故主心腹邪气。

外为阳，内为阴，阴阳和则中安，甘平益阴，所以安中。

脾者，阴气之原也；胃者，阳气之原也，甘平益阴，故养脾气，阴和则阳平，故平胃气。中气不足，则九窍不通，甘能满中，中气足，九窍通也。

十二经者，三阴三阳也；脾胃者，阴阳之原也。大枣养脾气、平胃气，则十二经无不助矣。肺主气而生津液，气平益肺，所以主少气少津液也。脾统一身之血，肺主一身之气，甘平益肺，身中气血和，自无不足之症矣。血气足则神安，所以定大惊。

脾主四肢，甘味益脾，脾气足，四肢自轻。甘平解毒，故和百药。肺气充，脾气足，所以轻身延年。

陈修园曰：大枣气平入肺；味甘入脾。肺主一身之气，脾统一身之血，气血调和，故有以上诸效。

黄杰熙评：大枣是脾之果，补养手足太阴经肺脾。张氏之解长于形象五行；叶氏之解理路最清，处处与经文映照；陈氏之解简明扼要，各有所长。

大枣补虚壅实，补虚必须长服久服，始能见效；实者服之，少则胀满不舒，多则足以伤人损人；处方中配合适宜，能起到扭转作用。

芡 实

气味甘平涩，无毒，主湿痹，腰脊膝痛，补中除暴疾，益精气强志，令耳目聪明。久服轻身不饥，耐老神仙。

张隐庵曰：芡实气味甘平，子黄仁白，生于水中，花开向日，乃阳引而上，阴引而下，故字从芡，得阳明少阴之精气。

主治湿痹者，阳明之上，燥气治之也。治腰脊膝痛者，少阴主骨，外合腰膝也。补中者，阳明居中土也。除暴疾者，精神气三虚相搏，则为暴疾。芡实生于水而向日，得水之精，火之神，茎刺肉白，又秉秋金收敛之气，故治三虚之暴疾。益精气强志，令人耳目聪明者，言精气充益，则肾志强，肾志强，则耳目聪明，盖肾又开窍于耳，精神则注于目也。久服则积精全神，故轻身不饥，耐老神仙。

叶天士曰：芡实气平湿，秉天秋敛之金气，入手太阴肺经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气味降多于升，阴也。脾为湿土而统血，湿邪降于下，则走腰脊膝，致血泣而成痹。芡实甘平，则益脾肺，肺通水道，则湿行；脾和则血活，而痹者瘳矣。

中者脾也，味甘益脾，故能补中。暴疾多属于火，得水之精者，多能抑火，芡实味甘属土，而生于水，所以制火而主暴疾。

肾藏精，肺为金而肾为水，气平益肺，肺气旺则生精，金生水也。味甘益脾，脾统血，目得血则明，耳得血则聪，故令耳目聪明也。味甘益脾，脾气升；气平益肺，肺气降，升降和，则天清地宁，养之以刚大，而志强矣。

久服气平益肺，肺气充则身轻；味甘益脾，脾血旺，耐老不饥也；脾肺气血充足，神仙有自来矣。

黄杰熙评：张叶二氏，遵经注解，均能畅通芡实之经文，取义专精，可以互补，堪称清初两大名医。

但芡实生于水中，乃肾之果也，子黄味甘，入脾之经也，仁白气平，入肺之经也，总观为肺脾肾三经之药也。味兼湿，能敛气血以归根。余用之治气血不敛之自汗、盗汗、遗精、尿蛋白多，皆获奇功，是补敛之功效也。

关于“神仙”之说有两解，二氏不明，应申明之：一是神话中之神仙，乃荒诞无稽之谈，以妄想代替现实，根本不可能；一是肺脾肾健旺，气血和畅，精神爽朗之身心健康人而言，既“多病方知健是仙”之义，乃为正确。

莲 实

气味甘平无毒，主补中，养神，益气力，除百病。久服轻身耐老，不饥延年。

张隐庵曰：莲生水中，茎直色青，具风木之象；花红须黄，房白子黑，得五运相生之气化。气味甘平，主补中，得土之精气也，养神得水火之精气也。百病之生，不离五运，莲兼五运之气化，故除百疾。

久服且轻身不饥延年。

叶天士曰：莲实气平湿，秉天秋收之金气，入手太阴肺经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经；以其仁也，兼入少阴心经。气味升多于降，阳也。

脾者，五脏之中也，甘平益脾，所以补中。心者，神之居也，芳香清心，所以养神。脾为万物之母，后天之肺，主周身之气，先天之源，甘平益脾肺，所以益气力。

心为十二官之主，主安则十二官俱安，而百病皆除也。

久服轻身耐老者，益气和血之功；不饥延年者，补脾养神之力也。

黄杰熙评：张氏之解经，长于形象思维与五运；叶氏之解经，长于气味归经主治性能，合观之，可得其全。

但莲花有色白者，与《本经》所论之结实主治颇合；色红者结实，应为清热、养血、化瘀者居多。莲实即莲子，象心而居上，以入手少阴心经为合拍，按之临床，以清心安神为主，用之效验如神。

莲 花（附）

气味苦甘温无毒，主镇心益色，驻颜身轻。（《日华本草》）

黄杰熙释：莲花气温入手厥阴心包络、足厥阴肝经；味苦入手少阴心经；甘入足太阴脾经。“出污泥而不染”，具升清降浊功能。

脾主鎮靜，土之德也；心主顏色，火之精也，故能鎮心益色，駐顏身輕。入厥陰而舒風木之氣，使之條達，升清降濁也。肥者，濁氣壅塞也，余用之治肥胖症，頗建奇功。

蓮 蕊 須 (附)

氣味甘澀溫無毒，主清心通腎，固精氣，烏髮，悅顏色，益血。止血崩、吐血。（《本草綱目》）

黃杰熙釋：蓮須氣溫乘風木之性，入手厥陰心包絡經，包絡相心用事，故能悅顏色益血；入足厥陰肝經，肝主藏血，故能止血崩、吐血。

味甘入足太陰脾經，脾主統血，為五臟六腑之總後勤，轉旋上下左右，故能清心通腎，而止血崩、吐血。澀乃酸之極味，入肝腎肺三經，以收斂之，疏通之，使風水氣循經暢達，故能固精氣，烏須髮，而又以須象須髮之治也。

蓮 房 (附)

氣味苦澀溫無毒，主破血。（《食療本草》）

治血脹腹痛，及產後包衣不下，解野菌毒。（《本草拾遺》附）“蓮房”，又蓮蓬壳，陳久者良。

黃杰熙釋：蓮房氣溫入手厥心包絡，味苦入心，而主血脈；味澀入足厥陰肝經，澀入肝，同主收斂以藏血，酸之極則澀，澀之極則反，物極則反，故主破血。

蓮房象大腹、包衣，入而破之，故治血脹腹痛及產後包衣不下。野菌之毒為礆毒，澀能中和之，甘溫能疏散之，故解野菌毒。

莲 蕙 (附)

气味苦涩寒无毒，主治血渴。(《食性本草》)

产后渴，止霍乱。(《日华本草》)

清心去热。(《本草纲目》)

黄杰熙释：莲蕙即莲子心，以心入心，为清心去热之圣药。气寒入足少阴肾经以滋水填离，故有斯效。味苦入心；涩入肝肾肺经，以水济火，故主治血渴、产后渴。若为热邪嚣张之霍乱，寒可清之，故又止霍乱。

荷 叶 (附)

气味苦平无毒，主治血胀腹痛，产后胎衣不下，酒煮服之。(《本草拾遗》)

治吐衄血、血崩、血痢、脱肛，赤游火丹，偏身风痲，阳水浮肿，脚膝浮肿，痘疮倒靨。(《新增》)

黄杰熙释：莲叶即荷叶，亭亭玉立于水面，有清凉洁净之象，能载药于上，以治颜面头颅之疾苦。气平入手太阴肺经，味苦入心清热，又为清暑之良药。肺金心火宁静，气血和畅，故血胀腹痛自愈。产后胎衣不下，并煮之以酒则行速，故可下之。

气血和畅，血行归经，故上可治吐衄血，下可疗血崩、血痢、脱肛。

赤游火丹，乃心火郁于肤表而不散；遍身风痲，乃火极风生所致；阳水浮肿，乃肌腠壅热，卫气不行所生；脚膝浮肿，乃心火郁于下而不上之气火充斥所来；痘疮倒靨，乃火毒郁于肌肉而不达于肤表之象，荷叶有内清外散之功，故兼能治之。

荷 鼻 (附)

气味苦平无毒，主安胎，去恶血，留好血，止血痢，杀菌萆毒，并煎水服。（《本草拾遗》附）荷鼻即荷叶蒂也。

黄杰熙释：荷叶蒂气味与荷叶无异，功能与荷叶相同。但荷叶似胎盘；蒂似胎盘蒂，固叶全靠于它，故可安胎，用之确有效验。

薏 苡 仁

味甘微寒无毒，主筋急拘挛，不可屈伸，久风湿痹下气。久服轻身益气。

张隐庵曰：薏苡仁，米谷之属，夏长秋成，味甘色白，其性微寒，秉阳明金土之精，主治筋急拘挛，不可屈伸者。阳明主润宗筋，宗筋主束骨而利机关，盖宗筋润，则诸筋自和；机关利，则屈伸自如。

又金能制风，土能制湿，故治久风湿痹。肺主金而主气，薏苡秉阳明之精气，故主下气，治久风湿痹，故久服轻身下气，而又益气。

叶天士曰：苡仁气微寒，秉天秋金之燥气入手太阴肺经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气降味和，阴也。

《经》云：“湿热不攘，则大筋短软而拘挛。”苡仁气微寒，清热利湿，所以主筋急拘挛而不可屈伸也。久风，长久之风也，风淫末疾，所以手足麻木而湿痹生焉，苡仁甘寒，其主之者，甘以行之，寒以清之也。

微寒禀秋金之燥气而益肺，肺气治则下行，故主下气。久服轻身益气者，久服则脾健而身轻，金清则肺实而气益也。

陈修园曰：夏长秋成，味甘色白，秉阳明金土之精，金能制风，土能胜湿，故治以上诸疾。久服轻身益气者，以湿行则脾健而身轻，金清则肺治而气益也。

黄杰熙评：张氏之解从阳明金土入手，润宗筋着眼似超；叶氏之解从手足太阴入手，似拘执而死板；陈氏取张氏之说无多大发挥。

实则苡仁生于水中而长于茎上，与水稻无以异，味淡气微寒，同于大米。色白属金，味淡属脾，乃清金益气，淡渗行水之物，若为湿热所酿成之以上诸症，多服久服有效，非治急症之药也。三氏拘于经文，迂回曲解，通则通矣，不无缪误，如“土能制湿”，只有燥能制湿，风能胜湿，土何能制湿、胜湿呢？土能克水，使土更湿，其病不是更增无减乎？明明是淡渗利水，使湿热从小便去吗！

迷信古人是圣人、神人所造成之结果，忘记了孔子说的“后生可畏，焉知来者”的谆谆教诲。常言道：“要发家，看娃娃。”医学这一大家，是否能发达，全看娃娃呀！要后胜于前，今胜于昔。否则家必败、国必亡。

大 麻 仁

气味甘平无毒，主补中益气。久服肥健，不老神仙。

张隐庵曰：大麻放花结实于五、六月之交，乃阳明、太阴主气之时。《经》曰：“阳明者，午也，五月阳盛之阴也。”又长夏属太阴主气，天太阴阳明雌雄相合，麻仁秉太阴阳明之气，故气味甘平。

主补中者，补中土也；益气者，益脾胃之气也。夫脾胃气和，

则两土相为资益，阳明燥气，得太阴湿气以相资，太阴湿土，得阳明燥气以相益，故久服肥健，不老神仙。

黄杰熙评：张氏以经解经，于义可通。实则大麻仁乃油料作物，为人生活所必需，油脂能润燥，网油上之油，即脾之物，此能补之；性平益肺气，故能补中益气。

油脂足则肥健而延缓衰老到长寿。不老神仙乃夸张无稽之谈，与实际不合。

巨 胜 子

气味甘平无毒，主治伤中虚羸，补五内，益气力，长肌肉，填髓脑。久服轻身不老。

张隐庵曰：麻乃五谷之首，秉厥阴春生之气，夫五运始于木，而递相资生。主治伤中虚羸者，气味甘平，补中土也。补五内益气力，所以治伤中也。长肌肉，填髓脑，所以治虚羸也。补五内益气力之无形，长肌肉，填髓脑之有形，则内外充足，久服轻身不老。

叶天士曰：巨胜子即脂麻仁也，脂麻气平，秉天秋凉之金色，入手太阴肺经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经；脂麻之仁，兼入手少阴心经。气味升多于降，阳也。

阴者，中之守也；伤中者，阴血伤也。肺为津液之化源，脾统血，心主血，脂麻入脾肺心，甘平益血，所以主伤中也。

脾主肌肉，脾燥则虚瘦，味甘入脾，故主虚羸。内为阴，外为阳，五内，五脏之内，藏阴之所也，脂麻脂润，故补五内。阴虚则馁，五脏既补，气力自充。脾主肌肉，味甘润脾，肌肉自长。髓与脑皆阴气所化也，甘平益阴，阴长髓脑自填。久服味甘益脾，脾血润，故不老；气平益肺，肺气充，故身轻也。

黄杰熙评：巨胜子即胡麻子，而胡麻子有赤、白、黑三种

色，其中黑色者，称巨胜子，今名黑脂麻。所榨之油，称胡麻油，本为常用植物油脂之一。经张氏解为厥阴春生之气，以一年之五运推之，递相资生，主治各症。叶氏根据气味甘平无毒推之属手足太阴与手少阴心经，所据不同，皆能通黑脂麻之主治性能，可以互补。比较之，张氏解之含混囫圇；叶氏细微，处处不离经文，似后来者居上。

赤 箭

气味辛温无毒，主杀鬼精物、蛊毒、恶气。久服益气力，长阴肥健。

张隐庵曰：赤箭气味辛温无毒，其根名天麻者，气味甘平。盖赤箭性温属金，金能制风，而有弧矢之威，故主杀鬼精物。天麻甘平属土，土能胜湿，而居五运之中，故能治蛊毒恶风。天麻形如芋，藏有游子十二枚，周环之以效十二辰，十二子在外，应六气之司天，天麻如皇极之居中，得气运之全，故功同五芝，力倍五参，为仙家服食之上品，是以久服益气力，长阴肥健。

李时珍曰：补益上品，天麻第一，世人止用之治风，良可惜也。

黄杰熙评：张氏之解有违经旨与实际，不可从。赤箭系天麻之茎，其味辛气温，味辛入手太阴肺金，金平木，所以为息风之正药；温气入肝以舒散肝风，乃金木合德之奇药，安定肺肝。

肝魂肺魄，魂魄安定则鬼精物自去，蛊毒恶气自除。久服肝脾无忤，肺气通和，则气力自益，气力益则长阴肥健。时珍所论，乃久服之效果而矣。

干地黄

气味甘寒无毒，主伤中逐血，填骨髓，长肌肉，作汤除寒热积聚，除痹，疗折跌绝筋。久服轻身不老。生者尤良。

张隐庵曰：地黄色黄，味甘性寒，秉太阴中土之专，兼少阴寒水之气化。

主治伤中者，味甘质润，补中焦之精汁也。血痹，犹脉痹，逐血痹者，横纹如脉络，通周身之经络也。得少阴寒水之精，故填骨髓；得太阴中土之精，故长肌肉。

地黄性惟下行，故从芩，藉汤饮则上行外达，故曰作汤，除寒热积聚，除积聚上行也，除寒热外达也。

又曰逐痹，言不但逐血痹，更除皮肉筋骨之痹也，除皮肉筋骨之痹，则折跌绝筋，亦可疗矣。

久服则精气充足，故轻身不老。生者尤良，谓生时多津液而尤良，惜不能久贮远市也。后人蒸熟合丸，始有生熟地之分。熟地黄功与力与生地黄相等，寒性稍减，蒸熟则黑，补肾相宜。愚按：地黄入土最深，性惟下行，作汤则助其上达。日华子有天黄、地黄、人黄之分，谬矣。

叶天士曰：地黄气寒，秉天冬寒之水气，入少阴肾经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气味重浊，阴也。

地黄味甘益脾，脾血润则运动不滞；气寒益肾，肾气充则开合如式，血和邪解，而痹疗矣。肾主骨，气寒益肾，则髓足而骨髓充。脾主肌肉，味甘润脾，则土滋而肌肉丰也。

作汤除寒热积聚者，汤者荡也，或寒或热之积聚，汤能荡之也。

盖味甘可以缓急，性寒可以去著也。其除痹者，血和则结者

散，阴润则闭者通，皆补脾之功也。其疗折跌绝筋者，筋虽属肝，而养筋者脾血也，味甘补脾，脾血充足，则筋得养而自续也。

久服寒气益肾，肾气充，所以轻身；味甘益脾，脾血充，所以华面，所以不老，且先后二天交接，元气与谷气俱纳也。

又曰除痹者，言不但除血痹，更除皮肉筋骨之痹也，除皮肉筋骨之痹，则折跌绝筋，亦可疗也。生者尤良，谓其本性俱在也。

陈修园曰：地黄《本经》名“地髓”；《尔雅》名“苳”、又名“苳”，唐以后九蒸九晒名熟地黄，苦味尽除，入于温补肾经丸剂，颇为相宜，若入汤剂及养血凉血等方，甚属不合。盖地黄专取其性凉而滑润流通，熟则臃滞不凉，全失其本性矣。

徐灵胎辨之甚详，无何若辈执迷不悟也。又曰：“百病之极，穷不及肾，及肾危症也，有大承气汤之急下法；有桃花汤之温固；有四逆汤、白通汤之回阳法；有黄连鸡子黄汤、猪苓汤之救阴法；有真武汤之行水法；有附子汤之温补法，皆所以救其危也。张景岳自创邪说，以百病之生，俱从肾治，误以《神农本经》上品服食之品，认为治病之药。”

《内经》云：“五谷为养，五果为助，五菜为充，毒药攻邪。”神农所列上品，多服食之品，即五谷、五果、五菜之类也。玩“久服”二字，可见圣人药到病瘳，何以云“久”乎！凡攻邪以去病，皆取毒药。

黄杰熙评：张叶二氏之解地黄，在归经上是一致的，在主治上又基本相似，合乎经旨，可从。惟对“作汤除寒热积聚”上，张氏之解牵强，叶氏之解正确。

陈氏之解，重在辨别生、熟地黄上。引徐氏批判张景岳对百病之生，俱从肾治上。但张氏处明代气数将尽之时，世人多阴亏阳亢之病，张氏以善用熟地著称，绰号“张熟地”，救愈了不少阴亏险症，这是气数使然之特殊性，非一般也。若论一般，而百病之生，俱从肾治，是错误的，应如此评论张氏，才是允当的，合

乎实际的。陈氏之辨生、熟地，真实可靠，无可非议。但陈氏乃取之徐氏，是“借花献佛”之人。

至于上品与五谷、五果、五菜之作用相同，基本上是正确的。但重用、久服，确可疗疾，张熟地是明证。余用之，亦救活过不少大病，此又深信不疑，切切不可轻易否定。临床多了，什么样的病，都可能遇到，治法上要灵活多变，关键在“观其脉证，知犯何逆，随证施治”上。

麦 门 冬

气味甘平无毒，主心腹结气，伤中伤饱，胃络脉绝，羸瘦短气，久服不老不饥。

张隐庵曰：麦冬一本横生，根颗连络，有十二枚者，有十四枚者，有十五、六枚者。盖合于人身之十二络，加任之尾翳、督之长强为十四络，又加脾之大络名大包为十五络，又加胃之大络名虚里，共十六络。

惟圣人能体察之，用之以通脉络，并无去心二字，后人不详经义，不穷物理，相沿去心久矣，今特表正之。

《经》云“主心腹结气，伤中伤饱，胃络脉绝”者，以麦冬根颗连络不断，能通达上下四旁，令结者解，伤者复，断者续，皆藉中心之贯通也。又主“羸瘦短气”者，补胃自能生肌，补肾自纳气也。

久服轻身不老不饥者，先天与后天俱足，斯体健而耐饥也。又曰凡物之凉者，其心必热，热者，阴中之阳也，人但知去热，而不知用阳，得其阳而后能通阴中之气。

叶天士曰：麦冬气平，秉天秋平之阴气，入手太阴肺金；味甘无毒，得地中和之土味，入足太阴脾经。气降味和，阴也。

心腹者，脾肺之分；结气者，邪热之气结也，其主之者，麦

冬甘平，平能清热，甘能散结也。

伤中者，阴伤也，甘平益阴，故主伤中。脾为胃行津液者也，脾血不润，则不能为胃行津液，而伤饱之症生矣，味甘而润，滋养脾血，故主伤饱。

脉者，血之府，胃与脾合，胃络脉绝者，脾血不统，脉络不与胃相接也，甘润养阴，所以续脉。

脾主肌肉，而秉气于胃，脾阴不润，则肌肉不长。而胃气上逆，肺亦能呼不能吸，而气短促矣。麦冬味甘益脾，故主羸瘦，气平益肺，故主短气也。

久服肺气充，所以轻身；脾血润，所以不老不饥也。

陈修园曰：麦门冬气味甘平，质性滋润，凌冬青翠，盖秉少阴冬水之精，上与阳明胃土相合。

主治心腹结气者，麦冬一本横生，能通胃气于四旁，则上心下腹之结气，皆散除矣。

伤中者，经脉不和，中气内虚也；伤饱者，饮食不节，胃气壅滞也，麦冬秉少阴癸水之气，合阳明戊土，故治伤中伤饱。

胃之大络，内通于脉，胃络脉绝者，胃络不通于脉也。麦冬颗分心贯，横生土中，连而不断，故治胃络脉绝。

胃虚则羸瘦，肾虚则气短，麦冬助胃补肾，故治羸瘦短气。

久服则形体强健，故轻身；精神充足，故不老不饥。

黄杰熙评：《易·大传》：“天下一至而百虑，同归而殊途。”从麦冬形象上论，张陈二氏之论颇超；从归经主治上看，叶陈二氏之论得体。叶主归手足太阴经，根据在气味甘平上；陈主归足阳明胃经与足少阴肾经，根据于形质兼胃土上。据《河图》所示，凡物生于阳者，成于阴；生于阴者，成于阳。麦冬是生于阳而成于阴，故秉天水之气化，若去心则等于去了阳，麦冬之主治则去了一半功能，所以张氏留心之说是完全正确的，可嘉、可取。

总之，三家之说，皆可从。比较之陈氏简练而针对性强，似

后来者居上。

天 门 冬

气味苦平无毒，主治暴风湿偏痹，强骨髓，杀三虫，去伏尸。久服轻身益气，延年不饥。

张隐庵曰：天麦二冬，皆秉少阴精气之化。麦门冬秉水精而上通乎阳明；天门冬秉水精而上通于太阳。后人有天门冬补中有泻，麦门冬泻中有补之说，不知何处引来，良可叹也。

叶天士曰：天门冬气平，秉天秋平之金气，入手太阴肺经；味苦无毒，得地寒凉之火味，入手少阴心经。气味俱降，阴也。

其主暴风湿偏痹者，燥者濡之，热者清之，著者润之也。盖风本阳痹，风湿偏痹，发之以暴，暴病皆属于火者也。

骨属肾水，天冬气平益肺，肺金生水，故骨髓强也。

三虫伏尸，皆湿热所化，味苦可以除湿，气平可以清热，湿热下逐，三虫伏尸皆去也。

久服益肺，肺清则气化，故益气；气足则身轻；气治则延年；气满则不饥也。

陈修园曰：天门冬，《本经》言“气味苦平”；《别录》言“甘寒”。新出土时，其味微苦，爆干则微甘也，性寒无毒，体质多脂，始生高山，盖秉寒水之气而上通于天，故有天冬之名。

主治暴风湿偏痹者，言风湿之邪，暴中于身，而成半身不遂之偏痹，天冬秉水天之气，环转运行，故可治也。强骨髓者，得寒水之精也。杀三虫去伏尸者，水阴之气，上通于天也，水气通天，则天气下降，故土中之三虫，泉下之伏尸，皆杀去也。

太阳为诸阳主气，故久服轻身益气；天气通贯于地中，故延年不饥。

伏尸者，传尸鬼疰，泉下死鬼，痢而为病也。天门冬能启水中

之生阳，上通于天，故去伏尸。凡治传尸之药，皆从阴达阳，由下升上也。

黄杰熙评：叶氏遵经注解，亦步亦趋，无多大发明；陈氏绍张氏之绪，有所突破和阐发。但不知水即化气，气复还为水。天门冬秉水寒之气，而环转运行，火可潜消，故可治偏痹；以水滋髓而强骨髓；水气环行，湿不可留，故杀三虫；阳升阴降，故去伏尸。

水化为气则益气，气益则身轻，气益则延年，气足则不饥，皆久服之效果。三才汤用之，是从此义而来。

葳 蕤

气味甘平无毒。主中风暴热，不能动摇，跌筋结肉诸不足。久服去面黑黧，好颜色润泽，轻身不老。

张隐庵曰：葳蕤气味甘平，质多津液，秉太阴湿土之精，以资中焦之汁。

主中风暴热，不能动摇者，以津液为邪热所灼也；跌筋者，筋不柔和也；结肉者，肉无膏泽也；诸不足者，申明以上诸症，皆属津液不足也。

久服则津液充满，故去面上之黑黧，好颜色而肌肤润泽，且轻身不老也。

又曰：阴柔之药，岂堪重用，古人除治风热以外，绝不收用。自李时珍有不寒不燥，用代参芪之说，时医借为补剂，虚症仗此，百无一生。咎其谁识耶。

叶天士曰：葳蕤气平无毒，主心腹结气，虚弱腰痛，茎中寒，及目痛眦烂泪出。秉天秋降之金气，入手太阴肺经；味甘无毒，得中和湿土之味，入足太阴脾经。气降味和，阴也。甘平之品，能清能润，故亦主心腹结气也。

其主虚热者，甘能补虚，平可清热也。

湿毒腰痛，及茎中寒，目痛眦烂泪出，皆太阳膀胱之病也，膀胱之经，起于目内眦，其直者下项挟脊抵腰中，入循膂络肾，属膀胱。膀胱本寒水之经，膀胱有湿毒，则湿气走腰而痛，走膀胱而茎寒矣。于是膀胱命火上炎于经络，目痛内眦烂而泪出也，故其主之者，膀胱之开合，皆由于气化。葳蕤气平益肺，肺气降则小便通，湿行火降，而诸症自平矣。盖膀胱津液之府，肺乃津液之源，润其源则膀胱之湿亦行，所谓治病必求其本者如此。

陈修园曰：葳蕤气味甘平，质多津液，秉太阴湿土之精，以资中焦之汁。中风暴热者，风邪中人，身热如曝也；不能动摇者，热盛于身，津液内竭，不濡灌于肌腠也；跌筋者，筋不柔和，则踈蹶而如跌也；结肉者，肉无膏泽，则涩滞而如结也；诸不足者，申明中风暴热，不能动摇，跌筋结肉，是诸不足之症也。

久服则津液充满，故去面上之黑黥，好颜色而肌肤润泽，且轻身不老。

愚按：葳蕤润泽滑腻，秉性阴柔，故《本经》主治中风暴热；古方主治温风灼热，所治皆主风热之病。近医谓葳蕤有人参之功，无分寒热燥湿，一概投之以为补剂，不知阴病内寒，此为大忌，盖缘不考经书，咸为耳食所误。

黄杰熙评：葳蕤即玉竹，以其晶莹透彻而多汁，味甘气平，为手足太阴经之药。温病救阴用之，则风热除而效捷。脑髓不足而受风热头痛之疾，用之补髓脑息风热，每获奇功。

张氏、陈氏遵经注解，可通《本经》之义。至于用代参芪之说，似属夸张之谈，但水即化气，确有益气之功，流动之性。虚寒实寒用之，则冰上加霜矣，何能代参芪哉。张陈之批驳得理，但未具体分辨明白，似欠一问之地。

叶氏之解，去《本经》之主治范围，另行其道，是创新发明之举，值得称赞。一药之功效，《本经》又何能尽括之，全靠后贤

之实践发明以充之。余曾遵用以治风热上攻之茎中寒目痛眦烂泪出患者，病已经年，累治不效，投余求治，诊之脉细数带弦，断为阴亏风热上攻所致，想到了叶氏离经而不叛道之注，重用玉竹60克，稍佐桑叶、黑脂麻、枸杞、菊花投之，一剂知，二剂已。足证叶氏功底深厚，名不虚传。

牛 膝

气味苦酸平无毒，主寒湿痿痹，四肢拘挛，膝痛不可屈伸，逐血气，伤热火烂，堕胎。久服轻身不老。

张隐庵曰：《本经》谓百倍气味苦酸，概根苗而言也；今时所用，乃根下之茎，味甘嗅酸，其性微寒。

《易》曰：“乾为马，坤为牛。”牛之力在膝，取名牛膝者，秉太阴湿土之气化，而能资养筋骨也。

主治寒湿痿痹，言或因于寒，或因于湿，而成痿痹之症也。痿痹则四肢拘挛，四肢拘挛则膝痛不可屈伸，牛膝秉湿土柔和之化，而资养筋骨，故能治之。

血气伤热火烂，言血气为热所伤，则为火烂之症，牛膝味甘性寒，故可逐也。根下之茎，形如大筋，性唯下泄，故堕胎。

久服则筋骨强健，故轻身耐老。

叶天士曰：牛膝气平，秉天秋降之金气，入手太阴肺经；味苦酸无毒，得地木火之味，入足厥阴肝经、手厥阴心包络。气味皆降，阴也。

肺热叶焦，发为痿痹，牛膝苦平清肺，肺气清则通调水道，寒湿下逐，营卫行而痿痹愈矣。

湿热不攘，则大筋软短，而四肢拘挛，膝痛不可屈伸矣，牛膝苦酸，酸则舒筋，苦除湿热，所以主之也。

逐血气者，苦平下泄，能逐气滞血凝也。

伤热火烂者，热汤伤，火伤疮也，苦平清热，酸能收敛，则痛止而疮愈也。

苦味伐生生之气，酸滑伤厥阴之筋，所以堕胎。

久服则血脉流通无滞，所以轻身而耐老也。

陈修园曰：牛膝气平，秉金而入肺；味苦得火味而入心包；味酸得木味而入肝。唯其入肺，则能通调水道而寒湿行，胃热清而痿痹愈矣。唯其入肝，肝藏血而养筋，则拘挛可愈，膝亦不痛，而能屈伸矣。唯其入心包，苦能泻实，则血因气凝之病可逐也。苦能泻火，则热汤之伤与火伤之疮可愈也。苦味本伐生生之气，而又合以酸味，而遂大申其涌泄之权，则胎无不堕矣。

久服轻身耐老者，又统言其流通血脉之功也。

黄杰熙评：三氏之解，均能通《本经》之义。张氏长于形象思维；叶陈二氏长于归经主治，合参之则经义宣通矣。

牛膝，《本经》原名“百倍”，后世又名天精、地菘、山苋菜、对节菜。后世用根，《本经》全草用，故名百倍。总之是通行血气之药，能引血下行，故治脑充血之头痛、牙痛、牙龈肿痛、眼痛、耳鸣等上部充血之证，皆有奇效。分怀牛膝、川牛膝两个品种，以怀产者良，川产者分紫白二色，色紫者亦佳。

杜 仲

气味辛平无毒，主腰膝痛，补中益精气，坚筋骨，强志，除阴下湿痹，小便余沥。久服轻身耐老。

张隐庵曰：杜仲皮色黑而味辛平，秉阳明少阴金水之精气。

腰膝痛者，腰乃肾府，少阴主之；膝属大筋，阳明主之，杜仲秉少阴阳明之气，故腰膝之痛可治也。补中者，补阳明之中土也。益精气者，益少阴肾精之气也。坚筋骨者，坚阳明所属之筋，少阴所主之骨也。强志者，所以补肾也。阳明燥气上行，故除阴

下湿痒，及小便余沥。

久服则金水相生，精气充足，故轻身耐老。

愚按：桑皮桑叶有丝，蚕食桑而结茧，其色洁白，其质坚牢，秉金气也。藕与莲梗有丝，生于水中，得水精也。杜仲黑色味辛而多丝，故兼秉金水之气化。

叶天士曰：杜仲气平，秉天秋降之金气；味辛无毒，得地润泽之金味，专入手太阴肺经。气味升多于降，阳也。

腰者肾之府，膝者肾之主也，杜仲辛平益肺，肺金生肾水，所以腰膝痛自止也。

中者阴之守也，辛平益肺，肺乃津液之化源，所以阴足而补中也；初生之水谓之精，天一之水也。杜仲入肺，肺主气而生水，所以益精气，精气益，则肝有血以养筋，肾有髓以填骨，所以筋骨坚也。

肺主气，辛平益肺，则气刚大，所以志强。阴下者，即篡间，任脉别络也，湿痒者湿也，杜仲辛平润肺，则水道通而湿行也。小便气化乃出，有余沥，气不收摄也，杜仲益肺气，气固即能摄精也。

久服辛平益气，气充则身轻；辛润滋血，血旺则耐老也。

盐水炒则入肾，醋炒则入肝，以类从也。

黄杰熙评：张氏以“杜仲皮色黑而味辛平”入手注经，但不知杜仲生时皮色黄，炒后皮色黑之义，以之归入少阴肾、阳明胃经，从二经入手论注经文。叶氏从气味辛平入手，归手太阴肺经以论注经文。二氏通则通矣，而在归经上有矛盾，各自的根据都是正确的，合并起来归入三经就对了。

杜仲不管炒到何种程度，其白丝即筋都不会断裂，韧性最大，其能坚筋骨，治腰膝痛，全赖此性，非辛平之气味所能比拟，二氏未论及，实属遗憾。

枸 杞

气味苦寒无毒，主五内邪气，热中消渴，周痹风湿。久服坚筋骨，轻身不老，耐寒暑。

张隐庵曰：枸杞根苗苦寒，花叶紫赤，至严冬霜雪之中，其实红润可爱，是秉少阴水精之气，兼少阴君火之化也。

主治五内热中消渴，谓五脏正气不足，邪气内生而为热，热中消渴之病，枸杞得少阴水精之气，故可治也。

主治周痹风湿者，兼得少阴君火之化也。岐伯曰：“周痹者，在于血脉之中，随脉以上，随脉以下，不能左右，各当其所。”枸杞能助君火之神，出于血脉之中，故去周痹而除风湿。

久服益筋骨，轻身不老，耐寒暑者，亦得少阴水火之气化，而精神充足，阴阳交会也。

叶天士曰：枸杞子气寒，秉天冬寒之水气，入足少阴肾经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气味俱降，阴也。

五内者，五脏之内也；邪气者，邪热之气也。盖五内为藏阴之地，阴虚所以有邪热也，其主之者，苦寒清热也。心为君火，肾为寒水，水不制火，火灼津液，则病热中消渴，其主之者，味苦可以清热，气寒可以益水也，水益火清，消渴自止。

其主周痹风湿者，痹为闭症，血枯不运，而风湿乘之也，治风先治血，血行风自灭也，枸杞子苦寒益血，所以治痹。

久服苦益心，寒益肾，心肾交，则水火宁而筋骨坚，筋骨坚则身轻，血足则色华，所以不老。耐寒暑者，气寒益肾，肾水足，可以耐暑；味苦益心，心火宁，可以耐寒也。

陈修园曰：五内为藏阴之地，热气伤阴，即为邪气，邪气伏于中，则为热中。热中则津液不足，内不能滋润脏腑而为消渴，外不能灌溉经络而为周痹，热盛则成风，热郁则生湿，种种相因，唯

枸杞之苦寒清热，可以统主之。

久服轻身，不老，耐寒暑三句，则又申言其心肾交补之功。以肾字从坚，补之所以坚之也，坚则身健而轻，自忘老态。且肾水足可以耐暑，心火宁可以耐寒，洵为服食之上剂。然苦寒二字，《本经》概根苗花子而言。若单论子，严冬霜雪之中，红润可爱，是秉少阴水精之气，兼少阴君火之化，为补养心肾之良药，但性缓，不可以治大病、急病耳。

黄杰熙评：枸杞《本经》是概根苗花子而言；枸杞子则专指其果实也。所以张陈二氏之注，既指枸杞，又指枸杞子，两者兼而有之。叶氏之注专指枸杞子而言。

三氏在归经主治之注解，基本一致，是水火交泰之果，为补心肾之阴以清热邪之良药。比较之，陈氏总括张叶二氏之注，而有所着重与补充，尤其在“性缓”上，提出“不可以治大病、急病”上，在用药上特关紧要。

枸 杞 苗 (附)

气味苦寒，主除烦益志，补五劳七伤，壮心气，去皮肤骨节间风，消热毒，散疮肿。（《日华本草》）

黄杰熙释：枸杞苗即枸杞之嫩苗之茎叶，亦名天精草，有升散之性。味苦入手少阴心经以清热；气寒入足少阴肾经以滋水补肾。

心热去则心烦除，肾水足则肾志益，皆味苦气寒归经入脏之作用。五劳乃五脏之劳，劳则水衰火旺，此能清之补之。七伤乃五脏之伤再加风雨寒暑伤形和恐惧不节伤志而成。五脏藏阴者也，形志者，气血所充，神之居也，寒水化气益气；味苦清心安神，阴足神安气益，故能主治之。壮心气，乃苦寒补益之效。

茎叶主升散，苦寒主清热补阴，升散则皮肤骨节间风自去，清

则消热毒，升散清热并举则疮肿散。

地 骨 皮 (附)

气味苦寒，主去骨热消渴。(孟说)

枸 杞 子 (附)

气味甘寒，主坚筋骨耐老，除风去虚劳，补精气。
(《食疗本草》)

黄杰熙释：枸杞子上注已详，兹不赘。地骨皮乃枸杞之根皮，气味苦寒，归经同于枸杞。根皮入骨髓，故滋水清骨热，髓足则五脏之阴足，阴足则消渴自除。

入气分药治发热汗出，入血分药治骨蒸劳热，皆有显效。

女 贞 子

气味苦平无毒，主补中，安五脏，养精神，除百病。
久服肥健，轻身，不老。

张隐庵曰：三阳为男，三阴为女，女贞秉三阴之气，岁寒操守，因以为名。

味苦性寒，得少阴肾水之气也；凌冬不凋，得少阴君火之化也；作蜡坚白，得太阴肺金之气也；结实而圆，得太阴脾土之气也；四季长青，得厥阴风木之气也，女贞属三阴而秉五脏、五行之气化，故补中安五脏也。水之精为精，火之精为神，秉少阴水火之气，故养精神。人生百病，不外五行，女贞备五脏五行之气，故除百病。

久服则水火相济，五脏安和，故肥健轻身不老。

叶天士曰：女贞气平，秉天秋收之金气，入手太阴肺经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气味俱降，阴也。

中者阴之守也，五脏者藏阴者也，女贞气平益肺，肺为津液之化源，所以补中而脏安也。心者神之居，肺者水之母，入心肺而益阴，阴足气充，气足神旺精生，所以主养精神也。气失其平则为病，女贞气平益肺，肺主气，气得其平，则百病皆除矣。

人身有形之皮肉筋骨，皆属阴者也，女贞苦平益阴，则肌肉自丰，筋骨自强也。心者身之本，其华在面，肺者气之源，气足则身轻血华，故不老。

黄杰熙评：张氏从三阴五行，以及形象思维与气味合并入手以解女贞之主治，微妙微俏，堪称解经之能手。

叶氏朴实无华，只从气味苦平无毒入经心肺以解之，亦颇切中其义，可谓善解经义者。

然女贞古方最少用，以其性缓也，非久服多服不为功，余多不用，为此也。

五 加 皮

气味辛温无毒，主治心腹疝气腹痛，益气疗蹇，小儿五岁不能行，疽疮阴蚀。

张隐庵曰：五加皮色备五行，花乃五出，乃五车星之精也，为修养长生不老之药。

主治心腹疝气，乃心病而为少腹有形之疝也。黄帝问曰：“诊得心脉而急，此为何病？病形何如？”歧伯曰：“病名心疝，少腹当有形者是也。”腹痛乃脾病而致腹痛也。益气，乃肺病气虚，五加皮能益其气也。疗蹇，乃肝病筋虚，五加皮能强筋疗蹇也。小儿五岁不能行，乃肾病骨虚，五加皮能补肾骨，故治小儿五岁不

能行。治疽疮者，诸疮痛痒，皆属心火，五加皮助精水上滋，而能济其火也。治阴湿者，虫乃阴类，阴虚则生，五加皮能益君火，而下济其阴也。

夫五加皮、女贞实，咸秉五运之气化，女贞皆言养正，五加皆言治病，须知养正则病自除，治病则正自养。

东华真人《煮石经》云：“何以得长久，何不食金咸；何以得长寿，何不食玉豉。”玉豉地榆也，金咸五加也，取名金咸玉豉，咸乃水味，豉乃水谷，得先天水精，以养五脏之意。昔人有言曰：“宁得一把五加，不用金玉满车；宁得一斤地榆，不用明月宝珠。”

又鲁定公母服五加皮酒，以致不死，尸解而去；张子声、杨建始、王叔牙、于世彦等，皆服此酒，而房事不绝，得寿三百岁。亦可为散以代茶汤。

又曰：“五加者，五车星之精也，水应五湖，人应五德，位应五方，物应五车，故有青精入茎，则有东方之液；白气入节，则有西方之津；赤气入华，则有南方之光；元精入根，则有北方之精；黄烟入皮，则有戊己之灵，五神镇生相转，育成饵之者真仙，服之者反婴。”是五加乃服食养生之上品，而《本经》不言“久服延年”，或简脱也。

黄杰熙评：张氏此注走邪而失正，不可从。尤其末后按语，引《煮石经》更是无稽怪诞之谈，那有什么“不死”，“寿三百岁”的房中术，以及“真仙”等，皆一派胡言乱语，自骗骗人之说，切不可中其毒，而招早死。张氏此注最差，与女贞注相比，有天渊之别。

五加皮气味辛温，辛乃金之味，为祛风之药；温乃木之气，有散寒去湿之功；五乃土之数，有入脾达皮肉筋骨之力，不过为祛风寒湿痹壮筋骨之药物，何必神乎其说，引入歧途呢！

且其皮红有细刺者，称南五加，或称红毛五加，为上品可服。另一种皮褐色，有香气者，亦称南五加，为次品。若皮褐色，无

香气者，称北五加，有毒，切不可服，服后使人周身红肿剧痛，甚至眼失明、耳聋。而《本经》未言“久服延年”，并非简脱，正是为此也。

肉 苁 蓉

气味甘微温无毒，主五劳七伤，补中，除茎中寒热痛，养五脏，强阴益精气，多子，妇人症瘕。久服轻身。

张隐庵曰：马为火畜，精属火阴，苁蓉感马精而生，其形似肉，气味甘温，盖秉少阴水火之气，而归于太阴坤土之药也，土性柔和，故有从容之名。

五劳者，志劳、思劳、烦劳、忧劳、恚劳；七伤者，喜、怒、思、悲、忧、恐、惊，七情所伤也，水火阴阳之气，会归于中土，则五劳七伤可治矣。

得太阴坤土之精，故补中。得少阴水火之气，故除茎中寒热痛。阴阳水火之气，归于太阴坤土之中，故养五脏。强阴者，火气盛也；益精者，水气盛也；多子者，水火阴阳皆盛也。妇人症瘕，乃血精留聚于郭郭之中，土气盛而症瘕自消。故久服轻身。

叶天士曰：肉苁蓉气温，温秉天春升之木气，入足厥阴肝经；味甘无毒，得地中正之土气，入足太阴脾经；色黑而润，制过味咸，兼入足少阴肾经。气味俱浊，降多于升，阴也。填精益髓，又名黑司令。

五劳者，伤劳五脏之真气也；七伤者，食伤、饮伤、忧伤、房室伤、喜伤、劳伤、经络营卫气伤之七伤也，七者皆伤真阴，肉苁蓉甘温滑润，能滋元阴之不足，所以主之也。

中者阴之守也，甘温益阴，所以补中。

茎，玉茎也。寒热痛者，阴虚火盛，或寒或热而结痛也。苁蓉滑润，滑以去著，所以主之也。

气温润阴，故养五脏。

阴者宗筋也，宗筋为肝，肝得血则强，苡蓉甘温益肝血，所以强阴也。

黑入肾，补益精髓，精足则气充，故益精气。精气足则频御女，所以多子也。

妇人症瘕，皆由血成，肉苡蓉润而咸，咸以软坚，滑以去著，温以散结，所以主之也。

久服肝脾肾精气充足，所以身轻也。

陈修园曰：肉苡蓉是马精落地所生，取治精虚者，同气相求之义也。凡五劳七伤。久而不愈，未有不伤其阴也，苡蓉补五脏之精，精足则阴足矣。茎中者，精之道路，精虚则寒热而痛，精足则痛止矣，又滑以去著。

精生于五脏，而藏之于肾，精足阳举精坚，令人多子矣。

妇人症瘕，皆由血瘀，精足则气充，气充则瘀行矣。叶天士注症瘕之治，谓其咸以软坚，滑以去著，温以散结，犹浅之乎测苡蓉也。

黄杰熙评：张氏之解，从马、马精入手，以其形似阴茎，兼气味甘温以引之归入手足少阴与脾，既以水火土三气为根据以解经，头头是道，理路分明，似可取，孰不可取。盖苡蓉，乃寄生植物，多寄生于桦树根上。马精落地所生，语出《别录》，后则以讹传讹之说也。

陈氏步张氏后尘，并突出一“精”字，以解经文，似有所得，并批驳叶氏之解症瘕，乃五十步笑百步也。

叶氏之解经，平正可靠，不落讹阱，真明辨之士，所以名望高于张陈二氏，为众所仰归，读叶氏之注，深知其造诣深远，知行合一之伟大名医也。

苡蓉除《本经》所列主治外，以其温滑油润之性，以治老人、虚人之大便燥结有神效。

巴 戟 天

气味辛甘微温无毒，主大风邪气，阴痿不起，强筋骨，安五脏，补中增志益气。

张隐庵曰：巴戟天，生于巴蜀，气味辛甘，秉太阴金土气化，其性微温，经冬不凋，又秉太阳标阳之气化。

主治大风邪气者，得太阴之金气，金能制风也。治阴痿不起，强筋骨者，得太阳之标阳，阳能益阴也。安五脏补中者，得太阴之土气，土气盛，则安五脏而补中。增志者，肾藏志而属水，太阳天气下运于水中也。益气者，肺主气而属金，太阴天气，外合乎肺也。

叶天士曰：巴戟天气微温，秉天春升之木气，入足厥阴肝经；味辛甘无毒，得地金土二味，入足阳明燥金胃经。气味俱升，阳也。

风气通肝，巴戟入肝，辛甘发散，主大风邪气，散而泻之也。

阴者宗筋也，宗筋属肝，痿而不起，则肝已全无鼓动之阳矣，巴戟气温益阳，所以主之。盖巴戟治阳虚之痿；淫羊藿治阴虚之痿也。

肝主筋，肾主骨，辛温益肝肾，故能强筋骨也。

胃者五脏之原，十二经之长，辛甘入胃，温助胃阳，则五脏皆安也。胃为中央土，土温则中自补也。

肾通气而藏志，巴戟气温益肝，肝者敢也，肝气不馁，则不耗肾，而志气增益也。

陈修园曰：巴戟天气微温，秉天春升之木气，入足厥阴肝经；味辛甘无毒，得地金土二味，入足阳明燥金胃。虽气味有土木之分，而其用统归于温肝之内，《佛经》以风轮主持大地，即是此义。《本经》以“主大风”三字提纲两见，一见于巴戟天，一见于防风。

阴阳造化之机，一言逗出。《金匱》云“风能生万物，亦能害万物。”防风主除风之害，巴戟天主得风之生，不得滑口读去。盖人居大块之中，乘风以行鼻息呼吸，不能顷刻去风。风即是气，风气通于肝，和风生人，疾风杀人，其主大风者，谓其能化疾风为和风也。

邪气者，五行正气不得风，而失其和，木无风则无以遂其条达之情，火无风则无以遂其炎上之性，金无风则无以成其坚劲之体，水无风则潮不上，土无风则植不蕃，一得巴戟天之用，则到处皆春，而邪气去矣。

邪气去而五脏安，自不待言也。

况肝之为言敢也，肝阳之气，行于宗筋，而阴痿起；行于肾脏，肾藏志而志增，肾主骨而骨强；行于脾脏，则震坤合德，土木不害，而中可补。

益气二字，又总结通章之义，气即风也，逐而散之，风散即为气散，生而亦死；益而和之，气和即是风和，死可回生，非明乎生杀消长之道者，不可以语此。

黄杰熙评：张氏之注似欠妥，椒温乃肝木之正气，胡扯到太阳标阳之气化上以解经文，诸多不合。味辛甘乃金土之味，应为足阳明胃经之正气，即金土合德之经腑，而错划为太阴肺脾二脏，欲详反晦，故所解之经文，不可取法。

叶氏之注，合乎实际，处处印证不误，似后来者居上。

陈氏之注，突出肝经风木之脏，对风之阐述精详，引据合拍，既是注经，又很象一篇论风气之论文佳作。但“《本经》以‘主大风’三字提纲两见，一见于巴戟天；一见于防风”，是有错误的，两字应改为三字，还有黄芪亦主“大风”呀！这是陈氏为了论证疾风与和风之别，即巽震之别，为了惊俗骇众，而下肯定语法，所犯之错，此又为美中不足也。

五味子

气味酸温无毒，主益气，咳逆上气，劳伤羸瘦，补不足，强阴益男子精。

张隐庵曰：五味子色味絨五，乃秉五运之精气，味酸温，得东方长生之气，故主益气。

肺主呼吸，发源于肾，上下相交。咳逆上气，则肺肾不交，五味子能启肾藏之水精，上通于肺，故治咳逆上气。

本于先天之水，化生后天之木，则五脏相生，精气充足，故治劳伤羸瘦，补不足。

核形象肾，入口生津，故主强阴。女子不足于血，男子不足于精，故益男子精。

叶天士曰：五味子气温，秉天春升之木气，入足少阳胆经；味酸无毒，得地东方之木味，入足厥阴肝经。气升味降，阴也。胆者担也，生气之原也；肝者敢也，以生血气之脏也。五味气温胆，味酸益肝，益肝所以益气。

肝血虚，则木枯火炎，乘以不胜，病咳逆上气矣。五味酸以收之，温以行之，味过酸则肝以津，而火不炎矣。

肝气不足，则不胜作劳，劳则伤其真气，而肝病乘脾，脾主肌肉，故肌肉瘦削。五味子酸以滋肝，气温治劳，所以主劳伤羸瘦也。

肝胆者，东方生生之脏腑，万物荣发之经也，肝胆生发，则余脏从之宣发，五味子益胆气而滋肝血，所以补不足也。

阴者，宗筋也。肝主筋，味酸益肝，肝旺故阴强也；酸温之品，收敛元阳，敛则阴生。精者，阴气之英华，所以益男子精也。

陈修园曰：五味子气温味酸，得东方长生之气而主风，人在风中而不知风，犹鱼在水而不见水，人之鼻息出入，顷刻离风而

死，可知人之所以生者风也，风气通于肝，即人生之木气。《庄子》云“野马也，尘埃也，生物之息以相吹也。”息字有二义，一曰生息，一曰休息。五味子温以逐木气之发荣，酸以敛木气之归根，生息休息，皆所以益其生生不穷之气。

倘其气不治，咳逆上气者，风木挟火气而乘金，

为劳伤，为羸瘦，为阴痿，为精虚者，即《金匱》所谓“虚劳诸不足，风气百疾”是也。风气通于肝，先圣提出“虚劳”大眼目，惜后人不能申明其义，五味子，益气中大具开阖升降之妙，所以概主之也。

唐宋以下诸家，有谓其具五味而兼治五脏者；有谓其酸以敛肺，色黑入肾，核似肾而补肾者，想当然之说，究非定论也。

然肝治，五脏得其生气而安，为《本经》言外之正旨。仲景佐以干姜，助其温气，俾气血与味相得而益彰，是补天手段。

黄杰熙评：张氏之注，长于形象思维，虽未言肝木，而实寓其义，又落实在肺肾上，并以肾之水精为主，以解经文，平淡可从。

叶氏之注，从肝胆入手，丝丝入扣，与经义吻合，不出奇而奇中，其善解经者也。

陈氏之注，是继承与发扬并重，突出肝经风木之脏，“然肝治”以后之文，是其注之精华所在，学者宜多留意焉，必有所得。

总之，五味子酸温之品，为肝胆之药，酸以敛之，温以散之。风火过急，可以敛之散之；风气不足，可以补之温之，使得其平，气调则血调，气血调畅，诸疾自治。今人只知配干姜、细辛以治咳逆上气，何其陋哉。

蛇 床 子

气味苦辛无毒，主男子阴痿湿痒，妇人阴中肿痛，除

痹气，利关节，癩病恶疮。久服轻身，好颜色。

陈修园曰：蛇床子气味苦辛，主男子阴痿湿痒，妇人阴中肿痛，除痹气。其性温热，得少阴君火之气，秉火气而下济其阴寒也。除痹气，利关节，秉火气而外通其经脉也。

心气虚而寒邪盛，则癩病；心气虚而寒邪盛，则生恶疮，蛇床子味苦性温，能益心气虚，故治癩病恶疮。

久服则火土相生，故轻身；心气充盛，故好颜色。

蛇，阴类也。蛇床子性温热，蛇虺喜卧于中，嗜食其子，犹山鹿之嗜水龟，潜龙之嗜飞燕，盖取彼之所有，以资己之所无，故阴痿虚寒所宜用也。李时珍曰：“蛇床子神农列为上品，不独助男子，且有益于妇人，乃世人舍此而求补药于远域，且近时但用为疮药，惜哉”。

黄杰熙评：陈氏之注，以蛇床子之性温热入手少阴心经以解经文，虽能中的，但不无遗义。应结合味苦入心，辛入手太阴肺经，子入足少阴肾经，为补火之品，故可以治因心肾虚寒之阴痿，妇女因寒湿之阴中肿痛，以及因风寒湿滞之湿痒，除风寒湿之痹气，利关节，癩病恶疮。风寒湿去则身轻，好颜色。

《金匱》蛇床子散，乃温中坐药，即外用药。但内服治心肾阳虚之阳痿证，颇有效验，验方三子散治阳痿，蛇床子60克、菟丝子60克、五味子20克，研为细末，每服九克，一日二次，黄酒送服，六日见效，六十日可全愈。

覆盆子

气味酸平无毒，主安五脏，益精气长阴，令人坚志强、倍力、有子。久服轻身不老。

陈修园曰：《本经》名“蓬藂”，以其藤蔓繁衍，苗叶不凋，结子则蓬蓬而藂藂也。《别录》名“覆盆”，以其形圆而扁，如釜如

盆，就蒂结倒垂向下，一如盆之下覆也。

气味酸平，藤蔓繁衍，具春生夏长之气；覆下如盆，得秋时之金气；冬叶不凋，得冬令之水精；结实形圆，具中央之土气，体备四时，质合五行，故主安五脏。肾受五脏之精而藏之，故益精气而长阴。肾气充足，则令人坚强志、倍力、有子。是覆盆虽安五脏，补肾居多，所以然者，水天上下之气，交相输应也，天气下覆，水气上升，故久服轻身不老。

黄杰熙评：修园此注颇超然，能缘一物之终始，正本清源以注经文而来。

然覆盆子补肾之功居多，肾精足则五脏六腑身躯百骸，皆精足而神充，故轻身而延缓衰老。补肾药用之，多健奇功，但必须多服久服，始见功效，捣碎泡酒喝最佳。

菟 丝 子

气味辛甘平无毒，主续绝伤，补不足，益气力，肥健人。《别录》云：“久服明目轻身延年”。

张隐庵曰：凡草木子实，得水湿清凉之气，后能发芽；菟丝子得沸汤火热之气，而有丝芽吐出，盖秉性纯阴，得热气而发也。

气味辛甘，得手足太阴天地之气化，寄生空中，丝经缭绕，故主续绝伤，续绝伤故能补不足，补不足故能益气力，益气力故能肥健人。

兔乃明月之精光，“阴精所奉，其人寿”，故轻身延年。

叶天士曰：菟丝子气平，秉天秋平之金气，入手太阴肺经；味辛甘无毒，得地金土二味，入足太阴脾经、足阳明燥金胃经。气味升多于降，阳也。

其主续绝伤者，肺主津液，脾统血，辛甘能润，润则绝伤续也。

肺主气，脾主血，胃者十二经之本，气平而味辛甘，则气血俱益，故补不足也。

气力者，得于天，充于谷，辛甘益脾胃，则食进而气力充也。

脾胃为土，辛甘能润，土润则肌肉自肥也。

陈修园曰：菟丝肺药也，然其为用在肾，而不在肺，子中脂膏最足，绝类人精，金生水也。主续绝伤者，子中脂膏如丝不断，利于补续也。补不足者，取其最足之脂膏，以填补其不足之精血也，精血足则气力自长，肥健自增矣。

久服肾水足则目明，肾气壮则身轻。华元化云“肾者，性命之根也。”肾得补则延年。

黄杰熙评：叶氏之注，拘谨板滞，只从气味入手注经之结果，不知得此气味之药颇多，却无续绝伤、补不足、益气力、肥健人之作用。且气味可以经人工调配而成，即善调五味之厨师是也，其能取代大夫治病乎？

张、陈二氏之注，好在能放弃气味，只取作为参考补充，专以自然生长之形象实质，以注经文，使经文畅达无阻，所以颇超。

但菟丝是寄生植物，善吸它物之营养与天阳而生长繁茂，故又为安胎要药。续绝伤治腰腿疼痛，与续断同用，效果超然。

沙 参

气味苦微寒无毒，主血结惊气，除寒热，补中益脾气。《别录》云“久服利人”。

张隐庵曰：沙参生于近水之沙也，其性全寒，苦中带甘，故曰微寒，色白多汁，秉金水之精气。

血结惊气者，荣气内虚，故血结而惊气也。寒热，卫气外虚，故肌皮不和而寒热也。补中者，补中焦之津液，补则血结惊气可治矣。益肺者，益肺气于皮毛，益肺则寒热可治矣。所以然者，秉

水精而补中，秉金精而益肺也。

久服则血气调而荣卫和，故利人。

叶天士曰：沙参气微寒，秉天初冬之水气，入足少阴肾经；味苦无毒，得地南方之火味，入少阴心经。气味俱降，阴也。

心主血而藏神，神不宁则血结而易惊矣，结者散之，惊者平之，沙参味苦能散，气寒能平也。

心火秉炎上之性，火郁则寒，火发则热，苦寒之味，能清心火，故除寒热。

阴者所以守中者也，气寒益阴，所以补中。肺为金脏，其性畏火，沙参入心，苦寒清火，故能益肺气也。

陈修园曰：沙参气微寒，秉水性而入肾；味苦无毒，得水性而入心，谓其得水性以泻心火之有余也。

心火亢，所以主之，血不行而为结，而味之苦，可以攻之。心火亢，则所藏之神不宁而生惊，而气之寒可以平之。

心火秉炎上之性，火郁则寒，火发则热，而苦寒可以清心火，故能除寒热也。

阴者，所以守中者也，苦寒益阴故补中。补中则金得土生无火克，所以益肺气也。

愚按：《本经》人参、沙参，气味甘，性皆微寒，后人改人参微温。人参味甘，甘中带苦，故曰微寒。沙参全寒，苦中带甘，故曰微寒。先圣立言，自有深意，后人不思体会而审察之，擅改圣经，误人最甚。

黄杰熙评：张氏之注，除“其性全寒，苦中带甘，故曰微寒，色白多汁，秉金水之精气”可取外，其余皆是想当然之推理，注已落空，瞎凑而成章。

叶氏之注，循规蹈理，四平八稳，难于挑剔。但缺乏生机与全面彻底。

陈氏尽力摄取张、叶二氏之精义，去其糟粕以成其注，似可

取。

张氏谓“荣气内虚，故血结而惊气也”，显然不够周到，陈氏改为“血不行而为结”，浅显明白。叶氏谓“沙参味苦能散”，显然有语病。“苦能泄”经有明文，“辛能散”均出自《内经》，此其疏忽也。

盖沙参产于沙地多水处，色白而疏松多孔窍质轻，极象肺之体，味苦甘性微寒，得心肾之性能清火，脾土之味能生金补肺气。肺为相辅之官，辅佐心君而通行血气以治血结惊气；寒热者，火郁、火发而交替之现象，苦以泄之，寒以清之，故可除之。甘能补中以益肺之气。统观沙参乃补肺气、清心火之药饵。

至于陈氏之按语，其错误在余“人参评”中，兹不赘，请参观自明。

泽 泻

气味甘寒无毒，主风湿痹，乳难，养五脏，益气力，肥健消水。久服耳目聪明，不饥，延年，轻身，面生光，能行水上。

张隐庵曰：泽泻水草也，气味甘寒，能启水阴之气，上滋中土。

主治风寒湿痹者，启在下之水津，从中土而灌溉于肌肉皮肤也。

乳者，中焦之汁，水津滋于中土，故治乳难。五脏受水谷之精，泽泻泻泽中之土，故养五脏。肾者作强之官，水精上滋，故益气力；从中土而灌溉于肌腠，故肥健；水气上而后下，故消水。

久服而耳目聪明者，水济其火也；不饥延年者，水滋其土也；轻身面生光者，水泽外注也；能行水上者，言其耳目聪明不饥。延年轻身而面生光者，以其能行在下之水，而使之上也。

叶天士曰：泽泻性寒，秉天冬寒之水气，入足太阳寒水膀胱经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气降味和，阴也。

其主风寒湿痹者，风寒湿三者合而成痹，痹则血闭而肌肉麻木也，泽泻味甘益脾，脾湿去则血行而肌肉活，则痹症疗矣。

其主乳难者，脾主血，血不化，乳所以难也，味甘益脾，脾湿行则血运而乳通也。

其主五脏，益气力肥健者，盖五脏藏阴者也，而脾为之源，脾主肌肉，而性恶湿，泽泻泻湿，湿去则健脾。脾乃后天之本，所以肌肉长而气力益，阴气充而五脏得养也。

其消水入膀胱，寒气下泄也。

久服耳目聪明，不饥延年轻身者，肾与膀胱为表里，膀胱水道通，则肾之精道固，精足则气充，肾开窍于耳，所以耳聪；水之精为目瞳子，所以目明。肾者胃之关，关门固，所以不饥；肾气纳，所以轻身延年也。

其言面生光，能行水上者，脾为湿土，湿则重，燥则轻，轻则能行水上也；脾统血，血充则面有光彩也。盖表其有利水固肾之功，燥湿健脾之效也。

陈修园曰：泽泻气寒，水之气也；味甘无毒，土之味也；生于水而上升，能启水阴之气上滋中土也。

其主风寒湿痹者，三者以湿为主，此能启水气上行而复下，其痹即从水气而化矣。

其主乳难者，能滋水精于中土而为汁也。

其主五脏，益气力，肥健等句，以五脏为藏阴，而脾为五脏之原，一得水精之气则能灌溉四旁，俾五脏循环而受益，不特肥健、消水、不饥见五脏之功。而肺得水精气而气益，心得水精之气而力益，肝得水精之气而目明，肾得水精之气而耳聪，且形得水精之气而体轻，色得水精之气而面生光泽，一生得水精之气而

延年，所以然者，久服之功，得行在下之水，而使之上也。

此物形圆，一茎直上，无下行之性，故其功效如此，今人以咸水拌炒，则反制其肘矣。

黄杰熙评：泽泻形圆，内多孔窍，切片如车轮之状，故能转动以行水，生于水中而生机勃勃，不为水困。一茎直上，叶从根出，故能引水津上行，既“能行水上”之义。张氏此解合拍，陈氏从之，并不偶然，叶氏解为行于水上不妥。但叶氏对归经主治之解是步步合拍的。

泽泻气寒味甘，气寒入膀胱水腑，味甘入脾土以除湿，是清湿热利水道之药饵，故《本经》只言“风湿痹”，未言“寒”字，是一大眼目，不能以寒而治寒明矣。其他主治，皆湿热去，而所得之效果，既邪去正安得补之义。

综上以观，三氏之注，对重点并不突出，使人读后，莫之所措，遵用之，恐不能治一病也！此注经家之通病，甚矣！读书之难也。

菖 蒲

气味辛温无毒，主治风寒湿痹，咳逆上气，开心孔，补五脏，通九窍，明耳目，出声音，主耳聋痛疮，湿肠胃，止小便利。久服轻身，不忘，不迷惑，延年，益心智，志高不老。

张隐庵曰：太阳之气生于水中，上与肺金相合而主神，菖蒲生于水石之中，气味辛温，乃秉太阳寒水之气，而上合于心肺之药也。

主治风寒湿痹，咳逆上气者，太阳之气，上与肺气相合，而出于肌表也。开心孔者，太阳之气，上与心气相合，而运其神机

也。五脏在内，九窍在外，肝开窍于二目，心开窍于二耳，肺开窍于二鼻，脾开窍于口，肾开窍于前后二阴，菖蒲秉寒水之精，能濡五脏之窍，故内补五脏，外通九窍，明耳目，出声音，是通耳目口鼻之上窍也。

又曰：主耳聋痈疮者，言耳不能听，而为耳痈之耳疮，菖蒲并能治之。

温肠胃、止小便利，是通前后二阴之下窍也，菖蒲气味辛温，性惟上行，故温肠胃，而止小便之过利。

久服则阳气盛，故轻身；心气盛，故不忘。寒水之精，太阳之阳，标本相合，故不迷惑而延年。益心智者，菖蒲益心，心灵则智生。高智不老者，水精充足，则肾志高强，其人能寿而不老。

叶天士曰：菖蒲气温，秉天春和之木气，入足厥阴肝经；味辛无毒，得地西方之金味，入手太阴肺经。气味俱升，阳也。

风寒湿三者，合而成痹，痹则气血俱闭，菖蒲入肝，肝藏血；入肺，肺主气，气下能行，味辛能润，所以主之也。

辛润肺，润则气降，而咳逆上气自平。

辛温为阳，阳主开发，故开心窍。辛润肺，肺主气，温和肝，肝藏血，血气调和，五脏俱补矣。通九窍者，辛温开发也。辛温为阳，阳气出上窍，故明耳目。肺主音声，味辛润肺，故出音声。主耳聋，即明耳目之功也。治痈疮者，辛能散结也。肠胃属于手足阳明经，辛温为阳，阳充则肠胃温也。膀胱寒，则小便不禁，菖蒲辛温温肺，肺乃膀胱之上源，故止小便利也。

久服轻身，肝条畅也；不忘，不迷惑，阳气充而神明也；延年，阳气盛而多寿也；益心智、志高，辛温为阳，阳主高明也；不老，温能活血；血充，面华也。

陈修园曰：菖蒲性用略同远志，但彼苦而此辛，且生于水石之中，得太阳寒水之气。其味辛，合于肺金而主表；其气温，合于心包络之经，通于君火而主神。

其主风寒湿痹，咳逆上气者，从肺驱邪以解表也。开心窍至末句，皆言补心之效，其功同于远志。声音不出，此能入心，而转舌入肺以开窍也。痲疮为心火，而此能宁之。心火下济而光明，故能温肠胃而止小便利也。但菖蒲秉水精之气，外通九窍，内濡五脏，其性自下以行于上，与远志自上以行于下者有别。

黄杰熙评：张氏抓住太阳之气，生于水中为钥匙以解经文，忘掉了气味辛温，解得十分勉强吃力而欠通，不无遗憾。

叶氏紧紧围绕气味归经以解经，理出正统，解得比张氏明白通畅得多，故可从，但不无遗珠之憾。

陈氏绍张叶二氏之遗绪，取二氏之精华，汇通以解经，并与远志为对比补充其义，似后来者居上，但只属守成，并无多大发明。

盖菖蒲生于水石之上，秉金水之性，气温味辛而香窜，一寸有九节者为上品，称“九节菖蒲”，通称“石菖蒲”。湿入水中，能化水为气，循三焦网膜而上，达于肺为呼吸，布于皮表为卫气，此即太阳寒水之气化也，即本寒标阳之来历。张氏误为上与肺金相合而主神，心主神，肺主魄，经有明文，魄者气魄也，既气旺而有魄力之谓也，魄力足则咳逆上气自止。卫气流通，辛可制风，温可逐寒驱湿，故能治风寒湿三气闭结之痹症。

其余之主治，皆肺卫之气畅达，血行无阻，辛散温通，香窜开窍，脏腑经络百骸受益之结果，不必悉举。

远 志

气味苦温无毒，主咳逆伤中，补不足，除邪气，利九窍，益智慧，耳目聪明，不忘，强志强力。久服轻身不老。

张隐庵曰：远志气味苦温，根茎骨硬，秉少阴心肾之气化，苦温者心也，骨硬者肾也，心肾不交，则咳逆伤中，远志交通心肾，

故治咳逆伤中。

补不足者，补心肾之不足。除邪气者，除心肾之邪气。利九窍者，水精上濡空窍于阳，下行二便于阴也。神气相通，则益智慧。智慧益，则耳目聪明。心气盛，则不忘。肾气盛，则强志倍力。

若久服，则轻身不老，《抱朴子》云：“陵阳子仲，服远志二十余年，有子三十七人，开书所视，记而不忘。”此轻身不老之一徵也。

叶天士曰：远志气温，秉天春和之木气，入足厥之肝经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经；气温味苦，入手厥阴心包络。气升味降，阳也。

中者脾胃也，伤中，脾胃阴气伤也。远志味苦下气，气温益阳气，温则咳逆除，阳益则伤中愈也。补不足者，温苦之品，能补心肝二经之阳不足也。除邪气者，温苦之气味，能除心肝包络郁结之邪气也。气温益阳，阳主开发，故利九窍。九窍者，耳目鼻各二，口前后阴各一也。味苦清心，心气光明，故益智慧。心为君主，神明出焉，天君明朗，则五官皆慧，故耳目聪明不忘也。心之所之谓之志，心灵则志强。肝者敢也，远志畅肝，肝强则力倍。

久服轻身不老者，心安则坎离交济，十二官皆安，阳平阴秘，则血旺气充也。

陈修园曰：按远志气温，秉厥阴风木之气，入手厥心包络；味苦得少阴君火之味，入手少阴心经，然包络为相火，而主之者心也。

火不刑金，而咳逆之病愈。

主明则下安，安则不外兴利除弊两大事，即补不足，除邪气之说也。心为一身之主宰，凡耳目口鼻之类，无一不待其使令，今得远志以补之，则九窍利，智慧益，耳聪目明，记不忘，志强力

壮，所谓天君泰然，百体从令者此也。

又云久服轻身不老者，即《内经》所云“主明则下安，以此养生则寿”之说也。夫曰养身，又曰久服，言其为服食之品，不可以之治病，故经方中绝无此味。今人喜服丸药补养，久则增气而成病，唯以补心之药为主，又以四脏之药为佐，如四方诸侯，皆出所有以资天子，即乾纲克振，天下皆宁之道也。诸药皆偏，唯专以补心则不偏，《抱朴子》谓“陵阳子服远志二十七年，有子三十七人，开书所视，记而不忘”者，其久服之效也。若以之治病，则失经旨矣。

黄杰熙评：张氏之注，从心肾入手以解经文，虽有些勉强，但还算可以。

叶氏归经主治，一般可取。但对“味苦清心”，解之不确，因苦之本味为火，极味才为寒。

归经自然进入手足厥阴经肝与心包络和手少阴心经；但不明苦味是得火之味应补火之理。其所以能入心补火，心火明则神宁，则主治各症，迎刃而解。心火下交，肾水上腾，所以还应归足少阴肾经，肾藏精与志，故名“远志”。总之，是交心肾之药兼厥阴经之道路也。

陈氏之注，扯得太远，以心为主，在做文章。不过最后“久服之效也，若以之治病，则失经旨矣”几句话，可取。若以远志治急病、暴病，未见有见效者也。

细 辛

气味辛温无毒，主咳逆上气，头痛脑动，百节拘挛，风湿痹痛、死肌。久服明目利九窍，轻身长年。

张隐庵曰：细辛气味辛温，一茎直上，其色赤黑，秉少阴泉下之水阴，而上交于太阳之药也。少阴为水脏，太阳为水腑，水

气相连于皮毛，内合于肺，若循行失职，则病咳逆上气，而细辛能治之。

太阳之脉，起于目内眦，从颠络脑，若循行失职，则病头痛脑动，而细辛亦能治之。

太阳之气主皮毛，少阴之气主骨髓。少阴之气不合太阳，则风湿相侵，痹于筋骨，则百节拘挛；痹于腠理，则为死肌，而细辛皆能治之，其所以能治之者，以气胜之也。

久服明目利九窍者，水精之气，濡于空窍也，九窍利，则轻身而延年矣。

又曰：宋元佑陈承，谓细辛单用末，不可过一钱，多则气闭不通而死。近人多以此语，忌用，而不知辛香之药，岂能闭气？上品无毒之药，何不可多用？方书类此之言不少，学者不善详审而遵守之，歧黄之门，终身不能入矣。

叶天士曰：细辛气温，秉天春升之木气，入足厥阴肝经；味辛无毒，得地西方之金味，入手太阴肺经。气味俱升，阳也。

肺属金而主皮毛，形寒饮冷则伤肺，肺伤则气不降，而咳逆上气之症生矣，细辛入肺，温能散寒，所以主之。

风为阳邪，而伤于上，风气入脑，则头痛脑动，风性动也，其主之者，风性通肝，入肝辛能散也。

地之湿气，感则害人。皮肉筋骨，百节拘挛，湿伤筋骨也；风湿痹痛，湿伤肉也；死肌，湿伤皮也。细辛辛温散湿，活血，则皮肉筋骨之邪，散而愈也。

久服辛温畅肝，肝开窍于目，五脏津液上奉故目明。辛温开发，故利九窍。肝木条达，以生气血，所以轻身长年也。

黄杰熙评：张氏之注，从少阴肾水与太阳膀胱经入手以解之，似有师法，取仲景用以治少阴伤寒而来，后人取为治少阴病之引经药，义亦由此。根据正确，所解经文畅达可从。

叶氏之解，紧跟细辛之气味，其归经则成了足厥阴肝经与手

太阴肺经，与张氏之解，炯然不同。但所解之经文，亦头头是道，处处逢春，堪称高手。但仲景治厥阴病之乌梅丸与手太阴肺经之咳逆上气，有小青龙汤等方，其中皆有细辛温散辛通之功。据此以求，细辛应归入少阴、太阳、厥阴、太阴四经为妥当。

至于细辛用不过钱之说，始于宋朝元佑年间，福建人陈承《重广补注神农本草》一书，陈承指的是单服细辛末，不过一钱，非指汤剂明矣。余曾用过细辛30克加入大剂八味丸汤料中煎服，治愈三十年之少阴受寒头痛，一剂即起沉疴。

细辛为《本经》上品，常服久服之药，如吃米面死人，世间或有之，不能据此少吃大米白面了，限量一钱，岂有此理。人类之劣根性，说好话没人听，更不传；听到坏话是特大新闻，传得又广又深远，根深蒂固，很难纠正过来。这种见到封皮即认为是告示的人，闻屁味而馨香惯了，一辈子也入不了歧黄之门，没有出息。

柴 胡

气味苦平无毒，主心腹肠胃中结气，饮食积聚，寒热邪气，推陈致新。久服轻身，明目益精。

张隐庵曰：柴胡春生，白莠香美可食，香从地出，直上云霄，其根苦平，秉太阴坤土之气，而达于太阳之药也。

主治心腹肠胃中结气者，心为阳中之太阳而居上，腹为阴中之太阴而居下，肠胃居心腹之中，柴胡从坤土而治肠胃之结气，则心腹之正气自和矣。

治饮食积聚，土气调和也。治寒热邪气，从阴出阳也。从阴出阳，故推陈莖而致新谷。

土气调和，故久服轻身。阴气上出于阳，故明目。阳气下交于阴，故益精。

愚按：柴胡乃从太阴地土，阳明中土，而外达于太阳之药也，故仲祖《卒病论》言伤寒中风，不从表解。太阳之气，逆于中土，不能枢转外出，则用小柴胡汤，达太阳之气于肌表，是柴胡并非少阳主药。后人有病在太阳，而用柴胡则引邪入于少阳之说，则庸愚无稽之言，后人宗之，鄙陋甚矣。

叶天士曰：柴胡气平，秉天中正之气；味苦无毒，得地炎上之火味。胆者，中正之官，相火之腑，所以独入足少阳胆经。气味轻升，阴中之阳，乃少阳也。

其主心腹肠胃中结气者，心腹肠胃，五脏六腑也。脏腑共十二经，凡十一脏，皆取决于胆，柴胡轻清升达胆气，胆气条达，则十一脏从之宣化，故心腹肠胃中凡有结气，皆能散之也。

其主饮食积聚者，盖饮食入胃，散精于肝，肝之疏散，又藉胆为生发之主也，柴胡升发胆气，肝能散精，而饮食积聚自下矣。

少阳经行半表半里，少阳受邪，邪并于阴则寒，邪并于阳则热，柴胡和解少阳，故主寒热之邪气也。

春气一至，万物俱生，柴胡得天地春升之性，入少阳以生血气，故主推陈致新也。

久服清气上升，则阳气自强，所以轻身。五脏六腑精华上奉，所以明目。清气上行，则阴气下降，所以益精，精者，阴气之精华也。

黄杰熙评：张氏所注，认为“其根苦平”，显然饮片用根，归经为“秉太阴坤土之气，而达于太阳之药也”。但苦为火味，应归心或少阳三焦与胆；平气归脾与肺或胃、大肠。据此只说对了一小部分，所以其注极为勉强，不可信。因此，末后之结论，亦属于虚乌有。

叶氏毕竟是理论与实际结合之大名医，其注“独入足少阳胆经”是对了一半，而还有手少阳三焦经未提及，是一大遗憾。而所注经文，较张氏着实多矣，但不够理由充分。

多少年来，柴胡一药，品种乱极了，不辨真伪者多矣。药房所备之柴胡，有软柴胡、红柴胡、绿柴胡、银柴胡等等，五花八门，以伪乱真。从理论上夸夸其谈，胡诌一通，能治什么什么，遵用之则恰恰相反，无不出差错者，害人非浅，临床经验丰富的医生，累受其害，称柴胡为“柴胡狗”，最怕用它。

这个问题，如不澄清，遗害非浅。盖现行之柴胡，是多用根，不用茎叶，其根并非气味苦平，而是辛温，效用与羌独活无异，服后发汗而燥湿劫阴，壮实人服之，尚能难过一阵子后没事；阴亏气弱人服后，大汗淋漓，往往虚脱。所出的问题，是极其严重的，不得不特别注意留心。叶天士在医案中提到“柴胡劫肝阴”（是指伪柴胡而言），而在注《本经》中未提及，实属遗憾。

真正的柴胡，既仲景所用的柴胡，出自四川梓潼县，称潼柴胡，唐容川论证最详。唐氏曰：“柴胡色青，一茎直上，生于春而采于夏，得木火之气味，从中土以达木火之气，使不侮肺者也，故能透胸前之结。夫仲景用柴胡以治少阳，其义尤精。少阳者，水中之阳，发于三焦，以行腠理，寄居胆中，以化水谷，必三焦之膜网通畅，肝胆之木火通和，而水中之阳乃能由内达外。柴胡茎中虚松，有白瓤通气，象人身三焦之膜网，膜网有纹理，与肌肤筋相腠，故名腠理。少阳木火，郁于腠理而不达者，则作寒热，柴胡能达之，以其中松虚象腠理，能达阳气，且味清苦，能清三焦之火。然则，柴胡治胆者，用其茎也；治三焦者，用茎中虚松直上也；治太阳者，则是通三焦之路，以达其气，乃借治，非正治也。又柴胡须用一茎直上，色青，叶四面生，如竹叶而细，开小黄花者，乃为真柴胡，是仲景所用者。近有草根，辛温发表，绝非柴胡本性，断不可用。”至于主心腹肠胃中结气，饮食积聚，推陈致新者，乃木能疏土，即胆汁入肠胃中助消化之义也。

用柴胡者请注意，必须是茎叶、色青、茎中有白瓤、尝之味清苦者，始可用。此即潼柴胡之形色气味也。

升 麻

气味甘苦平，微寒无毒，主解百毒，杀百精老物殃鬼，辟瘟疫瘴气邪气，蛊毒入口皆吐出，中恶腹痛，时气毒痢，头痛风热风肿诸毒，喉痛口疮。久服不夭，轻身长年。

张隐庵曰：柴胡、升麻，皆达太阳之气，从中土以上升。柴胡从中土而达太阳之标阳；升麻兼启太阳之寒水；细辛更兼寒水之气启于泉下，而内合少阴，三者大义相似，而功用少别。

具身转周偏之功，故又名周麻，防风秦艽乌药防己木通升麻，皆纹如车辐，而升麻更觉空通。

叶天士曰：升麻气平微寒，秉天秋平冬寒金水之气，入手太阳肺经、足太阳膀胱经、手太阳小肠经；味苦甘无毒，得地南方中央火土之味，入手少阴心经；味苦则燥，入足阳明胃经。气味轻清，阳也。

其解百毒者，气平而寒，味苦而甘，能清能和，所以解毒也。

杀百精老物殃鬼者，升麻秉平寒之气，则得清阳通达之性，能破幽暗，制精鬼也。

瘟疫瘴气，甘能和，所以能辟之也。蛊毒阴恶败坏之毒，阴毒邪气，皆天地郁塞熏蒸之气也，平寒能清，苦能泄之，甘味能和、能解，故药入口，蛊即吐出也。

其主中恶腹痛者，甘能解毒，苦能泄邪也。

其主时气毒痢头痛者，甘平和毒，苦寒清热，平苦又燥湿也。

其主寒热风肿诸毒者，平甘以和之，寒苦以清之，入膀胱能散寒热风肿也。

喉痛口疮，火郁于上也，其主之者，苦寒之味，火郁发之也。

久服不夭，轻身延年者，升麻为阴中之阳，能升阳气于至阴之下，“阴精所奉其人寿”也，盖必佐补药，方可久服耳。

陈修园曰：气味甘苦平，甘者土也，苦者火也，主从中土而达太阳之气也。

太阳标阳本寒，故微寒。盖太阳乘寒水之气，而行于肤表，如天气之下连于水也。太阳在上，则天日当空，光明清湛，清湛故解百毒；光明故杀百精老物殃鬼。太阳之气行于肤表，故辟瘟疫、痲气、邪气。太阳之气行于地中，故蛊毒入口皆吐出。治蛊毒，则中恶腹痛自除。辟瘟疫、瘴气、邪气，则时气、毒痲、头痛寒热自散。寒水之气，滋于外而济于上，故治风肿诸毒、喉痛、口疮。

久服则阴精上滋故不夭，阳气盛故轻身，阴气充足，则长年矣。

尝考凡物纹如车轮者，皆有升转循环之用，防风、秦艽、乌药、防己、木通、升麻，皆纹如车辐，而升麻更空通，所以升转甚捷也。

黄杰熙评：张氏之注不算注，只说明柴胡、升麻、细辛三者，大义相似，功用少别而矣。皆达太阳之气，从中土以上升。

叶氏之注，循规蹈矩，气味归经则五：手太阴肺经，小肠、膀胱之手足太阳经，手少阴心经，足阳明燥金胃经，独遗微寒归肾之足少阴经，不无美中不足之憾。

其解主治经文，又与归经脱节，全凭气味甘苦平微寒以解之，自然不够全面彻底。

陈氏之注，承张氏未言之秘，叶氏气味之专，又丢掉气味，专主从中土而达太阳之气以解主治范围，在太阳上大做文章，似头头是道，但不无疑问。

盖升麻用其粗大之根，质疏松则孔隙多而粗大，能吸地下黄泉之水，即肾水膀胱水化气上行。地者土也，味甘；水者寒也，性微寒，循膜网上达于心肺，布于肤表，即是太阳经气上升外达之实。能入心肺者，心之味苦，肺之气平，得此气滋而出之也。

其主治虽多，不外升气解毒二者，可以括之。在升气方面，张

寿甫升陷汤、李东垣补中益气汤可以代表之；解毒方面仲景麻黄升麻汤及升麻鳖甲汤可以代表之。

桂

气味辛温无毒，主上气咳逆，结气，喉痹，吐吸，利关节，补中益气。久服通神，轻身不老。

张隐庵曰：桂木经冬不凋，气味辛温，其色紫赤，水中所生之木火也。

肺肾不交，则为上气咳逆之症，桂启水之生阳上交于肺，则上气平而咳逆除矣。

结气喉痹者，三焦之气不行于肌腠，则结气而为喉痹，桂秉少阴之水气，通利三焦，则结气通而喉痹可治矣。

吐吸者，吸不归根，即吐出也，桂能引下气与上气相接，则吸入之气，直至丹田而后出，故治吐吸也。

关节者，两肘、两腋、两髀、两膕，皆机关之室，周身三百六十五节，皆神气之周行，桂助心火之气，使心主之神，而出入于机关，游行于骨节，故所以利关节也。

补中益气者，补中焦而益上下之气也。

久服则阳气盛而光明，故通神；三焦明通会元真于肌腠，故轻身不老。

叶天士曰：桂气温，秉天春和之气，入足厥阴肝经；味辛无毒，得地西方润泽之金味，入手太阴肺经。气味俱升，阳也。

肺为金脏，形寒饮冷则伤肺，肺伤则气不下降，而上气咳逆矣，桂性温温肺，肺温则气下降而咳逆止矣。

结气、喉痹、吐吸者，痹者闭也，气结于喉，闭而不通，但吐而不能吸也。桂辛温散结行气，则结者散而闭者通，不吐而能吸也。

辛则能润，温则筋脉和而关节利矣。

中者脾也，辛温则畅达肝气，而脾经受益，所以补中益气者，肺主气，肺温则真气流通而受益也。

久服通神轻身，而身轻不老也。

陈修园曰：桂牡桂也，牡阳也，即今之桂枝，桂皮也。茵根也，即今之肉桂、厚桂也。然生发之机在枝干，故仲景方中所用俱是桂枝即牡桂也。时医以桂枝发表，禁不用，而所用肉桂，又必刻意求备，皆是为施治不必愈，卸罪巧法。

黄杰熙评：张氏之注，通则通矣，不无刺缪，如云“其色紫赤，水中所生之木火也。”紫乃火之变色，应入手少阴心，而归入足少肾去了。其能兼入肾膀胱者，乃心火下交，蒸动膀胱之水化气上行之结果。

张氏不明水火气血之关系，所以有此误。

叶氏之注，归经准确，但缺入心之说。总之，心主血、肝藏血，桂枝是入心肝温通血脉之圣药。“桂枝下咽，阳盛则毙”，血热者用之，火上加油；血虚寒者用之，雪中送炭。

陈氏是补充，此非注。补充说明仲景方全用桂枝之理，得其精要，故可从。

至于治“吐吸”之说，此治最精，数语难尽，详余所评注之《本草问答评注·八问》中，兹不赘。

羌 活

气味苦甘平无毒，主风寒所击，金疮止痛，奔豚病瘕，女子疝瘕。久服轻身耐老。

张隐庵曰：羌活初出土时，苦中有甘，晒干则气平味苦，故《本经》云“气味苦甘平”，其色黄紫，气甚芳香，生于西蜀，秉手足太阴金土之气化。

风之所击，如客在门而扣击之，从皮而入肌腠也。羌活秉太阴肺经之气，则御皮毛之风寒；秉太阴脾土之气，则御肌腠之风寒，故主治风寒所击。

金疮止痛，秉土气而长肌肉也。

奔豚乃水气上奔，土能御水逆，金能益子虚，故治奔豚。

痲疹，风痲风疹也，金能制风，故治痲疹。

“肝木为病，疝气瘦聚”，金能平木，故治女子疝瘦。

久服则土金相生，故轻身耐老。

叶天士曰：羌活气平，秉天秋燥之金气，入手太阴肺经；味苦甘无毒，得地南方中央火土之味，入手少阴心经、足太阴脾经。气味降多于升，阴也。

其主风寒所击，金疮止痛者，金疮为风寒所击，则气血壅而不行，其痛更甚矣。羌活苦能泄，甘能和，入肺解风寒；所以气血行而痛止矣。

奔豚者，肾水之邪，如豚奔突而犯心也，苦可燥湿，甘可伐肾，所以主之。

痲疹者，风症也；疹者，湿流关节之症也。女子疝瘦，多行经后，血假风湿而成，羌活平风燥湿，兼之气雄，可以散血也。

久服则脾湿散，所以轻身；心血和，所以耐老，皆味甘苦之功也。

陈修园曰：羌活气平，秉金气而入肺；味苦甘无毒，得火味而入心；得土味而入脾。

其主风寒所击者，入心以扶心火之衰，所以主之。

痲疹者，木动则生风，风动则挟木势而害土，土病则聚液而成痰，痰进入心，则为痲为疹。此物秉金气以制风，得土味而补脾，得火味而宁心，所以主之。

女子疝瘦，多行经后，血假风湿而成，此物入肝以平风，入脾以胜湿，入心而主宰血脉之流行，所以主之。

久服轻身耐老者，著其扶阳之效也。

黄杰熙评：《本经》名“独活”，又曰“独活一名羌活”。因此《三家注》皆以羌活为解，故此书编辑者易名“羌活”。

羌活、独活，炯然不同，显为二物，唐·甄权《药性本草》开始分别，距今已一千三百多年。明·李时珍《本草纲目》仍混为一物，两个产地。清代之三位大名医，亦无分别，混在一起，依经文注解，通则通矣，实则大缪。

羌活辛苦温气烈；独活辛温，气烈小于羌活，均为祛风燥湿劫阴之品。不过羌活走表发汗，独活走里发汗，羌活入太阳经，独活入少阴经。因其燥烈劫阴，仲景方不用，《千金方》开始用之，张元素、李东垣喜用之，恐其时之寒湿特重，据此用之，到颇为对症。

总之，二活是祛风寒湿之药物，据此以解经文，无不透彻。所以《三家注》欲明反晦，晦在分辨与重点突出上不明不白。

防 风

气味甘温无毒，主大风头眩痛，恶风，风邪目盲无所见，周行周身骨节疼痛，烦满。久服轻身。

张隐庵曰：防风茎叶花实，兼备五色，其味甘，其质黄，其嗅香，秉土味之专精，治周身之风症。盖土气厚，则风可屏，故曰防风。

风淫于头，则大风头眩痛，申明大风者，乃恶风之风邪，头痛不已，必至目盲无所见，而防风能治之。

又风邪行于周身，甚至骨节疼痛，而防风亦能治之。

久服则土气盛，故轻身。

元人王好古曰：“病头痛、肢节痛、一身尽痛，非羌活不能除，乃拨乱反正之主，君药也”；李东垣曰：“防风治一身尽痛，随所

引至，而乃卒伍卑贱之职也”。愚按：神农以上品为君，羌活防风并列上品，俱散风治病，何以贵贱迥别，后人发明药性，多有如是谬妄之论，虽曰无关治法，学者遵而信之，陋习何由得洗乎！

叶天士曰：防风气温，秉天春和风木之气，入足厥阴肝经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气味俱升，阳也。

肝为风木，其经与督脉会于巅项，大风之邪入肝，则行于阳位，故头眩痛，其主之者，温以散之。

伤风则恶风，恶风，风邪在表之风也；肝开窍于目，目盲无所见，在肝经之风也；风行于周身，在经络之风也；骨节疼痛，在关节而兼湿也，盖有湿则阳气滞而痛也。皆主之者，风气通于肝，防风入肝，甘温风散也。

脾主肌肉，湿则身重矣。久服轻身者，风剂散湿，且引清阳上通达也。

陈修园曰：风伤阳位，则头痛而眩；风伤皮毛，则为恶风之风邪；风气害空窍，则目盲无所见。风行周身者，经络之风也；骨节疼痛者，关节之风也；身重者，病风而不能晓捷也。防风之甘温发散，可以统主之。

然温属春和之气，入肝而治风，尤妙在甘以入脾，培土以和木风，其用独神。此理证之《易》象，于剥复二卦，而可悟焉，两土同崩则剥，故大病必顾脾胃，土木无忤则复，故病转必和肝脾，防风驱风之中，大有回生之力。李东垣竟曰“卒伍卑贱”之品，真门外汉也。

黄杰熙评：张氏之解崇土，故注之甚牵强附会之至，到“久服则土盛，故轻身”，则碰壁矣，土主湿，土湿重应为身重。故张氏之注到了矛盾不能解决之程度。

叶氏归经正确，解之理实合一，故可从。

陈氏之解与叶氏略同，起步有别，与叶解互参，可谓得其道矣。

总之，防风是治肌肉之风邪，使肝脾无忤，则风熄，主治各症自瘳。

紫 苏

气味辛微温无毒，主下气，杀谷，除饮食，辟口臭，去邪毒，辟恶气。久服神明，轻身耐老。

张隐庵曰：紫苏气味辛温，嗅香色紫，其叶昼挺暮垂，秉太阳天日晦明之气。

天气下降，故下气，下气则能杀谷，杀谷则能除饮食，除，消除也。味辛嗅香，故辟口臭，辟口臭，则能去邪毒，去邪毒，则能辟恶气。

久服则天日光明，故通神明；天气下降，则地气上升，故轻身耐老。

陈修园曰：紫苏气微温，秉天之春气而入肝；味辛得地之金味而入肺。

主下气者，肺行其治节之令也。

杀谷除饮食者，气温达肝，肝疏散而脾亦健运也。辟口臭、除邪毒、辟恶气者，辛中带香，香为天地之正气，香能胜臭，即能解毒，即能胜邪也。

久服则气爽神清，故通神明，轻身耐老。

其子下气尤速，其梗下气宽胀，治噎膈反胃心痛，旁小枝通十二经关窍脉络。

愚按：紫苏配杏子，主利小便、消水肿、解肌表、定喘逆，与麻黄同功，而不走泄正气，故《本经》言久服通神明，轻身耐老，列于上品。

黄杰熙评：张氏之注，抓住两个特点进行的，即“其叶昼挺夜垂，秉太阳天日晦明之气”与“味辛嗅香”进行注解经文的，能

暢其义，但有遺珠之憾，容在后再议。

陈氏之注，抓住微温入肝，辛入肺，香胜臭，辟恶，解毒入手注经的，与张氏之注，异曲同工，遺憾相同。

盖紫苏之主要功能，是色紫入血分，性与桂枝相似，但温性小得多，温通血脉，以解肌发汗，与麻黄入气分者，根本不同。《本经》主治，以此解之，则无遺珠矣。时方香苏散，治四时感冒，药下咽，汗出肌松而愈矣，盖取此义而成方。

苏 子 (附)

气味辛温无毒，主下气，除寒、温中。（《别录》）

黄杰熙释：紫苏之子，主降下归根，气温入肝，使肝气条达；味辛入肺，使肺气通调。

下气者，子主降下之功也。温可除寒，血脉温煦之象也。除寒则中土必温，此连锁之反应也。

苏 枝 (附)

气味辛平无毒，主宽中行气，消饮食化痰涎，治噎膈反胃，止心腹痛，通十二经关窍脉络。（《别录》）

黄杰熙释：紫苏之枝，即可上通，亦可下达，并能横行四面八方。气平乃中正之气，入手太阴肺、足太阴脾经；味辛入肺与手足阳明胃大肠经。

以其枝之性，太阴阳明通畅，则宽中下气。阳明以下行为顺，则消饮食化痰涎，并治噎膈反胃。肺气治，则心君安，脾气理，则大腹畅，故止心腹痛。枝之作用，则可通十二经关窍脉络。

橘 皮

气味苦辛平无毒，主治胸中痰热，逆气，水谷。久服去臭，下气通神。

张隐庵曰：橘实形圆，色黄嗅香，肉甘，脾之果也。其皮气味苦辛，性主温散，筋膜似脉络，皮形若肌肉，宗眼如毛孔，乃从脾胃之大络，而外出于肌肉皮孔之药也。

胸中痰热逆气者，谓胃上邪郭之间，浊气留聚，则假意成形，而为痰热逆气之病，橘皮能达胃络之气，出于肌腠，故胸中之痰热逆气可治也。

利水谷者，水谷入胃，藉脾气之散精，橘皮能达脾络之气，上通于胃，故利水谷。

久服去臭，去中焦腐秽之臭气，而肃清脾胃也。下气通神者，下肺主之气，通心主之神，橘皮气味辛苦，辛入肺而苦入心也。

叶天士曰：橘皮气温，秉天春升之木气，入足厥阴肝经；味苦辛无毒，得地南西火金之味，入手少阴心经、手太阴肺经。气味升多于降，阳也。

胸中者，肺之分也，气常则顺，气变则滞，滞则一切有形血食痰涎，皆假滞气而成痰，痰成则肺气不降，而热生焉。橘皮辛能散，苦能泄，可以破痰清热也。

苦辛降气，又主逆气。饮食入胃散精，温辛疏散，肝能散精，水谷自下也。肺主降，苦辛下泄，则肺金行下降之令，而下焦臭浊之气，无由上升，所以去臭下气也。心为君主，神明出焉，味苦清心；味辛能散，所以通神也。

陈修园曰：橘皮气温，秉春气而入肝，味苦入心，味辛入肺。

胸中为肺之部位，唯其入肺，所以主胸中之痰热逆气。疏泄为肝之专，唯其入肝，所以能利水谷。心为君主之官，唯其入心，

则君火明而浊阴之臭气自去。又推其所以得效之神者，皆其下气之功也。总结上三句，古人多误解。

愚按：上古诸方，止曰橘皮，个用不切，并无去白之说。李东垣不参经义，不体物性，承雷斅炮制，谓留白则理脾健胃，去白则消痰止嗽，后人习以为法，每用橘红治虚劳咳嗽。

夫咳嗽非止肺病，有肝气上逆而咳嗽者，有胃气壅滞而咳嗽者，有胃气奔迫而咳嗽者，有心火上炎而咳嗽者，有皮毛闭拒而咳嗽者，有脾肺不和而咳嗽者，《经》云“五脏六腑，皆令人咳。”非独肺也。橘皮里有筋膜，外黄内白，其性先甘后辛，其性由络脉而外达肌肉毛孔，以之治咳，有从内达外之义，若去其白，其味但辛，止行皮毛，治风寒似乎相宜，虚劳不足，盖辛散矣。后人袭方书糟粕，不穷物理本原，无怪以讹传讹而莫之止。须知雷斅乃宋人，非黄帝时雷公也，业医者，当以上古方制为准绳，如《金匱要略》用橘皮汤治干呕哕，义可知矣。日华子谓橘瓢上筋膜，治口渴吐酒，煎汤饮甚效，以其能治胸中之饮，而行于皮肤也。夫橘皮从内达外，凡汗多、里虚、阳气外浮者，宜禁用之。

黄杰熙评：张氏之注，能缘橘皮之形象，结合气味以注解经文，通畅条达，颇为精要。

叶氏之注，归经确凿，病机详实，主治无误，堪称大国手。

陈注简敏，重点突出，橘皮之所以“得效之神者，皆其下气之功也”。又陈氏按语精辟，此是口授心传之法，学者切莫忽诸。

总之，橘皮之功效，无外以下三项，一辛散，达表发汗；二苦降，下气以调上中下三焦；三温通，以疏通壅塞之邪气。是理气之品，气实者用之，如获灵丹妙药，神清气爽；气虚者服之，如落井下石，不死者算命不该绝。

青 橘 皮 (附)

气味苦辛润无毒，主治气滞，下食，破积结及膈气。

叶天士曰：青橘皮，气温，秉天春和之木气，入足厥阴肝经；味苦辛无毒，得地西南金火之味，入手太阴肺经、手少阴心经。气味升多于降，阳也。

其主气滞者，味辛入肺，肺主气，而辛温能通也。下食者，饮食入胃，散精于肝，气温入肝，肝能散精，食自下也。辛能散，温能行，积者破而结者解矣。肝主升，肺主降，升而不降，气膈于右；降而不升，气膈于左，温可达肝，辛苦泄肺，则升降和膈气平矣。

黄杰熙评：叶氏之解，紧依气味，归经主治，左右逢源。但缺形象思维，不无遗略。

青皮是橘子未成熟时，剥下之橘皮，色青入肝，气雄于橘皮，归经主治与橘皮相同，但温通破滞，理肝之郁气，则十倍于橘皮。

橘 核 (附)

气味苦平温无毒，主治肾症，腰痛，膀胱气痛，肾冷。

黄杰熙释：橘核形圆色白质重，降肺金之气于肾膀胱，以生水化气。味苦入心，气平入肺，气温入肝，温通宣化少阴、太阴、厥阴三阴经之药也。

其主肾症者，症乃灌注之义，即今之慢性的恶性传染病，与爱滋病相似。橘核入肾，温通宣化，使病毒排走，肾功恢复而治愈之。

腰痛乃肾虚受寒湿所致，得橘核以核补之，兼温通宣化之力，故可主治之。

膀胱气痛，肾冷，皆虚寒气结所致，得此温通宣化之力，故可治之。

橘核质重下坠之性，治疗范围，以下焦肝肾膀胱为主。

橘 叶（附）

气味苦平无毒，主导胸膈逆气，入厥阴行肝气，消肿，散毒，乳痛，胁痛，用之行经。

黄杰熙释：橘叶四散披离，随风飘逸，嗅香窜，味苦入手少阴心经，气平入太阴脾肺二经，香窜之性，则无所不到，无所不周也。

胸膈逆气，乃邪气聚于胸膈之区，橘叶味苦入心则心气壮，气平入肺则肺气旺，香窜以驱之逐之，正气壮旺，邪不能存，故可导之使各归其所。

神宁魄安，全肃有权，香窜入肝，故入厥阴行肝气，使之条达。

气血畅行，以苦清之泄之，香散之，则肿消，毒散，乳痛愈，胁痛瘳，妇女经行。

辛 夷

气味辛温无毒，主治五脏身体寒热风，头脑痛，面黧。久服下气，轻身，明目，延年耐老。

张隐庵曰：辛夷味辛嗅香，苞毛花白，秉阳明土金之气化。阳明者土也，五脏之所归也，故主治五脏不和，而为身体之寒热。阳明者金也，金能制风，故主治风淫头脑之痛。阳明之气有余则面生光，故治面黧，黧黑色也。《经》云“阳明者，胃脉也。”其气下

行，故久服下气。土气和平，轻身，金水相生，故明目。下气、轻身、明目，则增年耐老。

黄杰熙评：张氏之解，突出阳明土金之气化，通则通矣，不无遗略，且断句领会经文亦欠妥。

盖经文应为“主治五脏身体寒热风”即风寒热之义。遗略辛味入手太阴肺，气温入足厥阴肝经。

辛夷花尖向上，辛温发散为阳，专治头脑之风寒而鼻涕不止，肺开窍于鼻，辛入肺以散风，温入肝以治寒凝。至于治五脏不和，导致身体风寒热及面黧等，皆辛散温通之力。肺治，肝胃无忤，则心安、肾宁、脾和之功也。

木 香

气味辛温无毒，主治邪气、辟毒疫瘟鬼，强志，主淋露。久服不梦寤，魔寐。

张隐庵曰：木香其数五，气味辛温，上彻九天，乘手足太阴天地之气化，主交感天地之气，上下相通。

治邪气者，地气四散也；辟毒疫瘟鬼者，天气光明也；强志者，天一生水，水生则肾志强；主淋露者，地气上腾，气腾则淋露降。天地交感，则阴阳和，开辟利，故久服不梦寤魔寐。梦寤者，寤中之梦；魔寐者，寐中之魔也。

叶天士曰：木香，气秉天春和之木气，入足厥阴肝经；味辛无毒而香燥，得地燥金之正味，入足阳明胃经。气味俱升，阳也。

辛温益胃，胃阳所至，阴邪恶毒鬼气皆消，所以主邪气毒疫瘟鬼也。辛润之品，能益阳明，阳明之气，能强志气。淋露者，小便淋漓不止，阳气虚，下陷也。阳者，肠胃之阳也，辛温益胃，胃阳充而淋露止也。

久服则阳胜，阳不归于阴，故不梦寤。阳气清明，阴气伏藏，

故不麝寐也。

黄杰熙评：张氏之注，以“木香其数五”立论，五为土之生数，扯入手足太阴注经的。

至于以五之数入脾，首见于《河图》、《洛书》；次见于《三洞珠囊》，《三洞》云：“五香者，即青木香也，一株五根，一茎三枝，一枝五叶，叶间五节，故名五香，烧之能上彻九天也。”《图经》谓木香为“五木香”，张氏之根据，可能是此。今查其生有异，叶似甘草叶之椭圆形，茎似藤，高二三尺，数目皆不一定是五。想《三洞》所云，另是别种。张氏据此注经，玄妙有余，与实难合。

叶氏临床经验丰富，理论最能结合实际，妙手回春，号称“十全之医”，所注经文，步步合拍，堪称高手。

木香本辛温之品，其能理脾者，亦因香气，辛散温通，辛乃肺胃之味，温乃肝胆之气，木能疏土，辛能制风，以此而归脾。

续 断

气味苦微温无毒，主治伤寒，补不足，金疮痈疡，折跌续筋骨，妇人乳难。久服益气力。

张隐庵曰：续断气味苦温，根色赤黄，爆干微黑，折有烟尘，秉少阳、阳明火土之气化，而治经脉三因之证。

主治伤寒者，经脉虚而寒气侵入，为外因之证也；补不足者，调养经脉之不足，为里虚内因之证也；金疮者，金伤成疮，为不内外因之证也；经脉受邪为痈为疡，皆外因也；折跌而筋骨欲续，亦不内外因也；妇人经不足而乳难，亦里虚内因也，续断秉火土之气，而治经脉三因之证者如此。

久服则火气盛，故益气；土气盛，故益力。

叶天士曰：续断气微温，秉天春升之木气，入足厥阴肝经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气升味降，阳也。

肝藏血，心主血，血者营也，中之守也，血虚则中伤。续断气微温入肝，肝者阳中之少阳，以生气血者也，所以主伤中。

补不足者，补肝经之不足也。金疮痈疡，皆伤血之症，气温益血，味苦入心，所以主之。折跌续筋骨者，气微温活血养经，则断者续也。女人血不足则乳难，得温行血，则乳汁自多也。肝者，罢极之本，以生气血之脏也，气微温，达少阳之气，所以益气力也。

陈修园曰：参此以形为治，续断有肉有筋，如人筋在肉中之象，而色带紫带黑，为肝肾之象；气味苦温，为少阳、阳明火土之气化。故伤于经络，而能散之。痈疡结于经络，而能疗之。折跌筋骨有伤，而能补不足，续其断绝。以及妇人乳难。

久服益气力者，亦强筋壮骨之功也。

黄杰熙评：陈氏之注最佳，是后来者居上。续断以形为治为主；以气味为治为辅，归经为肝肾少阳阳明四经无疑。

叶氏循经文为注，亦步亦趋，对主伤寒之“寒”字改为“中”字，别有新义。观仲景《伤寒论》一书，未有据经文取续断治伤寒于经络皮表者，可以互证。所以叶注很有参考价值。

张注突出少阳阳明火土之气化，而治经脉三因之证。人病无外乎三因与经络受邪，抓住续断之筋膜，似经络而入人身之经络，或通、或补、或续以治之，则万病皆离不开续断也乎？岂有此理！更无此证据，以证实之。续断本微温，“久服”怎能“火气盛”与“土气盛”，注到此，张氏强词夺理，亦无可奈何矣。

总之，续断之治病，以形为主，以肝肾为主，肝主筋，肾主骨，是续补筋骨之药物，古方时方与自我之方，用于此最多，颇有效验。用于其他，亦见通经活络之效，而是辅佐药。

蒺藜

气味苦温无毒，主治恶血，破症瘕积聚，喉痹乳难。久服长肌肉，明目轻身。

张隐庵曰：蒺藜子坚忍而有刺，秉阳明之金气，气味苦温，则属于火。《经》云：两火合并，故为阳明，故阳明秉火气而得金也。

金能平木，故主治肝木所瘀之恶血，破郭郭之症瘕积聚，阴阳交结之喉痹，阳明胃土之乳难，皆以其秉锐利之质，而攻伐之力也。

久服则阳气盛，故长肌肉。金水相生，故明目。长肌肉，故轻身。

其沙苑蒺藜一种，生于沙地，形如羊肾，主补肾益精，治腰痛虚损，小便遗沥，所以然者，味甘带腥，秉阳明土金之气，土生金而金生水也。

叶天士曰：蒺藜气温，秉春和之木气，入足厥阴肝经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气升味降，秉火气而生，阳也。

主恶血者，心主血，肝藏血，温能行，苦能泄也。症者，有形可徵也，有形之积聚，皆成于血，白蒺藜能破之者，以入心肝，而皆苦温气味也，温能散火，苦可去结。又主喉痹乳难乳汁不通也，乳房属肝，气温达肝，其乳自通。

白蒺藜，一名旱草，秉火气而生，形如火而有刺。久服心火独明，火能生土，则饮食倍而肌肉长。肝木条畅，肝开窍于目，故目明。木火通明，元阳舒畅，所以身轻也。

黄杰熙评：张注从阳明金气入手，兼其胃土之作用以解经文，且所引《经》文，义相似而词不同，故不加引号，原文是“两阳合明，故曰阳明。”以气味推之，张注之归经不确，以其形坚多刺

推之，得金之质，应归阳明，故张注不全，应与叶注合观之，始得全貌。

叶注从气味引入心肝二经，是正确的，所引经文，比较确切，若能兼形质以解之，则蒺藜之药性，了如指掌矣。

至于蒺藜又称白蒺藜、刺蒺藜。沙苑蒺藜是另一种，补肝肾之专药，张氏论之颇详，兹不赘。

桑 根 白 皮

气味甘寒无毒，主治伤中，五劳六极，羸瘦，崩中，绝脉，补虚益气。

张隐庵曰：桑名白桑，落叶后，望之枝根皆白，根皮作纸，洁白而绵，蚕食桑精，吐丝如银。盖得阳明金精之气，阳明属金而兼土，故味甘；阳明主燥，而金气微寒，故气寒。主治伤中续经脉也。

五劳，志劳、思劳、烦劳、忧劳、悲劳也；六极，血极、气极、筋极、骨极、肌极、精极也；羸瘦者，肌肉消减；崩中者，血液下注；脉绝者，脉络不通，桑皮秉阳明土金之气，刈而复茂，生长之气最盛，故补续之功如此。

叶天士曰：桑皮气寒，秉天冬寒之水气，入足少阴肾经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气降味和，阴也。

中者，中州脾也，脾为阴气之原，热则中伤，桑皮甘寒，故主伤中。

五劳者，五脏劳伤真气也；六极者，六腑之气虚极也。脏腑俱虚，所以肌肉削而羸瘦也。其主之者，桑皮甘以补脾气，而补不足；寒以清邪火之邪，而退内热，邪气退而脾阴充，脾主肌肉，自然肌肉丰，而劳极愈矣。

崩中者血脱也，脉者血之府，血脱故脉绝不来也，脾内血而

为阴气之原，甘能益脾，所以主崩中脉绝也。

火与元气，势不两立，气寒清火，味甘益气，气益火退，虚得补而气受益矣。

陈修园曰：今人以补养之药，误认为清肺利水之品，故用多之不效。且谓生用大泻肺气，宜涂蜜炙之，然此药忌火，不可不知。

黄杰熙评：张注归经阳明胃，以土金之气解经，实属离经背道，勉强解通，实不可取，唯“补续之功”句，证明桑皮是补药，非治病之药也，一句中的。

叶注归经足少阴肾与足太阴脾，是完全与经文相符的。桑皮乃补肾阴、脾阴之药物。其主治各症，以此解之，迎刃有余。

陈氏非注，乃提纲警语。桑皮是补脾肾之阴的药，若以之治肺热咳嗽，则缓不济急，耽搁病情；治肺寒咳嗽，则雪上加霜，永无愈期，其害无穷，可说未见有以之治急病取效者也，反增病情。

桑 叶

气味苦甘寒，有小毒，主寒热出汗。

叶天士曰：桑叶气寒，秉天冬寒之水气，入足太阳寒水膀胱经；味苦甘有小毒，得地中南火土之味，而有燥湿之性，入手少阴心经、足太阴脾经。气味降多于升，阴也。

太阳者，行身之表，而为一身之藩者也，太阳本寒标热，所以太阳病，则发寒热。桑叶入太阳，苦能清，甘能和，故除寒热。汗者，心之液，得膀胱气化而出者也，桑叶入膀胱而有燥湿之性，所以出汗也。

黄杰熙评：叶注偏重苦甘味，实则还有辛味，而且辛大于甘，何也？从树上采下桑叶，蒂处即有白浆溢出，似牛奶，以舌舐之，味辛苦微甘，有芳香气，其叶上密布细毛，横纹最多，故走肺络

而宣肺气。盖树木之叶，即人之肺部，行呼吸之作用也。同时，桑得箕星之精，箕好风，风气通于肝，故桑叶善平肝风。

据此，气寒归足太阳膀胱经；味苦归于太阳小肠经；味辛归手太阴肺经；味甘归足太阴脾经，总之归于二太，是辛凉解表之主要药物。所以《温病条辨》之桑菊饮，用以治太阴风湿病，而有特效，既治风而又治温。

其能除寒热发汗者，叶氏解为“桑叶入膀胱而有燥湿之性，所以出汗也。”忘记了经言辛甘发散为阳之义，伤寒为水病，辛温即能蒸水为汗；温病是火病，如火炉烧红，泼之以水，即能蒸腾出汗，即辛凉发汗之义。

叶氏未透此关，故所注美中不足。

桑 枝 (附)

气味苦平，主治遍体风痒干燥，水气，脚气，风气，四肢拘挛，上气眼运，肺气咳逆，消食利小便。久服轻身，聪明耳目，令人光泽。（《图经本草》）

黄杰熙释：桑枝披离四散，通达四肢，得箕星之精，箕好风，风气通气于肝，故善平肝风。味苦入心清血热，气平入肺行肺气。

主治遍体风痒干燥者，“诸疮痛痒，皆属于心”，苦入心清热，肺金气行则风息，风息则燥者润，故可治之。

水气、脚气、风气，皆气血郁滞不行，宣化不利所演成，桑枝气平入肺，肺气调则诸气自治；苦入心泄血，血行畅则诸风自息。

桑枝达四肢，通气行血，拘挛自理。

上气眼运者，肝风上窜也，“诸风掉眩，皆属于肝”，经有明训，桑枝善治肝风，投之效如桴鼓。

肺气咳逆者，肺金失清肃下行之令，郁而上升之病也，桑枝

气平入肺，匡扶以正，令行禁止也。

消食利小便者，肺气下行，则胃气顺，顺则消食；金为水之母，母壮儿肥，肺气调，三焦通，膀胱气化正常，则小便自利也。

久服心血宁，肺气旺，故轻身。金生水，水生木，故耳目聪明。心主色，故令人光泽。

桑 椹 (附)

止消渴，(苏恭)利五脏关节痛，安魂镇神，令人聪明，变白不老。(陈藏器)

黄杰熙释：桑椹，肾之果也，生时色紫红，干时色黑，食之味甘酸，性微温。

甘味归脾，酸味归肝敛肺气，微温益肝气，色黑入肾，紫红入心。

桑椹味酸，敛肺生津，故止消渴。气味色形质并论之，入五脏兼五脏性情，故利五脏。机关者，人身之大关节也，五脏之神游于此，痛者不通也，五脏利，神游无阻，则通则不痛也，故可以治之。肝藏魂，心藏神，心肝得补，故可以安魂镇神。肾主聪，肝主明，肝肾得补，故令人聪明。心主色，肺色白，肾主年寿，心肺肾得补，则变白不老。

以其补五脏之功，流通气血之妙，故《保命集》用生桑椹捣取汁熬膏，名文武膏，或名桑椹膏，以治疗癆结核，久服强身去疾。

桑 花 (附)

气味苦酸无毒，主治健脾涩肠，止鼻衄吐血，肠风，

崩中，带下。（《日华诸家本草》）

黄杰熙释：桑花色黄绿，开于春末，得木火之气，性微温，味酸入肝木之经；味苦入心火之经。气升味降，阳中之阴也。

其主治健脾者，味苦入心，火生土，故健脾。酸为肝之味，肺之性，主收敛，故涩肠，肺与大肠相表里也。阳络伤，则鼻洪吐血，微温入肝，肝藏血，酸敛血，苦泄瘀血而生血，故主治鼻洪吐血。阴络伤，则肠风、崩中、带下，苦主之、酸藏之、苦酸温化痰而敛之，故肠风、崩中、带下自愈。

桑 上 寄 生

气味苦平无毒，主治腰痛，小儿背强，痈肿，充肌肤，坚发齿，长须眉，安胎。

张隐庵曰：寄生感桑气而寄生枝节间，生长无时，不假土力，夺天地造化之神功，故能资养血脉于空虚之地，而取效倍于他药也。

主治腰痛者，腰乃肾之外候，男子以藏精，女子以系胞，寄生得桑精之气，虚系而生，故治腰痛。小儿肾形未足，似无腰痛之证，应有背腰痈肿之疾，寄生治腰痛，则小儿背强痈肿之能治之。充肌肤，精气外达也。坚齿发，精气内足也。精气外达，而充肌肤，则须眉亦长。精气内足，而坚齿发，则胎亦安。盖肌肤者皮肉之余，齿者骨之余，发与须眉者血之余，胎者身之余，以余气寄生之物，而治余气之病，同类相感如此。

黄杰熙评：张注抛弃气味，专以“能资血脉于空虚之地”，即“虚系”和“余气”以“治余气”等词，以注经文，注得玄之又玄，虚之又虚，通篇玄虚，不落实处，似不可法。

盖桑寄生，寄生于桑树之上，吸桑之阴精以生，吸天阳以长，叶翠枝荣，十分可爱，味苦入心养血，气平入肺补气。

其能主治腰痛者，腰者肾之腑，肾虚气血郁滞不通则腰痛，金生水，肾水足则虚可补，血行气畅则郁滞去，桑寄生俱此性能，故可治之。小儿背强，乃太阳经输之病，金生水，膀胱水足气畅，行于经输，故能治之。痲肿乃气血凝滞，拥挤之病，苦泄平通，又能治之。气血足则肌肤充，齿发坚，须眉长。

胎儿在母腹，如寄生之在桑树之上，吸收孕妇之气血，以生以长，用桑寄生之气性，以补养之，则生长旺盛，故可安胎。

桑寄生实(附)

气味甘平无毒，主明目，轻身，通神。(《拾遗》)

黄杰熙释：寄生实，形似肾，生子繁多，入足少阴肾经；气平入手太阴肺经；味甘入足太阴脾经，总为土金水相生之物。

其能明目者，肾水足之力也。轻身者，气阴充足，土气平和之象。通神者，精生气，气生神之结果。

柏子仁

气味甘平无毒，主治惊悸，益气除风湿，安五脏。久服令人润泽美色，耳目聪明，不饥不老，轻身延年。

张隐庵曰：柏叶经冬不凋，秉太阳之水气也；仁黄嗅香，秉太阴之土气也。

水精上资，故治心肾不交之惊悸；土气内充，故益气除风湿。夫治惊悸，益气，除风湿，则五脏安和，故安五脏也。

仁多脂液，久服令人润泽而美色，且耳目聪明，五脏安和，津液濡灌，故不饥不老，轻身延年。

叶天士曰：柏仁气平，秉天秋之金气，入手太阴肺经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经；以其仁也，兼入手少阴

心经。气升味和，阳也。

神者，心之舍也，神不宁则病惊悸，柏仁入心，故治惊悸也。

益气者，气平益肺气，味甘益脾气，滋润益心气，治风先治血，血行风自灭，柏仁味甘益脾胃，血行风自息，而脾健运，湿亦下逐矣。盖太阴乃湿土之经也，五脏藏阴者也，脾为阴气之原，心为生血之脏，肺为津液之腑，柏仁平甘益阴，阴足则五脏皆安矣。

久服甘平益血，令面光华。心为君主，君明则十二官皆安，耳目聪明矣。味甘益脾，不饥不老。益肺气，轻身延年矣。

陈修园曰：徐灵胎云“柏得天地坚刚之性以生，不与物变迁，经冬弥翠，故能宁心神敛心气，而不为邪气游火所侵克也。”

人之生理谓之仁，仁藏于心，物之生机在于实，故实亦谓之仁，凡草木之仁，皆能养生气，以类相应也。

黄杰熙评：张注归太阳之水气上，似不确切，以其子仁，应归足少阴肾经为合拍，因归经有误，所解经文似是而非。

叶注归经正确，故所解经文，贴近实事，不过仍有遗蕴，待后再说。

陈氏选徐氏之注以为注，徐注铿锵有力，掷地有声，突出重点，遗归经与其他主治。

陈氏所补者，不过是草木之子仁，与人心之仁，以类相应之义，亦不过是徐注之注中注而矣。比起叶注来，很不够。

盖凡草木之枝叶，皆向东指，以得其生发之春气以长。唯柏之枝叶，独向西指，经冬弥翠，得金水之气以生之奇物。金能平木，水能滋木，是治肝火肝气过亢之专药。肝为将军之官，骄卒悍将，平之清之过急，往往起反作用，而大汗淋漓，头晕脑转，病情增剧，难以收场。所以治肝病之法，必须恩威并重，厚其粮餉，晓以纪律，既滋水平肝并举，始能见效。柏子仁俱滋水平肝之性，最为合拍。

一人年四十，业商，生意失利，负债累累，东躲西藏，以酒浇愁。得头痛病经年，性情暴躁，稍睡片刻，恶梦即醒，一身大汗，四处求治，服药百余剂，未见好转，反而病情增剧。亲朋怜之，与余商治，语焉诚挚，余亦怜之，用车将余接至其秘密住处。

余见其面色困顿，眼睛充血，声粗气壮，脉之左关弦硬而大，右寸细微，断为肝阳过亢，肺金不足，水不涵木所致。观其所服药方一叠，类多清肝火、平肝木之药，总算对证，为何不效而反增剧呢？乃用药不专，政出多门，清之平之过急，拒不接受所引起。思之良久，必以单方，单刀直入，滋平并举，单用柏子仁九十克，炒香捣碎，煎水服之，结果一剂知，二剂已，三剂，好如常人矣。

侧柏叶（附）

气味苦微温无毒，主治吐血、衄血、痢血，崩中赤白，轻身益气，令人耐寒暑，去湿痹，生肌。（《别录》）

张隐庵曰：凡草木耐岁寒，经冬不落叶者，阴中有阳也。冬令主太阳寒水，而水腑属太阳，水脏属少阴。柏叶秉寒水之气，而太阳为标；秉少阴之气，而君火为本，故气味苦微温。

主治吐血、衄血、痢血、崩中赤白者，得水阴之气，而资养其津液也。

轻身益气，令人耐寒暑，去湿痹生肌者，得太阳之标，少阴之本，而补益其阳气也。

柏子仁气味甘平，故秉太阳寒水，而兼得太阴之土气；侧柏叶气味苦微温，故秉太阳寒水，而兼少阴之君火，叶与实之所以不同者如此。

黄杰熙评：张氏此注，糟透了，东拉西扯，根本对不上号。

侧柏叶四散披离，而向西指，经冬弥翠，气又微温，是入足

厥肝，手太阴肺，足少阴肾，味苦入手少阴心。

心生血，肝藏血，血既生且藏，何外流之有乎！故主治吐血、衄血、痢血、崩中赤白。

叶向西指，得金气入肺经，肺气受益，故轻身益气。四季常青，经冬弥翠，气微温则耐寒。得水气则耐暑，故令人耐寒暑。气温味苦入心生火，火就燥，燥胜湿，故去湿痹。火生土，土主肌肉，故生肌。

松 脂

气味苦甘温无毒，主治痈疽，恶疮，头疡，秃白，疥痒风气，安五脏除热。久服轻身，不老延年。

张隐庵曰：松脂生于松木之中，秉木质而有火土金水之用。气味苦温，得火气也，得火气，故治肌肉之痈，经络之疽，以及阴寒之恶疮。入土成珀，坚洁如金，裕金气也，裕金气，故治头疮秃白，以及疥痒之风气。色黄嗅香，味苦而甘，备土气也，备土气，故安五脏。木耐岁寒，经冬不凋，具水气也，具水气，故除热。

久服则五运全精，故轻身不老延年。

松脂俗名木香，入土年深，化成琥珀。

黄杰熙评：张氏此注，振振有词，把五行都用上了，又是摆的花架子，华而不实。

除“具水气，故除热”，勉强能说通外，其余皆或多或少存在疑问。

如“得火气，故治肌肉之痈，经络之疽，以及阴寒之恶疮”，痈为阳热，疽为阴寒，恶疮兼阴阳湿毒，以火气治痈，岂不火上浇油？治疽还算对症，治恶疮，则支一派打另一派，永无愈期。

又如“头疡秃白，疥痒风气”，头疡秃白，是大风痲疾，即麻

痲病；疥癩风气，是疥疮与牛皮癣，以上是湿寒、湿热兼风，长虫于所演成，金气只能治风，遣寒热湿，怎么办？且松脂与琥珀，为质同，而炯然不同之两物，岂可混同论之，且各有专能。

至于论到“安五脏除热”，亦不完全确切，所以张注是银样蜡枪头，能看不能用。

盖松脂，俗名松香，是松树身上溢出来的油脂，又名松油。松为阳木，凌冬不凋，精华外溢，凝成松脂，其味苦涩微甘，性温燥，以其阳木之精也。《本经》只言“气味苦甘温无毒”，今增涩味与燥气，非与《本经》争胜，亲自去看看尝尝便知，且涩性与燥气最浓。今肉食加工，用以拔猪头猪蹄上之毛，用其涩劲易拔尽也。

松脂味苦，入手少阴心经；味涩与气温，入足厥阴肝经；微甘入足太阴脾经；气燥入足阳明胃经与手阳明大肠经；肺与大肠相表里，所以兼入手太阴肺经；凌冬不凋，且为脂液，所以又入足少阴肾经，其能入五脏二腑者，以此为根据也。

其能主治痲者，痲为阳，皮肉为风湿热壅结寒束而高大红肿，发寒热而心烦意乱，松脂驱风燥湿清热去寒，综合治理，齐头并治，故可愈之。疽为阴，附骨而生，乃风寒湿壅结于内所长，松脂之综合治理，齐头并治，亦可治之。恶疮、头疡秃白、疥癩风气，无外风寒热湿之邪，壅滞皮肉经络所造成，松脂既能个个击破，又能综合治理，故可治之。

松脂味苦安心，温涩安肝，燥金之气安肺，甘安脾，脂液安肾，故安五脏。金生水，苦清热，故又除热。

久服则湿热不攘，五脏安和，却疾而轻身，却病则不老延年。

松 节 (附)

气味苦温无毒，主治百邪久风，风虚脚痹疼痛；酿酒，

主脚软骨节。（《别录》）

黄杰熙释：松节乃松之骨节，坚韧不凋，迎冰傲雪。味苦入手少阴心经，补火燥湿；气温入肝经，温通血脉。骨主入骨，节主入关节，故取苦温之性，以治骨节间之风湿疼痛。

主百邪久风者，“风为百病之长”，百邪指风邪而言，百邪不去，久之则成久风，风气通于肝，温气入肝则血行风息，故可治之。

风虚脚痹疼痛者，“邪之所凑，其气必虚”，风邪中虚人，称风虚。风为阳邪，寒湿为阴邪，阴邪中于下则成脚痹疼痛。松节气温可驱风寒，苦燥可去湿，风寒湿去，则可愈脚痹疼痛。

史国公药酒用松节，以其治风寒湿也，故酿酒，主脚软骨节，以其坚劲治之也。

朱丹溪云“能燥血中之湿。”以松之汁液似血，节为机关所在，故能苦温以燥血中之湿。

松 花（附）

别名松黄，气味甘温无毒，主润心肺，益气除风止血，亦可酿酒。《本草纲目》

叶天士曰：松花气温，秉天春和之木气，入足厥阴肝经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气味俱升，阳也。

其主润心肺者，饮食入胃，脾气散精，输于心肺，松花味甘益脾气，温能行脾，为胃行其津液，输于心肺，所以润心肺也。

气温益肝之阳气也，味甘益脾之阴气也。风气通肝，气温散肝，所以除风。

脾统血，味甘和脾，所以止血也。

可酿酒者，清香芳烈，宜于酒也。

黄杰熙评：叶注言简意赅，步步合拍，所解明白通畅，堪称

典范。

茯 苓

气味甘平无毒，主治胸胁逆气，忧患惊邪恐悸，心下结气疼痛，寒热烦满，咳逆口焦舌干，利小便。久服安魂养神，不饥延年。

张隐庵曰：茯苓本松木之精华，藉土气以结成，故气味甘平，有土位中央，而枢机旋转之妙。

秉木气而旋转，则胸胁之逆气可治也；秉土气而安五脏，则忧患惊恐悸之邪可平也。里气不和，则心下结痛；表气不和则为寒为热；气结于上，上而不下，则烦满咳逆、口焦舌干；气逆于下，上不交通，则小便不利，茯苓位于中土，灵气上荟，主内外旋转，上下交通，故皆治之。

久服安肝藏之魂，以养心藏之神，木生火也。不饥延年，土气盛也。

叶天士曰：茯苓气平，秉天秋降之金气，入手太阴肺经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气味和平，降中有升，阴也。

胸者肺之分，胁者肝之分，肝主升而肺主降，肺金不足，则气不降，肝木有余，则气上逆，逆于肝肺之分，故在胸胁之间也。茯苓入肺，气平则降，味甘可以缓肝，所以主之。

脾为土，肺为金，脾肺上下相交，则五脏皆和，位一身之天地矣。若脾肺失中和之德，则忧患惊邪恐悸，七情乖戾于胸，发不中节而致病，茯苓味甘和脾，气平和肺，脾肺和平，七情调矣。

心下脾之分也，湿热在脾则结痛，湿热不除，则流入太阳，而发寒热，郁于太阳而烦满，湿乘肺金而咳逆，茯苓甘平淡渗，所以能燥土伐木清金，治以上诸症也。

人身水道不通，则火无制而口焦舌干矣。茯苓入肺以通水道，下输膀胱，则火有去路，故止口焦舌干。水道通，所以又利小便也。

肝者，魂之居也，而随魂往来者神也。久服茯苓，肺清肃，故肝木和平，而魂神安养也。不饥延年者，脾为后天之本，肺为元气之府，脾健则不饥，气足则延年也。

陈修园曰：茯苓气平入肺，味甘入脾，肺能通调，脾能转输，其功在于利小便一语。

胸为肺之部位，胁为肝之部位，其气上逆，则忧患惊邪恐悸七情之用，因而不调；心下为太阳之部位，水邪停留则结痛，水气不化则烦满，凌于太阴则咳逆，客于营卫则发热恶寒，有宿食则津液不生，为口焦舌干，唯得小便一利，则水行而气化，诸疾自愈矣。

久服安魂养神，不饥延年者，以肺金为天，脾土为坤，位一身之天地，而明其上下交和之效也。

黄杰熙评：张氏长于形象思维。思维若能与实际相合，则推阐逻辑强，注经则步步合拍。

张注从木之精华与中土入手，用枢机旋转之妙以注之，合乎以上之评论，故此注颇超。张氏其他之注，象此就好了，可惜每多脱离实际，玄妙无根。

叶注平妥，对理解经文，最有帮助。

陈注突出重点，“其功皆在利小便一语”，以此注解病症，亦到处逢春，迎刃而解，注得痛快利落，又颇切临床实用，妙极！

总之，三家注解茯苓，各有所长，而皆正确，本书以此注最超，堪为典范。

赤 茯 苓 (附)

破结气，泻心、小肠、膀胱湿热，利窍行水。

黄杰熙释：《本经》茯苓不分赤白，气味相同。至唐·甄权《药性本草》始分之。赤茯苓，色赤入心，甄权只言“破结气”三字，水即气也，血者水之类，茯苓行水化气，赤者入心行血行气，故可破结气。

至明·李时珍在其下又补入“泻心、小肠、膀胱湿热，行窍利水”十二字。《三家注》编辑郭汝聪辑入两家之说，未明来历，实属遗憾。

盖水行则湿热去。赤为火之色，主室通，通则既行且利，故行窍利水，使无关卡之阻。

茯 神 (附)

气味甘平无毒，主辟不祥，疗风眩风虚、五劳口干，止惊悸、多恚怒、善忘，开心智，安魂魄，养精神。

张隐庵曰：离松根而生者，为茯苓；抱松根而生者，为茯神，总以茯苓为胜。

茯苓皮、茯神木，后人收用，各有主治，然皆糟粕之药，并无精华之气，不足重也。

叶天士曰：茯神味甘气平，得中正之气味，和脾肺，位一身之天地，所以能辟不祥也。诸风皆属肝木，虚则风动而眩，其主之者，味甘性缓，可以益肝伤；气平金清，可以定风木也。五劳，五脏劳伤其神也，五劳神伤，则阴火动而口干矣，茯神甘平安神，故止口干。惊悸多恚怒善忘，皆心肾不交，而肝木不宁之症，茯神气平益肺，肺气下降，则心亦下交，味甘益脾，脾气上升，则

肾气亦上，盖天地位，则水火宁，土金实则风木定，五行相制之道也。其开心益智者，皆气平益肺之功也，肺益则水道通，而心火有制，所以心神开朗而光明，肺益则金生肾水，所以技巧出而智益也。肝者魂之居，肺者魄之处，茯神气平益肺，肝宁肺和，故安魂魄。精者阴之华，神者阳之灵，茯神味甘益脾，脾和，则饮食纳，而精神得所养也。

黄杰熙评：张氏只说明茯苓、茯神出生之别，与茯苓较茯神优胜，此非注，乃说明而矣。

叶注根据气味，即气天味地之和，以注经文，平易可从，能明白茯神之主治性能，且对每症机转之探导合拍，是简明落实之好注。

茯 苓 皮 (附)

主治水肿肤胀，利水道，开腠理。

黄杰熙释：茯苓皮之主治，出李时珍《纲目》。茯苓皮气平入肺，肺主皮毛，且皮亦达皮；味甘入脾，脾主肌肉，则达肌肉皮毛，以行皮化气，水气通行，则肿消胀去，故可治之。气平入肺清金，味甘入脾生金，金气有权，则水道利，肺为水之上源也。腠理即三焦网膜在皮与肌，和肌与肉之间的薄膜，肺气通调，脾气畅达，则三焦利而腠理开。

茯 神 木 (附)

主治偏风，口面喎斜，毒风筋挛不语，精神惊悸，虚而健忘。

黄杰熙释：茯神首见于《别录》，茯神木则首见于《药性本草》，主治各症，乃甄权所定。

茯神俱乾天坤地之性，木在其中，俱顶天立地之能。主治偏风者，风中于一边，成半身不遂，神木主风，旋转乾坤，则风定，故可治之。主治口面喎斜者，风中头面于左，左之筋经受邪而失职，则喎斜于右；同理右面受风邪，则喎斜于左，乾金制风，坤土和风，神木旋转机关，使之恢复，故可以治之。毒风中人，肝筋先受之，故筋挛；心火受之，火焰而上，则神昏不语，茯神木，以金平风木，土缓风势，旋转调和，使归于平，故可治之。土木不忤，金清风息，则精神定，惊掣安。天地泰，木滋荣，则虚得补。虚得补，心神宁，则记事，而健忘自治。以上皆金清土和旋转调整之功。

蔓 荆 子

气味苦微寒无毒，主治筋骨间寒热湿痹拘挛，明目坚齿，利九窍，去白虫。久服轻身耐老。小荆实亦等。

张隐庵曰：蔓荆多生水滨，其子色黑，气味苦寒，秉太阳寒水之气。盖太阳本寒标热，少阴本热标寒。

主治筋骨间寒热者，太阳主筋病，少阴主骨病，治太阳少阴之寒热也。

湿痹拘挛，湿伤筋骨也。益水之精故明目，补骨之余故坚齿。九窍为水注之气，水精充足，故利九窍。虫乃阴类，太阳有标阳之气，故去白虫。

久服则筋骨强健，故轻身耐老。

小荆实亦等，言蔓荆之外，另有一种小荆，其实与蔓荆之实功用相等，可合一而并用也。

叶天士曰：蔓荆子气微寒，秉天冬寒之水气，入足少阴肾经、足太阳寒水膀胱经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气味俱降，阴也。

太阳寒水，主筋所生之病，而骨者肾之合也，蔓荆寒可清热，苦可燥湿，湿热攘，则寒热退而拘挛愈矣。

气寒壮水，味苦清火，火清则目明，水壮则齿坚，齿乃肾之余也。

九窍者，耳目鼻各二，口大小便各一也，味苦清火，所以九窍皆利也。

白虫湿热所化，苦寒入膀胱以泻湿热，所以去白虫也。

久服轻身者，祛湿之功；耐老者，壮水之力也。

黄杰熙评：张注实则只取微寒之气，入足太阳经与足少阴经，以解经文，因为只取气，而未取味，所解虽通，但不够全面彻底。

叶氏之解，紧跟气味主治，故所解者，较张氏全面而妥当。但仍未识药性之全。

盖蔓荆多生于海滨或水滨，茎高二、三尺，匍匐着地即生须根，子黑褐色，约红豆大小，内包之种子极小，味苦中带辛，故能入手少阴心经与兼入手太阴肺经，以治风热之作用，头痛用之，取效亦切。

小 荆 实 (附)

气味苦温无毒，主除间寒热，通利胃气，止咳嗽下气。

黄杰熙释：《别录》名“牡荆”，《图经》名“黄荆”，《本经》名“小荆实”只附于蔓荆子下，有“小荆实、亦等”五字记载。张隐庵不识此物，只好囿囿作解。

《三家注》从《别录》辑入之气味主治，断文少字，原文是“气味苦温无毒，除骨间寒热，通利胃气，止咳逆下气”。

南方荒野多产此物，俗名黄荆，茎可作杖，即刑杖，谚云“黄荆棍下出好人。”又用此物体罚，教子成龙。茎高七八尺，色黄，有香气，结实略大于蔓荆实，此物丛生茂密，樵夫砍下作柴

烧，或到市上当柴卖钱。

气湿入足厥阴肝经；味苦入手阴心经；子黑褐色，入足少阴肾经。气升味降，阴也。

主骨间寒热者，肾主骨，寒热郁于骨间，得温则通则散，得苦则清，故可治之。通利胃气者，木能疏土，既温通苦降也。止咳逆下气者，肺受寒而火郁肺中，即寒包热，火郁上逆，寒火相争，则咳逆上气。温散寒，苦清热和火，火清寒散，故咳逆止而气下矣。按之临床，余用小荆实一味50克，治咳嗽神效；乡人得此方，症状相似，往往一服即愈，不须煎渣再服。余曾用小荆实100克，猪肉一斤，生姜、花椒、大茴香、盐适量，炖汤，吃肉喝汤，治愈三十年之劳嗽。

槐 实

气味苦寒无毒，主治五内邪气热，止涎唾，补绝伤火疮，妇人乳痃，子脏急痛。

张隐庵曰：槐生中原平泽，花黄子黑，气味苦寒，木质有青黄黑白色，老则生火生丹，备五运之精金。

故主治五内邪气之热，五脏在内，故曰五内；邪气热，因邪气而病热也。

肺气不能四布，则涎唾上涌，槐实能止之。肝血不能渗灌于络脉，则经脉绝伤，槐实能补之。心火内盛，则为火疮；脾土不和，则为乳痃；肾气内逆，则子脏急痛。槐秉五运之气，故治肺病之涎唾，肝病之绝伤，心病之火疮，脾病之乳痃，肾病之急痛，而治五内邪气之热者如此。

黄杰熙评：张注谈气味色质，却掉其他，单以俱五色秉五运论治，以槐木之变色，而总统其子之药性，注得有声有色，岂不隔靴搔痒乎！？

盖槐实色黑气寒入肾补水，味苦入心清火，为少阴经之药物。

少阴司天为热化，其能止五内邪气热者，少阴热而引起五内即五脏连锁反应之邪热也，槐实苦寒清心肾之热，心肾治则其他三脏亦相继治也。

脾主涎，肾主唾，唾为涎之源，源清则流静，槐实清源，则能止涎唾。

槐实滋水补肾，乙癸同源，肾精足则肝筋续；诸疮痛痒，皆属于心，味苦入心清火，心火治则火疮愈。

乳房属脾，脾热结则为瘰，苦清热，热散则乳瘰消。

子脏即子宫，属肾与肝，肝肾衰，疏补失，则急痛，槐实补肾滋肝，肝肾治，则子宫急痛，可以立愈。

张注根据有差，所以注得别别扭扭。

槐 花 (附)

气味苦平无毒，主治五痔，心痛眼赤，杀腹脏虫，及皮肤风热，肠风泻血，赤白痢。(《大明》)

叶天士曰：槐花气平，秉天秋金之凉气，入手太阴肺经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气味俱降，阴也。

肺与大肠为表里，五痔，大肠之火症也，槐花味苦清心，所以主之。

火郁于心则痛，气平能清，味苦能泄，所以主之也。

眼赤肝有实火也，实则泻其子，味苦清心，心乃肝之子也。

腹，太阴经行之地；脏，即大肠、肺之合，味苦可以杀虫，所以主之也。

皮肤，肺之合也，平能制风，苦能泄热，所以主之。

肠风下血，大肠火也；赤白痢，大肠湿热也，味苦者能清，所以并炒研服也。

黄杰熙评：叶注平准无奇，将《大明》气味主治推阐无遗，并将原书服法补入，可法可遵。

但花主散，若将其散性补入，则治皮肤风热，即风湿之症，可得而全也。

槐 枝 (附)

气味苦平无毒，主治洗疮，及阴囊湿痒，八月断大枝，候生嫩叶，煮汁酿酒，疗大风痿痹甚效。

黄杰熙释：槐枝气味主治，首见于《别录》。其气平入手太阴肺经；味苦入手阴心经。气味俱降，阴也。

疮为湿热之毒，郁于肺合之皮肤毛窍不散所致，槐枝味苦燥湿清热，湿热外攘，则疮渐愈，故主治洗疮及阴囊湿痒。煎水熏洗。

八月中秋，金气最旺，断大枝，形如臂腿，候生嫩叶，即芽蘗，金气外发之力最雄，煮汁酿酒，酒体阴而用阳，湿透血脉之力大。大风痿痹，风湿郁闭四肢而痛挛麻木，气平制风，味苦燥湿，酒通血脉，故可治之。

槐 叶 (附)

气味苦平无毒，主治煎汤治小儿惊痫壮热，疥癣及疗肿。皮茎同用。

黄杰熙释：槐叶之气味主治，首见于《大明》。

槐叶气平入手太阴肺经；味苦入手少阴心经。气味俱降，阴也。

小儿惊痫壮热，肝主筋，受壮热则抽搐；心藏神，壮热则神

昏而惊。槐叶味苦清热，气平制风而舒筋，故煎汤以荡涤之，即能治之。

疥癣疔肿，风热湿壅结以成，槐叶之苦，以燥湿清热，气平以制风，叶主散逸，故可治之。

槐树皮与茎，功同枝叶，故可同用。

槐 胶 (附)

气味苦平无毒，主治一切风，化痰涎，清肝脏风，筋脉抽掣及急风口禁。

黄杰熙释：槐胶之用，首见于《嘉祐》。

入心肺二经，为驱风清火燥湿之品，胶为槐之精华凝结，槐之金气能驱风，精华者全能也，故主治一切风。

痰涎为水不化气所凝结，胶可补脾之膏油，油利，化水为气，使三焦通利，痰涎自化。

槐胶金气最浓，树之胶即人之血液，肝藏血，又是风木之脏，胶之性入肝，气平制风，故清肝脏风。

血不和，筋不平，则筋脉抽掣；口者脾之窍，肝引风而侮土，则急风口禁。槐胶乃槐之精华，以血入血和血，金平风气，和血则风灭，金平木静，恢复筋脉及脾之功能，则抽掣与口禁自愈。

干 漆

气味辛温无毒，主治绝伤，补中，续筋骨，填脑髓，安五脏，五缓六急，风寒湿痹，生漆去长虫。久服轻身耐老。

张隐庵曰：漆木生于西北，凿取滋汁而为漆，日曝则反润，阴

湿则易干。如人胃腑水谷所化之津液，奉心化赤则为血，即日曝反润之义也；入肾脏则凝结为精，则阴湿易干之义也。

干漆气味辛温，先白后赤，生干则黑，秉阳明金精之质，而上奉于心，以滋经脉；下交于肾，以凝精髓之药也。

主治绝伤，滋经脉也；补中，阳明居中土也。续筋骨，治绝伤，则筋骨亦可续也。填髓脑者，凝精髓也。阳明水谷之精，滋灌五脏故安五脏。弛纵曰缓，拘挛曰急，皆不和之意。五脏不和而弛纵，是为五缓；六腑不和而拘挛，是为六急，五缓六急，乃风寒湿痹之证，故曰风寒湿痹也。《素问·痹论》云：五脏皆有外合，六腑亦各有俞。皮肌脉筋骨之痹，各以其时，重感于风寒湿之气，则内舍五脏，五脏之痹，犹五缓也。风寒湿气中其俞，而食饮应之，循俞而入，各舍其腑，六腑之痹，犹六急也，是五缓六急，乃风寒湿痹也。生漆色白属金，金能制风，故生漆去长虫。

久服则中土之精，四布运行，故轻身耐老。

黄杰熙评：张注又是扔掉气味，专以干漆之质与情，以解经文，通则勉强能通，然与实际更难吻合，且所引《素问·痹论》云以下，与原书出入很大，断章取义，以己意杂凑成章，义虽不乖，但非原文，故不加引号，如此引经据典，有以伪乱真之嫌。

盖《本经》言干漆气味辛温无毒，实则有毒，而且有剧毒，服后肠胃如刀割一般疼痛，甚至有嗅其气，即生漆疮肿溃者。

余行医50年，治过的病人以10万计之，处方从未用过干漆，而治干漆中毒患者，却有十余例，皆以蟹500克左右，煎汤服之而愈。漆疮则煎汤熏洗，轻者一次，重者二、三次即愈。

仲景方，不用干漆，《千金方》始用之，及后之妇科方，治经闭、症瘕积聚等，有用之者，但多为炒研，制成丸药服少量者，亦能中毒。余救治者，其中一半左右，是服有干漆之丸药的患者。《本经》上品，亦不能一视同仁，须一分为二来看待，无实践者，且不可轻易盲从。孟子曰：“尽信书，不如无书。”是实践之言，是

永远颠不破的真理。

黄 连

气味苦寒无毒，主治热气，目痛眦伤泣出，明目，肠澼腹痛下痢，妇人阴中肿痛。久服令人不忘。

张隐庵曰：黄连生于西蜀，味苦气寒，秉少阴水阴之精气，主治热气者，水滋其火，阴济其阳也。

目痛眦伤泣出者，火热上炎于目，则目痛而眦肉伤，眦伤则泣出。又曰明目者，申明治目痛眦伤泣出，以其能明目也。

肠澼者，火热内乘于阴，夫热淫于内，薄为肠澼，此热伤阴分也；腹痛下痢者，风寒暑湿之邪，伤其经脉，不能从肌腠而外出，则下行肠胃，致有腹痛下痢之证，黄连泻火热而养阴，故治肠澼腹痛下痢。

妇人阴中肿痛者，心火协相火而交炽，黄连苦寒，内清火热，故治妇人阴中肿痛。

久服令人不忘者，水精上滋，泻心火而养神，则不忘也。

大凡苦寒之药，多在中品下品，惟黄连列于上品者，阴中有阳，能济君火而养神也。少阴主水，而君火在上，故冬不落叶。

凡物有性，寒热温清燥润，及五色五味。五色五味，以应五运；寒热温清燥润，以应六气。是以上古司岁备物，如少阴君火、少阳相火司岁，则备温热之药；太阳寒水司岁，则备阴寒之药；厥阴风木司岁，则备清凉之药；太阴湿土司岁，则备甘润之药；阳明燥金司岁，则备辛燥之药，歧伯曰：司岁备物，得天地之专精；非司岁备物，则气散也。后世不能效上古之预备，因加炮制以助其力，如黄连水浸，附子火炮，即助寒水君火之义。后人不体经义，反以火炒黄连，尿煮附子，寒者热之，热者寒之，是制也！非制也！譬如鹰犬之力，在于爪牙，今束其爪，缚其牙，亦何贵乎

鹰犬哉！

叶天士曰：黄连气寒，秉天冬寒之水气，入足少阴肾经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气味俱降，阴也。

其主热气目痛也，心主火，火气热，心病舍肝，肝开窍于目也，黄连苦寒，所以清火也。手少阴之正脉，出于面，合目内眦，手少阴为心火，火盛，则心系急而泪出；眦伤者，皆心火也，黄连清心，所以主之。实则泻其子，心者，肝木之子也，清心则肝邪泻，所以明目也。

大肠为庚金之腑，心火乘之，则津液化成脓血，痛而下痢矣，其主之者，寒以清火，苦以泻热也。

北方黑色，入通于肾，开窍于二阴，妇人阴中，乃肾窍也，热盛则肿，肿痛者火盛也，黄连入肾，寒苦清火，所以主之。

其久服令人不忘者，入心清火，火清则心明，能记忆也。

陈修园曰：黄连气寒，秉天冬寒之水气，入足少阴肾经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经，气水而味火，一物同俱，故能除水火相乱，而为湿热之病。

其云主热气者，除一切气分之热也。目痛眦伤泪出不明，皆湿热在上之病；肠澼腹痛下痢，皆湿热在中之病；妇人阴中肿痛，为湿热在下之病，黄连除湿热，所以主之。

久服令人不忘者，苦入心，即能补心也。然苦为火之本味，以其味之苦而补之；而寒能胜火，即以其之寒而泻之。千古唯仲景得《本经》之秘，《金匱》治心气不足而吐血者，取之以补心；伤寒寒热互结心下，而痞满者，取之以泻心；厥阴之热，气撞心者，合以乌梅；下痢后重者，合以白头翁等法，真信而好古之大圣人也。

黄杰熙评：张注长于理想，力求深奥，转多晦义；叶氏理论紧贴实际，一步一个脚印，解得平准无奇，但有遗珠；陈注承叶注，补入黄连是治湿热之药，即“能除水火相乱，而为湿热之

病”也。所以陈注有突破，而得药性之真，故所解经文，更为切实，但未达到化境。

盖黄连色黄而瘦瘪，味苦气寒，味苦入心，气寒入肾，色黄归脾，瘦瘪入肝。味苦之极，物极则反，故得火之味，反得水之性，故清血分之火，又清气分之热；瘦瘪无汁，故又能燥湿。

水火相乱，即水火杂交，蒸于中土，即为湿气。火交于水，即为气；水交于火，即为血，若气血相乱，则湿热成矣。黄连气寒清热，味苦燥湿，色黄入脾，瘦瘪入肝，则心肝脾胃之湿热被治，所列诸症，化为乌有，到爪哇国去了。

至于黄连水浸，济其燥性，火炒则增其燥性。附子火炮、尿泡尿煮，是为了去其毒，非如张氏所说，火炮增火，尿煮去火。待到下品评附子时再详说究竟。

关于仲景用黄连补心，是水交于火即为血之义；泻心是去其水火相乱之湿热也。兼寒者必入干姜；合乌梅者，取肺气之收降；合白头翁以舒肝气之升，郁于下则里急后重，所以陈氏之解仲景药法，尚未达到化境。

蒲 黄

气味甘平无毒，主治心腹膀胱寒热，利小便，止血消瘀血。久服轻身益气力；延年神仙。

张隐庵曰：香蒲生于水中，色黄味甘，秉水土之专精，而调理其气血。

主治心腹膀胱寒热，利小便者，秉土气之专精，通调水道，则心腹膀胱之寒热，俱从小便出，而气机调和矣。

止血消瘀血者，秉水气之专精，生其肝木，则止新血，消瘀血，而血脉调和矣。

久服则水气充足，土气有余，故轻身益气力；延年神仙。

黄杰熙评：张注遣气平入手太阴肺经，解得非常别扭。如土本克水，怎能治心腹膀胱之寒热，特别是利小便呢？只能是气平入肺，肺为水之上源，气降则通调三焦水道，入膀胱则利小便，气化行，小便通，则寒热去。

脾统血，味甘补脾，脾能统则血止；气为血之帅，气平入肺，肺气通调，则血行畅达，何瘀之有，故消瘀血。

久服脾土旺则多进食，肺气足则轻身益气力。能食则健康延年，“多病方知健是仙”，健康的人，就是神仙。

菊 花

气味苦平无毒，主治诸风头眩肿痛，目欲脱泪出，皮肤死肌，恶风湿痹。久服利血气，轻身耐老延年。

张隐庵曰：菊花《本经》名节花，以其应重阳节候而华也。《月令》曰：“九月菊有黄花。”茎叶味苦，花味兼甘，色有黄白，秉阳明秋金之气也。

主治诸风头眩肿痛，秉秋金而制风也。目欲脱泪出，言风火上淫于目，痛极欲脱而泪出，菊秉秋金清肃之气，能治风木之火热也。皮肤死肌，恶风湿痹，言感恶风湿邪，而成风湿之痹症，则为皮肤死肌，菊秉金气而治皮肤之风，兼得阳明土气，而治肌肉之湿也。

周身血气生于阳明胃腑，故久服利血气轻身；血气利而轻身，则耐老延年。

叶天士曰：菊花气平，秉天秋平之金气，入手太阴肺金；味苦无毒，得南方之火味，入手少阴心经。气味俱降，阴也。味苦清火，火抑金胜，发花于秋，其秉秋金之气独全，故为制风木之上药也。

诸风皆属于肝，肝脉连目系上出额，与督脉会于巅，肝气炽，

则火炎上攻头脑而眩，火盛则肿而痛。其主之者，味苦可以清火，气平可以制木也。

肝开窍于目，风炽火炎，则目张欲脱，其主之者，制肝清火也。手少阴之正脉，上走喉咙，出于面，合目内眦，心为火，火盛则心系急而泪出，其主之者，苦平可以降火也。

皮肤乃肺之合，肌肉乃脾之合，木火炎则刑肺金脾土，而皮肤肌肉皆死，菊花秉金气，具火味，故平木清火而主皮肤死肌也。

其主恶风湿痹者，风湿成痹，风统于肝，菊花气平，有平肝之功，味苦有燥湿之力也。

久服利血气者，肺主气，气平益肺，所以有利于气；心主血，以苦清心，所以有利于血。有利于气，气充身自轻；利于血，血旺自耐老；气血皆利，其延年也必矣。

陈修园曰：徐灵胎云：“凡芳香之物，皆能治头目肤表之疾，但芳香则无不辛燥者，惟菊花得天地秋金清肃之气，而不甚燥烈，故于头目风火之疾尤宜焉。”

黄杰熙评：张注从阳明燥金燥土入手以解经文，虽注中未提燥字，实寓其义，通则勉强能通，但对诸病之机转，未能和盘托出，实属不足。

叶氏遵经注释，归手太阴肺金、手少阴心经，在归经上，较张氏妥当，且对病机之推阐明白，性味治疗，紧贴多矣，所以叶注超凡。

陈氏引徐氏之注为注，徐注重点突出，并可纠正张注隐燥性之谬误。

茵 陈

气味苦平，微寒无毒，主治风湿寒热邪气，热结黄疸。久服轻身益气耐老，面白悦长年。兔食之仙。

张隐庵曰：《经》曰：春三月此为发陈，茵陈，因旧苗而春生。盖因冬令水寒之气，而具阳春生发之机，主治风湿寒热邪气，得生阳之气，则外邪自散也；热结黄疸，得水寒之气，则内热自除也。

久服则生阳上升，故轻身益气耐老；因陈而生新，故面白悦长年。兔乃纯阴之物，喜阳春之气，故曰兔食之而成仙。

叶天士曰：茵陈气平微寒，乘天秋平冬寒金水之气，入手太阴肺金、足太阳寒水膀胱经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气味俱降，阴也。

风为阳邪，湿为阴邪，风湿在太阳，阳邪发热，阴邪发寒也。其主之者，气寒清热，味苦燥湿也。

心为君火，火郁太阴，则肺不能通调水道，下输膀胱，而热与湿结矣。太阴乃湿土之经，所以蒸土色，而成黄疸也。其主之者，苦平可以清心肺，微寒可以解湿热也。

久服则燥盛，所以轻身；平寒清肺，肺主气，所以益气；心主血，味苦清心，心清则血充华面，所以耐老，而面白可悦也；心为十二官之主，心安十二官皆安，所以长年也。

黄杰熙评：张注欠实，虚幌而过，如解风湿寒热邪气之治法，用生阳之气；论黄疸仅为热结而遣湿等等，皆不妥当。

叶注归经主治，以及病机，步步合拍，堪称好注。至于“兔食之仙”本为虚玄幻语，叶氏弃之不注，是应该的；张氏注之，欲明反晦。

天 名 精

气味甘寒无毒，主治瘀血血瘕欲死，下血止血，利小便。久服轻身耐老。

张隐庵曰：鹿乃纯阳之兽，得天名精而复活，盖秉水天之气

而多阴精，故能治纯阳之鹿。

主治瘀血血瘦欲死，得水天之精气，阴中有阳，阳中有阴，故瘀久成瘦之积血；至欲死而可治，亦死而能生之义者。

又曰下血止血者，申明所以能治瘀血血瘦欲死，以其能下积血而复止新血也。

水精之气，上合于天，则小便自利。

久服则精气足，故轻身耐老。

黄杰熙评：张注仅以一水天之精气为解，注得十分勉强，似不可取。

盖天名精，亦名天蔓菁、地松、稀荃草、活鹿草等，经实验能活被射死之獐得名，獐不顺耳，易名为鹿，故事来源于《异苑》宋元时嘉中刘懂，又称刘懂草。

天名精《本经》云：气味甘寒无毒，实则还兼辛味，有狐臊气。气寒入足太阳膀胱经；味甘辛入足太阴脾经、足阳明胃经。

主治瘀血血瘦欲死，下血止血者，脾统血，味甘入脾，故能统周身之血；辛通，故可化瘀去瘀；狐臊气入肝藏血，故能治之。

利小便，气寒入足太阳膀胱经，经气行，则小便通利。

久服脾胃健，多进食，补益气血，故轻身；太阳经行畅达，肝木舒和，水木滋荣，故耐老。

鹤虱（附）

气味苦辛，有小毒，主治蛔蛭虫。

张隐庵曰：鹤虱得天日之精气在上，故主杀阴类之蛔蛭。

黄杰熙评：张注模糊不清，说明不了问题。天日即太阳在上，则地上之虫类皆可杀也，岂有此理。

盖鹤虱即天名精之草子，苦燥湿，辛制风，蛔蛭为风湿所化生，所育长，鹤虱且有小毒，故可以主治之。按：鹤虱首见于

《唐本草》。

土 牛 膝 (附)

又名杜牛膝，气味苦寒，主治吐血，牙疼咽喉肿塞，诸骨哽咽。

张隐庵曰：天者阳也，下通水精；水者阴也，阴柔在下，故根名土牛膝，阳刚在上，故苗名活鹿，子名鹤虱，于命名之中，便有阴阳之义。

黄杰熙评：张注不是注，是一种说明而矣。

土牛膝根白而短，似牛膝故名。盖其药效，与天名精相似，味苦入心主血，而其主治性能，皆清热化瘀止血，引血气下行之结果。

石 龙 刖

气味苦微寒无毒，主治心腹邪气，小便不利，淋闭，风湿鬼疰恶毒。久服补虚羸，轻身，耳目聪明延年。

张隐庵曰：石龙刖气味苦寒，生于水石之间，得少阴水精之气化，故以龙名，又龙行能泄其水精也。

主治心腹邪气者，少阴水精之气，上交于心，则心腹之邪气可治也。

小便不利、淋闭者，热邪下注，而病淋浊，气不下化，而仍闭结，皆为小便不利，龙刖能启水精之气，上交于心，上下相交，则小便自利矣。

又少阴神气外浮，则能取风湿；少阴神气内藏，则能除鬼疰也。又曰恶毒者，言鬼疰之病，皆恶毒所为，非痲毒也。

久服则水火相济，故能补虚羸而轻身；精神充足，故耳目聪明而延年。

黄杰熙评：张注以少阴水精之气化为解，似精而反粗，似妙而反拙。

石龙刳，又名龙须草，生水石间，得金水之气化而生，一茎直上，无枝叶，穗状花序，结实赤而细小，丛生高产，南方人取为织草席之原材料，北方人称为凉席。

石龙刳味苦入手少阴心经；气微寒入足少阴肾经、足太阳膀胱经。

心主火，肾主水，膀胱主气化与小便，水火既济，气化行，则心腹邪气、小便不利淋闭、风湿鬼疰恶毒等邪，不治而自解，今既得诸症，服此故能相应解之。

而鬼疰恶毒，系一种恶毒之慢性传染病，可使一家、一片，中恶毒传染而相继死亡，似今之爱滋病，多从小便之处传染，服此能使恶毒从小便排出，心肾安然，故有新效。

车 前 子

气味甘寒无毒，主治气癃，止痛，利水道，通小便，除湿痹，久服轻身耐老。

张隐庵曰：车前草，《本经》名“当道”，《诗》名“芼苢”。乾坤有动静，夫坤之静也翕，其动也辟，车前好生道旁，虽牛马践踏不死，盖得土气之用，动而不静者也。

气癃，膀胱之气闭也，闭则痛，痛则水道不利。车前得土气之用，土气行，则水道亦行而不癃，不癃则不痛，而小便长矣。

土气行，则湿邪散，湿邪散，则痹自除矣。

久服土气升而水气布，故能轻身耐老。

叶天士曰：车前气寒，秉天冬寒之水气，入足太阳寒水膀胱

经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴湿土脾经。气降味和，阴也。

膀胱者，州都之官，津液藏焉，气化能出矣，出气不化，闭塞下窍而为癃闭，其主之者，寒能化热，甘能化气也。

小便者，心火之去路也，火结于膀胱，则小便痛矣，其止痛者，气寒能清火也。饮入于胃，游溢精气，上输于脾，脾气散精，上归于肺，肺乃下输膀胱，车前味甘，甘能益脾，脾气散精，则滞气通行，故水道通，小便利矣。益脾利水，则湿下逐，故又除湿痹也。

久服轻身耐老者，指有病者而言也，人身有湿则身重，湿透则身轻；湿逐脾健，脾主统血，血充故耐老也。不然，滑泄之品，岂堪久服者哉。

《神仙服食经》云：车前雷之精也，震为雷，为长男。《诗》云：采采芣苢，意欲妊娠而生男也。

黄杰熙评：张注出奇，以土气论治，而遗气寒，所以注不彻底。

叶注实在，从气味甘寒无毒入手，归经正确，论病较张注详尽，所以叶注正宗可取。末引《神仙服食经》与《诗经》之文，仅可作参考。

盖车前以其子论，还有补肾阴之功效，总之是利水通小便之药物，水行则湿去，其能治湿痹者，此也。

冬 葵 子

气味甘寒滑无毒，主治五脏六腑寒热，羸瘦五癯，利小便。久服坚骨长肌肉，轻身延年。

张隐庵曰：葵花开五色，四季长生，得生长化收藏之五气，故治五脏六腑之寒热羸瘦。

冬葵子，覆养过冬，气味甘寒而滑，故治五癃。夫膀胱不利为癃，五为土数，土不运行，则水道闭塞，故曰五癃。治五癃则小便自利。

久服坚骨，得少阴之气也，长肌肉得太阴之气也，坚骨长肌，故轻身延年。

黄杰熙评：张氏此注可取，在于花开五色，与四季长生上，用以推出病机所在。但未直指归经，旁敲而出，使人颇费周折，若能与时色混合解之，则更妙。

地 肤 子

气味苦寒无毒，主治膀胱热，利小便，补中，益精气。久服耳目聪明，轻身耐老。

叶天士曰：地肤子，气味苦寒，秉太阳寒水之气化，故主治膀胱之热，而利小便，膀胱位居胞中，故补中而益水之精气。

久服则津液滋灌，故耳目聪明，轻身耐老。

虞搏《医学正传》云：搏兄年七十，秋间患淋二十余日，百方不效，后得一方，取地肤草捣自然汁服之遂通，至贱之物，有回生之功如此，是苗叶亦有功也。

黄杰熙评：叶氏此注简明，与其他注之规格有差异，比较之，系敷衍而成，但未引虞搏医案有参考价值。地肤草，即扫帚苗，极贱而功超，证明药不在贵贱，用对了即是灵丹妙药，用不对，虽贵过黄金，亦不见效，甚则增病杀人。不学无术之医生，好用贵重药，为医门所鄙，病家所恶，闻此能否省悟耶！

盖地肤子，味苦入手少阴心经；气寒入足少阴肾经与足太阳膀胱经。气味俱降，阴也。

味苦清热，气寒清热利小便，故治膀胱热，利小便。

补中者，补膀胱之中也；益精气者，益肾中之精气也，以其

气寒兼子之力也。

决 明 子

气味咸平无毒，主治青盲目淫肤赤，白膜眼赤、泪出，久服益精光轻身。

张隐庵曰：目者，肝之窍，决明气味咸平，叶司开阖，子色紫黑色亮，秉太阳寒水之气，而生厥阴之肝木，故主之。

青盲目淫肤赤，青盲则白膜，肤赤乃眼肤之赤，目淫则多泪，故又曰白膜、眼赤泪出也。

久服则水精充溢，故益精光轻身。

黄杰熙评：张注不全面，不切实，是说明而矣。

盖决明用子味咸，入足少阴肾经与足太阳膀胱经，气平入手太阴肺经，乃金水相生之物，子色黑紫，肾肝兼补之品。

主治青盲目淫肤赤，白膜眼赤泪出者，即青光眼、白内障、结膜炎病也。盖眼之五轮主五脏，肾水亏则青盲，心肝火炽则眼赤目淫泪出，肺气虚则白膜起，脾之湿热盛则肤赤。决明子，以子补肾治青盲；以咸滋水涵木而清火治赤眼；以平气入肺补肺则白膜去；肾水上滋，则心火去，以治目淫泪出；肝脾无侮，火清湿下，则肤赤可理，故以上各症皆可治之，非如张氏所云，治肝则可主之也。

茺 蔚 子（附）

气味辛甘微温无毒，主明目益精，除水气。久服轻身。

张隐庵曰：茺蔚茎叶甘寒，子辛温，《本经》辛甘微温，概苗叶实而言也。茎方子黑，喜生湿地，秉水土之气化，明目益精，得水气也；除水气，土气盛也。

久服则精气充蔚，故轻身。

叶天士曰：茺蔚子气微温，秉天初春之木气，入足厥阴肝经；味辛甘无毒，得地金土之味，入手太阴肺经、足太阴脾经。气味俱升，阳也。

肝为藏血之脏，脾为统血之脏，辛甘益血，目得血则能视，所以明目。

脾者阴气之源也，肺者津液之源也，甘辛能润，所以益精。

脾为胃行津液者也，肺者相傅之官，通调水道者也，辛甘益脾肺，则津液行而水道通，所以除水气。

久服益肝脾肺，肺主周身之气，脾主周身之血，肝为生生之脏，以生气血，气血生生长旺，自然轻身矣。

陈修园曰：今人奉为女科专药，往往误事，且其独具之长反掩。

黄杰熙评：张注本水土之气立论，解简而囫圇，说明不了问题，只可作为参考。

叶注全面详细，可取可法。

陈氏非注，是警语，意在拨乱反正。

盖茺蔚子，即益母草之子，子微温，母微寒，所以其性亦异，今人混同，不识药之故耳。用之混同治病，每帮倒忙而误事。

茺蔚子用治眼病，辛温发散，有散瞳之作用，如瞳孔散大者，忌用。

茺蔚茎叶花穗（即益母草）

气味甘寒微苦辛，主治隐疹，可作浴汤。

张隐庵曰：《诗》言：中谷有蕓，煖其乾矣。益母草得水湿之精，能耐旱煖，滋养皮肤，故主治隐疹，可作浴汤。茺蔚子明目益精而补肾，后除水气以健脾，故有茺蔚之名；益母草清热而解

毒凉血以安胎，故有益母之名。

叶天士曰：菟蔚茎，主癩疹痒，所以可浴儿也。

黄杰熙评：张注以水湿之精为据，妄谈“滋养皮肤”以治隐疹，可作浴汤。

叶注非注，只是一项说明。

盖益母草气味辛苦微甘微寒，经文倒置处，应于纠正。入肺心脾肾四经，茎方形归脾，中充白瓤入三焦网膜。

主治隐疹者，疹乃气血内郁肌肉，壅热而成，隐于皮内。益母草微寒清热，味苦入心清火行血，辛入肺以行气，甘入脾以充肌肉活力，达三焦网膜以通调道路，故可治之。作浴汤外熏洗，亦是清热解毒，活血化瘀之义也。

总之，益母草是清热解毒，活血化瘀之品，血实有热者用之，效如桴鼓；血虚无热者用之，如落井下石。要言不繁，谨记此数句，够你一生用的了。

丹 砂

气味甘微寒无毒，主治身体五脏百病，养精神，安魂魄，益气明目，杀精魅邪恶鬼。久服通神明不老，能化为汞。

张隐庵曰：水银出于丹砂之中，精气内藏，水之精也；色赤体坚，象合离明，火之精也。气味甘寒，生于土石之中，乃资中土而得水火之精气。

主治身体五脏百病者，五脏之气，内归坤土，外合周身，丹砂从中土而达五脏之气，出于身体，则百病咸除。

养精神者，养肾脏之精，心脏之神，而上下水火相交矣。

安魂魄者，安肝脏之魂，肺脏之魄，而内外气血调和矣。调和其气，故益气；调和其血，故明目。

上下水火相交，则精魅之怪，邪恶之鬼，自消杀矣。

久服则灵气充盛，故神明不老；内丹可成，故能化为汞。

叶天士曰：丹砂气微寒，秉天初冬寒水之气，入足少阴肾经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经；色赤而生水银，入手少阴心经，盖心乃火脏，而藏阴者也。气味降多于升，质重味薄，阴也。

心肾者，人身之水火也；天地之用在于水火，水火安，则人身之天地位矣。丹砂色赤质重，可以镇心火；气寒，可以益肾水，水升火降，心肾相交，身体五脏之病皆愈也。

心者生之本，神之居也；肾者气之源，精之处也，心肾安则精神交相养矣。随神往来者谓之魂，并精出入者谓之魄，精神交养，则魂魄自安。

味甘益脾，脾为后天，气者，得于天，充于谷，后天纳谷，所以益气。

心病多舍于肝，心火不炎，则肝血上奉，故又明目也。

色赤，具南方阳明之色，阳明能辟阴幽，所以杀精魅邪恶鬼也。

久服通神明不老者，心之所藏者神明，久服丹砂，则心火清，火清则血充，故虚灵不昧，光彩华面也。

陈修园曰：丹砂气微寒入肾，味甘无毒入脾，色赤入心。

主身体五脏百病皆可用，而无顾忌也。

气者得之先天，全赖后天之谷气而昌，丹砂味甘补脾，所以益气。明目者，以石药凝金之气，金能鉴物；赤色得火之象，火能烛物也。杀精魅邪恶鬼者，具天地纯阳之正色，阳明胜阴，正能胜邪也。

久服通神明不老者，明其水升火降之效也。

黄杰熙评：张注能从内阴外阳，象合离明，以及气味甘寒，资中土而得水火之精气入手，以解经文，到处逢春，迎刃而解，故

此注超出其注它药多矣。但在丝丝入扣上，差于叶注；讲实际上差于陈注。

叶注归经全面具体，主治重点突出，阐发每病之机转，活龙活现，真不愧为清代第一流大名医、大国手。

陈注精简叶注而来，落实在“主身体五脏百病皆可用”之“皆可用”三字，既平和之品，只能是皆可用而矣，非能治愈百病也。

不过，丹砂是安心神杀毒菌之无上妙品，研细末，水送五至十克，治霍乱有神奇之功效。推之，还可控制与治愈爱滋病，此则看如何配伍法了。治霍乱余有多次实践经验，治爱滋病只是推测，尚无实践也。

云 母

气味甘平无毒，主治身皮死肌，中风寒热，如在车船上，除邪气，安五脏，益子精明目。久服轻身延年。

张隐庵曰：今时用阳起石者有之，用云母者甚鲜，故但存《本经》原文，不加诠释。

后凡存《本经》而不诠释者，义俱仿此。

黄杰熙评：张氏从实际出发，作此说明，证明其不是学究派，而是求是者。

云母是耐高温物品，极难溶解；韧性大，又极难磨成粉，纵有其效，怎能溶解出来？怎么吸收起作用？故不切实用。曾见俗医用过，未有任何效果，浪费而矣。不释为好，免得再浪费时间。

赤 石 脂

气味甘平无毒，主治黄疸泄痢，肠澼脓血，阴蚀下血

赤白，邪气痈肿疽痔恶疮头疡疥瘙。久服补髓益气，肥健不饥，轻身延年。

五色石脂，各随五色补五脏。

张隐庵曰：石脂乃石中之脂，为少阴肾脏之药，又色赤象心，甘平属土。

主治黄疸泄痢肠澼脓血者，脾土留湿，则外疸黄而内泄痢，甚则肠澼脓血，石脂得太阴之土气，故可治也。

阴蚀下血赤白，邪气痈肿疽痔者，少阴脏寒，不得君火之阳热以相济，致阴蚀而为下血赤白，邪气痈肿而为疽痔，石脂色赤，得少阴之火气，故可治也。

恶疮头疡疥瘙者，少阴火热，不得肾脏之水气以相滋，致火热上炎，而为恶疮之头疡疥瘙，石脂生于石中，得少阴水精之气，故可治也。

久服脂液内生，气血充盛，故补髓益气，补髓助精也，益气助神也，精神交会于中土，则肥健不饥，而轻身延年。

《本经》概言五色石脂，故曰各随五色补五脏。

叶天士曰：赤石脂气大温，秉天春夏木火之气，入足厥阴肝经、手厥阴心包络经；味甘酸辛无毒，得地中东西土木金之味，入足阴阳燥金胃土、手阳明燥金大肠。气味升多于降，阳也。

心包络者，臣使之官，喜乐出焉，代君行事之府也。石脂气味酸温，则条畅心包络，而心君之气得所养矣。肝开窍于目，辛温疏达，则肝和而目明。精者，五脏阴气之华也，甘酸之味，可以益阴，所以益精而补髓也。

腹者，太阴经行之地，太阴为湿土，土湿而寒则痛，石脂气温，温能行寒去湿，所以主之也。

胃与大肠为阳明燥金，阳虚不燥，则肠澼下痢，石脂辛温收湿，故主下痢及利小便。盖涩可以固脱也。

诸痛痒疮疡，皆属心火，火有虚实，实火可泻，虚火可补，心

包络代君行事，其气味酸温，可补心包络之火也。

肝藏血，肝血不藏，则崩中漏下产难包衣不出矣，味甘酸，可以藏血；气温可以达肝气，所以主之也。

久服补益阳明，阳明经行于面，所以好颜色。肾为水脏而藏智，酸收益阴，所以益智；阳明胃气充化，所以不饥而延年矣。

陈修园曰：赤石脂气平，秉金气，味甘得土味，手足太阴药也。

太阴湿胜，在皮肤则为黄疸，在肠胃则为泄痢，甚则为肠澼脓血；下注于前阴，则为阴蚀，并见赤浊、白带；下注于后阴，则为下血，皆湿邪之气为害也，石脂具湿土之质，而有燥金之用，所以主之。

痈肿疽痔恶疮头疡疥瘙等症，皆湿气郁而为热，热盛生毒之患，石脂能燥湿化热，所以主之。

久服补髓益气，肥健不饥延年者，湿热去则津生，自能补髓益气。补髓助精也，补气助神也，精神交会于中土，故有肥健不饥，轻身延年之效也。

黄杰熙评：张注从石脂之质色及气味入手，以解经文，能通其义，但比较勉强，难满人意。

陈注实从张注悟出，归经紧依经文，主治上比张注简明，而有说服力，似后来者居上。

叶注创新，丢掉《本经》经文，而取《别录》之文注解之。且注得步步合拍，堪称医界创新家、求实家。

比较之，《别录》对赤石脂之气味主治，完全符合实际，《本经》于此，实不及《别录》，叶氏此举，是完全正确的，无可非议的。

医学之进步，全在求实、求真上，只有在真实的基础上，求理论、求实用、求发展、求创新，否则一切都要落空的。

总之，赤石脂性温，是矽酸盐类陶土，作宜兴壶杯等的原材

料，味甘辛咸涩，以入手足阳明经大肠与胃为主，是湿肠止泻、止血、止滑脱之药物，且用之神效，其他之用，亦与此性能有关，偏热者，须配凉药；偏寒者，可少佐热药；偏湿者，可佐燥湿之药等等。

滑 石

气味甘寒无毒，主治身热泄澼，女子乳难，癃闭，利小便，荡肠胃中积聚寒热，益精气。久服轻身，耐饥长年。

张隐庵曰：滑石味甘属土，气寒属水，色白属金，主治身热泄澼者，秉水气而清外内之热也。热在外则身热，热在内则泄澼也。

女子乳难者，秉金气而生中焦之汁，乳生中焦，亦水类也。治癃闭，秉土气而化水道之出也，利小便，所以治癃闭也。荡胃中积聚寒热，所以治身热泄澼也；益精气所以治乳难也。久服则土生金，而金生水，故轻身耐饥长年。

叶天士曰：滑石气寒，秉天冬寒之水气，入足太阳寒水膀胱经，手太阳寒水小肠经、味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气味降多于升，阴也。

其主身热肠澼者，盖太阳行身之表，为诸经主气者也，暑伤太阳，则气化失职，水谷不分，身热泄痢肠澼矣，滑石甘以益气，寒以清暑，所以主之也。

其主女子乳难者，乳汁不通也，其甘有益脾土，脾湿行，则脾血化乳也。

膀胱热则癃闭，甘寒滑渗，故主癃闭而利小便也。

脾者为胃行其津液者也，脾湿则困、不行，胃中津液渣秽，则积聚于胃，而寒热生焉，滑石入膀胱利小便，则湿去脾健，而胃中积聚皆行也。

益精者，滑石入小肠，则心火有去路，火不刑金，金水相生，而精受益矣。

久服湿行脾健，所以轻身耐饥；脾为后天，脾旺谷充，自然长年也。

陈修园曰：按滑石气寒，得寒水之气，入手足太阳；味甘入乎太阴；且其色白，兼入手太阴，所主诸病，皆清热利小便之功也。

益精延年，言其性之纯，不比他种石药，偏之为害也，读者勿疑。

黄杰熙评：张氏从五行注经，而遗经络学说，故所解经文，不甚透彻，语多模糊重复，证明其思维之混也。如“热在内则泄溺”，如不兼湿与宿食，何能泄溺呢！又如“治癃闭，乘土气而化水道之出也”，土克水，何能化水道之出呢！等等，证明其注，实在不堪一驳。

叶氏首先以气味归经注解，而遗色白入手太阴肺经，是其归经之不全也。

叶注从经脉分析病机主治，比较精辟落实，基本上可以取法，唯遗色白入肺，肺金通调水道之旨，故所注美中不足。

陈氏是按语，而其归经正确，重点突出，即“皆清热利小便之功也”。

总之，《三家注》除叶氏外未道出湿字，是最大之遗憾。应该说成清湿热利小便之功，是治湿温症之最佳良药，与生石膏洽为对子，生石膏治燥热，滑石治湿热，皆是灵丹妙药。

消 石

气味苦寒无毒，主治五脏积热，胃胀闭，涤去蓄结饮食，推陈致新，除邪气。炼之如膏，久服轻身。

张隐庵曰：消石乃冬时地上所生白霜，气味苦寒，秉少阴、太阳之气化。盖少阴属冬令之水，太阳主六气之终，遇火能焰者，少阴上有君火，太阳外有标阳也。

主治五脏积热，胃胀闭者，言积热在脏，致胃腑之气胀闭不通，消石秉水寒之气，而治脏热；具火焰之性，而消胃胀也，涤去蓄结饮食，则胃腑之胀闭自除。推陈致新除邪气，则五脏之积热自散。

炼之如膏，得阴气之体，故久服轻身。

黄杰熙评：张注基本正确，能解通经文。但炼之如膏，得阴气之体固确，故久服轻身，则欠妥，而阴气之体，只能增加重量，何能轻身？

盖消石者，消融之义，久服则消融脏腑之积垢渣秽，排于体外，故去粗留精后，才能身轻。

消石、朴消

皆味咸性寒，《本经》言“苦寒”，初时则咸极而苦，提过则转苦为咸。

叶天士曰：硝石气寒，秉天冬寒之水气，入手太阳寒水小肠经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阳相火三焦经。气味俱降，阴也。

其主五脏积热，胃胀闭者，五脏本为藏阴之经，阴枯则燥，而火就之，则热积于脏，而阳偏盛矣。阳者胃脘之阳，阳偏盛，故胃胀而闭塞也，其主之者，消石入三焦，苦寒下泄水谷之道路通，而胀者平；以小肠为受盛之官，化物出焉之腑，小肠燥热，则物受而不化，饮食蓄积于肠矣，消石入太阳，寒苦下泄，咸以软坚，则陈者下，而新者可进也；除邪气者，苦寒治燥热之邪气也。

炼之如膏，久服则轻身者，指三焦小肠有积热言也，盖积去

身自轻也。

陈修园曰：雪花六出，元精石六棱，六数为阴，乃水之成数也。消石朴消，面上生芽如圭角，作六棱，乃感地水之气结成，而秉寒水之气化，是以形类相同。但消石遇火则焰，兼得水中之天气；朴消只秉地水之精，不得天气，故遇火不焰也，所以不同者如此。

黄杰熙评：叶注归经小肠、三焦，是从理论与实际相结合得出的，可补张注之不及。

对主治病机之推阐，亦从实际出发的，所以叶注颇超，但仍有遗蕴，得下面张注完后，再一并说明之。

陈注仅是补充说明，其目的在别硝石、朴硝之异同。

朴 硝

气味苦寒无毒，主治百病，除寒热邪气，逐六腑积聚，结固留癖，能化七十二种石。炼饵服之，轻身神仙。

张隐庵曰：朴硝秉太阳寒水之气化，夫太阳之气，本于水府，外行通体之皮毛，从胸膈而入于中土。

主治百病寒热邪气者，外行于通体皮毛也，外感百病虽多，不越寒热之邪气，则外感之百病皆治也。

逐六腑积聚，结固留癖者，从胸膈而入中土也，太阳之气入于中土，则天气下交于地，凡六腑积聚，结固留癖可逐矣。

能化七十二种石者，朴硝味咸，能软坚也。天一生水，炼饵服之，得先天之精气，故轻身神仙。

黄杰熙评：张氏从太阳寒水之气化以注解，虽勉强能解通经文，总以原义出入较大，难于取信也。

盖硝石、朴硝皆色白，秉金气入手太阴肺经与手阳明大肠经、足阳明胃经；气寒入足少阴肾经与足太阳膀胱经；味苦入手少阴

心经、手太阳小肠经、手少阳三焦经。气味皆降，阴也。总以寒水之气体为主治，为心经之对宫药。

火交于水则化气，气循三焦网膜而上，入肺达皮毛，是为卫气，此即太阳寒水之气体，张氏不明此气之实质，故论多囿囿。此气上出为顺，从胸膈入于中土为逆，则成大结胸症矣。张氏不明此理，故所注经文，根本不可取。

其主治百病者，百病皆生于郁，郁则积聚结固留癖于五脏六腑，而外发寒热。郁不通则热，通则寒，乃壅挤与疏散之义也。朴硝苦寒清热，咸能软坚，色白入肺与肠胃，则郁者理，积聚结固留癖，随之软化下走，下走则寒热除，故可治之，其主治百病之理，眩于此，不必他求。实则荡涤肠胃积垢之功效也。胃为五脏六腑十二经之母，胃肠健，其余相继而健壮也。

硝石、朴硝为硝盐类，硝者能消，故能化七十二种石。炼为玄明粉，性和缓于朴硝，久服肠胃洁净，重量减轻，故轻身；肠胃健，百病不生。“多病方知健是仙。”健康的人，就是神仙，神话中的神仙，根本不存在。

矾 石

气味酸寒无毒，主治寒热泄利白沃，阴蚀恶疮目痛，坚骨齿。炼而服之，轻身不老增年。

张隐庵曰：矾石以水煎石而成，光亮体重，酸寒而涩，是乘水石之专精，能肃清其秽浊。

主治寒热泄痢白沃者，矾石清涤肠胃，故可治也。阴蚀恶疮者，言阴盛生虫，肌肉如蚀，而为恶疮也，矾石酸涩杀虫，故可治也。以水煎石，其色光明，其性本寒，故治目痛。以水煎石，凝结成矾，其质如石，故坚骨齿。

炼饵而服，得石中之精，补养精气，故轻身不老增年。

黄杰熙评：张氏以水煎石而成，以及水石之专精，能肃清秽浊为根据，兼酸涩杀虫以论主治，故所注经文，亦多隔靴搔痒。

盖矾石，即今之白矾，乃矿物质，硫酸铝，什么水煎石？入水即溶解为白矾水。

矾石色白入手太阴肺经及手足阳明经；气寒入足太阳膀胱经；味酸涩入足厥阴肝经。气味俱降，阴也。阳明燥金，能燥湿去热；酸涩性收敛，能敛秽浊泥浆之水，使之澄澈清洁。

主治寒热泄痢白沃者，即今之赤白痢疾，赤痢属热，白痢属寒，皆兼湿而成。白矾之寒以清热；酸入肝，肝气温以胜寒；色白兼涩以燥湿，故可以治寒热泄痢白沃。

阴蚀恶疮，乃湿注二阴，腐化肌肉，初起多寒，久则化热以生虫，矾石去湿热，酸涩杀虫，故可治之。

目痛，乃肝脾之风湿上注之患，多挟寒热之气，矾石金平木制风，金燥去湿，气寒清热，酸补肝、温以去寒，故可治之。

寒水之气入骨齿，酸涩敛达，故坚骨齿。

炼之虚松而成枯矾，服之去湿则身轻，湿热去则不老增年。

石 胆（胆矾）

气味酸辛寒有小毒，主明目治目痛金疮，诸痼瘕，女子阴蚀痛，石淋寒热，崩中下血，诸邪毒气，令人有子。炼饵服之不老，久服增寿神仙。

张隐庵曰：胆矾气味酸辛而寒，酸木也，辛金也，寒水也，秉金水木相生之气化。惟秉金水，故主明目治目痛。秉金气，故治金疮诸痼瘕，谓金疮受风变痼瘕也。秉木气，故治女子阴蚀痛，谓之土湿溃烂，女子阴户如虫啮缺伤而痛也。金生水而水生木，故治石淋寒热。崩中下血，诸邪毒气，令人有子，水生木也。

炼饵服之不老，久服增寿神仙，得石中之精也。

黄杰熙评：张氏以五行生克制化，以注解经文，五行学说是科学的，无可非议的，轻浮浅薄之流，不懂装懂，见而非之，只能以下流菟子之辈以视之，下流之辈，不足语道也。

不过，张注虽好，犹有谬处，如“秉木气，故治女子阴蚀痛”以下，注得含混不清，女子阴湿溃烂而痛，是妇科常见病，胆矾秉金辛之味，金主燥，燥胜湿，湿去则女子阴蚀痛自愈。胆矾乃硫酸铜，或硫酸亚铁之结晶体，石淋寒热，即膀胱结石，石乃碱性结成，酸碱中和，石可粉化，即酸收酸化之义，膀胱乃太阳经之腑，主寒热，即本寒标热之症状，淋石去则寒热平。至于崩中下血，诸邪毒气，妇人无子，因于湿热之毒者，此可以寒胜热，燥胜湿而治愈之。非此则无效，反有害，非统治这类病症者也。

胆矾，只宜为丸服或外用，若煎汤服之，每致涌吐，因胃不胜酸辛之极味也，所以又为吐风痰之要药。此即用其长，而去其短之义也。

石 钟 乳

气味甘温无毒，主治咳逆上气，明目益精，安五脏，通百节，利九窍，下乳汁。

张隐庵曰：石钟乳为石之津液凝结而成，气味甘温，主中焦之汁，上输于肺，故治咳逆上气。

“中焦取汁，奉心化赤而为血”，故明目；流溢于中而为精，故益精；精气盛，则五脏和，故安五脏；血气盛，则百节和，故通百节；津液濡于空窍，则九窍自利；滋于经脉，则乳汁自下。

黄杰熙评：张注从石之津液入手，落实到中焦取汁为注，注对了一半，因不明物性，注错了一半，且不明归经，全注又囫圇吞枣。

盖石钟乳下垂，乃石之精液下滴凝结而成，中空色白，亦有

凝成冰晶透明者，象钟、象乳者，故又称钟乳石；象阴茎者，又称鹤管石，敲之发出八音钟之声。秉金石之性，故入肺经；味甘入脾胃二经；气温入手厥阴心包络经、足厥阴肝经；石之精液入足少阴肾经。

主治咳逆上气者，肺为娇脏，形寒饮冷则伤肺，气伤而不清者下行，病则咳逆上气，石钟乳气温散寒冷，质重下垂则降逆气，故可治之。

主明目益精者，石之精液入补肾精，精足则目自明。

“五脏藏精者也”，精足则五脏自安。

肾主先天，脾胃主后天，甘味养后天，精足先天足，先后天足，则气血畅，精气神旺，故通百节，利九窍。

钟乳石其形象乳而中空，汁从中出，故下乳汁，物性如此，用之其效如神。

鹤管石象阴茎，气味甘温，为入肝脾肾兴阳起痿之要药，治阳痿早泄有奇功，但阴虚火旺之人服之，如抱薪救火、火上浇油，易成痲瘖而死，不可不知。

禹 余 粮

气味甘寒无毒，主治咳逆寒热烦满，下痢赤白，血闭症瘕大热。炼饵服之，轻身延年。

张隐庵曰：仲祖《伤寒论》云：“汗家重发汗，必恍惚心乱，小便已寒疼，宜禹余粮丸。”全方失传，世亦罕用。

陈修园曰：禹余粮主咳逆补中降气，不使上逆，治寒热者，降脾胃湿滞之寒热，非谓可以通治寒热也；治烦满者，性寒除热，即可以止烦；质重降逆，即可以泻满也；下利赤白，除湿热之功；血闭症瘕，消湿热所滞之瘀积；大热、热在阳明者，热必甚，此能除之。

炼饵服之不饥，其质类谷粉而补脾土，所以谓之粮，而充饥也。轻身延年，补养后天之功。

黄杰熙评：张注是遁词，知其所穷也。

陈注勉强能通，但不明归经，泛泛乎！难于取信也。

盖禹余粮，色白，又称白余粮、自然谷、观音米；今出者各色皆有，类褐铁矿类之产物，外有壳，内贮黄褐色粉末，亦有内贮黄浆水者，干之即为粉末，年久色变紫，尝之味甘涩，气寒。味甘入脾胃；涩乃酸之极味，肝之味变为肺之性，性为收敛止涩，肺与大肠为表里，且其质重，直入大肠经；气寒入肾膀胱清热。

主治咳逆寒热烦满者，金虚受火刑，肺气上逆则咳，肺主皮毛，与太阳经相合，故现寒热，火属心，火旺则烦满，禹余粮气寒清火，质重降逆气，故可统而治之。

下痢赤白，血闭症瘕大热者，皆为湿热壅滞集结之患，禹余粮甘涩而燥，可以去湿，气寒可以清热，故可治之。然非为湿热所困之血闭症瘕，不会有太热之症，所以不可用。

湿热去，则轻身延年，炼饵服之，指此也。

在灾荒之年，饥民取观音米即禹余粮和草根树皮蒸饼食之，多得肠梗阻而死，具见其止涩难便之力太大，故其药性全在止涩大便上，观仲景赤石脂禹余粮汤治下利不止有奇效，既相反相成之理也，亦逆反思维之结果。

太 一 余 粮

气味甘平无毒，主治咳逆上气，症瘕血闭漏下，除邪气，肢节不利。久服耐寒暑不饥，轻身飞行千里神仙。

陈藏器曰：太大也，一道也，大道之师，即理化神君，禹之师也，师曾服之，故有太一之名。

陶宏景曰：《本草》有太一余粮、禹余粮两种，治体相同，而

今世惟有禹余粮，不复识太一矣。

李时珍曰：生池泽者，为禹余粮；生山谷者，为太一余粮，本是一物，晋宋以来不分山谷池泽，通呼太一禹余粮，义可知矣。

黄杰熙评：三家者，张、叶、陈也，皆不注太一余粮，以其实用价值不大也，且有“轻身飞行千里神仙”之怪诞语，怎么注？《本经》是圣经，碰不得！瞎注吗！三大名医，又不敢干自欺欺人的事，所以只好空下来，既遵经，又免后人鄙弃，两全其美。

纂集者郭汝聪，自注无能，只好从《本草纲目》上抄来陈、陶、李三氏之说，以说明之。禹余粮与太一余粮，本为一物二名，所以无须另行再注。

空 青

气味甘酸寒无毒，主治青盲耳聋，明目利九窍，通血脉，养精神，益肝气。久服轻身延年。

黄杰熙释：空青，三家皆不注，何也？此物真者为宝，世所罕见，价超过黄金十倍，出于金矿者价最高，出铜矿者价次之，伪制品即铜绿之空疏者，用之则无效而有毒。

空青大者如鸡卵，小者如黄豆，皆中空有汁如油，秉金性入手太阴肺经；气寒入足少阴肾经；味甘入足太阴脾、酸入足厥阴肝经。

主治青盲耳聋者，目为肝窍，耳为肾窍，气寒入肾滋水漓窍，味酸入肝通窍。金气之宝，能发声，能鉴物，故使盲者明，聋者聪。

明目，乃肾精之足也。利九窍，头上七窍加前后阴，共九窍，皆五脏之神气游行之所，空青色青味酸，补肝木生心火，气寒补肾，味甘补脾，金之性补肺，五脏受补，神气充足，故利九窍。而通血脉，养精神，益肝气，皆义赅其中矣。

久服不可能，此药为稀世珍宝也。

愚无缘亲用空青，少年时仅得一见，先祖得空青一粒，色黑绿，形如黑豆而光亮，质轻，放入瓷钵中，碎开出汁如油，化于二毫升蒸馏水中，愚用细玻璃棒，蘸而尝之，与《本经》所云气味一致。当晚九时许，用点家祖亲朋袁礼文先生，青盲三十年，百治无效，早失信心，劝其脱衣睡下，最后一试，将药滴于两眼各三滴，并用纱布蘸药汁擦两眉使润湿，余者冲开水半茶碗，用勺喂之使净，次晨七时许，听得客房内有声，大呼看见了，群集，袁先生还问是不是在做梦。

空青之神效，给愚留下了难忘之印象，此后留心迄今五十余年矣，终未再见此药，见过的全是伪制品，试之根本无效，愚书于此，愿读吾书者，群集而留心焉。世上无盲人，空青大批至。

紫 石 英

气味甘温无毒，主治心腹咳逆邪气，补不足，女子风寒在子宫，绝孕十年无子。久服温中，轻身延年。

叶天士曰：紫石英气温，秉天春和之木气，入足厥阴肝经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气味俱升，阳也。

心腹者，足太阴行经之地，脾虚不能生肺，肺失下降之令，则邪气上逆而咳矣，紫石英味甘质重，益脾土而降气逆，所以主咳逆邪气也。

补不足者，气温补肝气之不足，味甘补脾阴之不足也。

厥阴之脉，结于阴气，子宫亦属肝经，肝为两阴交尽之经，风木之腑，风寒在子宫，则肝血不藏，脾血亦不统，不能孕而生育矣。脾土之成数十，所以十年无子也。紫石英气温，可以散子宫之风寒，味甘可以益肝脾之血也。

中者，中州脾土也，久服甘温益脾，所以温中。肝木条达，脾

土健运，所以轻身延年。

陈修园曰：紫石英气温，秉木气而入肝；味甘无毒，得土味而入脾。

咳逆邪气者，以心腹为脾之部位，人之呼吸，出心肺，而入肝肾，脾居中而转运，何咳逆之有，惟脾虚受肝邪之侮，不能下转而上冲，故为是病，其主之者，温能散邪，甘能和中，而其质又重，而能降也。

补不足者，气味温甘，补肝脾之不足也。

风寒入于子宫，则肝血不藏，脾血亦不统，往往不能生育，紫石英气温，可以散子宫之风寒，味甘可以益肝脾之血也。

久服温中，轻身延年者，夸其补气纳血之功也。

黄杰熙评：叶氏之注，炉火纯青，对紫石英气味主治之解，粗细不遗，处处合实，堪为典范。叶氏善用此药，余效而用之，亦到处逢春，此为价廉物美之好药，药房多不备，实为憾事，不过用时须煨细，不然煎之药性难出。

陈注实取叶注之义，不过在呼吸中转上，另作文章。比较之，却不及叶注之踏实可循。

而肝脾之气宜升，胆胃之气宜降，呼出应肝脾之气随之止升，吸入应胆胃之气随之下降，陈氏不明此义，注此成了画蛇添足了。

白 石 英

气味甘温无毒，主治消渴阴痿不足，咳逆，胸膈间久寒，益气除风湿痹。久服轻身长年。

陈修园曰：与紫石英之治略同，但紫色属阴，主治冲脉血海，功多在下；白为金色，主治消渴，兼理上焦之燥。

黄杰熙评：陈氏此解，简明扼要，能中肯启。但应解为紫入血分，白入气分，皆质重下降，而阳金主燥，阴金主润，肺为阴

金，乘金气入肺而补之，则润性大而治消渴。

龙 骨

气味甘平无毒，主治心腹鬼疰，精物老魅，咳逆泄利脓血，女子漏下，症瘕坚结，小儿热气惊痫。

张隐庵曰：鳞虫三百六十，而龙为之长，背有八十一鳞，具九九之数，上应东方七宿，得冬月蛰藏之精，从泉下而上于天，乃从阴出阳，而上自下之药也。

主治心腹鬼疰精物老魅者，水中天气上交于阳，则心腹和平，而鬼疰精魅之阴类自消矣。

咳逆者，天气不降也；泄痢脓血者，土气不藏也；女子漏下者，水气不升也，龙骨启泉下之水精，从地土而上腾矣，天则阴阳交会，上下相和，故咳逆泄痢漏下，皆可治也。

土气内藏，则症瘕坚结自除。水气上升，则小儿热气惊痫自散。

不言久服，或脱筒也。

叶天士曰：龙骨气平，乘天秋收之金气，入手太阴肺金；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经；龙为东方之神，鳞虫之长，神灵之骨，入足厥阴肝经。气味降多于升，阴也。

腹，太阴行经之地也，太阴脾土上升，则肺气下降，位于一身之天地，而一切鬼疰精魅不能犯之矣。龙骨气平益肺，肺平则下降；味甘益脾，脾和则上升，升降和而天地位焉，所以祛鬼疰精物老魅也。

欬逆者，肝火炎上而乘肺也；泄利脓血者，清气下陷也；女子漏下，肝血不藏也。龙骨味甘，可以缓肝火，气温可以达清气，甘平可以藏肝血也。

脾统血，症瘕坚结，脾血不运而凝结也，气温能行，可以散

结也。小儿热气惊痫，心火盛，舍肝而惊痫也，惊者平之，龙骨气平，所以可平惊也。

陈修园曰：龙得天地纯阳之气，凡心腹鬼疰精物，皆属阴气作祟，阳能制阴也。

肝属木而得东方之气，肝火乘于上，则为咳逆，奔于下则为泄痢脓血、女子漏下，龙骨敛戢肝火，故皆治之。

且其用，变化莫测，虽症痼坚结难疗，亦穿入而攻破之。至于惊痫颠痉，皆肝气上逆，挟痰而归进入心，龙骨能敛火安神，逐痰降逆，故为惊痫颠痉之圣药。仲景风引汤，必是熟读《本经》，从此一味悟出全方，而神变妙化，亦如龙之莫测，余今注此品，复为之点睛欲飞矣。

痰水也，随火而升，龙属阳而潜于海，能引逆上之火，泛滥之水，而归其宅，若与牡蛎同用，为治痰之神品，今人只知其性涩以止脱，何其浅也。

黄杰熙评：张注见一龙字，则大做文章，注则神乎其神，虚幌而过，难切实用。

叶注在归经上比较实际，神化之说少得多，故所解经文亦比较贴近病机，可取者多些。

陈注绍张注之余绪，具体在阴阳变化上注经，神在其中，虽有可取之处，总不落实，皆因一龙字引起之一波三叠也。

盖龙骨乃古代脊椎动物之骨骼化石，年远代湮，凝化而成。动物者，阳也，有阳潜于阴之物理；骨者肾水所生所主，故入足少阴肾经；味甘入太阴脾经；味涩入足厥阴肝经；气平入手太阴肺经，归经为肺脾肝肾四经也。

主治心腹鬼疰，精物老魅者，心藏神，肝木之子也，神者阳之精华，腹者脾所司，心脾之阳不足，则鬼疰精物老魅之阴气乘之作祟。龙骨乃纯阳之体，潜于阴中，味甘补脾，涩补肝，肝旺则心神旺，母令子壮也，脾者心之子，子令母强，以阳潜入阴之

鬼疰精物老魅中，神为之指挥之，故可一举歼之逐之也。

肺气虚而不降，则咳逆；脾不统、肝不藏，则泄痢脓血、女子漏下、症瘕坚结。龙骨气平补肺气，味甘补脾统血，味涩补肝藏血，气血运行与贮备正常，故可以统治之。

肝气热，则魂不宁，上注于心则惊，挟肾水脾液成痰入心则痫，龙骨能敛肝火、敛肝魂，戢肾水、戢脾液，使不上冲与泛滥，各归其它，故可治小儿热气惊痫，推之以治大人亦然。

在临床上，余用龙骨治愈以上诸症不少。惟龙骨之粘湿性大，每有留湿之付作用，患风寒湿热症者，宜忌用，但加入祛风、清热、温散、利湿之药同用，有制之师，战必胜、攻必克也。

去掉龙之神化，以解经文，切实可行。

鹿 茸

气味甘温无毒，主治漏下恶血，寒热惊痫，益气强志，生齿不老。

张隐庵曰：鹿性纯阳，息通督脉，茸乃骨精之余，从阴透顶，气味甘温，有火土相生之义。

主治漏下恶血者，生气虚寒，则恶血下漏，鹿茸秉火气而生土，从阴出阳，下者举之，而恶血不漏矣。

寒热惊痫者，心为阳中之太阳，阳虚则寒热；心为君主而藏神，神虚则惊痫，鹿茸阳刚渐长，心神充足，而寒热惊痫自除矣。

益气强志者，益肾藏之气，强肾藏之志也。生齿不老者，齿为骨之余，从其类而补之，则肾精日益，故不老。

叶天士曰：鹿茸气温，秉天春升之木气，入足厥阴肝经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气味俱升，阳也。

肝藏血，脾统血，肝血不藏，则脾血不统，漏下恶血矣，鹿茸气温，可以达肝，味甘可以扶脾，所以主之也。

寒热惊痫者，惊痫而发寒热也，盖肝为将军之官，肝血虚则气亢，挟浊火上逆，或惊或痫矣，鹿茸味甘，可以养血，气温可以导火，所以止惊痫之寒热也。

益气者，气温则益阳气，味甘则益阴气也，甘温益阴阳之气，气得刚大而志强矣。

鹿茸骨属也，齿者骨之余也，甘温之味主生长，所以生齿。

真气充足，气血滋盛，所以不老也。

陈修园曰：鹿为仙兽而多寿，其卧则口鼻对尾闾，以通督脉，督脉为通身骨节之主，肾主骨，故又能补肾，肾得其补，则大气升举，恶血不漏。以督脉为阳气之总督也，然茸中皆血所贯，冲为血海，其大补冲脉可知也。凡惊痫之病，皆挟冲脉而作，阴气虚，不能宁谧于内，则附阳而上升，故上热而下寒；阳气虚，不能周卫于身，则随阴而下陷，故下热而上寒，鹿茸入冲脉而大补其血，所以能治寒热惊痫也。

至于长而为角，《别录》谓其主恶疮、逐恶气，以一点胚血，发泄已尽，只有拓毒消散之功也。

黄杰熙评：三家注鹿茸，根据一致，用词不同。叶注平正，归经主治，印证准确，不尚新奇。

张陈之注，不提归经，注重形象，病机治则，颇俱发挥。尤以陈注，肾冲并论，上寒下热，上热下寒之辨别，最俱要领，可补叶注之不足也。

三家此注，配合最妙，可以互补，而得鹿茸气味主治之精华。而修园在临床上，最善用鹿茸，所以注得也最妙。

鹿 角 胶

气味甘平无毒，主治伤中劳绝，腰痛羸瘦，补中益气，妇人血闭无子，止痛安胎。久服轻身延年。

张隐庵曰：鹿茸形如萌粟，有初阳方生之意；鹿角形如剑戟，具阳刚坚锐之体，水熬成胶，故气味甘平，不若鹿茸之甘温也。

主治伤中劳绝者，中气因七情而伤；经脉因劳顿而绝，鹿胶甘平滋润，故能治也。

治腰痛羸瘦者，鹿运督脉，则腰痛可治矣；胶能益髓，则羸瘦可治矣。

补中者，补中焦；益气者，益肾气也。治妇人血闭无子者，鹿性纯阳，角具坚刚，胶质润下，故能启生阳，行瘀积和经脉，而孕子也。止痛安胎者，更和经脉而生子也。

久服则益阴助阳，故轻身延年。

叶天士曰：鹿角胶气平，秉天秋收之金气，入手太阴肺经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气味降多于升，质滋味厚，阴也。

中者，脾土也，伤中劳绝者，脾虚之人，而作劳以伤真气，脾为阴气之源，源枯而阴绝也，其主之者，味甘益脾阴也。

腰痛羸瘦者，脾为阴气之源，而外合人身之肌肉，脾阴虚则肾阴亦虚，故腰痛而肌肉瘦削也，其主之者，味甘可以补脾，气平可以益肺滋肾也。

补中者，补脾中气也；益气者，肺主气，气平可以益肺也。

脾统血，女子血闭无子，脾血不统也，味甘益脾阴，所以主之。脾血少则燥而痛矣，味甘养血，所以止痛。血足则胎安，故又安胎也。

久服轻身延年者，鹿角胶气平益肺，肺主气，气充则身轻；味甘益脾，脾统血，血足则纳谷而延年也。又名白胶。

陈修园曰：白胶即鹿角煎熬成胶，何以《本经》白胶为上品，鹿茸列为中品乎？盖鹿茸温补过峻，不如白胶之甘平足贵也，功用略同，不必再释。

其主妇人血闭，止痛安胎者，皆补冲脉血海之功也。

轻身延年者，精足血满之效也。

黄杰熙评：张氏是从形质气味上，以辨鹿茸与鹿角胶之异同为注，虽未明归经，而归经暗寓于中，剖析主治，亦能切合病机治则，故此注颇超，尚有遗义，容后再补。

叶注平易近情，归经主治，推阐明白，按经文和盘托出，可补张注之不及，但缺形质论述，且归经上又缺弦外之音，在发挥创新上，多所不足，不无遗珠之憾。

陈氏仅在比较上作功夫，突出补冲脉之功用，不算全注，只算互补。

盖鹿角胶乃骨质胶溶之凝汁，入肾滋阴益阳，气平入肺，气微温入肝，味甘入脾，应入肺脾肝肾四经为是。以形质论，入补肝肾之功，大于入补脾肺，道家书称鹿为“斑龙”，龙者，肝肾之功用也。按之临床，治肝肾虚弱，早泄阳痿，左腿疼痛，有奇效。左青龙、右白虎、前朱雀、后玄武之说，古人不欺吾辈也。

鹿 角

气味咸温无毒，主治恶疮痈肿，逐邪恶气，留血在阴中，除少腹血痛，腰脊痛，折伤恶血，益气。

张隐庵曰：鹿角功力与鹿茸相等，而攻毒破泄，行瘀逐邪之功居多，较鹿胶又稍锐矣。

黄杰熙评：张注虽简，重点突出，比较茸、胶、角三者之功力，亦近实。

盖鹿角咸温，为入肝肾之正气正味，长于头顶，权槌而坚硬，为御敌攻破之锐利武器，其功用全在于兹，明其形质，即知其性，兼补益之力，作用全在肾肝所主疾病上，不释自明。

比较之，鹿茸娇嫩，内贯精血，治主冲任肾肝；鹿角老坚，内空松多气眼，治在肾肝脾肺兼督脉为病，主攻破无名肿毒，及一

切瘀血恶血；鹿角胶平和，阴阳双补，补肝肾有奇功，绵里藏针，攻破之力，亦不可低估，只其与鹿角相比，有刚柔之别尔。

牛 黄

气味苦平有小毒，主治惊痫寒热，热盛狂痉，除邪逐鬼。

张隐庵曰：牛黄胆之精也，牛之有黄，犹狗之有宝，蚌之有珠也，皆受日月之精华始成，无令见日月光者，恐复夺其精华也。牛属坤土，胆具精汁，秉性皆阴，故气味苦平，而有阴之小毒。

主治惊痫寒热者，得日月之精，而通心主之神也。治热盛狂痉者，秉中精之汁，而清三阳之热也。除邪者，除热邪，受月之华，月以应水也。逐鬼者，逐阴邪，受日之精，日以应火也。

牛黄有毒，不可久服，故不言也。

李东垣曰：中风入藏，始用牛黄，更配脑麝，从骨髓透肌肤，以引风出。

若中于府，及中经脉也，早用牛黄，反引风邪入于骨髓，如油入面，不能出也。

愚谓风邪入脏，皆为死症，虽有牛黄，用之何益，且牛黄主治皆心家风热狂烦之症，何曾入骨髓而治骨病乎！脑麝从骨髓透肌皮，以引风出，是辛窜透发之药，风入于脏，脏气先虚，反配脑麝，岂不使脏气益虚，而真气外泄乎！如中于府，及中经脉，正可合脑麝而引风外出，又何致如油入面而难出耶！东垣好为臆说，后人不能参阅圣经，从而信之，治病用药，畏首畏尾，六腑经脉之病，留而不去，次入于脏，便成不救，斯时用牛黄脑麝，未见其能生也。

李氏之说，恐贻千百年之祸患，故不得不明辨极言，以救其失。

黄杰熙评：张氏富于形象思维，若能落实，则思之正确。此解则脱离实际，因而解得离奇古怪，设想一日月精华以解之，并加中精之汁，即胆汁以释之，何能解通经文呢？既神话又庸俗，此注不可取。

但其驳斥李东垣之瞎说，却是一得，李说影响不小，庸医尊为圣旨，到处宣扬与执行，闻屁味而馨香的庸俗医生，不学无术，寡廉鲜耻之结果。但李氏为什么要臆断瞎说呢？张氏未能设身处地，探出其根源，加以驳正，故张说影响很小，谬种照例流行。庸医根基浅薄，眼短思狭，只读通俗易懂之医书，什么验方、偏方、神方、秘方等书，从中猎取“珍宝”，希望一用出奇，既可沽名钓誉，又能大骗钱财。若然不效，东推西诿；若然出了医疗事故，打一枪换一个地方，拔腿就跑。什么圣经，既读不懂，更嫌不现实、不实用，浪费时间。张氏所著之书，比较深奥难懂，不但张氏之书没读过，连张隐庵这个名字，也未听说过，故张说影响很小。

而李氏为什么要给牛黄下这样的不白之冤名呢？李氏研究牛黄见其有穿透力，用染指甲能透甲，洗之不去，刮之不掉，故臆断为“若风中于腑，及中经脉也，反引风邪入骨髓，如油入面，不能出矣”。何其巧妙之结合呢！而其穿透走窜，正牛黄之特性，可以搜刮风邪无藏身之地，或歼之或逐之外出，使无余净。至于中风入脏，正气衰败已尽，万无一活，虽牛黄亦不能扭转乾坤，何能归罪于牛黄哉。东垣之学，只登堂，未入室，当然见不到室内的东西。

至于牛黄，是牛病火灼脾液成痰，胆汁成块而成。不仅见于胆囊，而多见于三焦网膜、横膈膜中，并有少数见于角中者，皆少阳三焦所司之地也。张氏缺乏实践，见识不广，在书房内写成之书，不知者，不为怪。

脾液布于三焦，网膜中之油，即脾所司，脾主膏油也，脾主大腹，实则膏油之病变耳。牛黄色黄而清香，即脾之色与气；味

苦乃火之味，火生土，退去火而又生出土之色，既能退火，故成了清火之妙药。气平入肺，金生水，水克火，气香则穿透走窜而清火，以痰治痰，又为治痰火迷心窍之神药，有起死回生之功，《本经》所列诸症，不出痰火之患，故用之神效。

不过牛黄真者少见，多系伪制品，伪者人为二字合而成一字也，凡人工牛黄，皆伪制品也，故用之无效验。

阿 胶

气味甘平无毒，主治心腹内崩，劳极洒洒如症状，腰痛，四肢酸痛，女子下血，安胎。久服轻身益气。

张隐庵曰：阿胶乃滋补心肺之药也，心合济水，其性趋下，主清心之热，而下交于阴；肺合皮毛，驴皮主导肺气之虚，而入于肌。又驴为马属，火之畜也，必用乌驴，乃水火相济之义。

崩，堕也，心腹内崩者，心包之血，不散经脉，下入于腹，而崩堕也，阿胶益心主之血，故主心腹内崩。

劳极，劳顿之极也。洒洒如症状者，劳极气虚，皮毛洒洒，如症状之先寒，阿胶益肺主之气，故治劳极洒洒如症状。

夫劳极则腰痛腹痛。洒洒如症状，则四肢酸痛。心腹内崩，则女子下血也。心主血，肺主气，气血调和，则胎自安矣。

滋补心肺，故久服轻身益气。

叶天士曰：阿胶气平，秉天秋收之金气，入手太阴肺经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气味降多于升，色黑质润，阴也。

心腹者，太阴行经之地也。内崩劳极者，脾血不统，内崩而劳极也。阴者，中之守也，阴虚则内气馁而洒洒恶寒如症也，其主之者，味甘可以益脾阴也。

腰腹皆藏阴之处，阴虚则空痛，阿胶色黑益阴，所以止痛。四

肢脾主之，酸痛者血不养筋也，味甘益脾，脾统血，四肢之疼自安。女子下血，脾血不统也，味甘以统脾血，血自止也。安胎者，亦养血之功也。

久服轻身益气者，气平益肺主之气，气足身轻也。

陈修园曰：阿胶以阿井之水，入黑驴皮煎熬成胶也。《内经》云“手少阴外合于济水，内合于心。”又云“毛皮者，肺之合也。”以皮煎胶，故能入肺；味甘无毒，得地中正之土味，故能入脾。

凡心包之血，不能散行经脉，下入于腹，则为崩堕，阿胶入心补血，故能治之。劳极气虚，皮毛洒洒如症状之先寒，阿胶入肺补气，故能治之。脾为后天生血之本，脾虚则阴血内枯，腰腹空痛，四肢酸疼，阿胶养血补脾阴，故能治之。且血得脾以统，所以有治女子下血之效；胎以血为养，所以有安胎之效。

血足气亦充，所以有轻身益气之效也。

黄杰熙评：三家注，张注偏于形色质，兼水火以解经文；叶注以归经为主导，突出脾统血之作用；陈注乃综合张叶二注之优长，兼补充说明而成。皆有可取之处，似后来者居上。

惟对“心腹内崩”之解，出两说，张陈主心包，叶氏主脾血不统；前者重在想象，后者重在实际。而心主血，脾统血，血不足，气不充，供上无能，下堕可行，故形成心腹内崩，应主于心脾肺三经才对。阿胶之用，乃“水入于经，其血乃成”，即水交于火是为血之义，心血得补，则能主；甘补脾，则能统；平补肺，则气充，血气上达，何内崩之有乎？

其余各症，皆血气不足之象，血气足，心脾肺之功能恢复，其病自去，不去细推自明。

然济水潜流至阿井，必冬至后取水，比平时重约十分之一，用以煎熬黑驴皮成胶，始为真阿胶，其滋补潜流血脉之力乃大，不使外溢，即外溢者，又能促使之归经。人身之病虽多，不外水火气血之病，苟能使水火气血之贮备、供求正常，则健康长寿矣，真

阿胶能起到这项补充调济作用，故为妙药，上贡之品。天下需求太大，真品供不应求，伪制品应运而生，用之无甚效验，医家、病家、养生家，家家对此，早打问号，是谁之过欤！

麝 香

气味辛温无毒，主辟恶气，杀鬼精物，去三虫蛊毒，温疟惊痫。久服除邪，不梦寤魔寐。

张隐庵曰：凡香皆生于草木，而麝香独出于精血，香之神异者也，气味辛温散行。

主辟恶气者，其具馨香也。杀鬼精物，去三虫蛊毒者，辛温香窜，从内透发，而阴类自消也。温疟者，先热后寒，病藏于肾，麝则香于肾，故治温疟。惊痫者，心气昏迷，痰涎壅滞，麝香辛温通窍，故治惊痫。

久服则腑脏机关通利，故除邪，不梦寤魔寐。

陈修园曰：麝喜食柏叶、香草，及蛇虫，其香在脐，为诸香之冠。香者，天地之正气也，故能辟恶而解毒；香能通达经络，故能逐心窍凝痰，而治惊痫；驱募原邪气，以治温疟。

而魔寐之症，当熟寤之，顷心气闭塞而成，麝香之香气最盛，令闭者不闭；塞者不塞，则无此患矣。

孕妇忌之。

黄杰熙评：张注着重于质与香气，故解得亦可取；陈注起于食性，而以香者天地之正气以解，解法基本相同。所异者，在温疟上，张主病藏于肾；陈主病藏于募原，即横膈膜。而张注是根据《素问·疟论》而来，陈注似在“创新”，错把温疟当瘟疫，从吴又可《瘟疫论》中移植而来。比较之，还是张注正确，温疟是伏气为病，应藏于肾，非口鼻传染而来，伏于募原。

总之，麝香为群香之冠，价值最高，以其味辛入肺；香气入

脾；温气入肝。肺主乾天之气，脾主坤地之气，肝主顶天立地之气，三气立，则邪恶秽浊之气，逃之夭夭矣。

凡窍结闭塞，痰浊秽污壅滞之处，天地人三气并至，所到之处，无不迎刃而解。《本经》所列诸病之机转，无出乎此，故用之效如桴鼓。

龟 甲

气味甘平无毒，主漏下赤白，破症瘕痰疟，五痔阴蚀，湿痹，四肢重弱，小儿囟不合。久服轻身不饥。

张隐庵曰：介虫三百六十，而龟为之长，龟形象离，其神在坎，首入于腹，肠属于首，是阳气下归于阴，复通阴气上行之药也。

主治漏下赤白者，通阴气而上行也；破症瘕者，介虫属金，能攻坚也；痰疟，阴疟也，阳气归阴，则阴寒之气自除，故治痰疟。

五痔阴蚀者，五痔溃烂缺伤，如阴虫之蚀也，阳入于阴，则阴虫自散，肠属于首，则下者能举，故五痔阴蚀可治也。湿痹、四肢重弱者，因湿成痹，以致四肢重弱，龟居水中，性能胜湿，甲属甲冑，质主坚强，故湿痹而四肢之重弱可治也。小儿囟不合者，先天阙陷，肾气不充也，龟甲藏神于阴，复使阴出于阳，故能合囟。

久服则阴平阳秘，故轻身不饥。

《本经》只说龟甲，后人以甲熬胶，功用相同，其质稍滞。甲性坚劲，胶性柔润，学者以意会之，而分用焉可也。

叶天士曰：龟甲气平，秉天秋收之金气，入手太阴肺经；味甘，复地中正之土味，入足太阴脾经；北方之神，介虫之长，性复无毒，秉阴寒之性也，入足少阴肾经。气味降多于升，阴也。

脾统血，脾血不统，则漏下赤白，其主之者，味甘益脾也。疟

而至于有症瘕，湿热之邪，已聚结阴分矣。龟甲阴寒，可以清热；气平，可以利湿，所以主之也。

火结大肠，则生五痔；湿浊下注，则患阴蚀，肺合大肠，肾主阴户，性寒可去热，气平可消湿，所以主之也。

脾主四肢，湿盛则重弱，龟甲味甘益脾，气平去湿，湿行，四肢健也。

肾主骨，小儿肾虚，则凶骨不合，其主之者，补肾阴也。

久服益肾，肾者，胃之关，关门利，能去脾湿，所以轻身不饥也。

陈修园曰：龟甲，诸家俱说大补真水，为湿阴第一神品。而自余视之，亦不尽然，大抵介虫属阴，皆能除热；生于水中，皆能利湿；其甲属金，能攻坚，此外无他长。

《本经》云：“主治漏下赤白”者，以湿热为病，热胜于湿，则漏下赤色，湿胜于热，则漏下白色，龟甲专除湿热，故能治之也。

破症瘕者，其甲属金，金能攻坚也。痃疟，老疟也，疟久不愈，湿热之邪，痃结阴分，唯龟甲能入阴分而攻之也。

火结大肠，则生五痔；湿浊下注，则患阴蚀，肺合大肠，肾主二阴，龟甲性寒以除其热，气平以消除湿也。

脾主四肢，因湿成痹，以致重弱，龟居水中，性能胜湿；甲属甲胃，质主坚强，故能健其四肢也。

小儿凶骨不合，肾虚之病，龟甲主骨，故能合之也。

久服身轻不饥者，言阴精充足之效也。

黄杰熙评：张注长于形象思维，以形象质性为注，注得生动活泼，颇具阴阳生化之机，此注超妙。

叶注实在，归经主治，病机治则，推阐齐备，总不离气味甘平与性寒上以治之，紧扣机转，堪称好注。

陈注从比较诸家之说中，异军突起，魔扫一切，注得干脆利落，总结出介虫药性之三大规律，“属阴，皆能除热；生于水中，

皆能利湿；其甲属金，能攻坚，此外亦无他长”。

不过，陈注主治，抄张注小部分，抄叶注大部分，混合而成。未能根据药性三大规律，继续独自推阐发挥下去，别具一格，此属美中不足。

牡 蛎

气味咸平微寒无毒，主治伤寒寒热，温疟洒洒，惊恚怒气，除拘缓，鼠痿，女子带下赤白。久服强骨节，杀邪鬼延年。

张隐庵曰：牡蛎假海水之沫，凝结而成形，秉寒水之精，具坚刚之质。

太阳之气，生于水中，出于肤表，故主治伤寒寒热。先热后寒，谓之温疟，皮毛微寒，谓之洒洒，太阳之气，行于肌表，则温疟洒洒可治也。

惊恚怒气，厥阴肝木受病也，牡蛎南生东向，得水中之生阳，达春生之木气，则惊恚怒气可治矣。生阳之气，行于四肢，则四肢拘挛自除。

鼠痿乃肾脏水毒，上淫于脉，牡蛎味咸性寒，从阴泄阳，故除鼠痿。

女子带下赤白，乃胞中湿热下注，牡蛎秉水气而上行，阴出于阳，故除带下赤白。

具坚刚之质，故久服强骨节；纯雄无雌，故杀邪鬼；骨节强，则邪鬼杀，则延年矣。

叶天士曰：牡蛎气平微寒，秉天秋冬金水之气，入手太阴肺经、足太阳寒水膀胱经；味咸无毒，得地北方之水味，入足少阴肾经。气味俱降，阴也。

冬不藏精，水枯火旺，至春，木火交攻，发为伤寒热病，病

在太阳寒水，所以寒热，其主之者，咸寒之味，入太阳壮水清火也。夏伤于暑，但热不寒，名为温疟，温疟阴虚，阴者中之守，守虚所以洒洒然也，其主之者，咸寒可以消暑热，气平入肺，肺平，足以制疟邪也。

肝虚则惊，肝实则恚怒，惊者平之，恚怒降之，气平则降，盖金制木也。

味咸足以软坚，平寒可以除拘缓，故主鼠痿。

湿热下注于肾，女子则病带下，气平而寒，可清湿热，所以主之。

久服强骨节者，咸平益肺肾之功也；杀邪鬼者，气寒清肃热邪之力也；能延年者，固涩清气之全功也。

陈修园曰：牡蛎气平者，金气也，入手太阴肺经；微寒者，寒水之气也，入膀胱经；味咸者，真水之味也，入少阴肾经。

此物得金水之性，凡病起于太阳，皆名曰伤寒，传入少阳之经，则为寒热往来，其主之者，藉得秋金之气，以平木火之游行也。

温疟者，但热不寒之疟也。症为阳明经之热病洒洒者，即阳明白虎证中，背微寒恶寒之义，火欲发而不能径达之也。主以牡蛎者，取其得金之气，以解炎暑之苛，白虎命名，亦同此意也。

惊恚怒气，其主在心，其发在肝，牡蛎气平，得金之用以制木；味咸得水之用以济火也。

拘者筋急，缓者筋缓，为肝之病；鼠痿者，即瘰疬之别名，为三焦胆经火郁之病，牡蛎之平以制风，寒以胜火，咸以软坚，所以全主之。

止带下赤白，与强骨节二句，其义互见于龟板注中，不赘。

杀鬼邪者，补肺而申其清肃之威；能延年者，补肾而得其益精之效也。

黄杰熙评：张注凭幻想，认为牡蛎是假海水之沫，凝结而成

形，实则牡蛎乃海生动物之壳，属瓣鳃纲，牡蛎科，俗名牡蛤，或蛎蛤，肉鲜美。至于牡蛎南生东向，得水生木之气化，即牡蛎左顾之象，又称左牡蛎，丛生堆积如山，又称蚝山。

所以张注根据有差，但注解基本正确，还是有可取之一面，尤其对鼠痿之注，再加陈注，合而为一，则全面矣。

叶注平正，归经合实，主治机转，较张注陈注皆好，唯对鼠痿不甚了然，故不可取，应以张陈合一为是。

陈注归经，与叶注一致，完全可取。论注伤寒寒热，陈主外感，叶主伏气，似以叶注为是，因未见仲景伤寒寒热初起，用牡蛎者。而伏气温病，热邪萌起于下焦肾脏，外现寒热，或新感引伏气之太阳经寒热，却能用之，达太阳之气与清镇潜伏之热邪。所以叶注于此，最为超然，不愧为温病学集大成之开山祖师。

桑 螵 蛸

气味咸甘平无毒，主治伤中疝瘕阴痿，益精生子，女子血闭腰痛，通五淋，利小便水道。

张隐庵曰：《经》云“逆夏气则太阳不长。”又云“孕者五月，主右足之太阳。”螵蛸生于五月，秉太阳之气而生，乾则强健，其性怒升，子生于桑，又得桑之金气，太阳主寒水，金气属阳明，故气味咸甘。

主治伤中，秉桑精而联属经脉也；治疝瘕，秉刚锐而疏通经脉也；其性怒升，当轍不避，其生长迅发之机，故治男子阴痿，而益精生子；女子肝肾两虚，而血闭腰痛。螵蛸捕蝉，一前一却，乃升已而降，自然之理，故又通五淋，利小便水道。

陈修园曰：螵蛸螵蛸之子也，气平属金，味咸属水。螵蛸于诸虫中，其性最刚，以其具金性，能使肺之治节申其权，故主疝瘕，女子血闭，通五淋，利小便水道也。

又具水性，能使肾子作强得其用，故主阴痿，益精，生子，腰痛也。

其主伤中者，以其生于桑，得桑气而能续伤也。

今人专取其缩小便，虽曰能开，而亦能阖，而其本性在此，而不在彼。

黄杰熙评：张注缘桑蝶蛸之所生，而得其所成之气味与金水之药性，以解主治，则迎刃有余矣，张氏此注，最为周详，堪称典范。

陈注系绍张注之余绪，加以修整补充而矣。今人专取缩小便，治小儿遗溺，可说百无一效，原因是背道而驰，昧其性味功能，不读《本经》之过欤！

蜂 蜜

气味甘平无毒，主治心腹邪气，诸惊痫瘈，安五脏，诸不足，益气补中，止痛解毒，除众病，和百药。久服轻身，不饥不老，延年神仙。

张隐庵曰：草木百卉，五色咸具，有五行之正色，复有五行的间色，而花心止有黄白二色，故蜜色有黄白也。春夏秋，采集群芳，冬月退藏于密，得四时生长收藏之气，吸百卉五色之精。

主治心腹邪气者，甘味属土，滋养阳明中土，则上下心腹之正气自和，而邪气可治也。

诸惊痫瘈，乃心主神气内虚，蜂蜜花心酿成，能和心主之神，而诸惊痫瘈可治也。

安五脏诸不足，花具五行，故安五脏之不足。

益气补中者，气属肺经，中属胃土，蜂采黄白金土之花心，故益气补中也。

止痛解毒者，言蜂蜜解毒，故能止痛也。除众病，和百药者，

言百药用蜜和丸，以蜜能除众病也。

久服强志，金生水也；轻身不饥，土气盛而轻身；不饥则不老，延年神仙可冀。

叶天士曰：蜂蜜气平，乘天秋收之金气，入手太阴肺经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气味升多于降，阳也。

心腹，太阴行经之地也，气味甘平，故主邪气。

诸惊痫瘛，肝热而气逆也，惊者平之，痫瘛者缓之也。甘为土化，土为万物之母，五脏诸不足，补之以甘也。

真气者，得于天，充于谷，甘味益气，脾利谷纳，所以益气补中也。

蜜乃采百花酿成，而得至甘之正味，所以止痛解毒，除众病，和百药也。

久服平气益肺，肺主气；味甘益脾，脾统血，而气血和调，所养刚大，所以强志，轻身不饥不老，延年神仙也。

陈修园曰：蜂蜜气平，乘金气而入肺；味甘无毒，得土味而入脾。

心腹者，自心下以及大小腹与肠肋而言也；邪气者，六淫之气，自外来。七情之气，自内起，非固有之气，即为邪气也，其主之者，甘平之用也。

诸惊痫瘛者，厥阴风木之为病也，其主之者，养胃和中，所谓“厥阴不治，取之阳明”是也。

脾为五脏之本，脾得补而安，则五脏之安，而无不足之患也。

真气者，得于天，而充于谷也，甘味益脾，所以益气而补中也。

止痛者，味甘能缓诸急；解毒者，气平能胜诸邪也。

诸花之精华，按取不遗，所以能除众病；诸花之气味，酝酿合一，所以能和百药也。

久服强志轻身，不饥不老，皆调和气血，补养精神之验也。

黄杰熙评：张注从蜂采百花之蕊入手，经时经酿成蜜入于五行以论治，可谓源流分明，注得颇为合适，仍有病机上之模糊，叶陈二注，可以补充齐备。

叶注归经，依经不误，主治之阐发，较张注踏实，可补张注迷离之失。

陈注绍叶注而来，对病机之阐发，拓宽了视线，是“继往者易成，后来者居上”，所以陈注最为可取。

不过，蜂蜜是寻常食品，与五谷、五菜、五果一样，用以治病，缓不济急，不能期望过高，《本经》上品，应如是观，方合实际。

蜜 蜡

气味甘微温无毒，主治下痢脓血，补中，续绝伤金疮，益气，不饥耐老。

张隐庵曰：蜂采花心，酿成蜜蜡，蜜味甘，蜡味淡，乘阳明太阴土金之气，故主补中益气。蜜蜡味淡，今曰甘者，淡附于甘也。

主治下痢脓血补中，言蜜蜡得阳明之气，治下痢脓血，以其能补中也；续绝伤金疮，益气，言蜜蜡得太阴金精之气，续金疮之绝伤，以其能益气也。

补中益气，故不饥而耐老。

黄杰熙评：张注，虽能勉强解通经文，但有遗蕴，还不落实。

盖蜜蜡色白，入手太阴肺经；味甘，入足太阴脾经；微温入足厥肝经。气味升多于降，阳也。

主治下痢脓血者，蜜蜡有护肠膜愈溃瘍之作用。

续绝伤金疮者，因金刃而伤，甚至绝皮肉与筋而成疮，蜜蜡色白补肺气而生皮，味甘补脾气而长肌肉，气微温补肝气而续筋

也。

补中益气者，味甘补脾胃之中，色白而益肺之气也。肺脾胃健，故不饥而耐老。

本 经 中 品

玄 参

气 味 苦 微 寒 无 毒， 主 治 腹 中 寒 热 积 聚， 女 子 产 乳 余 疾， 补 肾 气， 令 人 明 目。

张 隐 庵 曰： 玄 乃 水 天 之 色， 参 者 参 也， 根 实 皆 黑， 气 味 苦 寒， 秉 少 阴 寒 水 之 精， 上 通 于 肺， 故 微 有 腥 气。

主 治 腹 中 寒 热 积 聚 者， 启 肾 精 之 气， 上 交 于 肺， 则 水 天 一 气， 上 下 环 转， 而 腹 中 之 寒 热 积 聚 自 散 矣。

女 子 产 乳 余 疾 者， 生 产 则 肾 气 内 虚， 乳 子 则 中 焦 不 足， 虽 有 余 疾， 必 补 肾 和 中， 玄 参 滋 肾 一 之 精， 助 中 焦 之 汁， 故 可 治 也。

又 曰 补 肾 气， 令 人 明 目 者， 玄 参 言 补 肾 气， 不 但 治 产 乳 余 疾， 且 又 令 人 明 目 也。

中 品 治 病， 则 无 久 服 矣， 余 俱 仿 此。

叶 天 士 曰： 玄 参 气 微 寒， 秉 冬 天 寒 水 之 气， 入 少 阴 肾 经； 味 苦 无 毒， 得 地 南 方 之 火 味， 入 于 少 阴 心 经； 手 厥 阴 心 包 络 经。 气 味 俱 降， 阴 也。

腹 中 者， 心 肾 相 交 之 区 也， 心 为 君 火， 心 不 下 交 于 肾， 则 火 积 于 上 而 热 聚； 肾 为 寒 水， 肾 不 上 交 于 心， 则 水 积 于 下 而 寒 聚 矣。 元 参 气 寒 益 肾， 味 苦 清 心， 心 火 下 降， 而 肾 水 上 升， 升 者 升 而 降 者 降， 寒 热 积 聚 自 散 矣。

女 子 以 血 为 主， 产 乳 余 疾， 产 后 诸 症， 以 产 伤 血 也， 心 主 血，

味苦清心，所以主之。

补肾气者，气寒壮水之功也。

令人明目者，益水可以滋肝，清心可以泻火，火平水旺，目自明也。

陈修园曰：元参主产乳余疾者，以产后脱血，则阴衰而火无所制，治之以寒凉，既恐伤中；加以峻补，又恐拒隔，惟元参清而微带补，故为产后要药。

黄杰熙评：张注归经，在上通肺气上，与经旨不合，故所注造成隔靴搔痒之失，所取者无多。

叶注正确，归经主治之阐发，步步合拍，可法可取。

陈氏突出“主产乳余疾”之阐发，有进一步之发明，因叶注已详备，勿须“天下文章一大抄”了。

丹 参

气味苦微寒无毒，主心腹邪气，肠鸣幽幽如走水，寒热积聚，破症除瘕，止烦满，益气。

张隐庵曰：丹参、元参，皆气味苦寒，而得少阴之气化，但元参色黑，秉少阴寒水之精，而上通于天；丹参色赤，秉少阴君火之气，而下交于地，上下相交，则中土自和。故元参下交于上，而治腹中寒热积聚；丹参上交于下，而治心腹邪气，寒热积聚。君火之气下交，则土温而水不泛溢，故治肠鸣幽幽如走水。

破症除瘕者，治寒热积聚也；止烦满益气者，治心腹之邪气也。夫止烦而治心邪，止满而治腹邪，益正气，所以治邪气也。

叶天士曰：丹参气微寒，秉初冬寒水之气，入手太阳寒水小肠经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气味俱降，阴也。

心腹者，心与小肠之区也；邪气者，湿热之邪也，气寒则清，

味苦则燥湿，所以主之。

肠，小肠也，小肠为寒水之腑，水不下行，聚于肠中，则幽幽如水走声响矣，苦寒清泄，能泄小肠之水，所以主之。

小肠为受盛之官，本热标寒，所以或寒或热之物，皆能聚积肠中也，其主之者，味苦能下泄也。

积聚至有形可徵谓之症，假物成形谓之瘕，其能破除之者，味苦下泄之力也。

心与小肠为表里，小肠者，心火之去路也，小肠传化失职，则心火不能下行，郁于心而烦满矣，其主之者，苦寒清泄之功也。

肺属金而主气，丹参清心泻火，火不刑金，所以益气也。

陈修园曰：今人谓“一味丹参，功兼四物汤”，共认为补血行血之品，为女科之专药，而丹参之真功用掩矣。

黄杰熙评：张注从水火，上下相交，比较玄丹二参入手，实则从《易》象以解经文，遁则遁矣，而力求深奥，不无晦义。

叶注从《内经》气味归经学说，以解经文，病机治则，晓如指掌，通畅明白，可遵可法可行。

陈氏是批判后世对丹参之性能的误解，应用范围，应遵《本经》为是。余意还应遵叶注为确切。

紫 参

气味苦寒无毒，主治心腹积聚，寒热邪气，通九窍、大小便。

张隐庵曰：《金匱》泽漆汤，方用紫参，“本论”云：“咳而脉沉者，泽漆汤主之”。《纲目·集解》云“古方所用牡蒙，皆为紫参，而陶氏又以王孙为牡蒙，今用亦希”。因《金匱》方有紫参，故存于此。

黄杰熙评：张氏申明可取，但《金匱》有以紫参名汤者未提，

即“下利肺痛，紫参汤主之”。方组仅紫参、甘草二味而矣，证明仲景时，此药盛行而实用，今药房有紫参，系伪品，效用悬殊，不堪用。

真紫参不可得，陈修园据“方士”语，疑似桔梗。吴考槃云：“前泽漆汤内有紫参，云一作紫苑，疑此即紫苑之误。”按：若以桔梗，紫苑代之，须备开肺下气之功，但寒温之性与《本经》迥别，似不可通用为宜。

白 前 根 (附)

气味甘微温无毒，主治胸胁逆气，咳嗽上气，呼吸欲绝。

张隐庵曰：冠宗爽云“白前保定肺气，治嗽多用以温药相佐使尤佳。”李时珍曰“白前色白，而味微辛甘，手太阴药也，长于降气，肺气壅实而有痰者宜之。若虚而且哽气者，不可用”；张仲景治咳而脉沉者，泽漆汤中亦用之。

愚以泽漆汤方有紫参，复有白前，故因紫参而附白前于此也。白前虽《别录》收入中品，而仲祖方中先用之，而宏景亦因古方录取，但出处不若《本经》之详细，学者须知之。

黄杰熙评：张氏对紫参、白前，皆是引据说明，而不是注。紫参不可得，无实用价值，不注可也，但白前经方、时方，皆通用，岂可不注乎？

盖白前色白，入手太阴肺经；味甘入足太阴脾经；气微温入足厥阴肝经。气味俱升，阳也。

主治胸胁逆气者，胸乃肺所主，胁者肝之部，肺气不降，肝气不升，升降机停，则为胸胁逆气之症。白前色白保肺而气降，味微温入肝，助肝气之升，升降机转，胸胁之逆气自除。

肺为娇脏，受寒邪搏之，则咳嗽上气，甚者呼吸欲绝，皆脾

气衰弱，不能生金保肺，白前味甘补脾土生肺金，色白益肺气，微温散寒邪，一药而三得，战必胜，攻必克，所以主之。

至于时珍所云，与《药性赋》“白前治肺壅痰升”一个调子，意思是降气行实痰之药物，虚症不可用，而与《本经》与寇宗奭之论，迥迥相左，张氏引而不辩，囫圇吞枣，矛盾自启。《本经》明言气味甘微温，岂有甘温之品，不宜补虚乎？当然肺热若用之，有安危利灾之弊；若肺寒用之，如雪里送炭，时珍等莫辨寒热，妄谈虚实，犹五十步笑百步也。

当 归

气味苦温无毒，主治咳逆上气，温疟寒热，洗洗在皮肤中，妇人漏下、绝子，诸恶疮金疮，煮汁饮之。

张隐庵曰：当红花红根黑者，气味苦温，秉少阴水火之气。

主治咳逆上气者，心肾之气，上下相交，各有所归，则咳逆上气自平矣。

治温疟寒热，洗洗在皮肤中者，助心主之血液，从经脉而外充于皮肤，则温疟之寒热洗洗然而在皮肤中者，可治也。

治妇人漏下、绝子者，助肾脏之精气，从下而上；则妇人漏下无时，而绝子者可治也。

治诸恶疮疡者，养血解毒也；治金疮养血生肌也。

凡药皆可煮饮，独当归言煮汁饮者，以“中焦取汁，变化而赤则为血”，当归滋中焦之汁以养血，故曰煮汁，谓煮汁饮之，得其专精矣。

《本经》凡加别言，各有意存，如“术”宜煎饵，“地黄”作汤，“当归”煮汁，皆当体会者。

叶天士曰：当归气温，秉天春升之木气，入足厥阴肝经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气升味厚，阳也。

其主咳逆上气者，心主血，肝藏血，血枯则肝木挟心火上刑肺金，而咳逆上气也，当归入肝养血，入心清火，所以主之也。

肝为风，心为火，风火为阳，但热不寒者为温疟；风火乘肺，肺主皮毛，寒热洗洗在皮毛中，肺受风火之邪，不能固皮毛也。当归入心入肝，肝血足则风定，心血足则火息，而皮毛寒热自愈也。

妇人以血为主，漏下绝子，血枯故也，当归补血，所以主之。

诸恶疮疡，皆属心火，心血足则火息，金疮失血之症，味苦清心，气温养血，所以皆主之。

用煮汁饮者，取汤液之功，近而速也。

陈修园曰：当归气温，秉木气而入肝；味苦无毒，得火味而入心。

其主咳逆上气者，心主血，肝藏血，血枯则肝木挟心火而刑金，当归入肝养血，入心清火，所以主之。

肝为风，心为火，风火为阳，阳盛，则为但热不寒之温疟，而肺受风火之邪，肺气怯，不能为皮毛之主，故寒热洗洗在皮肤之中。当归令肝血足而风定，心血足而火息，则皮肤中之寒热可除也。

肝主藏血，补肝即所以止漏也；手少阴脉动甚，为有子，补心即所以种子也。

疮疡皆属心火，血足则心火息矣；金疮无不失血，血长则金疮瘳矣。

煮汁饮之，四字别言，先圣大费苦心，谓“中焦受气取汁，变化而赤是为血”，当归煮汁，滋中焦之汁，与地黄作汤同义，可知时传炒燥、土炒，反涸其自然之汁，大失经旨。

黄杰熙评：张注凭形象思维，将当归归入少阴水火之气作解，解得极勉强，而难落实。而当归气温，又作何解？同时其根亦非色黑，而是黄褐色，有芳香气而又有湿润之汁。这些皆是最主要之根据，张氏未提，怎能解得下去，所以张注疏漏过大，不及格。

叶注根据经文，归经合乎经义，主治以血为主，在主血、藏血上下功夫，所解各病之机转，基本合拍，故可取者多。

但当归明明气温，何以能入心清火，未能透彻，按理应火上浇油才是。所以叶注亦具模糊之处。

陈注是抄袭叶注而成，末后抄张注之义为补充，而陈所补充者，乃种子一处而矣。所遗憾者抄注应提名，不提名应列入偷袭之例。

盖当归，除叶注归心肝二经之外，色黄气香，应归入脾经；汁多而油润，应归入肾经，所以归经应为心肾肝脾四经，非仅二经也。

当归之所以能补血者，全凭其油润之汁也，其汁以味苦入心生血；色黄气香入脾统血；气温入肝藏血，血为阴汁，血足则火息，其能清火者，缘于此，而非味苦也。

叶陈二氏在论疮疡全疮等上，虽然有此结论，但整个来说，入心清火，是凭苦味，与气温产生矛盾，所以三家注，对此皆有模糊观念，未于理顺之故也。

而当归之油润，入肠有滑润燥屎之功，其人湿多而滑泄者忌用。

芍 药

气味苦平无毒，主治邪气腹痛，除血痹，破坚积寒热，疝瘕止痛，利小便，益气。

张隐庵曰：初之气厥阴风木，二之气少阴君火，芍药春生红芽，秉厥阴木风而治肝；花开三四月间，秉少阴火气而治心，炎上作苦，得少阴君火之气化，故气味苦平。

风木之邪，伤其中土，致脾络不能从经脉而外行，则腹痛，芍药疏通经脉，则邪气在腹而痛者可治也。

心主血，肝藏血，芍药秉木风而治肝，秉火气而治心，故除血痹，除血痹则坚积亦破矣。血痹为病，则发寒热；坚积为病，则或疝或瘕，芍药能调血中之气，故皆治之。

止痛者，止疝瘕之痛也。肝主疏泄，故利小便。益气者，益血中之气也，益气则血亦行矣。

芍药气味苦平，后人妄改圣经，而曰微酸，元明诸家，相沿为酸寒收敛之品，凡里虚下利者，多用之以收敛。夫性功可以强辩，气味不可讹传。试将芍药咀嚼，酸味何在？

又谓新产妇人，忌用芍药，恐酸敛耳，夫《本经》主治邪气腹痛，且除血痹寒热，破坚积疝瘕，则新产恶露未尽，正宜用之。若里虚下痢，反不当用也。

又谓白芍、赤芍，各为一种，白补赤泻，白收赤散，白寒赤温，白入气分，赤入血分，不知芍药花开赤白，其类总一。李时珍曰：“根之赤白，随花之色也”；卢子由曰：“根之赤白，从花之赤白也，白根固白，而赤根亦赤，切片以火酒润之，覆盖过宿，白根转白，赤根转赤矣。”今药肆中，一种赤芍药，不知何物草根，儿医、伤医多用之，此习焉而不察，为害殊甚。愚观天下之医，不察《本经》，不辨物性，因讹传讹，固结不解，咸为习俗所误，宁不悲哉！

叶天士曰：芍药气平，秉天秋收金气，入手太阴肺经；味苦无毒，得地南方之火味，入少阴心经。气味俱降，阴也。

腹者，足太阴经行之地，邪气者，肝木之邪气，乘脾土作痛也，芍药入肺，气平伐肝，所以主之。

血痹者，血涩不行而麻木也，芍药入心，苦以散结，故主之也。

坚积，坚硬之积也；疝者，小腹下痛，肝病也；瘕者，假物而成之积也；寒热疝瘕者，其原或因寒，或因热也，芍药能破之者，味苦散结，气平伐肝也。

诸痛皆属心火，味苦清心，所以止痛。膀胱津液之出，皆由肺气，苦平清肺，肺气下行，故利小便。肺主气，壮火食气，芍药气平益肺，肺清，故益气也。

赤者，入心与小肠，心主血，小肠主变化，所以行而不留，主破血也。

陈修园曰：芍药气平，是夏花而秉燥金之气也；味苦，是得少阴君火之味，气平下降，味苦下泄而走血，为攻下之品，非补养之物也。

邪气腹痛，小便不利，及一切诸痛，皆气滞之病，其主之以苦平，而泄其气也。

血痹者，血闭而不行，甚则寒热不调；坚积者，积久而坚实，甚则为疝瘕满痛，皆血滞之病，其主之者，以苦平而行其血也。

又云益气者，谓邪得攻而净，则元气自然受益，非谓芍药能补气也。

今人妄改圣经，以“酸寒”二字易“苦平”，误认为敛阴之品，杀人无算，取芍药而嚼之，酸味何在乎？

黄杰熙评：张注以厥少二阴论治，即木火二气论治，能解通经文。

叶注按经注释，归于心肺二经，为了证实是平肝行血散结之品，将味苦一解为散结，一解为清心，解为清心则可，解为散结则不可。盖辛才主散，苦只再有泄下之作用，此处值得注意，用词有不当之处。叶注之意，应为平肝清泄行血之品。

叶注承认芍药分赤白二种，并认为赤者入心与小肠，主破血，基本上是对的，余容下议。

陈注实际注解的是赤芍药，因不明赤白二种之分，所以才骂后人妄改圣经，竟把气味改变了，张注亦然。

《本经》只提“芍药”，不分赤白二种，既赤白二种混用，所论气味苦平亦不完全，实则芍药入口咀嚼，初为味苦，久留口中

细嚼，有酸味楚齿，并有清凉之感，所以芍药之性，应定为苦酸平微寒为正确，非妄改，是从实际作出的补充论证。

实则《本经》作出的主治范围，多为赤芍药之性能，少数为白芍药之性能，张陈二注，实则如此，叶注也是如此，不过末后申明赤芍药之破血性，很好，但亦未弄清二者之究竟。

赤白芍同种，赤芍是野生芍药，花分白、水红两种，根之木质部疏松，花形略小于白芍；白芍是园栽家种芍药，花分白红二种，花大艳丽，很有观赏价值，根粗于野芍，木质部紧密而坚实，两者根之颜色，均与花同色。赤白芍气味相同，气平入肺经；微寒入足少阴肾经；味苦入手少阴心经；味酸入足厥肝经，归入心肾肺肝四经。赤者入血分破血化瘀；白者入气分滋阴益气利小便，兼滋阴化血之作用。故仲景芍药甘草汤，必用白芍苦酸与甘草之纯甘，起到酸甘化合滋阴，苦甘化合滋生津液，使肝脾合作，滋生阴液，灌溉经脉，则其脚即伸。王清任《医林改错》上之通窍活血汤、血腑逐瘀汤、膈下逐瘀汤、少腹逐瘀汤、通经逐瘀汤、解毒逐瘀汤、会厌逐瘀汤，以及补阳还五汤等，皆用赤芍活血逐瘀，是其明证。

三家注，目的是通经、解经，力求深奥，转多晦义，于此可见矣。

芎 藭

气味辛温无毒，主治中风入脑，头痛寒痹，筋挛缓急，金疮，妇人血闭无子。

张隐庵曰：川芎气味辛温，根叶皆香，生于西川，秉阳明秋金之气化。名芎藭者，乾为天为金，芎穹窿也；藭，穷高也，皆天之象也。

主治中风入脑头痛者，川芎秉金气而治风，性上行而治头痛

也。

寒痹筋挛缓急者，寒气凝结则痹，痹则筋挛，弛纵曰缓，拘掣曰急，川芎辛温散行，不但上彻头脑而治风，且从内达外而散寒，故寒痹筋挛缓急可治也。

治金疮者，金疮从皮肤而伤肌肉，川芎秉阳明金气，能从肌肉而达皮肤也。

治妇人血闭无子者，妇人无子，因于血闭，川芎秉金而平木，肝血疏通，故有子也。

沈括《笔谈》云：“川芎不可久服、单服，令人暴死。”夫川芎乃《本经》中品之药，所以治病者也，有病则服，无病不宜服，服之而病愈，又不宜多服。若佐辅药而使开导，久服可也；有头脑中风，寒痹筋挛之症，单用可也，遽以暴死相加，谓不可久服、单服执矣，医执是说，而不能圆通会悟，其犹正墙面而立也欤。

叶天士曰：川芎气温，秉天春和之木气，入足厥阴肝经；味辛无毒，得地西方之金气，入手太阴肺经。气味俱升，阳也。

风为阳邪而伤于上，风气通肝，肝经与督脉会于巅顶，所以中风，风邪入脑痛也，其主之者，辛温能散也。

寒伤血，血涩则麻木而痹；血不养筋，筋急而挛，肝藏血而主筋，川芎入肝而辛温，则血活而筋行，痹者愈而挛者痊也。

缓急金疮者，金疮失血，则筋时缓时急也，川芎味辛则润，润可治急，气温则缓，缓可治缓也。

妇人秉地道而生，以血为主，血闭不通，则不生育，川芎入肝，肝乃藏血之脏，生发之经，气温血活，自然生生不已也。

陈修园曰：川芎气温，秉春气而入肝；味辛无毒，得金味而入肺。

风为阳邪，而伤于上，风气通肝，肝经与督脉会于巅顶而为病，川芎辛温而散邪，所以主之。

血少而不能热肤，故生寒而为痹；血少而不能养筋，故筋结

而为挛；筋纵而为缓；筋结而为急，川芎辛温而活血，所以主之。

治金疮者，以金疮从皮肤以伤肌肉，川芎秉阳明金气，能从肌而达皮肤也。

妇人以血为主，血闭不通，则不生育，川芎辛温通经，而又能补血，所以治血闭无子也。

黄杰熙评：张注以《易》象乾金以定川芎之性，以辛温散寒以论治，所注经文，基本通顺可取。

末引沈括之言甚是，说明亦合适。不过，尚有遗义，容后统谈。

叶注稳健实在，归经主治，病机治则，概论无遗。

但在归经上，应补入阳明燥金经为宜，用以解“金疮失血，则筋时缓时急也”，出“味辛则润，润可治急；气温则缓，缓可治缓”之错觉，而改成：气温则缓，缓可治急；味辛则燥，燥可治缓，此为相反之正治，比叶之解，不是更切实吗！皆为归经之不全，造成主治性能之差也。

陈注是叶注之再现，兼采张注为补充，凑合而成。

但认为川芎能补血，是错误的。川芎气味辛温而香窜，是血中气药，四物汤用之，是行归地芍之滞，使此方在补血中，无壅塞滞着之患。

川芎干燥，毫无油润之性，纯是以气烈刚燥为用，根本不能补血。秉金性而俱金刚之性，为制风木头痛之要药；秉温性为治寒痹、筋挛缓急、金疮、妇人血闭无子等之对宫药。

惟其走窜之性过强，最能走散人之元气，故不能久服、单服，犯者，令人暴死，其理在此。

牡 丹

气味辛寒无毒，主治寒热中风，痲疯惊痫邪气，除症

坚瘀血留舍肠胃，安五脏，疗痈疮。

张隐庵曰：牡丹根上生枝，皮色外红紫，内粉白，命名曰“牡丹”，乃心主血脉之药也，始生西北，气味辛寒，盖秉金水相生之性也。

寒热中风，痲疯惊痫邪气者，言邪风之气，中于人身，伤其血脉，致身发寒热而手足痲疯，面目惊痫，丹皮秉金气而治血脉之风，故主之也。

症坚瘀血，留舍肠胃者，言经脉之血，不渗灌于络脉，则留舍肠胃，而为症坚之瘀血，丹皮辛以散之，寒以清之，故主除焉。

花开五色，故安五脏；通调血脉，故疗痈疮。

叶天士曰：牡丹皮气寒，秉天冬寒之水气，入手太阳寒水小肠经；味辛无毒，得地西方之金味，入手太阴肺经。气味降多于升，阴也。

寒水太阳经行身之表，而为外藩者也，太阳经虚，则皮毛不密，而外藩不固，表邪外入而寒热矣，其主之者，气寒可以清热，味辛可以散寒解表也。

肝者，风木之脏也，肺金不能制肝，肝风挟浊火而上逆，中风痲疯惊痫之症生焉，丹皮辛寒益肺平肝，肝不升而肺气降，诸症平矣。

小肠者，受盛之官，与心为表里，心主血，血热下注，留舍小肠，瘀积成痲，形坚可徵，丹皮寒可清热，辛可散结，所以入小肠而除痲也。

五脏，藏精者也，辛寒清血，血清阴足而安脏也。

营血逆于肉里，乃生痲疮，丹皮辛寒，可以散血热，所以和营而疗痲疮也。

陈修园曰：丹皮气寒，秉水气而入肾；味辛无毒，得金味而入肺。

心火俱炎上之性，火郁则寒，火发则热，丹皮秉水气而制火，

所以主之。

肝为风脏，中风而言其筋，则为痲疯；中风而乱其魄，则为惊痫，丹皮得金味以平肝，所以主之。

邪气者，风火之邪也，邪气动血，留舍肠胃，瘀积痲坚，丹皮之寒能清热，辛能散结，可以除之。

肺为五脏之长，肺安而五脏俱安。

痲疮皆属心火，心火除而痲疮可疗。

黄杰熙评：三家注丹皮，各俱特色，皆振振有词，摇曳生姿，真可谓仁者见仁，智者见智矣。

张注长于形象，短于据此发挥。

叶注稳健，遵经注解，不留遗文，但由于理路间或不清，造成所注大纯小疵，如云“肝不升而肺气降，诸症平矣”，因不明肝之气主升之真理，肝气如不升，郁于中则成郁火，行于下则下血不止。只是升宜徐缓，谓之肝气条达，过快则肝阳上亢，血压升高，过慢则血压过低，皆要造成肝性昏迷之中风症，不过治法不同耳。

陈注异军突起，别开局面，另立天下，注得有个性。但也由于理路间或不清，注得有得有失，如“中风而乱其魄，则为惊痫”，肺藏魄，心藏神，惊痫是心病，而非肺病，何得张冠李戴呢？应正为：中风而乱其神，则为惊痫才对吗！

总之，三家注忘掉了一项最重要的东西，就是丹皮色红，入心与血脉，气寒清热，味辛散结化瘀，是入血分清热化瘀之妙品。仲景大黄牡丹皮汤用之，清热化瘀；以治肠痲；肾气丸用之，以化血中瘀阻，使桂枝引心火下交，以助肾阳，则火之体用俱备。以及钱乙之六味地黄丸用之，以清血中瘀阻，使血清而阴足。

地 榆

· 气味苦微寒无毒，主治妇人产乳痙病，七伤，带下五漏，止痛止汗，除恶肉，疗金疮。

张隐庵曰：地榆，一名玉豉，其臭兼酸，其色则赭，故《别录》又名酸赭。盖秉厥阴木火之气，能资肝脏之血也。

主治妇人产乳痙病者，谓产后乳子血虚，中风而病痙，地榆益肝脏之血，故可治也。

七伤者，食伤、忧伤、房伤、饥伤、劳伤、经络营卫气伤、饮伤，内有干血，身皮甲错，两目黯黑者，地榆得先春之气，故能养五脏而治七伤。

带下五漏者，带漏五色，或如青泥，或如红津，或如白涕，或如黄瓜，或如黑衄血也；止痛者，止妇人九痛，一阴中痛，二阴中淋痛，三小便痛，四寒冷痛，五经来时腹痛，六气满来时足痛，七汗出阴中如虫啮痛，八肋下皮肤痛，九腰痛，地榆得木火之气，能散带下之瘀，而解阴凝之痛也。

止汗者，止产后血虚汗出也。除恶肉疗金疮者，生阳气盛，则恶肉自除；血气调和，则金疮可疗。

黄杰熙评：张注根据厥阴木火之气，将地榆解成补血气之药，离题太远，越解越糊涂，故不可取。

盖地榆气微寒，入足少阴肾经；味苦入手少阴心经；微酸入足厥阴肝经。气味俱降，阴也。

主治妇人产乳痙病者，产乳血虚生热，热灼其筋而发痙，地榆苦寒清热，微酸入肝养筋，故可治之。

七伤者，七情之伤，伤则发火生热，地榆苦寒以清之、下之，故可治之。

带下五漏，热伤五脏，故带下五脏之色，色必鲜艳而发臭，地

榆之苦寒清热，酸敛肝血，故能治之。

止痛止汗者，诸疮痛痒，皆属于心，汗为心液，皆心经之热邪为患，地榆苦寒入心清热，热去心平气和，何痛、何汗之有乎！

除恶肉、疗金疮者，恶肉多为金疮后，皮肉腐烂，营血壅热，滞留而成，地榆之酸化恶肉，苦寒清热，热清肉化，故除恶肉。恶肉除，气血流行，好肉自生，故疗金疮。

不过，《本经》所述主治，在实践中，疗效不太可靠。而可靠者，是地榆苦寒酸收之性，用以清血热而止血，颇建奇功。但地榆凉血止血，地榆稍行血破血，性能恰恰相反，用于止血时，莫忘去净梢，《药性赋》上说：“地榆医止血，连梢不住红。”就是这个道理。

余之评三家者，自注者，是理论与实践密切结合之产物，理论有违实践者，必申明之，因为实践才是检验理论是否正确的唯一标准，舍此无他。

紫 草

气味苦寒无毒，主治心腹邪气五疳，补中益气，利九窍。

张隐庵曰：紫乃苍赤之间色，紫草色紫，得火色也，苗似兰香，得土气也，火土相生，能资中焦之精汁，而调和其上下，故气味苦寒。

主治心腹之邪气，疳者干也，津液干枯也，五疳者，惊疳、食疳、气疳、筋疳、骨疳也，紫草秉火土之气，滋益三焦，故治小儿之五疳。

补中者，补中土也；益气者，益三焦之气也；九窍为水注之气，补中土而益三焦，则如雾、如沍、如渎，水气复环，故利九窍。

黄杰熙评：张注可取，但在观念上有错误，张不知火生之土，是燥土，如何能生中焦之精汁？盖茶草味苦入心，气寒入肾，心肾水火，合化于中焦，始能资中焦之精汁，既是湿，为脾所主，以此注释经文主治，迎刃而解。

泽 兰

气味苦微温无毒，主治金疮、痈肿、疮脓。

张隐庵曰：泽兰生于水，而得五运之气，故主治三因之症。生于水泽，气味苦温，根萼紫黑，秉少阴水火之气也；茎方叶香，微有白毛，边如锯齿，秉太阴土金之气也；茎青叶紫，叶生枝节间，其茎直上，秉厥阴之木气。

主治金疮、痈肿、疮脓者，金疮乃刀斧所伤，为不内外因之症；痈肿乃寒邪客于经络，为外因之症；疮脓乃心火盛而血脉虚，为内因之症，泽兰秉五运而治三因之症者如此。

黄杰熙评：张注从形象色入手，据之以气味，测出泽兰秉五运之气化，而主治三因之症，此注简明着实，堪称好注。

茜 草 根

气味苦寒无毒，主治寒湿风痹黄疸，补中。《别录》云：治蛊毒。久服益精气，轻身。

陈修园曰：气味苦寒者，得少阴之气化也。

风寒湿三气合而为痹，而此能入手足少阴，俾上下交通而旋转，则痹自愈矣；上下交通，则中土自和，斯有补中之效矣；中土和，则湿热之气自化，而黄疸自愈矣。

又《素问》以芦茹一两、乌鳧骨四两，丸以雀卵，饮以鲍鱼汁，治气竭肝伤，脱血，血枯，经闭，丈夫阴痿精伤，名曰四乌

鱧骨一芦茹丸。芦茹，即茜草也，亦取其入少阴以生血，补中宫以统血，汁可染绛，以血而能行血与软。后人以此三味，入乌骨白丝毛鸡腹内，以陈酒童便煮烂，烘干为丸，以百劳水下五、七十丸，治妇人倒经，血溢于上；男子咳嗽吐血，左手关脉弦，背上畏寒，有瘀血者。

黄杰熙评：茜草，陈注在归经上得其要领，故主治上到处逢春，迎刃而解，此注完全可取。今人只将茜草列于止血药中，何其陋矣！

所引《素问》四乌鱧骨一芦茹丸，治肝伤血枯经闭，丈夫阴痿精伤，有奇特之效果。

时方乌鸡白凤丸，即四乌鱧骨一芦茹丸之义，治效略同。

总之，茜草是交心肾水火，补血化瘀止血之品，性偏于寒，虚寒患者忌用。

秦 艽

气味苦平无毒；主寒热邪气，寒湿风痹，肢节痛，下水利小便。

张隐庵曰：秦艽气味苦平，色如黄土，罗纹交纽，左右旋转，秉天地阴阳交感之气，盖天气左旋右转，地气右旋左转，左右者，阴阳之道路。

主治寒热邪气者，地气从内以出外，阴气外交于阳，而寒热邪气自散矣。

治寒湿风痹肢节痛者，天气从外入内，阳气交于阴，则寒湿风三邪合而成痹，以致肢节痛者可愈也。

地气运行则水下，天气运行则小便利。

黄杰熙评：张氏此注，力求深奥，什么天地呀，阴阳呀，左右呀，道路呀！注得云遮雾罩，难于着实，丢掉气味形象不管之

过也。

盖秦艽之根，节节相连如骨节，其筋纹如筋，左右交扭，故入肝肾，而治筋骨之病；味苦入心清热；气平入肺平肝降气。

其主寒热邪气者，寒气伤肺，热气伤心，秦艽味苦入心清热，气平入肺益气祛寒也。

主治寒湿风痹，肢节痛者，气平制风寒，味苦燥湿，其形似骨节而入肢节，风寒湿痹去，而肢节之痛者必除，所以主之也。

下水利小便者，气平入肺，肺为水之上源，苦主下泄，源清下泄者，谓之下水；兼之肝疏肾气行，则小便通利。

防 己

气味辛平无毒，主治风寒温疟热气，诸痢除邪，利大小便。

张隐庵曰：防己气味辛平，色白纹黑，秉金水相生之气化，其茎如木，木能防土，己者土也，故有防己之名。

主治风寒温疟热气者，风寒之邪，藏于肾脏，发为先热后寒之温疟，热气有余之疟也，《经》云：温疟先热后寒，得之冬中于风寒，此病藏于肾，防己启在下之水精，而输转于外，故治风寒温疟热气也。

诸痢除邪者，心包受邪，发为牛马猪羊鸡诸痢之症，防己藤蔓中空，能通在内之经脉，而外达于络脉，故治诸痢除邪也。

利大小便者，土得木而达，木防其土，土气疏通，则二便自利矣。

愚按：防己气味辛平，茎空藤蔓，根纹如车辐，能启在下之水精而上升，通在内之经脉而外达。故《金匱要略》云：“膈间支饮，其人喘满，心下痞坚，面色黧黑者，其脉沉紧，得之数十日，医吐下之不愈，木防己汤主之。”又云：“风水脉浮，身重汗出恶

风者，防己黄芪汤主之；皮水为病，四肢肿，水气在皮肤中，四肢聂聂动者，防己茯苓汤主之。”《千金》方治遗尿，小便涩，三物木防己汤主之。

而李东垣云：防己乃下焦血分之药，病在上焦气分者，禁用。试观《金匱》诸方，所治之症，果在气分乎？抑在上焦乎？下焦乎？盖防己乃理气通上之药，其性功与乌药、木通相类，而后人乃以防己为下部药，不知何据？东垣又云：防己大苦寒，能泻血中湿热，比之于人，则险而健者也。

幸灾乐祸，能为乱阶，然善用之，亦可敌凶突险，此瞑眩之药也，故圣人存而不废。

噫！神农以中品之药为臣，主通调血气，却邪治病，无毒有毒，斟酌甚宜，随病而用，如防己既列中品，且属无毒，以之治病，有行气清热之功，险健为乱之说，竟不知从何处得来，使后人遵之格言，畏之若毒药，非先圣之罪人乎！东垣立言多属臆说，盖其人富而贪名，又无格物实学。李时珍乃谓：千古而下，惟李东垣一人误矣。嗟！嗟！安得伊岐再治世，更将经旨复重宣。

叶天士曰：防己气平，秉天秋降之金气；味辛无毒，得地西方燥金之味，入手太阴肺经。气味降多于升，阴也。

风寒温症者，感风寒而患但热不寒之症也；热气诸痢者，心有热而患一切风痢者，温热皆为阳邪，痢症皆属风木，防己气平，可以清阳邪，味辛可以平风木而消风痰也。

除邪者，辛平之品，可除湿热之邪也。

小便出于膀胱，膀胱津液，肺气化乃出，防己气平，可以化气，故利小便；大便出于大肠，肺与大肠为表里，味辛可以润肠，故利大便也。

但臭恶伤胃，宜慎用之。

陈修园曰：防己气平，秉金之气；味辛无毒，得金之味，入手太阴肺经。

风寒温疟者，感风寒而患但热不寒之疟也；热气诸痢者，心有热而患牛马猪羊鸡诸痢也，温热皆为阳邪，痢疟皆属风木，防己辛平，可以统治之。

除邪者，又申言可除己土之邪气也。

肺为水之上源，又与大肠为表里，防己之辛平调肺气，则二便利矣。

黄杰熙评：张氏以金水相生之气为解，对风寒温疟热气，而主伏气，出于《素问·疟论》；解诸痢邪气，主心包受邪，根据欠妥，故所注不彻。

叶陈二氏之注，完全遵经，不尚新奇，归经为手太阴肺经，主治阐之落实，对风寒温疟，主以新感，出于肝经风木；热气诸痢，以热为阳邪，痢疟皆属风木，病机确切。比较之，张氏之注，不如叶陈二氏之注切实可取，但均有遗蕴，待下再说。

张氏末后，引《金匱》木防己汤、防己黄芪汤、防己茯苓汤及《千金方》三物木防己汤为例证，批驳李东垣之说，言词激烈，达到人身攻击之境地。

盖不知东垣是本其师张元素之说，而加以发挥，给防己定了似是而非之性，作出了近于诬陷之结论。张元素自认为是本草权威，其高徒李东垣、王好古则是“专案组”成员。他们办错了的“案件”多得狠，不胜枚举，此就专以防己论之：

防己分汉防己、木防己两个品种，汉防己产于陕西汉中得名，分产于湖北、安徽等省；木防己产于广东，又称广防己，均为落叶藤蔓乔木。木防己粗大，汉防己细小；木防己黄白色，汉防己黄灰色，皆质坚硬而脆，折断时，木防己有粉质不飞扬，汉防有粉质而飞扬，故汉防己又称粉防己，防己之来路既明，再来研究其气味。

实则防己大苦而寒，微辛微平，故曰无毒，叶氏谓“臭恶伤胃，宜慎用之”，指此也，不敢违经者，另订气味，怕负“叛逆”

之“罪”名。

张元素是“权威”；李东垣、王好古是“医杰”，敢于碰硬，定出大苦大寒之气味来，因不知还有辛平之性，所以给防己定的“性”与作的结论，必犯错误，引起张氏之激愤，批判亦是可取的，矫枉必须过正吗！

大苦大寒属阴中之阴，性趋下走，所以定为入下焦血分，泻血中湿热之悍药，比之于人，则成了危险人物，而又是一个有本事的健将，东垣如此作结论，太草率鲁莽，而不知防己还有其文静淳良之一面，即辛平之性也。故仲景用之，孙思邈用之，皆屡建奇功。

防己以其藤蔓中空多孔，能引地下黄泉之水，上生苗叶，即能通经脉而达中上二焦，外达肌表，上至头顶，以治周身因湿热滞瘀之肿胀。以其味苦入心与小肠；气寒入膀胱与肾；辛平入肺与大肠，以此归入六经，再论《本经》主治范围，可以迎刃而解。

由此可见，东垣所定主治性能，何其渺小而狭隘，不足以登大雅之堂。庸医奉之为圣旨，张隐庵之批李，皆不足为奇。

总之，防己是治湿热肿胀，从大小便将湿热排出体外之圣药，用之得当，效如桴鼓；若体虚寒而肿胀者用之，则成了毒药矣，不可不知。

木防己粗大，治肌表之肿胀，优于汉防己；汉防己较小，治内部胀满，既《本经》所列诸症，又优于木防己。

木 通（通草）

气味辛平无毒，主除脾胃寒热，通利九窍血脉关节，令人不忘，去恶虫。

张隐庵曰：木通藤蔓空通，其色黄白，气味辛平，秉土金相生之气化，而通关利窍之药也。

秉土气，故除脾胃之寒热。藤蔓空通，故通利九窍血脉关节。血脉通而关窍利，则令人不忘。秉金气，故去恶虫。

又曰：防己木通，皆属空通蔓草，防己取用在下之根，则其性自下而上，从内而外；木通取在上之茎，则其性自上而下，自外而内，此根升梢降，一定不易之理。后人用之，主利小便，须知小便之利，亦必上而后下，外而后内也。

叶天士曰：木通气平，秉天秋平之金气；味辛无毒，得地西方之金味，专入手太阴肺经。气降味苦，阴也。

其除脾胃寒热者，盖饮入于胃，游溢精气，上输于脾，脾气散精，上归于肺，肺气通调水道，乃下输膀胱，如水道不通，则留饮于脾胃，而发寒发热矣，木通入肺以通水道，故除脾胃寒热也。

九窍者，耳目鼻各二，口大小便各一也，木通气平则利，味辛则通，所以通利九窍血脉关节也。

其令人不忘者，心藏神而属火，水道通，则心火有制，神清多记忆也。

湿热不除，则化生恶虫，水道通则湿热有去路，故恶虫不生也。

黄杰熙评：张氏以木通色黄白，气味辛平，定为秉土金相生之气化，用以解主治，通则能通，不无纠葛。

叶氏遵辛平之气味，则专入手太阴肺经，理所当然。而又复言“气降味苦”，实则补入苦味，注主治时，虽未明言苦味之作用，实寓其义，如“湿热不除，则化生恶虫”，只有味苦是去湿热之对宫药，怕冒犯经文，而曲改为“水道通，则湿热有去路，故恶虫不生也”。叶氏之苦衷，于前后行文中，明显可见。

《本经》无木通之名，而名之为“通草”，今药店之木通与通草为二物，今之通草，即通脱木，味甘淡气平，是入气分之利尿药；木通气味苦寒，是入血分祛湿热而利尿之药。《本经》之通草

气味辛平；《别录》则云味甘；雷公云味苦，以雷公之见，则似今之木通，合《本经》之主治观之，定为今之木通为宜，而今之通草不能肩此重任。

《金鉴》之木通汤，重用木通一味治三痹，疗效颇佳，余曾多次用之，效验可靠。证实驱风湿热之全身肿大与骨节肿大，消肿效果显著，愈后永不复发，洵良方也。

木通与防己之气味是相同的，形状色泽颇近似，性能基本相同。不过，木通平缓，防己峻剂，湿热过盛者，加防己；兼寒者加附子；无汗者加羌独，则木通汤之单方与加法运用，可见规程矣。

葛 根

气味甘辛平无毒，主治消渴，身大热，呕吐诸痹，起阴气，解诸毒。

张隐庵曰：葛根延引藤蔓，则主经脉，甘辛粉白，则入阳明；皮黑花红，则合太阳，故葛根为宜达阳明中土之气，而外合于太阳经脉之药也。

主治消渴身大热者，从胃腑而宣达水谷之津，则消渴自止；从经脉而调和肌表之气，则大热自除。

治呕吐者，和阳明之胃气也。治诸痹者，和太阳之经脉也。起阴气者，藤引蔓延，从下而上也。解诸毒者，气味甘辛，和于中而散于外也。

又曰：元人张元素云：葛根为阳明仙药，若太阳初病，未入阳明而头痛者，不可使用升麻、葛根，用之反引邪入阳明，为引贼破家也。

愚按：仲祖《伤寒论》方有葛根汤，治太阳病，项背强几几，无汗恶风。又治太阳与阳明合病，若阳明本病，有白虎、承气诸

汤，并无葛根汤症，况葛根主宣通经脉之正气以散邪，岂反引邪内入耶！前人学不明经，好为异说。李时珍一概收入，不加辨正，学者看“本草发明”，当合经论参究，庶不为前人所误。

叶天士曰：葛根气平，秉天秋平之金气，入手太阴肺经；味甘辛无毒，得地金土之味，入足阳明燥金胃。气味轻清，阳也。

其主消渴者，葛根辛甘，升腾胃气，气上则津液生也。

其主身大热者，葛根气平，平为秋气，能解大热也。

脾有湿热，则壅而呕吐，葛根辛甘，升发胃阳，胃阳鼓动，则湿热下行，而呕吐止矣。

诸痹皆起于气血不流畅，葛根辛甘和散，气血活，诸痹自愈也。

阴者，从阳者也，人身阴气，脾为之原，脾与胃合，辛甘入胃，鼓动胃阳，阳健则脾阴亦起也。

甘者，土之冲味；平者，金之和气，所以解诸毒也。

黄杰熙评：张注从形象色味入手，归入阳明太阳二经，用以解经文，颇合仲景用药之法，但丢掉气平不管，似属不妥。

批驳张元素之胡谄，甚为得体，而经旨深奥，浅学者望而生畏，张元素、李东垣等之书肤浅，正适合浅学者之口味，对其无稽之谈，无经旨核实，奉为圣旨，流毒甚广，医学日下，来源于此，其罪责由谁负哉！

叶注平安，归入太阴肺经与足阳明胃经，以其解主治各症亦合拍，但未补充阐明仲景药法，实属遗憾。

亘古以来，仲景最善用葛根者也，张隐庵补阙，亦未得其要领，今进一步以明之：仲景以葛根为帅名方者，共三方，一、葛根汤，治“太阳病，项背强几几，无汗恶风”与“太阳与阳明合病，必自下利”和“太阳病，无汗而小便反少，气上冲胸，口噤不语，欲作刚痉”，以上三症，余曾多次用之，皆效如桴鼓，张元素就连《伤寒论》也未读过，而胡谄用葛根之禁令，恶霸也。

二、葛根黄芩黄连汤，用治“太阳病，桂枝证，医反下之，利遂不止，脉促者，表未解也；喘而汗出者，葛根黄芩黄连汤主之”，此症最常见，余用其方，覆杯而起。

三、葛根加半夏汤，即葛根汤原方加半夏半升（洗），用治“太阳与阳明合病，不下利但呕者”，此症亦常见，遵用之，立起其疴。

以上三方，皆是治太阳病或太阳与阳明合病的，既有太阳病，必有头痛症，张元素用“反引贼入阳明，为引贼破家也”之恶语诬陷葛根引贼，今特为葛根平反昭雪，恢复其名誉。

《本经》主治，谓葛根“起阴气”三字，指明为太阳经之药；“身大热”三字，明显是阳明经之药，故葛根为太阳、阳明二经之主药无疑。仲景，医圣也，最善读《本经》者也，仲景药法全从《本经》而来，不精研《本经》，无法读通仲景书也。

葛 谷（附）

气味甘平无毒，主治下痢，十岁以上。

叶天士曰：葛谷气平味甘，入足阳明胃、手阳明大肠，阴中阳也。

阴中之阳为少阳，清轻上达，能引胃气上升，所以主下痢，十岁以上，阳陷之症也。

黄杰熙评：叶注葛谷，不甚洽当。不带辛味，何能归于阳明经，少阳之胃出，亦很或断。胃与少阳之气，以下行为顺，上行为逆，必证现呕吐。

盖葛谷者，葛之果实，色绿似小豆，色绿入足厥阴肝经；豆入足少阴肾经；气平入手太阴肺经；味甘入足太阴脾经，归经为肝肾肺脾四经。

主治下痢，十岁以上者，十为上之成数，谓其脾气虚衰，不

能消化饮食，造成长期慢性痢，达十年以上。葛谷之甘以补脾；气平益肺气以平肝气之疏泄；色绿入肝，使肝气上升；豆则补肾，严其关门，不使随便痢下外走，故可治之。

葛 花 (附)

气味甘平无毒，主消酒，治肠风下血。

黄杰熙释：葛花气味同葛谷，故归经亦相同。主消酒出《别录》；主肠风下血出《纲目》，均非《本经》之文，为集注者补入，下同。

主消酒者，花之性主散，兼之甘平之气味，从乾天坤地以散之也。盖甘为坤土，平为乾金主天也。

治肠风下血者，肺与大肠相表里，气平入肺，平肝制风；味甘入脾，脾统血，故治肠风下血也。

葛 叶 (附)

主治金疮止血，接傅之。

黄杰熙释：葛叶之主治出《别录》，气味甘平，同于葛根。

主治金疮止血者，金刃创伤皮肉，流血不止而成疮，葛叶接烂成糊，以傅之，气平益肺而生皮，味甘入脾而生肉，皮肉得生生之气，且土克血水，故主治之。

葛 蔓 (附)

主治卒喉痹，烧研水服方寸匕。

黄杰熙释：葛蔓即葛藤，主治出《图经》。气味同于葛根。

主治卒喉痹者，喉为三阴经交通上出之关隘，受风而阻其经

气流通，则患喉痹，葛蔓长而交扭，谓之“纠葛”，如经脉受风之纠葛一样，气平制风，以纠葛而解经脉之纠葛，故治之。

麻 黄

气味苦温无毒，主治中风伤寒、头痛，温疟，发表出汗，去邪热气，止咳逆上气，除寒热，破症瘕积聚。

张隐庵曰：植麻黄之地，冬不积雪，能从至阴而达阳气于上，至阴者盛水也；阳气者太阳也，太阳之气，本膀胱寒水，而上行乎头，周遍于通体之毛窍。

主治中风伤寒头痛者，谓风寒之邪，病太阳高表之气，而麻黄能治之也。

温疟发表出汗，去邪热气者，温疟病藏于肾，麻黄能起水气而周遍于皮毛，故主发表出汗而去温疟邪热之气也。

治咳逆上气者，谓风寒之邪，闭塞毛窍，则里气不疏，而咳逆上气，麻黄空细如毛，开发毛窍，散其风寒，则里热外出于皮毛，而不咳逆上气矣。

除寒热症坚积聚者，谓在外之寒热不除，致中土之气不能外达，而为症坚积聚，麻黄除身外之寒热，则太阳之气出入于中土，而症坚积聚自破矣。

叶天士曰：麻黄气温，秉天春和之木气，入足厥肝经；味苦无毒，得地南方之火味，入手阴心经。气味轻升，阳也。

心主汗，肝主疏泄，入肝入心，故为发汗之上药也。伤寒有五，中风伤寒者，风伤卫，寒伤营，营卫俱伤之伤寒也，麻黄温以散之，当汗出而解也。

温疟，但热不寒之疟也，温疟而头痛，则阳邪在上，必发表出汗，乃可去温疟邪热之气，所以亦可主以麻黄也。

肺主皮毛，皮毛受寒，则肺伤而咳逆上气之症生矣，麻黄温

以散皮毛之寒，则咳逆上气自平。

寒邪郁于身表，身表者，太阳经行之地，则太阳亦病，而发热恶寒矣，麻黄温以散寒，寒去而寒热除矣。

症坚积聚者，寒气凝血而成之积也，寒为阴，阴性坚，麻黄苦入心，心主血，温散寒，寒散血活，积聚自散矣。

陈修园曰：麻黄气温，秉春气而入肝；味苦无毒，得火味而入心，心主汗，肝主疏泄，故为发汗之上药，其所主皆系无汗之症。

中风伤寒，头痛发热，恶寒无汗而喘，宜麻黄以发汗。

但热不寒，名曰温症，热甚无汗头痛，亦宜麻黄以发汗。

咳逆上气，为手太阴之寒症；发热恶寒，为足太阳之表症，亦宜麻黄以发汗。

即症坚积为内病，亦系阴寒之气，凝聚于阴分之中，日积月累而渐成，得麻黄之发汗，从阴出阳，则症坚积聚自散，凡此皆发汗之功也。

根节古云止汗，是引止汗之药，以达于表而速效，非麻黄根节自能止汗，旧解多误。

黄杰熙评：张注从麻黄之性情，即“植麻黄之地，冬不积雪，能从至阴达阳气于上”入手注解经文，可谓得其要者，一言而终，注得透达可取，迎刃而解。

叶注从气味入手，归经确实，按步就班，以解主治，切实周到。

陈注归经，与叶注一致，英雄所见略同，而突出“发汗”二字，以解主治，到处逢春，所向披靡，注得淋漓尽致，堪称伤寒名家，出手不凡。

但对麻黄根、节之批判，是非参半。盖不知麻黄之所以能发汗者，在于其形之细小中空，象人身之毛孔，能引太阳膀胱之水气，循太阳经脉，上升布达于全身之皮表，是为卫气，邪气侵表，

卫气充达，使之化汗而解，其能发汗者，此也。

麻黄根实、节实无孔，无升达水气作用，反有阻止水气外流之作用，即堵塞之义，所以止汗。此即一通一塞之性，用于治病，其效亦同。此义由唐宗海首先发现，唐氏之前，所有医家，非仅修园也，皆昧而不知也。

白 芷

气味辛温无毒，主治女人漏下赤白，血闭阴肿，寒热，头风侵目泪出，肌肤润泽颜色，可作面脂。

张隐庵曰：白芷嗅香色白，气味辛温，秉阳明金土之气化。

主治妇人漏下赤白，血闭阴肿者，《经》云：阳明胃脉，其气下行而主阖。白芷辛温，秉阳明燥金之气下行，则漏下赤白，血闭阴肿可治也。

治寒热头风侵目泪出者，白芷芳香，香气胜于味，不但秉阳明燥金之气下行，且秉阳明中土之气上达，故寒热头风侵目泪出可治也。

土主肌肉，金主皮肤，白芷得阳明金土之气，故长肌肤；面乃阳明之部分，阳气长，则其颜光，其色鲜，故润泽颜色；作粉如脂，故可面脂。

叶天士曰：白芷气温，秉天春和之木气，入足厥肝经；味辛烈而兼芳香，得地西方燥金之味，入足阳明胃经、手阳明大肠经。气味俱升，阳也。

其主女人漏下赤白者，盖肝主风，脾主湿，风湿下陷，则为赤白带下，白芷入肝散风，芳香燥湿，故主之也。

肝藏血，血寒则气闭，温散寒，故治血闭。

阴者，男子阴茎，女子阴户也。属厥阴，阴肿而寒热，肝经风湿也，湿胜故肿，白芷入肝，辛可散风，温可行湿，所以主之

也。

肝经会督脉于巅顶，风气通肝，肝开窍于目，头风侵目泪出，肝有风而疏泄之也，其主之者，以辛温可散风也。

胃主肌肤，而经行于面，辛温益胃，故主长肌肤；芳香辛润，故泽颜色；可作面脂，乃润泽颜色之余事也。

黄杰熙评：张注以阳明金土之气化为解，而遽弃气温不管，故其注别扭，对主治病机不详，似不可取。

叶注气味归经翔实，对主治病机推阐明白，以白芷辛温芳香之性，对准病机治之，注得既生动活泼，又切实可行，是好注，绝妙之注。

不过，白芷之主治，《本经》所列，尚欠齐备。白芷辛温芳香，行水湿之功特强，余根据华佗《中脏经》以白芷为细末，每服六克，治关节肿大，功效卓著；杨吉老“都梁丸”治阳明头痛，肝风上窜，头目昏黑，眩痛，及妇人胎前产后之伤风头痛，均有特效，乃白芷一味研末，炼蜜为丸也。

其他治眉棱骨痛，鼻流浊涕不止，以其辛温芳香，散寒驱风湿之专能，服后立见效果。同时，阴亏火旺之人用之，有抱薪救火之弊，切忌。

荆 芥

气味辛温无毒，主治风寒鼠痿癩病生疮，破结聚气，下瘀血，除湿疸。

张隐庵曰：荆芥味辛性温嗅香，秉阳明金土之气，而肃清经脉之药也。

寒热鼠痿，乃水脏之毒，上出于脉，为寒为热也。本于水脏，故曰鼠；经脉空虚，故曰痿，此内因之痿也；癩病生疮，乃寒邪客于脉中，血气留滞，结核生疮，无有寒热，此外因之痿也，荆

芥味辛性温，肃清经脉，故内因之寒热鼠痿；外因之瘰疬生疮，皆可治也。

其嗅芳香，故破结聚之气；破结聚则瘀血自下矣。

阳明之上，燥气主之，故除湿。

陈修园曰：荆芥气温，秉木气而入肝胆；味辛无毒，得金味而入肺，气胜于味，以气为主，故所主皆少阳相火、厥阴风木之症。

寒热往来，鼠痿瘰疬生疮等症，乃少阳之为病也，荆芥辛温，以发相火之郁，则病愈矣。

饮食入胃，散精于肝，肝不散精，则气滞而为积聚，肝主藏血，血随气血运行，肝气一滞，则血亦滞而为瘀，乃厥阴之为病也，荆芥辛温，以达肝之气，则病愈矣。

其除湿疸者，以疸成于湿，荆芥温而兼辛，辛入肺而调水道，水道通则湿疸除矣。

今人炒黑则变为燥气，而不能达；失其辛味，而不能发，且谓为产后常用之品，味甚。

黄杰熙评：张氏主以秉阳明金土之气，而肃清经脉之药也，为主治依据，以注解经文，对病机之探导，颇具独道之见，故所解主治，亦可取。

陈注归经，依《本经》之义而定，故可取，且鼠痿瘰疬，多发于少阳经脉所过之处，证明陈氏归经是有所本的。

对主治之解，从归经出发，注得切合实际，故陈注颇超，较张注为优。

荆芥炒黑，目的是以黑胜红，用以止血之用。但不知炒黑失辛温驱风寒化瘀血之作用，变为燥性，纯失荆芥之效力，陈氏之批驳，甚当。

盖荆芥色红入血分，辛以制风，温以散寒，气香色红以化瘀，故其作用是入血分驱风寒化瘀之品，病在气分者忌用。

贝 母

气味辛平无毒，主治伤寒烦热，淋漓邪气，疝瘕，喉痹，乳难，金疮风痉。

张隐庵曰：贝母川产者，味甘淡，土产者味苦辛，《本经》气味辛平，合根苗而言也，根形象肺，色白味辛，生于西川，清补肺金之药也。

主治伤寒烦热者，寒邪在胸，则为烦热，贝母清肺，故胸中烦热可治也。

淋漓邪气者，邪入膀胱，不能随太阳而出于皮肤，则小便淋漓，贝母通肺气于皮毛，故淋漓邪气可治也。

疝瘕乃肝木受病，治疝瘕，金能平木也。

喉痹乃肺窍内闭，治喉痹，通肺气也；乳难乃阳明津汁不通；金疮风痉，乃阳明经脉受伤，贝母色白味辛；乘阳明秋金之气，内开郁结，外达皮肤，故皆治之。

叶天士曰：贝母气平，秉天秋平之金气，入手太阴肺经；味辛无毒，得地西方之金味，入手阳明大肠经。气味降多于升，阴也。

其主伤寒烦热者，伤寒之有五，风寒湿热温，而风与热，乃阳盛之症，阳盛所以烦热也，贝母气平则清，味辛润散，故主之也。

淋漓者，膀胱有热也；邪气者，热邪之气也，膀胱以气化为主，贝母味辛入肺，肺乃主气之脏，肺润则气化及于州都，小便通而不淋漓矣。

其主疝瘕者，肺气不治，则不能通调水道，下输膀胱，因而湿热之邪，聚结成疝瘕，贝母气平，可以通调水道，味辛可以散热结也。

大肠之脉，其正者上循喉咙，火发于标，乃患喉痹，痹者闭也，其主之者，味辛气平，能解大肠之热结也。

肺乃津液之府，主乳难者，味辛能润，润则乳自通也。

肺主皮毛，味辛气平，则肺润而皮毛理，可愈金疮也。

风痉者，风湿流于关节，致不能养筋，而筋急也，贝母味辛，辛则散风湿而润血，且贝母入肺，润则水道通而津液足，所以风湿逐而筋脉舒也。

陈修园曰：贝母气平味辛，气味俱属于金，为手太阴、手阳明药也。

其主伤寒烦热者，取西方之金气，以除酷暑，《伤寒论》以白虎汤命名，亦此义也。

其主淋沥邪气者，肺之治节，行于膀胱，则邪热之气除，而淋沥愈矣。

疝瘕为肝木受病，此则金平木也；喉痹为肺窍内闭，此能宣通肺气也；乳少为阳明之汁不通；金疮为阳明之经脉受伤；风痉为阳明之宗筋不利，贝母清润而除热，所以统治之。

今人以之治痰嗽，大失经旨，且李士材谓贝母主燥痰，半夏主湿痰，二物如冰炭之反，皆臆说也。

黄杰熙评：张注对气味略作更正，以解经文，基本通畅，但有余蕴。

叶注遵经，归入肺与大肠二经，以气味辛平解主治各症，通顺无阻。

陈注归经与叶注一致，所解主治，取义有别，但理出一致。

惟对今人以之治痰嗽，大失经旨之批判，似不切实际，应于否定。

贝母，《本经》气味辛平，但今之贝母苦寒，并无辛味，可能是时代气候不同，即司天在泉五运间气有别造成的。如根据《本经》所论主治，则有明显区别，应具体对待。

贝母分川贝母、浙贝母两个品种，皆用其根茎鳞片，川贝小而浙贝大。

川贝味甘苦微寒，色白而象肺，入手太阴肺经；味甘入足太阴脾经；味苦入手少阴心经；微寒入足少阴肾经，故归经为心肺脾肾四经。

是滋阴清虚热治燥痰而愈咳喘之药，适用于虚癆咳嗽，治外感实证咳嗽不宜，且有截留邪热之弊。

浙贝母气味苦寒，苦入心；寒入足太阳寒水膀胱经；其形象肺而入肺经。

是治太阳受风，风邪入肺化火，痰热郁肺，肺失清肃下降之令，咳嗽气促者，可用以清肺热，降肺气，并调太阳经脉之气化，祛在经而又未入肺之风邪，以断邪之后续。若阴虚火旺之虚癆咳嗽误用，苦寒伤胃伤阴，使饮食减少，虚火更旺，病情变恶。

两种贝母，对寒湿之症，皆不可用，故李士材谓贝母主燥痰是对的，以其寒湿滋润之性而化燥行痰也。

苍耳子

气味甘温，有小毒，主治风头寒痛，风湿周痹，四肢拘挛，恶肉死肌，膝痛，久服益气。

张隐庵曰：苍耳子，《本经》名“柰耳”，赅茎叶而言也，今时用实，名苍耳子，子内仁肉，气味甘温，外多毛刺，故有小毒，花白实黄，秉阳明燥金之气。

金能制风，故主治风头寒痛，谓受风邪，为寒为痛也。

燥能胜湿，故主治风湿周痹，四肢挛痛，谓风湿之邪，伤周身血脉而为痹，淫于四肢，而为拘挛痛疼也。

夫周痹则周身血脉不和，周痹可治，则恶血死肌亦可治也。四肢拘挛痛可治，则膝痛亦可治也。

久服则风湿外散，经脉流通，故益气。

黄杰熙评：张氏去掉气味甘温不管，专以白与黄色，归入阳明燥金之气论治，即以金与燥二者，以注解主治各症，通则勉强可通，但不全面彻底。

盖苍耳子，以其外多芒刺而属金戈之象，故秉金气入肺经；味甘入脾；气温入肝，为入肺脾肝三经之药也。

主治风头寒痛者，以其金以制风木，其温以散寒邪也。

治风湿周痹者，肌肉受风濡湿，阻止血脉流通，痹者闭也，周身受风湿，痹闭血脉流通，谓之周痹，苍耳子味甘入脾，脾主肌肉，故入于肌肉，金性制风而燥湿，气温则流通血脉，风湿去，血脉流通，则风湿周痹去矣。

四肢拘挛，血不流通之故；恶肉死肌，土气壅塞，血气难通之由；膝痛者，风寒湿下溜，留于大关节所致，苍耳子以其金性制风，温性散寒，金燥之性祛湿，风寒湿去，则血气通行无阻，故统治之。

味甘益脾气，气温益肝气，久服肝脾之气升，故益气。

款冬花

气味辛温无毒，主治咳逆上气，善喘喉痹，诸惊痫，寒热邪气。

张隐庵曰：款冬生于水中，花开红白，气味辛温，从阴出阳，盖秉水中之生阳，而上于肺经之药也。

太阳寒水之气，不从皮毛外交于肺，则咳逆上气而善喘，款冬秉水气而通肺，故可治也。

厥阴少阳木火之气，结于喉中，则为喉痹，款冬得金水之气，金能平木；水能制火，故可治也。

惊痫寒热邪气，为病不止一端，故曰诸惊痫寒热邪气，款冬

花乘太阳寒水之气，而上行外达，则阴阳水火之气自相交会，故可治也。

愚按：款冬气味辛温，从阴出阳，主治肺气虚寒之咳喘，若肺火燔灼，肺气焦满者不可用。

《济生方》中，用百合、款冬二味为丸，名百花丸，治痰嗽带血，服之有愈者，有不愈者。寒嗽相宜，火嗽不宜也。

卢子由曰：款冬《本经》主治咳逆上气，善喘喉痹，因形寒饮冷，秋伤于湿者宜之。如火热刑金，或肺气焦满，恐益销铄矣。

叶天士曰：款冬气温，秉天春和之木气，入足厥阴肝经；味辛无毒，得地西方润泽之金味，入手太阴肺经。气味俱升，阳也。

肺金主气，气逆则火乘金，而咳逆上气、气喘矣，其主之者，味辛润肺，气温宣通，则肺金下降之令行，而诸症平矣。

喉痹者，火结于喉，而闭塞也，喉亦属肺，款冬辛温通肺，故并主喉痹也。

诸惊痫寒热邪气者，惊有虚实之别，痫有五脏之分，其类不一，所以邪气亦有寒热之殊也。其主之者，以其邪虽有寒热之殊，然皆厥阴肝木气逆火炎之症，款冬辛温，温能达肝，辛能降气，气降火平，邪气退矣。

黄杰熙评：张氏以注解经文为体，以按语为用，体用各异，体则是从阴出阳，金水之气，将款冬划入阴寒之物以注经文，注得非常尴尬。用则不同，摇身一变，成了温热之品，前后矛盾，所以其说非常尴尬。

叶注遵经，归肝肺二经，紧依辛温为注，对主治病机阐发简明扼要，治则鲜明，可谓善解善注。但不能突出重点，款冬毕竟是以辛温治虚寒之品，若热邪壅肺，用之如火上烧油。所以张氏之按语可取。

盖款冬花，非生于水中，而是生于水边冰冻之土地上，破冰冻而出，其热力之雄健，可想而知，原名款冻花，款者至也，花

从根抽蕙而出，花至冻解，破阴还阳之力，无以伦比，花主散，味辛入肺，温散肺之寒凝冻结如神，审症确切，若为《本经》所列虚寒诸症，用之立建奇功。若胡乱套用，为害亦烈，为医者应“三思而行，再思可也”。

紫 苑

气味苦温无毒，主治咳逆上气，胸中寒热结气，去蛊毒，痿躄，安五脏。

张隐庵曰：紫，赤黑之间色也，黑赤，水火之色也。

紫苑气味苦温，秉火气也，其质阴柔，秉水气。

主治咳逆上气者，启太阳寒水之气，从皮毛而合肺也。

治胸中寒热结气者，助少阴火热之气，通利三焦而上达也。

蛊毒在腹属土，火能生土，故去蛊毒。痿躄在筋属木，水能生木，故去痿躄。

水火者，阴阳之徵兆也，水火交则阴阳合，故安五脏。

叶天士曰：紫苑气温，秉天春升之木气，入手厥阴心包络；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气升味降，阴也。

火为君火，火刑肺金，则咳逆上气矣，紫苑入心，味苦清心，所以主之也。

心包络手厥阴脉，起于胸中；手厥阴之筋，其支者入腋散胸中。主散厥阴，紫苑气温，可以散寒之气结，结而不散，乃寒热结气，厥阴有或寒或热，味苦可以散热也。

蛊毒者，湿热之毒化成蛊也，味苦无毒，泄而杀蛊，所以主之也。

痿躄者，肺受湿热薰蒸，不能行清肃之令，心气热，下脉厥而上，上实下虚，扼折掣胫，纵不任地，而生痿躄也，味苦入心，清热降气，故主痿躄也。

心为君主，十二官之宰，五脏之主也，味苦入心，心安，五脏皆安也。

黄杰熙评：张注取色紫；即水气与火气为解，该用水气则取太阳寒水之气，该用火气则取少阴君火之气，水火之气穷，则以五行生化之气，即火生土；水生木之类以解之，左右逢源，如此注解而矣，岂能明紫苑之药性？故曰：“力求深奥，转多晦义”。

叶注取其实用，归经心包络与心脏二经，即味苦取其性寒，气温取其性散，以解主治各症，通则强解能通，不无问题所在。

紫苑性温，果治寒咳，还是热咳呢？同时味苦乃火之味，岂能清热？总起来说，紫苑是火热之药，治虚寒之症可也，若治热症，有抱薪救火之失，切切留心，不可造次。

盖苦为火之性，入心补火制寒；苦之极味，乃物极则反，由火变水，变为水之性。即变，其气必寒，不会气温。张叶二氏未透“物极则反”之关，故其注难免乱弹琴。

紫苑味苦入手少阴心经；气温入手厥阴心包络经、足厥阴肝经。气味俱升，阳也。

主治咳逆上气者，形寒饮冷伤肺，肺伤失清肃下降之性，气逆而上则咳，紫苑味苦入心补火温肺，气温散寒，寒冷消散，故可以治之。

治胸中寒热结气者，胸为心阳所居之地，寒邪困之，热不能透达四散，则形成寒热互结之气，简称寒热结气，其邪是寒，紫苑味苦入心补心火而增辐射之热力以驱寒，气温入手足厥阴经以散寒，既驱又散，所以寒邪去而病愈矣。

去蛊毒者，蛊卦见于《周易》，即山风卦，山者艮也，在上属胃；风者巽也，在下属肝，乃胃气不降，肝不升，久久酿成，即今之肝硬变腹水也，紫苑气温入厥阴而升肝气，味苦入心补火生燥土而降胃气，故可治之。

治痿躄者，痿者肺痿，肺气不足而痿缩也；躄者足不任地，不

能行走也，紫菀味苦入心补火，以温肺壮气；气温入肝补筋脉，则筋强而足力健，气足而筋健，故治痿躄。

心为五脏之君主，紫菀味苦入心补火，心主火，火足则心安，心安则其余四脏安，故安五脏。

知 母

气味苦寒无毒，主治消渴热中，除邪气，肢体浮肿下水，补不足，益气。

张隐庵曰：知母质性滋润，得寒水之精，故气味苦寒，有地参、水参之名，又名连母、蜺母者，皮有毛而肉色白，秉秋金清肃之气，得寒水之精，而秉秋金之气，须知水之有母也。

秉寒水之精，故主治消渴热中；皮外有毛，故除皮毛之邪气；肉厚皮黄，兼得土气，故治肢体浮肿下水。

补不足者，补肾水之不足；益气者，益肺气之内虚。夫金生其水，故补肾水之不足；土生其金，故益肺气也。

叶天士曰：知母气秉天冬寒水之气，入足少阴肾经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气味俱降，阴也。

肾属水，心属火，水不制火，火烁津液，则病消渴；火薰五内，则病热中，其主之者，苦清心火，寒滋肾水也。

除邪气者，苦寒之味，能除燥火之邪气也。热胜则浮，火胜则肿，苦能退火，寒能退热，故主肢体浮肿也。肾者水脏，其性恶燥，燥则开阖不利，而水反蓄矣，知母寒滑，滑利关门，而水自下也。

补不足者，苦寒补寒水之不足也。益气者，苦寒益五脏之阴气也。

陈修园曰：《金匮》有桂枝芍药知母汤，治肢体疼痛，身体羸羸，脚肿如脱。可知长沙诸方，皆从《本经》来也。

黄杰熙评：张氏从质性入手，推之秉寒水之精，而得秋金之气，即金水二气为依据，水之有母为相生之物，以注知母之主治性能，舍气味，专以五行形色为注，是舍近而求远，欲明而反晦，其注只可作为参考，难为楷式，以其非全面明畅无疑之注也。

叶注平正，归经心肾，理所当然，主治病机，有实可循，苦寒治病，针锋相对，叶注无奇，却有奇遇。

陈氏注明长沙方药，纯遵《本经》，不读《本经》，终生无以进长沙之门也。

盖知母质软而内含水精，为滋补肾阴之品；皮多毛刺与肉白，入手太阴肺经；皮黄肉又白中带黄，入足阳明胃经；气寒入足少阴肾经；味苦入手少阴心经，为滋阴清热去火之品。

仲景白虎汤用之，治肺胃“消渴热中”，以其苦寒之性，滋阴清火也。

仲景桂枝芍药知母汤用之，治“邪气肢体浮肿下水”也，以其苦寒滑利之性，疗热性关节肿大，即尪羸也，有滋阴清热利水滑大便之功，使湿热之邪有出路也。

东垣滋肾丸用之，以补肾水之不足，湿热留滞，小便涩而黄赤，滋水行湿热，则小便清利，肺气有权，故有益气之功。

栝 萎 根

气味苦寒无毒，主治消渴身热，烦满大热，补虚安中，续绝伤。

张隐庵曰：栝萎根入土最深，外黄内白，气味苦寒，盖得地水之精气，而上达之药也；其实黄色，内如重楼，其仁，色绿多脂，性能从上而下。

主治消渴身热者，谓启在下之水精上滋，此根之功能也。

治烦满大热者，谓降在上之火热下泄，此实之功能。

补虚安中，续绝伤，合根实而言也，水火上下交济，则补虚而安中；藤蔓之药，能资经脉，故续绝伤。

又曰：半夏起阴气于脉外，上与阳明相合，而成火土之燥；栝萎根起阴津于脉中，天癸相合，而能滋其燥金，《伤寒》《金匱》诸方，用半夏以助阳明之气，渴者燥气太过，即去半夏，易花粉以滋之，圣贤立方加减，必推物理所以然。

叶天士曰：栝萎根气寒，秉天冬寒之水气，入足少阴肾经、足太阳寒水膀胱经；味苦无毒，得地南方火味，入手少阴心经。气味俱降，阴也。

膀胱者，津液之腑也，心火内烁，则津液枯而病消渴；膀胱主表，火盛则表亦热而身热也，其主之者，苦寒可以清火也。

心为君火，火盛则烦满大热，其主之者，寒以清之，苦以泄之也。

火盛则阴虚，补虚者，清润能补阴虚也。阴者中之守，安中者，苦寒益阴，阴充中有守也。其主续绝伤者，血为阴，阴虚则伤，阴枯则绝，栝萎根清润，则虚者滋，枯者润也。

实名栝萎，甘寒之性，能解阳邪，所以主伤寒阳邪结胸也。

陈修园曰：栝萎根气寒，秉天冬寒之水气，而入肾与膀胱；味苦无毒，得地南方之火味，而入心。

火盛烁液，则消渴；火浮于表，则身热；火盛于里，则烦满；大热火盛，则阴虚，阴虚则中失守而不安，栝萎根之苦寒清火，可以统主之。

其主续绝伤者，以其蔓延能通阴络，而续其绝也。

实名栝萎，《金匱》取治胸痹；《伤寒论》取治结胸，盖以能开胸之结也。

黄杰熙评：张注取形质，而不求气味，且其注走题，拉扯其实以注，殊不合经义，故此注所取者不多。

未引半夏与栝萎根在仲景方加减法，不过燥与湿之分，深入

到脉外与脉中为解，实属隔靴搔痒，欲深反晦，不知“易则易知，简则易明”乃《周易》之理。

叶注归经正确，以气味苦寒注解主治各症，皆中肯启，故叶注平正可取。

陈注实则简化叶注而来，只“续绝伤”一则同意张注之义。

叶陈二注，对栝蒌实之补解，义相同，不过陈注有补充说明而矣。

盖栝蒌根即“花粉”，性与知母颇相近，且皆用根，为滋阴清火去热之品，知母近时劣品颇多，可用花粉以代之，较用劣品知母，效果好得多。

瞿 麦

气味苦寒无毒，主治关格诸癥结，小便不通，出刺决痈肿，明目去翳，破胎堕子，下血闭。

张隐庵曰：瞿者，如道路通衢，有四通八达之意；麦者，肝之谷，有东方发生之意。

瞿麦一本直上，花红根紫，秉厥阴少阳木火之气化，苦者火之味，寒者水之性，气味苦寒，乃水生木，而木生火也。

主治关格诸癥小便不通者，厥阴肝木主疏泄，少阳三焦主决渎也。

出刺决痈肿者，津液随三焦出气，以温肌肉之刺可出，而肌肉之痈肿可决也。

明目去翳者，肝通窍于目，肝气和而目明也。

破胎堕子者，少阴属肾，肾气泄则破胎堕子；下血闭者，厥阴主肝，肝气通，则月事时行，而下血闭。

黄杰熙评：张注从字义到瞿麦之生形，花根之颜色至气味之苦寒以解，可谓较详矣，但仍留遗义。

注解主治各症，只以肝木与三焦之功能为依据，兼以肾气，虽勉强能通，不无囿囿之处，故此注所取无多。

瞿麦，又称蘧麦、巨句麦、南天竺草，茎青黄中空似竹，茎青黄，主入足厥阴肝经；中空，主入手少阳三焦经；味苦入手少阴心经；气寒入足少阴肾经、足太阳膀胱经、手太阳小肠经，归肝、三焦、心、肾、小肠、膀胱六经。

主治关格壅结小便不通者，瞿麦苦寒之性，通心肾则关格去；驱湿热则壅结除；中空通利三焦，达小肠膀胱，则水道通，其湿热有去路，而从小便出。

出刺去痛肿者，太阳水腑之气化，达于皮表，是为卫气；三焦之气达于腠理，则肌肉充实，故可从内顶出其邪刺，并去血气之痛肿。

明目去翳者，翳为湿热所凝结，瞿麦苦寒，从下达上，去肝经之窍所凝之湿热，湿热去则翳散而目明。

破胎堕子下血闭者，胎居宫内，为肾所主，肝所司，瞿麦苦寒之性，达肝肾而致宫寒胎破子堕下；苦寒下泄，血闭无留，亦破而下之。

总之，瞿麦是驱湿热，通小便，行血热之药饵，虚寒有孕者，切忌胡乱使用。

苦 参

气味苦寒无毒，主治心腹结气，症瘕积聚，黄疸，溺有余沥，逐水，除痛肿，补中，明目止泪。

张隐庵曰：苦参气味苦寒，根黄花白，秉寒水之精，得中土之化。

水精上与君火相参，故主治心腹结气；参伍于中土之中，故治症瘕积聚，而清黄疸。

秉水精则能资肾，故治溺有余沥。

苦主下泄，故逐水；苦能清热，故除痈肿。

得中土之化，故补中；水之精上通于火之神，故明目止泪。

陈修园曰：此以味为治也，苦入心，寒除火，故苦参专治心经之火，与黄连功用相近。但黄连似去心脏之火为多，苦参似去心腑小肠之火为多，则以黄连之气味清，而苦参之气味浊。

黄杰熙评：张氏长于形象思维，若能与实际相结合，则解得既妙且准，苦参用根，张氏以根黄花白，与气味苦寒相结合，定为秉寒水之精，得中土之化，以注解主治各症，到处逢春，迎刃而解，堪称好注。

陈注突出苦寒之气味为注，并与黄连相比较而论之，不谈归经主治各证，注重于实用性。

总之，苦参气味苦寒根黄，归经应为心肾胃小肠膀胱五经。

以其苦寒之性，是清利湿热，治疮疡疥癣，并杀其虫之妙药，外用与内服都卓俱效果。《金鉴》苦参地黄丸用之，治肠风粪后多血有效果。

青 蒿

气味苦寒无毒，主治疥瘙痴痒恶疮，杀虫，治留热在骨节间，明目。

张隐庵曰：青蒿春生苗叶，色青根白，气味苦寒，盖受金水之精，而得春生之气。

主治疥瘙痴痒恶疮者，气味苦寒，苦杀虫，寒清热也。

又曰杀虫者，言不但治疥瘙，而且杀虫也。又曰治热留在骨节间者，言不但治痴痒恶疮，且治留热在骨节间也。秉金水之精，得春生之气，故明目。

黄杰熙评：张氏以青蒿受金水之精，而得春生之气，兼气味

苦寒为解，解得敷衍塞责，中间简直在做文字游戏，故此注所取者甚少。

盖青蒿与黄蒿有别，青蒿色青嗅香，黄蒿色黄嗅臭，今药房售出者，二者混淆，不合用药之道。

青蒿称香蒿。黄蒿称臭蒿，不能入药，只可燃点冒烟熏蚊虫。

青蒿色青入肝胆二经；气香入脾经；味苦入心与小肠二经；气寒入肾与膀胱二经。

主治疥瘙痂痒恶疮杀虫者，诸疮痛痒，皆属于心，既血液受湿热生虫之患，青蒿味苦入心清湿热而杀虫，气寒滋水清热，故可治之。

治留热在骨节间者，骨者肾所主，节者大小都会也，藏垢纳污之所，热气至此，停留而藏匿，青蒿气寒入肾达骨节，味苦以清之泄之。

肝开窍于目，肾主瞳仁，青蒿色青入肝，气寒入肾，味苦清湿热，湿热清，眼翳去，肝肾得补，故明目。

青蒿色青条达肝木之气，与少阳胆气，而有畅行三焦之作用，故可用之以代伪劣之柴胡也。

石 韦

气味苦平无毒，主治劳热邪气，五癃闭不通，利小便水道。

张隐庵曰：水草石草，皆主在肾。石韦生石上，凌冬不凋，盖秉少阴之精气；叶背有金星，有黄毛，乃金水相生，肾上连肺也。

治劳热邪气者，劳热在骨，邪气在皮，肺肾之所主也。

五癃者，五液癃闭，小便不利也，石韦助肺肾之精气，上下相交，水精上濡，则上窍外窍皆通，肺气下化，则水道行而小便利矣。

夫水声泄肾气，人声泄肺气，不闻水声人声者，藏水天之精，以助人之肺肾也。

黄杰熙评：张氏此注，能缘石韦之所生，兼其叶之形象以定性，定为金水相生之药物，以论主治，均合实际，故此注可取者多。

肾主水，故闻水声，则肾水走泄，故泄肾气；肺主金，人声乃金鸣之声，故闻人声，则起共鸣，而泄肺气，皆同气相感而耗气之结果，善养生者，必清静，不闻一切声响也。

不过，石韦苦平微寒，是清湿热利小便之药，无湿热者，不要随便乱用。

海 藻

气味苦咸寒无毒，主治瘰疬结气，散颈下硬核痛，痈肿症瘕坚气，腹中上下雷鸣，治十二经水肿。

张隐庵曰：咸能软坚，咸主润下，海藻生于海中，其味苦咸，其性寒凉，故主治经脉外内之坚结瘰疬结气。颈下硬核痛、痈肿，乃经脉不和，而病结于外也；症瘕坚气，腹中上下雷鸣，乃经脉不和，而病结于内也。

海藻形如乱发，主通经脉，故治十二经水肿，人身十二经脉流畅，则水肿自愈矣。

黄杰熙评：张注主要是以咸能软坚，咸主润下，苦寒清泄，兼之其形如发，主通经脉为解，惜其未联系起来注解主治各症，故注多龃龉。

中药论药性，主要以药材之自然性、物理性，即气味为根据；西医论药是化学性，即唯成份论，海藻之成份是含碘元素多，以治缺碘患者所得之瘰疬等症，如此分别而矣。

中医以形象气味归经论主治，则所治之病多，只要脉证诊断

准确，投之效如桴鼓，立起沉疴。

海藻气寒入肾与膀胱二经；味苦入心与小肠二经；味咸入肾经，为心肾水火气血阴阳相交之药饵。且味咸软坚而化血气之坚结，其形如发，主通经络，而无所不到，故与甘草相反，不能同用。

主治瘰疬结气，散硬核痛，痈肿疔瘰坚气诸症者，皆以其有软坚，清火，通经络之效果。

治腹中上下雷鸣者，交水火气血阴阳之效果。

治十二经水肿者，通经络，从肾膀胱行水消肿之效果。

海藻性苦咸寒，其人虚寒者，慎不可用。

水 萍

气味辛寒无毒，主治暴热身痒，下水气，胜酒，长须发，止消渴。久服轻身。

张隐庵曰：太阳之气，根于水中，而外浮于肤表；萍生水中，浮于水面，盖乘太阳之气化，其背紫赤，皆连于水，乃太阳之气，根于水中也。盛于暑夏，乃太阳之气，开萍而主夏也；气味辛寒，辛为乾金，太阳如天而合乾，太阳本寒，太阳标阳而本寒也。

主治暴热身痒者，风热之邪，暴客皮肤，一身苦痒，水萍乘寒水之气，外行肤表，故暴热身痒可治也。

下水气者，太阳之气，外达皮毛，则膀胱之水气自下也。

胜酒者，酒性辛温而慁悍，先行皮肤，水萍辛寒而解热，亦先行皮肤，故能胜酒。

长须发者，太阳为诸阳主气，而薰肤泽毛，须发长也。

得寒水之精气，故止消渴。

久服则阴精盛而阳气充，故身轻。

太阳之气，出于水中，上与君火相合，而主日。水萍下为水

映，上为日晒，方长，乃太阳之气上下相通，此物理自然之妙用也。

陈修园曰：水萍生于水中，而能出水上，且其叶入水不濡，是其性能敌水也。

故凡水湿之病，皆可治也。其根不着土而上浮水面，故又能主皮毛之疾。

黄杰熙评：张注缘水萍之所生，定为秉太阳之气化，注解主治各症，精确明白，堪称妙手。

陈注以水萍之生性为据，提出治水湿与皮毛之疾，可谓重点突出，可作为张注之补充。

盖水萍气味辛寒，是治湿病表热无汗之要药，对湿温有特效。

萆 薢

气味苦平无毒，主治腰脊痛强，骨节风寒湿周痹，恶疮不瘳，热气。

张隐庵曰：凡草木之根茎坚硬而骨胜者主肾，有刺而藤蔓者走经脉，萆薢骨胜藤蔓，故主治腰脊痛强，骨节风寒而主肾，又治湿痹周痹而主经脉，苦能清热，故治恶疮不瘳之热气。

叶天士曰：萆薢气平，秉天秋降之金气，入手太阴肺经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气味俱降，阴也。

太阳寒水经，挟脊抵腰中，太阳有湿，则阳气不布，腰脊强而痛矣。太阳经行身表，附皮毛而为外卫者也，皮毛者，肺之合，萆薢气平入肺，味苦燥湿，肺之皮毛理，而太阳之湿亦逐，所以主腰脊强痛也。

骨节者，节键之处也，亦属太阳经，湿流孔窍，故风寒湿合而成痹，则周身麻木而骨节更甚也，其主之者，萆薢入肺，肺通调水道，下输膀胱，可以去大肠之湿而理痹也。

恶疮热气，皆属心火，葶藶味苦清心，心火退则恶疮愈，而热气解矣。

黄杰熙评：张氏以葶藶之骨胜主肾，藤蔓走经络，味苦清火，三者为依据，以注主治名症，触类而通。

叶氏遵经注解，理路虽与张氏各异，但有殊途同归之妙，皆可作为互参。

不过，《本经》所述之葶藶气味，与市场所售葶藶之气味不同，可能是时代与气候变迁，气化各异所致，必须正视现实，才不致于食古不化，害己害人。

葶藶气味淡温无毒，以其味淡归脾，气温入肝，以其淡渗而直下，使温性直落膀胱以化气上行外达，是为卫气，因而小便反少，是缩小便，治小儿尿床及大人尿频之妙药。

肺主皮毛，卫气达皮毛，肺吸引之而肺金旺，金平木，为驱风要药；性温散寒，淡渗去湿，故可治风寒湿痹周痹腰疼。

以其藤蔓而骨胜，又为通经络，治骨节风寒湿痹之妙药。

至于治恶疮不瘳热气者，必是风寒湿郁久不散，成热气之恶疮，此不能概治之也，宜活看，切忌死板。

白茅根

气味甘寒无毒，主治劳伤虚羸，补中益气，除瘀血血闭，寒热利。

张隐庵曰：白茅根色白味甘，上刚下柔，根多津汁，秉于金水相生之气化。

主治劳伤羸瘦者，烦劳内伤，则津液不荣于外，而身体羸瘦，茅根秉水精而多汁，故治劳伤羸瘦。

补中益气者，中土内虚，则气不足，茅根秉土气而味甘，故能补中益气。

除瘀血血闭者，肝气内虚，则血不荣筋，而为瘀血、血闭之症，茅根秉金气而色白，故除瘀血、血闭。

肺金之气，外达皮毛，则寒热自愈；皮毛之气，下输膀胱，则小便自利。

黄杰熙评：张氏长于形象思维，惟此解白茅根，则缺乏形象思维。

白茅根秉春气最早，于冬令严寒冰冻之际，破冻土而出，坚硬如针，称茅针，得春气而入肝，以其破坚之力，故可入血分，除瘀血、血闭。

狗 脊

气味苦平无毒，主治腰背强，机关缓急，周痹寒湿膝痛，颇利老人。

张隐庵曰：狗脊根坚似骨，叶有赤脉，主利骨节，而通经脉之药也。

治腰背强，机关缓急，利骨节者，血脉不和，则为周痹，或因于寒，或因于湿，皆能为痹，治周痹寒热，通经脉也。

又曰膝痛者，言机关缓急，则膝亦痛；老人经血虚而机关不利，故颇利老人。

黄杰熙评：张氏以利骨节，通经脉为解，注虽能通，但落于平庸。

盖狗脊用根，其上多密布金色细绒毛，其形象狗之脊而弯曲，故又称金毛狗脊。

味苦甘性温，与《本经》所定苦平，同中有异，应以今之气味为解。

狗脊气温入肝，味苦入心，味甘入脾，骨硬入肾，金毛入肺，乃正入五脏之药也。

主治腰背强者，以其形似腰背之脊梁，入而温通之补之也。

气血虚，风寒湿客之，则机关缓急，周痹，寒湿膝痛也，狗脊味苦入心补血，秉金气入肺补气而祛风，气温散寒，味甘入脾补土行湿，故可统治之。

老人气血虚，正不压邪，最易致风寒湿痹而不去，狗脊能治之，故曰“颇利老人。”

淫羊藿

气味辛寒无毒，主治阴痿，绝伤，茎中痛，利小便，益气力、强志。

张隐庵曰：羊为火畜，藿能淫羊，盖秉水中之天气，而得太阳阳热之气化也。

秉水中天气，故气味辛寒，得太阳之热，故主治阴痿绝伤。太阳合膀胱寒水之气，故治茎中痛、利小便。大肠之气，上合于肺，内通于肾，故益力强志。

淫羊藿太阳之气，而功能治下，与紫葳秉太阳之气化，浮越于肤表者，少有不同，故生处不闻水声者良，欲使太阳之气，藏于水中，而不微现于外也。圣人体察物性，曲尽苦心，学者潜心玩索，庶几得之。

叶天士曰：淫羊藿气寒，秉天冬令之水气，入足少阴肾经；味辛无毒，得地润泽之金味，入手太阴肺经。气味降多于升，阴也。

阴者，宗筋也，水不制火热，则筋失其刚性而痿矣，淫羊藿入肾而气寒，寒足以制火，而痿自愈矣。

绝伤者，阴绝而精伤也，气寒益水，味辛能润，润则阴精充也。

茎，玉茎也；痛者，火郁于中也，热者清之以寒，郁者散之以辛，所以主茎中痛也。

小便气化乃出，辛寒之品，清肃肺气，故利小便。肺主气，辛润肺，故益气力也。气力既益，内养刚大，所以强志，盖肾藏志也。

陈修园曰：淫羊藿气寒，秉天冬寒水之气而入肾；味辛无毒，得地之金气而入肺，金水二脏之药，细味经文，俱以补水脏为主。

阴者，宗筋也，宗筋属于肝木，木遇烈日而痿，一得气寒之羊藿，即如得露而挺矣。

绝伤者，脉络绝而不续也，《金匱》云“脉络者，阴精阳气所往来也。”羊藿气寒味辛，具水天之气，环转运行，而能续之也。

茎，玉茎也，火郁于中，则痛。热者，清之以寒；郁者，散之以辛，所以主茎中痛也。

小便主于膀胱，必假三焦之气化而出，三焦之火盛，则孤阳不化，而为溺短、溺长之症，一得淫羊藿之气寒味辛，金水相涵，阴气濡布，则小便利矣。

肺主气，肾藏志，孟夫子云“夫志，气之帅也”，润肺之功，归于补肾，其益气力强志之训，即可于孟夫子善养刚大之训、悟之也，第此理难与时医道耳。

叶天士云：“淫羊藿浸酒，治偏风不遂，水润腰痛。”

黄杰熙评：张注淫羊藿秉水中之阳，即太阳之阳热以解主治诸症，似是而非，注多齟齬不通。气味辛寒，乃金水相生之性，何能胡扯到秉水中之阳热呢？故张注不可取。

叶注紧跟气味辛寒，归手太阴肺与足少阴肾二经，以解主治诸症，触类而通，着实可从。故其注明白通畅而落实，不过对阳痿等之解，还未达到化境。

陈注是叶注之补充再现，如对痿之举例补充最妙。茎、小便利、绝伤等之补充注明亦妙，故陈注为叶注之功臣，参赞之成为美注。

还应补明者，淫羊藿色青入肝经，为补肾阴、滋肝、益肺气

之药。

阴，是指男女生殖器，因受热脱水而痿缩。阴器为肝筋所聚之处，如植物之叶脉一样，受烈日光照，脱水痿缩下垂，根部浇之以水，勃然挺翠，淫羊藿气寒清热而供水，色青入肝筋，味辛补肺金而生气生水，则水有源头，故可以治之。

叶陈二注，提到的“刚大”等语，皆出孟子之语，气者水也，水即化气之气，水之母肺，水之主肾也，能深明此中相互关系，则进道矣。

紫 葳

气味酸微寒无毒，主治妇人产乳余疾，崩中症瘕，血闭寒热羸瘦，养胎。

张隐庵曰：紫葳延引藤蔓，主通经脉；气味酸寒，主清血热，故《本经》主治如此。

近时用此为通经下胎之药；仲景鳖甲煎丸，亦用紫葳以消症瘕，必非安胎之品，《本经》养胎二字，当是堕胎之讹耳。

黄杰熙评：张注简明扼要，便于应用，但非注经模式。

能确实更正《本经》养胎二字为堕胎二字，已俱研经家之风采，值得表彰。

盖紫葳又名凌霄花，气微寒入足少阴肾经；味酸入手厥心包络经与足厥阴肝经。气味俱降，阴也。

妇人产乳余疾，乃恶露未净，而发热腹疼，乳汁不足，乳腺不通也，紫葳气寒清热，味酸入厥阴通经化瘀止血，故可以主治之。

崩中者，血热妄行；症瘕者，瘀结而成。血闭寒热羸瘦，血不行郁于经脉，则发寒热，脱水而羸瘦，紫葳入肝与心包，通行血气，故皆主之。

活血化癥，气味俱降，故墮胎。

薤 白

气味辛苦温滑无毒，主治金疮溃败，轻身不饥，耐老。

张隐庵曰：薤用在下之根，气味辛温，其性从下而上，主生阳之气上升者也。

《金匱》胸痹证，有栝蒌薤白白酒汤，栝蒌薤白半夏汤，枳实薤白桂枝汤，皆取自下而上，从阴出阳之义。

金疮溃败，则皮肤经脉虚寒，薤白辛温，从内达外，故能治之。

生阳上升，则轻身不饥耐老。

叶天士曰：薤白气温，秉天春和之木气，入足厥阴肝经；味辛苦滑无毒，得地西南金火之味，而有润泽之性，入手太阴肺经、手少阴心经。气味升多于降，阳也。

金疮气虚，则疮口不合，气温可以益气，所以主疮溃败也。

气温达肝，肝气条畅，则气血日生，所以轻身；温暖脾土，土健所以不饥；味辛润血，血华所以不老也。

黄杰熙评：张注取气味辛温，由下而上；由内而外为注，取《金匱》三方为依据，以证明之，注虽不全，尚得简要，可作参考。

叶注踏实，归经主治，论述无遗，主要取气温为解，亦欠全面彻底。

盖薤白，俗名小蒜，俗呼苦叫子，有强烈之辛温气，气温入肝，升散郁气；色白入肺，补气降气；味辛入肺，补金平肝木之风气；味苦入心，补火，畅行血气。总之，是上入胸腔，补阳散行血气之品。仲景三方取之为主药，以治胸痹诸症，在《本经》主治之外，弹出弦外之音，根据气味性能，发展创新，所取得之显效者也。

主治金疮溃败者，金刃创伤成疮而溃败久不愈也，气血虚寒，而不能推陈出新之结果，薤白色白味辛入肺达皮毛以修复之；味苦入心补火以温煦之；气湿入肝以散寒邪，故可治之。

久服辛温之品，邪气散，阳气升，故轻身；阳气充，故不饥；血气调和，心旷神怡，故耐老。

龙 胆

气味苦涩大寒无毒，主治骨间寒热，惊痫邪热，续绝伤，定五脏，杀蛊毒。

张隐庵曰：龙胆草，根味极苦，而兼涩，性大寒，茎如竹枝，花开青碧，秉东方木气，故有龙胆之名。

龙乃东方之神，胆主少阳甲木，苦走骨，故主治骨间寒热。

涩类酸，故除惊痫邪气。胆主骨，肝主筋，故续绝伤。五脏六腑，皆取决于胆，故定五脏。山下有风曰蛊，风气升，而蛊毒自杀矣。

黄杰熙评：张注从龙胆之形质名入手，以注经文，前三症乱注，第五症注得是非掺半，除第四症外，皆不可取，主观胡诌成章，岂能交待。

盖龙胆分山龙胆与水龙胆，山龙胆根色黄而软，味极苦为上品；水龙胆根褐色而瘦硬，微苦为次品。

龙胆以其用根须，故有通经脉之功；气大寒入肾与膀胱；味极苦秉火之性入心，而物极则反，变为水之性清火；味涩，乃酸之极味入肝胆，而变为金之性，主平木泄肝胆。

所以龙胆秉苦而大寒之性，以清火热；涩金之性而燥湿，是清利湿热之药品。

骨为肾所主，人之机关也，湿为阴邪，流入则发寒；热为阳邪，流入则发热，症现骨间寒热，龙胆性寒入肾达骨清热，味涩

燥湿，故主治之。

心气下则惊，肝风挟痰上窜则痛，皆邪气也，龙胆味苦入心，则心气上；味涩秉金气，以制肝风，心定风平，则痰降，故治惊痛邪气。

绝伤者，脉绝筋伤也，龙胆以其根须通经脉；性寒滋肾水养肝木而续筋，故治绝伤。

定五脏，张注可取。

杀蛊毒者，蛊为《易》之山风卦，艮上巽下，艮者胃也，胃气上而不下；巽者肝也，肝风下而不上，则蛊毒成矣。龙胆味涩入肝制风，则肝气上达；苦寒泄下，则降胃气，胃气下行为顺，肝气上行为顺，理顺了，何蛊之有，故可杀蛊毒也。

黄 芩

气味苦寒无毒，主治诸热黄疸肠澼泄痢，逐水下血闭，恶疮疽蚀火疡。

张隐庵曰：黄芩色黄内空，能清肠胃之热而性寒，能清肌表之热，乃手足阳明，兼手太阴之药也。

主治诸热黄疸肠澼泄痢者，主诸经之热归于胃上，而为黄疸；归于大肠，而为泄痢，黄芩中空，主清肠胃，故能治之。

肠胃受浊，得肺气通调，则水津四布，血气运行。

逐水下血闭者，黄芩外肌皮而清肌表，肌表清，则肺气和，而流水可逐，血闭自下矣。

火热之气，留于肌肉皮肤，则为恶疮疽蚀。恶疮疽蚀，名曰火疡，黄芩治之，清肌表也。

叶天士曰：黄芩气平，秉天秋凉之金气，入手太阴肺经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气味俱降，阴也。

心者，火脏也，十二官之君，诸热之主也，苦平清心，故主

诸热。

黄疸者，湿热乘脾之症也，脾为太阴湿土，土受湿热，则本色现而发黄疸，黄芩苦平清肺，肺亦太阴，太阴湿热退，而脾疸亦平也。

肺与大肠相表里，大肠湿热，则肠澼泄痢，黄芩清肺，肺清则通调水道，而湿热下逐，肠肺复其燥金之性，而泄痢愈。

肺司水道，热则肺失清肃之令，而水道不通，水因而蓄焉，黄芩清肺，则气化下及膀胱，而水下逐矣。

血闭者，实热在血分，而经闭不通也，心主血，味苦清心，则能下泄，所以主之。

恶疮疽蚀者，系疮疽败坏，清腐而不收口也；火疡者，火伤疮也，皆心火有余而腐坏肺之皮毛也，苦平清心肺，所以主恶疮疽蚀火疡也。

陈修园曰：黄芩、黄连与黄柏，皆气寒味苦而色黄，主治大略相似，大抵气寒能除热，味苦能燥湿。色黄者，皆属于土，黄而明亮者，则属于金，金借土之色以为色，故五金以黄金为贵也。

但黄芩中空似肠胃，肠为手阳明，胃为足阳明，其主诸热者，指肠胃诸热病而言也。黄疸为大肠经中之郁热；逐水者，逐肠中之水；下血闭者，攻肠中之蓄血；恶疮疽蚀火疡者，为肌肉之热毒，阳明主肌肉，泻阳明之火，即所以解毒也，《本经》主治之言如此。仲景于少阳经用之于心下悸，易茯苓于腹痛，易芍药又于本经，言外别有会悟也。

黄杰熙评：三家之注，均能通黄芩之药性与主治，张陈二注近似，以形为主，张注以黄疸归胃上，似不够全面；陈注则归大肠，纯属错误；叶注改气寒味苦为苦平，似属不当。

盖黄芩用根，嫩时气壮味纯而中空，称子芩、条芩；老时气衰味降中空，称腐芩、空芩、枯芩、片芩，品质较次，药效差等。

子芩皮黄中绿，大苦大寒，清利湿热之功雄健，为治心肺肠

胃脾肝胆三焦湿热之妙药。

枯苓皮黄中空，气味苦寒，清利湿热，以其中空，似肺与大肠，治肺与大肠之湿热为效捷。

黄苓色黄归脾胃二经；中心色绿归肝胆二经；中空入肺大肠二经；气寒入肾膀胱二经；味苦入心小肠二经，归经如此，俱清利诸经湿热之专长，其主治则可迎刃而解，不必再赘，无湿热者绝对禁用。仲景药法，用其长弃其短，加减从心，妙不可言。

藁 本

气味辛温无毒，主治妇人疝瘕，阴中寒肿痛，腹中急，除头风寒，长肌肤，悦颜色。

张隐庵曰：藁本，高也，藁本始崇山，得天地崇高之气，秉太阳标本之精，故下治妇人疝瘕，阴中寒肿痛；中治腹中拘急；上除头风痛，盖太阳之脉本于下，而上额交巅，出入于中上也。太阳阳气有余，则长肌肤，悦颜色。

叶天士曰：藁本气温，秉天春升之木气，入足厥阴肝经；味辛无毒，得地西方之金味，入手太阴肺经。气味俱升，阳也。

妇人以血为主，血藏于肝，肝血少则肝气滞，而疝瘕之症生矣，藁本温辛，温行辛润，气不滞而血不少，疝瘕自平也。

厥阴之脉络阴器，厥阴之筋结阴器，其主阴中寒肿痛者，入肝而辛温散寒也。

厥阴之脉抵小腹，肝性急，腹中急，肝血不润也，味辛润血，所以主之。

风气通肝，肝经与督脉会于巅顶，风邪行上，所以头痛，其主之者，辛以散之。

肺主皮毛，长肌肤，味辛益肺之力；悦颜色，辛能润血之功也。

黄杰熙评：张注从藁，高也出发，归经于太阳标本之精，是出气味之外，别有会心，但未能作进一步之阐发，是其未足之处。盖藁本用根茎，有特殊芳香味，是从肺达皮毛，而窜入太阳膀胱经的，非能直入太阳经脉的。

而其所注主治，亦不切合实际，故张注所取者无多。

叶注遵经，归经切合实际，所论主治亦合拍，故叶注完全可取。

盖藁本生于四川者，称藁本；生于陕西者，称西芎，气味辛温香窜，其根又象川芎，作用相似，奸商多之伪充川芎，用此药时，须留心。

藁本服后，其气速达巅顶，其性温热味辛，是治风寒湿之特效药，若阴虚火旺之高血压症服之，如火上浇油，使脑充血，甚至溢血而暴死，用时须特别注意，免出医疗事故。

百 合

气味甘平无毒，主治邪气腹胀心痛，利大小便，补中益气。

张隐庵曰：百合色白属金，味甘属土；昼开夜合，应天道之昼行于阳，夜行于阴；四向六合，应土气之达于四旁。

主治邪气腹胀心痛者，邪气下乘于脾，则地气不升而腹胀；邪气上乘于肺，则天气不降而心痛，盖腹者，脾之部；肺者，心之盖也。

利大小便者，脾气上升，肺气下降，则水津四布，糟粕运行矣。

补中者补脾，益气者益肺也。

黄杰熙评：张注从百合之形色味，以及昼开夜合之性情，定出归经肺脾，即上下天地之气化，以解主治性能，到处逢春，迎

刃而解，堪称妙注。

不过，今之百合，除《本经》气味甘平之外，俱苦微寒之性，应定为甘苦微寒为是，俱人参之气味，生于根下，一茎直上，其花下垂，如天之覆下，根上结球形之百合，百片相拱，能吸天阳以归根，其色白入肺，能润肺止咳治痰血，宁心安神，清热利尿消肿胀，及《本经》主治各症。以其味甘归脾，味苦入心，微寒入肾膀胱之效果，总为滋阴清热之妙药。

仲景治百合病用之，有百合知母汤、百合滑石代赭石汤、百合鸡子黄汤、百合地黄汤、百合洗方、百合滑石散等六方，皆以百合为君药，以治伤寒愈后，余热未净，窜扰心神，致百脉一宗，悉致其病。肺朝百脉，治肺心以百合，滋阴清热则愈。

《海上奇方》治心下痞硬，用百合三十克、乌药九克，名百合乌药汤，用之亦有奇效，实得之于《本经》之主治也。

干 姜

气味辛温无毒，主治胸满咳逆上气，温中止血出汗，逐风湿痹，肠澼下痢。生者尤良。

张隐庵曰：太阴为阴中之至阴，足太阴主湿土，手太阴主清金，干姜气味辛温，其色黄白，乃手足太阴之温品也。

胸满者，肺居胸中，胸寒则满也；咳逆上气者，手足太阴之气不相贯通，致肺气上逆也；温中者，言干姜主治胸满咳逆上气，以其能温中也。脾络虚寒，则血外溢，干姜性温，故止血也。出汗者，辛以润之，开腠理，致津液，通气也。逐风湿痹者，辛能发散也。肠澼下痢，乃脾脏虚寒，《伤寒论》云“脾气孤弱，五液注下，下焦不阖，状如豚肝。”干姜能温脾土，故治肠澼下痢。生者尤良，谓生姜能宣达胃气，用之尤良。

按：桂枝、葛根、柴胡诸汤，并胃逆呕吐表寒诸症，多用生

姜，夫生姜乃老姜所生之子姜，主宣达阳明，为太阴之腑。故干姜治脾，生姜治胃，脏腑者，子母之谓也。

按《神农本草经》，止有生姜、干姜，而无炮姜，后人以干姜炮黑，谓之炮姜。《金匱要略》治肺痿，用甘草干姜汤，其干姜亦炮，是炮姜之用，仲祖其先之矣。姜味本辛，炮过则辛味稍减，主治产后血虚身热，及里寒吐血衄血便血之证。若炮制太过，本质不存，谓之姜炭，其味微苦不辛，其质轻浮不实，又不及炮姜功能矣。即用炮姜，亦必须三衢开化之母姜，始为有力，今药市中，多以伤水变味之生姜晒干炮用，未免有名无实。

叶天士曰：干姜气温，秉天春升之木气，入足厥阴肝经；味辛无毒，得地西方之金味，入手太阴肺经；炮炭色黑，入足少阴肾经。气味俱升，阳也。

胸中肺之分也，肺寒则金失下降之性，气壅于胸而满也，满则气上，所以咳逆上气之症生焉，其主之者，辛散温行也。

中者脾与胃也，脾胃为土，土赖火生，炮姜入肾助火，火在下谓之少火，少火生气，气充则中自温也。

血随气行，气逆火动，则血上溢，炮姜入肾，肾温则浮逆之火气皆下，火平气降，其血自止矣。

出汗者，辛温能发散也。逐风湿痹者，辛制风，温散湿也。辛温温肺，故大肠亦温，而下痢止矣。

生者其性尤烈，所以尤良。

陈修园曰：干姜气温，秉厥阴风木之气，若温而不烈，则得冲和之气而属土也；味辛得阳明燥金之味，若辛而不偏，则金能生水而转润矣，故干姜为脏寒之要药也。

胸中者，肺之分也，肺寒则金失下降之性，气壅于胸中而满也，满则气上，所以咳逆上气之症生焉，其主之者，辛散温行也。

中者土也，土虚则寒，而此能温之；止血者，以阳虚阴必走，得暖则血自归经也；出汗者，辛温能发散也；逐风湿痹者，治寒

邪之留于筋骨也；治肠澼下痢者，除寒邪之陷于肠胃也，以上诸治，皆取其雄烈之用，如孟子所谓“刚大浩然之气，塞于天地之间也”。

生则辛味浑全，故又申言曰“生者尤良”，即《金匱》治肺痿用甘草干姜汤，自注炮用，以肺虚不能骤受过辛之味，炮之使辛味稍减，亦一时之权宜。非若后世炮黑炮炭，全失姜之本性也，叶天士亦谓炮黑入肾，何其陋欤！

黄杰熙评：三家之注，皆提到生姜、干姜、炮姜及炭黑之区别与性用，而重点是论干姜。张注认为是手足太阴之温品；叶注遵气味，归足厥阴肝经与手太阴肺经，炮姜色黑，入足阴肾经；陈注归脾土与阳明燥金，各有所本，相互争鸣，而所论主治，皆通达无阻，比较之，以陈注为贴切可取，陈注取叶注合理之部分不提名，而批驳叶注之炮黑之炮姜则指名道姓，虽甚恰当，在道义上，似欠考虑。

盖干姜色黄入脾经；味辛入肺、胃、大肠三经；气温入肝经，归经应为肝脾肺胃大肠五经为全面周到。

以其辛温大热之性，以治脾胃二经为主，是治虚寒性之机能衰退；活力不足之病，若实热症或阴虚火旺症误用之，如抱薪救火，安危利灾矣。

生姜有汁，辛味大，具祛寒发汗止呕吐之作用，仲景桂枝汤、葛根汤等用之，有发汗之作用；生姜泻心汤用之，有祛寒之作用；小柴胡汤、小半夏汤用之，有止呕吐之作用。

干姜无汁而干缩，辛味稍增，温性不变，故发散之力稍减，温中之力大增，温性上升，又为温上焦之品，仲景理中丸、大建中汤、甘草干姜茯苓白术汤用之，温中焦，祛寒湿；小青龙汤用之，祛上焦之寒饮，治咳逆上气。

炮姜用干姜炮黑而成，辛味大减，甚至丧失辛味而成黑炭，味由辛变苦，体质轻虚，而浮走上焦，其性变为微温以祛寒饮而以

黑胜红而止因寒之吐衄血症。仲景甘草干姜汤用之，干姜微炮，以治肺痿吐涎沫而不咳者，其人不渴，必遗尿，小便数等虚寒毕露之症；时方断红饮，即炮姜炭、阿胶、侧柏、当归、川芎、蒲黄组成，以治吐血下血。

徐灵胎论干姜之药性曰：“凡味厚之药主守，气厚之药主散，干姜气味俱厚，故散而能守。夫散不全散，守不全守，则旋转于经络脏腑之间，驱寒除湿和血通气所必然矣，故性虽猛峻，不妨服食。”徐氏此论，可概《本经》干姜之气味主治矣。

赤 小 豆

气味甘酸平无毒，主下水肿，排痈肿脓血。

张隐庵曰：赤豆煮熟，其味则甘；生时其气微酸，故曰甘酸平。

豆者，水之谷也，其性下沉，是主从上而下，由外而内；色赤属火，又主从下而上，由内而外。

《本经》主下水肿，乃从上而下，由外而内也；排痈肿脓血，乃从下而上，由内而外矣。

黄杰熙评：张注以水火二气解赤小豆，水流下，下水肿；火炎上，排痈肿脓血，其解甚妙，其注颇超。

但不知水即是气，火即是血，实则以气血为解。赤小豆气平归肺主气；色赤入心主血；味甘入脾统血；味酸入肝藏血。

肺气下降，三焦通调，膀胱气化行，水从小便走，则下水肿。

心脾肝功能恢复，血气有权，则排痈肿，逐脓血，正复邪溜之义也。

仲景赤豆当归散用之，治先血后便。

大豆黄卷

气味甘平无毒，主治湿痹筋挛，膝痛不可屈伸。

张隐庵曰：黑大豆水浸出芽，约五寸长，便干之。《金匮》薯蕷丸，治虚劳不足，风气百疾，内用大豆黄卷，义可知矣。

黄杰熙评：张氏对大豆黄卷是说明，而不是注，仅此而矣。

豆，其形象肾，故曰豆为肾谷，色黑入肾；水浸出芽，芽形弯曲，象“乙”字，故入乙木肝，舒畅肝气；味甘入脾，畅达脾气而去湿；气平入肺，使肺气清肃而降下。总之，是入肝肾脾肺，壮筋骨，祛风湿，舒肝气，畅脾气，降肺气之妙药。

主治湿痹筋挛，膝痛不可屈伸者，正是壮筋骨，祛风湿之具体应用也。

仲景用药，悉遵《本经》，而其薯蕷丸用之，亦无出乎此义。

白薇

气味苦咸平无毒，主治暴中风，身热肢满，忽忽不知人，狂惑邪气，寒热酸痛，温疟洗洗，发作有时。

张隐庵曰：凡草木皆感春气而生，惟《本经》号白薇为春生，谓其能启水天之精气，随春气而生升也。其味苦咸，咸者水也，苦者火也，秉太阳寒水之气在下，标阳之气在上也；根色黄白，又得阳明秋金之气，而秋金之气，合肺气于皮毛，亦太阳之所主也。

太阳标阳之气，行于肤表，故主治暴中风；太阳寒水之气周于一身，故主治身热肢满，风邪淫于四末也；忽忽，眩晕貌，忽忽不知人，风邪行于头目也。夫风者，百病之长，善行数变，狂惑邪气，风淫血分，而涉于心包矣；寒热酸痛，风淫肌腠，而涉于经脉矣，白薇秉秋金之气，故治诸风之变证。

先热后寒，名曰温症，洗洗，如水洒身之寒也，温热发作有时，白薇秉寒水之气，上行外达，故治温症；又太阳之标阳，故治温症之洗洗。

黄杰熙评：张注以白薇秉太阳标热本寒之气为解，兼手太阴肺金为注，基本合拍，故所注主治各症，亦基本能通，但欠全面与扼要。

白薇气味苦咸平无毒，苦入心经；咸入足少阴肾经与足太阳膀胱经；气平入手太阴肺经，则归经应为心肺肾膀胱四经。

对主治各症，张注基本可取，兹不赘。但白薇以其苦咸平之性，毕竟是滋阴清热之品，用于阴虚风热症奇效，《金匱》竹皮大丸中用之，以治妇人乳中虚，烦乱呕逆，安中益气。

败 酱

气味苦平无毒，主治暴热火疮，赤气，疥疮疽痔，马鞍热气。

张隐庵曰：败酱俗名苦菜，味苦性寒，故主治暴热火疮赤气，而疥疮疽痔，马鞍热气，皆为火热之病，马者火畜也。《金匱》方有薏苡附子败酱散，亦主肠痈而消热气。

黄杰熙评：张注直截了当，平实可取。

白 鲜 根 皮

气味苦寒无毒，主治头风，黄疸，咳逆，淋漓，女子阴中肿痛，湿痹死肌，不可屈伸，起止行步。

张隐庵曰：白鲜嗅腥色白，气味苦寒，秉金水之精，而治风热之症。

主治头风，金能制风也。治黄疸，水能清热也。秉金气而益肺，故治咳逆。秉水气而益膀胱，故治男子之淋沥、女子之阴中肿痛。燥气属金，故治湿痹之死肌。水气主骨，故治骨属不可屈伸及不可起止行步也。

黄杰熙评：张注以白鲜皮秉金水之精，以解主治诸症，以五行生克论药性治则，简而明畅，堪称善用五行科学者也。

不过归经明白，则主治有必然之理焉。今补叙归经如下：白鲜皮色白归肺金；味苦入心与小肠而清热；气寒入肾与膀胱滋水清热，总观白鲜皮为清风湿热之专药，所以主治《本经》诸症，必能药到生效。《沈氏尊生》白鲜皮汤，即白鲜皮、茵陈蒿二味煎汤服，治湿热之阳黄，药到病除。

蓼 实 (附)

气味辛温无毒，主治明目温中耐风寒，下水气面浮肿痛痒。

黄杰熙释：蓼是古人蔬菜之一，其实象胡麻，色赤黑而尖扁，色赤入心与小肠二经；色黑入肾膀胱二经；气温入肝经；味辛入肺胃大肠三经；气香入脾经。

主治明目、温中、耐风寒者，肝开窍于目，脾胃居中，太阳经行身之表。蓼实辛润目，温散寒，色黑补水滋瞳仁，故明目。辛香补脾胃，温散寒，故温中。太阳经行肤表，辛制风、温胜寒，故耐风寒。

下水气面浮肿痛痒者，肺气虚寒，逆上则面浮肿；寒湿壅热则痛痒。蓼实味辛补肺气，气温散寒，肺气足则清肃下水气，水气下则面浮肿消；温散寒，辛燥祛湿，寒湿去则热散，而痛痒愈矣。

治以上诸症，总不离辛温发散为阳之功。

薇 衔

气味苦平无毒，主治风湿痹，历节痛，惊痫，吐舌，悸气，贼风，鼠痿痲肿。

张隐庵曰：按《月令》五月鹿角解，十一月麋角解，是麋鹿有阴阳之分矣，此草秉少阴水火之气，是以麋鹿咸宜，犹乌药之治猫狗也。

《素问》黄帝问曰：有病身热懈惰，汗出如浴，恶风少气，此为何病？歧伯曰：病名酒风，治之以泽泻、术各三分，麋衔五分，合以三指撮，为后饭。此圣方也，后世不知用之，诚缺典矣。

黄杰熙评：张注对薇衔，亦仅是说明，非注经体裁，说明此草秉少阴水火之气而已矣。

薇衔又称鹿衔草、麋衔草，气味苦平微寒，气平入肺经；微寒入足少阴肾经；味苦入手少阴心经。气味俱降，阴也。

主治风湿痹历节痛者，气平祛风，味苦燥湿，风湿去则痹愈，历节痛止。

心气下则惊；肝气逆则痫；舌为心窍，心气散则吐舌；水气凌心则悸气；风气袭人为贼风。薇衔以其味苦补心气，则惊去；气平平肝气，则痫愈；味苦补心气，则主收而吐舌止；味苦强心，悸气去；气平补肺金，则贼风去，故统能主治之。

鼠痿为水毒外泄，痲肿乃心火郁于肌腠，薇衔微寒补肾之正气，味苦解毒，故治鼠痿；味苦清火解毒，故消痲肿。

薇衔今时少用，一不明药性主治，二药房多不备此药，埋没药材岁月深之故尔。

土 瓜 根

气味苦寒无毒，主治消渴，内脾瘀血月闭，寒热酸痛，益气愈聋。

张隐庵曰：愚按：土瓜非世俗所食之王瓜，又非世俗所食之甜瓜，《本经》虽有其名，今人未之识也。因仲景《伤寒论》，有土瓜根为导之法，故存之。

黄杰熙评：从张氏之按语得之，张氏与今人皆不识此物，故存而不注。

盖不知土瓜即野王瓜，俗呼野甜瓜，其根似瓜萋根而长，得水土之气，秉木火之性，最能通经逐瘀。气寒入足少阴肾经、足太阳膀胱经；味苦入手少阴心经、手太阳小肠经。

主治消渴者，苦寒滋阴清火之效也。

内脾瘀血月闭者，脾统血，血瘀则统之过度而不行，则月闭经不行，土瓜根长，深入土中，故入脾土逐瘀而通经，所以治之。

寒热酸痛者，太阳经脉本寒而标热，太寒经病则发寒热；肝主筋而味酸，肝筋失养，则现酸痛之症，土瓜根气寒入太阳经脉以滋之；滋肾水养肝木则筋舒痛止，故可以治之。

益气愈聋者，肾开窍于耳，肾气衰败则耳窍闭而聋，益气者，气寒益肾气而愈耳聋也。

以其苦寒通利之性，《伤寒论》以土瓜根外用导大便；《金匱》土瓜根散，以治“带下、经水不利，少腹满痛，经一月再见者”。

厚 朴

气味苦温无毒，主治中风伤寒头痛，寒热惊悸，气血

痹死肌，去三虫。

张隐庵曰：厚朴气味苦温，色赤性烈，花实咸红，冬不落叶，肉厚色紫，盖秉少阳木火之精，而通于肌腠者也。

主治中风伤寒头痛寒热惊悸者，谓能解肌而发散也；助木火之精气，故能定肝心之惊悸也。

气血痹者，津液随三焦出气，以温肌肉，肝主冲任之血，充肤热肉，痹则血气不和于肌腠，厚朴气温色紫，能解气血之痹，而活死肌也。去三虫者，三焦火气内虚则生虫，厚朴得少阳之火化，而三虫自去也。

愚按：厚朴色赤性烈，生用则解肌而达表，秉木火之气化也；炙香则运土而助脾，木生火而火生土也。《金匱》方中，厚朴大黄汤，用厚朴一尺，取象乎脾也。

叶天士曰：厚朴气温，秉天春升之木气，入足厥阴肝经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气味升多于降，阳也。

《难经》云：“伤寒有五，中风、伤寒、湿温、热病、温病是也。”中风伤寒者，中风症也，风气通肝，肝脉与督脉会于顶巅，风为阳邪而伤上，所以头痛，其主之者，厚朴入肝，温散也。

寒热惊悸者，病寒热而惊悸也，心虚则悸，肝虚则惊，厚朴气温，可以达肝，味苦可以清心也。

肝藏血；心主血，血凝泣则成痹，苦可以泄，温可以行，故主血痹。死肌者，亦血泣而皮毛不仁麻木也，苦泄温行，故亦主之。

三虫，湿所化也，味苦燥湿，可以杀虫，所以去三虫也。

陈修园曰：厚朴气温，秉木气而入肝，味苦无毒，得火味而入心。然气味厚而主降，降则温而专于散，苦而专于泄，故所主皆为实证。

中风有便溺阻隔症，伤寒有下之微喘症，有发汗后，腹胀满症，大便硬症，头痛有浊气上冲症，俱宜主以厚朴也。

至于温能散寒，若能泄热，能散能泄，则可解逆气之惊悸。能散则气行，能泄则血行，故可以治气血痹及死肌也。三虫本湿气所化，厚朴能散而泄之，则三虫去也。

宽胀下气，经无明文，仲景因其气味苦温，而取用之，得《本经》言外之旨也。

黄杰熙评：张氏以木火之精而通会于肌腠者解经文，通则可通，绝非全面透彻。其云“花实咸红，冬不落叶”，与实际不符，厚朴花称木兰花，花大而色白，香气甚浓，叶大到霜降后即落，春分后再抽芽长叶。

叶注依经义归经，入于心肝二经，据归经论主治，亦基本正确可取，惟对“味苦”之解有错，陈注亦然。

陈注与叶注，基本相近，而陈注突出于治实症，故将中风解为真中风之实症，伤寒亦然，根据厚朴之性能，陈注在这点上可取。

对仲景用厚朴之义，弦外之音，陈氏是有心得体会的，不愧为伤寒名家。

盖厚朴气味苦辛温，除《本经》所述气味之外，有明显的辛香气味，川朴还俱油润之质，故归经在心肝之外还应归入脾胃肺大肠小肠诸经。属温热药，有破气行瘀的殊功。

苦乃火之味，入心补火，行血化瘀，绝非苦味是清热泄火之苦，何也？苦乃火之本味，而极苦则物极必反，变为水之性，其气则变寒，成为苦寒，才能泄火清热燥湿，而厚朴是苦温，正得本气本味，非变气变味也。

味不极不变，此是颠不破之真理，叶陈二氏不明此理，其注自然矛盾自启，好象厚朴身居二性，气温味寒，成了不分性别之阴阳药了，岂有此理，与实际根本不合。

厚朴是治风寒湿之药，有破积气、行瘀血之功，其能祛风湿者，味辛之故也。

仲景在《本经》主治之外，别有会心，即上所论述者，弹出弦外之音，最善用厚朴者也，有厚朴三物汤、厚朴七物汤、厚朴麻黄汤、厚朴大黄汤、厚朴生姜半夏甘草人参汤，以及梔子厚朴汤、半夏厚朴汤和桂枝加厚朴杏子汤，大、小承气汤等等，皆仲景用厚朴，或为君、或为臣、或为佐使之典范也。给食古不化，书本主义之学究，一记响亮耳光，学而无创造发明者，学之贼也，“天下文章一大抄”者，学贼之行为也。

黄 蘗

气味苦寒无毒，主治五脏肠胃中结热，黄疸肠痔，止泄痢，女子漏下赤白，阴阳蚀疮。

张隐庵曰：黄蘗气味苦寒，冬不落叶，秉太阳寒水之精；皮厚色黄，质润稠粘，得太阴中土之化。

盖水在地之下，由地中行，故主治五脏肠胃中之结热，黄疸肠痔。治结热者，寒能清热也。治黄疸肠痔者，苦能胜湿也。止泄痢者，先热泄而后下痢，黄柏苦寒，能止之也。女子漏下赤白，阴阳蚀疮，皆湿热下注之病，苦胜湿而寒清热，故黄蘗皆能治之也。

以上主治，皆正气无亏，热毒内盛，所谓下者举之，结者散之，热者寒之，强者泻之，各安其气，必清必静，则病气衰去，归其所宗，此黄蘗之治，皆有余之病也。如正气稍虚，饮食不强，便当禁用。

愚按：黄蘗秉寒水之精，得中土之化，有交济阴阳，调和水火之功，所治至广，而《真珍囊药性》云“黄蘗疮用，一言蔽之。”后人徒事歌括者，信为疮药而已，其曰“真珠”，殆以鱼目欺乱尔。

叶天士曰：黄柏气寒，秉天冬寒之水气，入足少阴肾经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气味俱降，阴也。

五脏六腑，心为君主，心属火，结热，火气结也，味苦泄热，所以主之。

黄疸胃经湿热之症，肠痔大肠火结之病，泄痢大肠湿热之症，其主之者，黄柏入肾，肾者胃之关，大肠肾之主也，气寒能清热，味苦能燥，故治以上诸症也。

漏下赤白，胎漏下血，及赤白带下也，一因血热妄行，一因湿热下注，黄柏入肾，寒能清热，苦可燥湿，所以主之。

、阴阳蚀疮，阴户伤蚀成疮也，诸疮皆属心火，其主之者，苦寒泄火也。

陈修园曰：黄蘗气寒，秉天冬寒之水气；味苦无毒，得地南方之火味；皮厚色黄，得太阴中土之化。

五脏为阴，凡经言主五藏者，皆主阴之药也。治肠胃中热结者，寒能清热也；治黄疸肠痔者，苦能胜湿也；止泄痢者，湿热泄痢，惟苦能除之，而且能坚之；女子胎漏下血，因血热妄行；赤白带下，及阴户伤蚀成疮，皆由湿热下注，黄蘗寒能清热，苦能燥湿，所以主之。然皆正气未伤，热毒内盛，有余之病，可以暂用，否则不可姑试也。

凡药之燥者，未有不热，而寒者未有不湿，黄柏于清热之中，而兼燥湿之效。

黄杰熙评：张陈二氏之解，归经主治，基本相同，陈氏是重复张氏之注；叶氏之归经，紧依《本经》气味，缺取其色，是属不全，对主治之解，三氏基本一致，故皆可取。

黄柏苦寒，是清利湿热之专药无疑，但为什么苦能燥湿，三氏皆莫得其理之所以然。

苦为火之味，火生土后，退出火之红色，变土之黄色，黄柏之苦，乃火之退气，以其为退气，所以正能退火，火就燥，以其退火之色性，正能入脾胃而燥湿，故与其他燥性药不同，其他燥性药是温燥、热燥，此为寒燥，即物极必反后，火性变为水性，水

性寒，故气味为苦寒。

梔 子

气味苦寒无毒，主治五内邪气，胃中热气，面赤，酒
疸鼓鼻，白癞、赤癞、疮疡。

张隐庵曰：梔子气味苦寒，其色黄赤，春荣夏茂，凌冬不凋，
盖秉少阴之气化，少阴寒水在下，而君火在上也；花多五瓣，而
梔花六瓣，六者水之成数也，梢杪结实，味苦赤色，房刻七棱九
棱，是下秉寒水之精，而上结君火之实。

主治五内邪气，胃中热气者，秉寒水之精，而治热之在内者
也；面赤、酒疸鼓鼻、白癞、赤癞、疮疡者，结君火之实，而治热
之在外也，梔子能启寒水之精，清在上之火热，复能导火热之气
以下降者如此。

梔子生用，能启水阴之气上滋，复导火热以下行，若炒黑则
但从上而下，不能启水阴以上滋，故仲景梔子豉汤，生用不炒，有
交媾水火，调和心肾之功。而后人委言，梔子生用则吐，炒黑则不
吐，且以梔子豉汤为吐剂。愚每用生梔子及梔子豉汤，并未曾吐，
夫不参《经》旨，而以讹传讹者，不独一梔子为然矣。

叶天士曰：梔子气寒，秉天冬寒之水气，入足太阳寒水膀胱
经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气味俱降，阴
也。

五内者，五脏之内也，五脏为阴，其邪气内，阳邪也，梔子
苦寒清阳，所以主之。

胃为阳明，胃中热气，即燥热之气也，气寒秉冬寒之水气，所
以除燥热也。

心主血，其华在面，面赤色，心火盛也，味苦清心，所以主
之。

鼻属肺，肺为金，金色白，心火乘肺，火色赤，故鼻红，成酒皰齆鼻，其主之者，入心清火也。

癩者，麻皮风也，膀胱主表，心火郁于膀胱寒水经，则湿热成癩也。白者湿也，赤者火也，梔子入心与膀胱，苦寒所以燥湿热，所以主之也。

疮疡皆属心火，苦寒清心，故主疮疡也。

陈修园曰：梔子气寒，秉水气而入肾；味苦，得火味而入心。

五内邪气，五脏受热邪之气也；胃中热气，胃经热烦，懊憹不眠也；心之华在面，赤则心火盛也；鼻属肺，酒皰齆鼻，金受火克而色赤也；白癩为湿；赤癩为热；疮疡为心火，梔子下秉寒水之精，上结君火之实，起启水阴之气上滋，复导火热之气下行，故统主以上诸症。

唯生用之气性尚存，若炒黑，则为死灰无用之物矣。仲景梔子豉汤用之者，取其交垢水火，调和心肾之功，加香豉以引其吐，非梔子能涌吐也。

黄杰熙评：三家注，在归经上是一致的，主治上亦基本相同，惟叶注在病机叙述上较详尽。三家注虽能反映梔子之性能，但仍有些遗蕴，容下补明之。

梔子花白实红，味苦气寒，形象心包，故可归入心、肺、心包、三焦、肾五经。

其质轻虚，入水即浮，是引水济火，交心肾，以坎填离之妙药，又能引火气经心包三焦曲折下行，经膀胱而排出体外，内而五脏，外而肌腠皮肤之湿热，皆能清化。经三焦膀胱而排出，除《本经》主治外，又为治黄疸等之妙药，仲景最善用此药组方，然皆生用，其性全而有效；若炒焦炒黑，其性半失到全失，用之则效减到无效，不可不知。

仲景梔子豉汤，治上焦热邪壅滞而吐者，是清火而止吐之方，非致吐明矣！余用此方多至上千次，从未见一例服汤后而致吐者。

后人学不明《经》，更无实践，胡说八道，还要著书，沽名钓誉，骗取职称，真学之贼也。

仲景栀子甘草豉汤，治上症而少气；栀子生姜豉汤，治若吐者；栀子大黄汤，治酒疸；栀子厚朴汤，治伤寒下后，心烦、腹满、卧起不安者；栀子干姜汤，治伤寒，医以丸药大下之，身热不去，微烦者；栀子柏皮汤，治伤寒，身黄发热，以上七方，皆用栀子为君帅，横扫湿热之邪也。

仲景茵陈蒿汤，治黄疸；枳实栀子豉汤，治大病差后，劳复者；大黄硝石汤，治黄疸腹满，小便不利而赤，自汗出，此表和里实，当下之，以上三方，皆用栀子为将相，协助破敌者也。

以上仲景十方，何方致吐？试问古今之著书立说者，读过《伤寒论》、《金匱要略》乎？如果读过，是走马看花读；还是下马看花读呢？真正研究过没有？用过仲景方乎？治愈率如何？有效率如何？心得体会总结后又如何？等等，一系列问题，解决过没有？竟敢欺世盗名，胡说八道，刊于纸素，骗己骗人，罪当何等？还是报于子孙，还是报于来世呢！善恶到头终有报，只差来早与来迟。

杏 仁

气味甘苦温、冷利有小毒，主治咳逆上气，雷鸣喉痹，下气产乳金疮，寒心奔豚。

张隐庵曰：杏仁气味甘苦，其实苦重甘，其性带温，其质冷利，冷利乃湿润之意。

主治咳逆上气者，利肺气也，肺气利，而咳逆之气自平矣。

雷鸣者，邪在大肠；喉痹者，肺窍不利；下气者，谓杏仁质润下行，主能下气，气下则雷鸣、喉痹皆愈矣。

产乳者，产妇之乳汁也，生产无乳，杏仁能通之。金疮者，金

刃伤而成疮也，金伤成疮，杏仁能敛之。寒心奔豚者，肾藏水气凌心而寒，如豚上奔，杏仁治肺，肺者金也，金为水之母，母能训子逆，又肺气下行，而水逆自散矣。

叶天士曰：杏仁气温，秉天春和之木气，入足厥阴肝经；味甘得地中正之土味，入足太阴脾经；杏果本苦，且属核仁，而有小毒，则秉火性，入手少阴心经。气味俱升，阳也。

肺为金脏，气上逆乘肺，则咳逆，肺苦气逆，急食苦以泄之，杏仁苦而下泄，所以止咳也。

火结于喉，闭而不通，则为喉痹；雷鸣者火结痰壅，声如吼也，杏仁温能散结，苦能下泄，甘可缓急，所以主之也。

杏仁味苦制肺，制则生化，则肺下行，所以下气。肝藏血，血温则流行，故主产乳。血既流行，疮口亦合，故又主金疮也。心阳虚，则寒水之邪，自下如豚上奔冲犯心血矣，故为寒水奔豚，其主之者，杏仁火土之气，味苦能益心阳而伐水邪也。

杏本有小毒，若双仁则失其常，所以能杀人也。

陈修园曰：杏仁气味甘苦，其实苦重于甘，其性带湿，其质冷利，冷利者，滋润之意也，“下气”二字，足以尽其功用。

肺实而胀，则为咳逆上气；雷鸣喉痹者，火结于喉为痹痛，痰声之响，如雷鸣也，杏仁下气，所以主之。

气有余便是火，气下即火下，故乳汁可通，疮口可合也。

心阳虚，则寒水之邪，自下上奔犯于心位，杏仁有下气之功，伐寒水于下，即所以保心阳于上也。

凡此皆治有余之证，若劳伤咳嗽之人，服之必死。时医谓产于叭哒者，味纯甘可用，而不知纯甘非杏仁之正味，既无苦降之功，徒存其湿以生痰，甘以壅气，阴受其害，至死不悟，惜哉。

黄杰熙评：三家注，按时代计，张氏居前，叶氏居中，陈氏殿后，张注创先，故注多舛错，如“雷鸣”认为在大肠，显与《经》文不合，又忽略归经，所论主治病机，亦欠周彻。

叶注实在，气味归经，主治病机，依法度进行，毫无取巧之心，故其所注，理论实际，融于一体，最为可取可法，虽对杏仁苦泄之解，不甚得体，亦大纯小疵。

陈注殿后，似取张叶二注之精华，突出“下气”二字，为其注重心，可谓善学者也，善学者必能创新，杏仁之功用，主要在下气上。

而“冷利”二字，叶氏避之；张陈之解，实未得其要。冷利即油滑之别称，杏仁以其质油滑而苦温，故能下气，即以苦温行油滑，才能泄下肺气，以治咳逆上气，雷鸣喉痹，下气产乳金疮，寒心奔豚，到润肠通便等症。

杏仁之毒，主要在皮上，用时须温水泡洗去皮，以去其毒，带皮者，绝对不可用，俗语云“杏树下面埋死人”，指中其毒也。

杏仁之归经，还有遗蕴，其色白入肺经；味甘油滑入脾经；苦入心经；气温入肝经。

寒心奔豚者，心阳心火衰，则心寒；水气从肾凌心，状如奔豚，杏仁苦入心补火，气温入肝，补火之母以生火，火足心阳复，水则不敢凌心，水火既济，则寒心奔豚愈。

总之，苦温之苦，其苦以火论；苦寒之苦，其苦则成水性，物不极则不反，保持原味原性不变；物极必反，变成相反之性。

桃 仁

气味苦甘平无毒，主治瘀血，血闭症瘕，邪气，杀小虫。

张隐庵曰：桃仁杏仁，味俱甘苦，杏仁苦胜，故曰甘苦；桃仁甘胜，故曰苦甘，桃色先青后紫，其味甘酸，秉木气也，其仁亦主疏肝。

主治瘀血血闭，疏肝气也。症瘕邪气，乃血与寒汁沫，留于

肠胃之外，凝结而为症瘕，肝气和平，则症瘕邪气自散矣。杀小虫者，厥阴风胜则生虫，肝气疏通，而虫自杀矣。

《素问》五果所属，以桃属金，为肺之果。后人有桃为肺果，其仁治肝之说。愚按：桃味酸甘，其生色青熟紫，并无金体，窃疑《素问》之桃，乃胡桃也，俗名核桃，外壳内白，庶几似之。若谓桃，则惟毛桃仁之桃，皮色白有毛，余即无矣，生时肉青白，熟则紫矣，若以外核内仁当之，则杏梅未始不如是，献疑于此，俟后贤正之。

叶天士曰：桃仁气平，秉天秋收之金气，入手太阴肺经；味苦甘无毒，得地中南火土之味，入手少阴心经、足太阴脾经。气降多于升，阴也。

心主血，脾统血，血者阴也，有形者也，周流乎一身，灌溉乎五脏者也，一有凝滞，非瘀即闭矣，至有形可徵，即成症体，物成形则成瘕，盖皆心脾不运故也，桃仁甘以和血，苦以散结，则瘀者化，闭者通，而积者消矣。

桃木之精，能镇辟不祥，所以主邪气；秉火之苦味，所以杀小虫也。

陈修园曰：桃仁气平为金气，味苦为火味，味甘为土味，所以泻多而补少者，以气平主降，味苦主泄，甘味之少，不能与之敌也。徐灵胎曰：“桃得三月春和之气以生，而花色鲜明似血，故一切血郁血结之症，不能调和畅达者，此能入于其中而和之散之。然其生血之功少，而去瘀之功多者，何也？桃本非血类，故不能有所补益，若瘀瘕皆已败之血，非生气不能流通，桃之生气皆存于仁，而味苦又能开泄，故能逐旧而不伤新也。”

黄杰熙评：张注是解桃，而非注仁，多影响之谈，而难落实，故张注所取无多。

叶注遵经，归经实在，所注经文，步步落实，堪称妙注。

陈注不过抄引徐氏之说，徐注超妙，充分发挥了仁之作用，与

叶注合勘，桃仁之药性，得其全矣。

桃仁无毒，皮红仁白，入血分者，多仗其皮；入气分者，多仗其仁，故用时宜留其皮，若去其皮，则作用全非，而市场之桃仁偏信“雷公炮制”法，去皮出售，所以用之无效，故用时宜亲自检点，免以杏仁混入，反有害而无益，因恰得其反也。

桃 胶 (附)

气味苦平无毒，炼服保中不饥，忍风寒。

黄杰熙释：桃胶取自《别录》，用桑灰汁炼服。气平入肺经补气，味苦入心经和血，血气通和则保中不饥，而忍风寒。

乌 梅

气味酸温平涩无毒，主治下气，除热烦满，安心，止肢体痛，偏枯不仁死肌，去青黑痣，蚀恶肉。

张隐庵曰：梅花放于冬，而实熟于夏，独得先春之气，故其味酸，其气温平而涩，涩附于酸也。

主下气者，得春生肝木之味，生气上升，则逆气下降矣。

除热烦满者，秉冬令水阴之精，水精上滋则烦满除，而胸膈不满矣。

安心者，谓烦热除而胸膈不满，则心气亦安。

肢体痛，偏枯不仁，死肌，皆阳气虚微，不能熏肤充身泽毛，若雾露之溉，梅实结于春，而熟于夏，主敷布阳气于肌腠，故止肢体痛及偏枯不仁之死肌；阳气充达，则其颜光，其色鲜，故去面上之青黑痣，及身体虫蚀之恶肉。

愚按：乌梅味酸，得东方之木味，放花于冬，成熟于夏，是秉冬令之水精，而得春升之上达也，后人不体经义，不穷物理，但

以乌梅为酸敛收涩之药，而春生上达之义，未之讲也，惜哉。

叶天士曰：乌梅气平，秉天秋收之金气，入手太阴肺经；味酸无毒，得地东方之木味，入足厥阴肝经。气味酸平，阴也。

肺主气，气平则降，所以下气；肝属木，木枯火炎，逆于胸中，则热而烦满，乌梅味酸，能收浮热，吸气下行，所以止烦满也。

心者火也，木之子，味酸气平，能平肝木，木和心自安也。

肢体属脾，脾为土，肝木克土则痛，味酸则敛，所以止痛。

肝藏血，血枯则偏枯不仁死肌矣，味酸益肝血，血和则润，不仁死肌愈也。

去青黑痣，及蚀恶肉，酸收之味外治，能消痣与肉也。

陈修园曰：乌梅气平，秉金气而入肺；气温秉木气而入肝；味酸无毒，得木味而入肝，味涩，即酸之变味也，味胜于气，以味为主。梅得东方之味，放花于冬，成熟于夏，是秉冬令之水精，而得春生之气，以上达也。

其下气者，生气上达，则逆气自下矣。

热烦满，心不安，《伤寒论》厥阴症，以气上撞心，心疼热等字赅之，能下其气，而诸病皆愈矣。

脾主四肢，木气不达而为死肌，乌梅能和肝气、养肝血，所以主之。

去青黑痣及蚀恶肉者，酸收之味，外能消痣与恶肉也。

黄杰熙评：张注据梅之花实时令，兼气味为解，而得乌梅之药性主治，堪称好注，其后之评语，亦近实之直言，故可取。

叶注紧依经文，处处落实，归经、主治、病机、治则，注解周匝，较之张注，更为超妙，贴近实际。

陈注实取张叶二注之精义，加工整理而成，故可取。

三家注之遗略疏忽应补之，乌梅色黑入肾经；气味酸温，入肝补肝温肝，为厥阴经之要药；气味平涩，入肺补肺气平肝木，并

涩敛滑脱而止久痢，完成肺金秋收之性，《本经》不厌其烦述说气
味酸温平湿无毒者，其义在此。

仲景乌梅丸，用之治蛔厥，又主久痢。其丸以乌梅为君，佐以
辛温与苦寒及补正之品成之，以治蛔厥、久痢及厥阴经寒热错杂之
病，颇为相宜，堪称用药成方之典范。

枳 实

气味苦寒无毒，主治大风在皮肤中，如麻豆苦痒，除
寒热结，止痢，长肌肉，利五脏，益气力轻身。

张隐庵曰：枳实气味苦寒，冬不落叶，秉少阴标本之气化，嗅
香形圆，花多白刺，穰肉黄白，又得阳明金土之气化。

主治大风在皮肤中，如麻豆痒者，得阳明金气而治风，秉少
阴水气而清热也。除寒热结者，秉少阴本热之气而除寒，标阴之
气而除热也。止痢长肌肉者，得阳明中土之气。五脏发源于先天
之少阴，生长于后天之阳明，故利五脏。得少阴之气，故益气；得
阳明之气，故轻身。

仲祖本论，有大承气汤，用炙厚朴、炙枳实；小承气汤用生
厚朴、生枳实，生熟之间，有意存焉，学者不可不参。

叶天士曰：枳实气寒，秉天冬寒之水气，入足太阳寒水膀胱
经、手太阳寒水小肠经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阳
相火三焦经。气味俱降，阴也。

太阳主表，经行身表，为外藩也，大风在皮肤中，如麻豆痒
者，皮毛患大麻风也，其主之者，枳实入太阳，苦寒清湿热也。

小肠为寒水之经，丙火之腑，寒热结者，寒热之邪，结于小
肠也，其主之者，苦以泄结也；小肠为受盛之腑，化物出焉，受
物不化，则滞而成痢，枳实苦寒下泄，所以止痢。

太阴脾主肌肉，乃湿土之脏也，土湿则脾困，而肌肉不生，枳

实入小肠膀胱，苦寒清湿热，所以脾土燥而肌肉长也。

三焦人身一大腔子也，苦寒清三焦之相火，火息则阴足，而五脏皆安也。

益气者，枳实泄滞气，而正气受益也；轻身者，去邪消积，则正气流通，而身轻也。

陈修园曰：按《本经》有枳实，无枳壳，唐《开宝》始分之，然枳壳即枳实之大者，宣性发而气散，不如枳实之完结，然既是一种，亦不必过分。

黄杰熙评：张注归经齐备，盖以气味取少阴标本之气化；以嗅香形圆，花多白刺，瓤内黄白，取阳明金土之气化，故谓之齐备也。

以少阴水火，阳明土金注解主治各症，亦游刃有余，颇中肯启，故此注趁然可取。

惟对《伤寒论》大、小承气汤之说有错，而小承气汤所用厚朴、枳实，并非生用，同样是炙后用。二承气汤所不同者，一是份量不同，大承气厚朴用半斤、炙去皮，枳实五枚、炙；小承气厚朴用二两、炙去皮，枳实三枚、大者、炙。二是煎法不同，大承气先煎枳朴二味，减水一半后去滓，再入大黄煎，减水五分之三后，再去渣，再入芒硝，更上微火煎一两沸，分温再服，大便下，余勿服；小承气是三味同煎，减水约三分之二，分温二服，大便下，余勿服。用量与煎法，颇有学问，学者三思。

陈氏《神农本草经读》之注，对张注照录不误，其后所加者，即此之“按”语，所提“唐开宝”，应改为《宋开宝》，乃为正确。

叶注紧依经文气味，归入小肠、膀胱、三焦等三经，主治各症，依归经气味以解其病机，注处即通，亦堪称妙注，但缺乏形色质，故归经亦欠全面，陈氏之注，取张而不取叶者，为此也。但二注必须合勘，始能全面透彻。

枳实毕竟是寒凉之破气药，若无湿热积聚气滞症，绝对禁用。

归经应为胃、大小肠、三焦、膀胱、心肾等七经为是，破气多，破血少，用于实证，不宜虚症，仲景药法，可为典范，虚中夹实，宜配补药，如枳实汤之配白术；枳实芍药散之配芍药；枳实薤白桂枝汤之配桂枝等，用药之法，仲景其圣矣。

枳 壳（附）

气味酸苦微寒无毒，主治风痒麻痹，通利关节，劳气咳嗽，背膊闷倦，散留结胸膈痰滞，逐水消胀满，大肠风，安胃止风痛。

张隐庵曰：《上世本草》，止有枳实，至《开宝本草》，始分枳之小者为枳实，大者为枳壳。愚谓小者其性藏密而气全，大者其性宣发而气散。或云大者气足而力厚，小者气不足而力薄。不知气之足也，在于旺时，若过其时，则反薄矣。

又李东垣云：枳壳缓而枳实速；王好古云：枳壳主高，枳实主下，高者主气速。气血之说，何可分乎！

叶天士曰：枳壳气微寒，秉天初冬寒水之气，入足太阳寒水膀胱经、手太阳寒水小肠经；味苦酸无毒，得南东木火之味，入足少阳相火胆经、手厥阴风木心包络经。气味俱降，阴也。

太阳经行身表，附皮毛而为卫者也，太阳为寒水，风入寒水，则风湿相搏，风痒麻痹矣，其主之者，酸可治风，苦可燥湿者也。关节筋束之，厥阴主筋，苦寒清湿热，故利关节也。劳则伤少阳之气，于是相火刑金，而咳嗽矣，枳壳味酸，可以平少阳，苦可以泻，相火息木平而咳止矣。

背膊太阳经行之地，火热郁于太阳，则背膊闷倦，苦寒下泄，可以泻火热矣。

手厥阴经，起于胸中，厥阴为相火，火炎胸中则痰涎滞结，枳壳寒可清火，苦可泄胸膈之痰也；入小肠膀胱而性寒苦，故可以

逐水消胀满。风为阳邪，入大肠阳经，两阳相烁，则血热下行而为肠风，心包乃风木之经，代君行事而主血，枳壳清心包之火，可以平风木而治肠风。

胃为燥金，味苦能燥，所以安胃。《经》云：味过于苦，胃气乃厚。盖以苦能泄也，风入太阳，气壅而痛，枳壳味苦能泄，所以止痛也。

黄杰熙评：张注与陈氏在枳实后之“按”语相似，应说成陈氏袭张氏对枳壳之注为是。

枳之分实与壳，始于宋《开宝本草》，枳实采于七、八月，为未成熟之枳果；枳壳采于九、十月，为已成熟之枳果。所以枳实气味壮而全；枳壳气味衰而减。衰减者，内部空虚，气上浮而外散，用治上焦及皮表之症，优于枳实。

叶注俯而就下，依据《开宝》气味归经，基本正确，不过苦酸归经应补入手少阳三焦经与足厥阴肝经为全面，三焦网膜，内包脏腑之外；外透肌肤为腠理，结束于关节为筋，而是厥阴肝主筋，正是循三焦网膜而行气于关节之筋，故补入肝与三焦二经，对叶注之解主治各症，更能通畅明白。总起来说，叶注枳壳，基本可取。

山 茱 萸

气味酸平无毒，主治心下邪气寒热，温中逐寒湿痹，去三虫，久服轻身。

张隐庵曰：山茱萸色紫赤而味酸平，秉厥阴少阳木火之气化。手厥阴属心包，故主治心下之邪气热，心下乃厥阴心包之部也。手少阳属三焦，故温中，中、中焦也。

中焦取汁，奉心化赤而为血，血生于心，藏于肝，足厥阴肝主之血，充肤热肉，故逐周身之寒湿痹。

木火气盛，则三焦通畅，故去三虫。

血充肌腠，故久服轻身。

愚按：仲祖八味丸用山茱萸，后人去桂附，改为六味丸，以山茱萸为固精补肾之药，此外无他用，皆因安于苟简，不深探导故也。今详观《本经》山茱萸之功能主治如此，学者能于《本经》之内会悟而广其用，庶无拘隘之弊。

叶天士曰：山茱萸气平，秉天秋成之金气，入手太阴肺经；味酸无毒，得地东方之木气，入足厥阴肝经。气味俱降，阴也。

心下，脾之分也，肝之邪、肝木之邪也。肝木血少气充，则克脾土，并于阳则热，并于阴则寒矣，山茱萸味酸入肝，益肝血而敛肝气，则下之寒热自除矣。

山茱萸味酸收敛，敛火归于下焦，火在下谓之少火，少火生气，所以温中。

山茱萸气平益肺，肺主皮毛而司水道，水道通调，则皮毛疏理，而寒湿之痹瘳矣；三虫者，湿热所化也，湿热从水道下行，则虫亦去也。

久服味过于酸，肝气以津，肝者敢也，生气生血之脏也，所以轻身也。

陈修园曰：山萸色紫赤而味酸平，秉厥阴少阳木火之气，手厥阴心包、足厥阴肝，皆属于风木也；手少阳三焦、足少阳胆，皆属于相火也。

心下巨阙穴，乃手厥阴心包之募，又心下为脾之分，曰邪气者，脾之邪，实为肝木之邪也，足厥阴肝木血少气充，则克脾土，并于阳则热，并于阴则寒也，又寒热往来，为少阳之病，山萸秉木火之气化，故咸主之。

山萸味酸收敛，敛火归于下焦，火在下谓之少火，少火生气，所以温中。

山萸味酸入肝，肝主藏血，血能充肤热肉，所以逐周身寒湿

之痹。

三虫者，厥阴风木之化也，仲景乌梅丸之酸，能治蚘厥，即从此物悟出。

肝者敢也，生气生血之脏也，孙真人生脉散中，有五味子之酸，能治倦怠而轻身，亦从此物悟出。

黄杰熙评：张氏之注，从山茱萸色紫赤味酸平出发，归入厥阴少阳木火之气化，即归入心包与三焦二经，从而注解主治各症，因归经有误，故注解龃龉，而其注所取无多。

叶注归入肺肝二经，归经正确，所注主治各症之机转治则，颇合实际，可取者最多。

陈注是取张叶二注之精华，揉合己意而成，归经取木火气化之全，在张注心包三焦之外，补入肝胆二经，而对主治之注释，主要袭取叶注而成，突出一个“酸”字，颇得要领。

盖山茱萸气味酸温，而非平，酸者木之味，温者木之气，故得木气最全，归入足厥阴肝经。肝藏血，肝主疏泄，凡人身元气，藏于肾，经肝木而上达，即乙癸同源之义。其色紫黑，黑者入肾经滋水，紫者入心经补火，则肾肝心一气贯通而入肺，成天元一气，上下舒和之态。

人之将终，元气上脱，必经肝经而奔上，山茱萸味酸补肝血而敛元气以归根，气温畅肝气而上达，以调肺气，而主呼吸，故山茱萸为治气上脱之无上妙药。近代人张寿甫爱用此药，屡建奇功，余遵用之，百发百中，起死回生。若误用人参，正如喻嘉言所云：“气高不返”，速其死也。

因得木气最全，既可敛、又能疏，虚症用之能敛补，实证用之能疏通，敛正气而疏逐邪气，故主治心下邪气寒热，温中逐寒湿痹，去三虫，久服轻身等等，皆敛正气逐邪气之功也。

不过，其核酸而湿，敛之过甚，服之小便壅闭，滴沥难通，用时须亲自检点，去净核用，商品称“净萸肉”，近有一种邪说，谓

其核能用，真自欺欺人害人之胡说八道，决不可信。

仲景肾气丸用之，补肝肾而敛真元也。

吴 茱 萸

气味辛温，有小毒，主治温中下气，止痛除湿血痹，逐风邪，开腠理，咳逆寒热。

张隐庵曰：山茱萸、吴茱萸，咸秉木火之气，秉火气故主温中，秉木气故主下气，中焦温而逆气下，则痛自止矣。

湿血痹者，湿伤肌腠，致充肤热肉之血，凝泣为痹，少阳炎热之气行于肌，脾肝主冲任之血，淡渗皮肤则湿血痹可除矣。

又曰逐风邪者，言湿痹可除，而风邪亦可逐也。

气味辛温，故开腠理，腠理开，则肺病之咳逆，皮肤之寒热皆治矣。

叶天士曰：吴茱萸气温，秉天春和之木气，入足厥阴肝经；味辛有小毒，得地西方燥烈之金味，入手太阴肺金。气味俱升，阳也。

中者脾也，太阴经也；肺主气，亦太阴也，气温则肺气下行，而太阴亦暖，所以温中下气也。

寒邪客于胸腹，则真气不通而痛矣，辛温则流行和散，所以止痛也。辛温暖肺，肺气通行，则水道通调，故又除湿。血泣则成痹，肝藏血，血温则活，故主血痹。辛温为阳，则能发散，故逐风邪。肺主皮毛，而司腠理，辛温疏散，腠理自开。形寒饮冷则伤肺，肺伤则气不下降，而火反上炎，咳逆寒热之症生焉，吴茱萸辛温暖肺，肺气下降，而寒热咳逆之症自平也。

陈修园曰：吴茱萸气温，秉春气而入肝；味辛有小毒，得金味而入肺。

气温能驱寒，而大辛之味，又能裨肺，令之独行而无所旁掣，

故中寒可温，气逆可下，胸腹诸痛可止，皆肺令下行，坐镇而无余事。

仲景取治阳明，食谷欲呕症，及干呕吐涎沫症，从《本经》而会悟于言外之旨也。

肺喜温而恶寒，一得茱萸之大温大辛，则水道通调而湿去；肝藏血，血寒则泣而成痹，一得吴茱萸之大温大辛，则血活而痹除。

风邪伤人，则腠理闭而为寒热咳逆诸症，吴茱萸大辛大温，开而逐之，则咳逆寒热诸症俱平矣。

然犹有疑者，仲景用药，悉遵《本经》，而少阴病吐利，手足逆冷，烦燥欲死者，吴茱萸汤主之。二十字与《本经》不符，而不知少阴之脏，皆本阳明水谷以资生，而复交会于中土，若阴阳之气，不归中土，则下燥而上烦，中土之内气绝，则四肢逆冷而过肘膝，法在不治，仲景取吴茱萸大辛大温之威烈，佐人参之冲和，以安中气，姜枣之和胃，以行四末，专求阳明，是得绝处逢生之妙，张隐庵、叶天士之解俱浅。

黄杰熙评：张注将吴茱萸与山茱萸并列，来了个威秉木火之气，以注解主治各症，因在根据上是非参半，故所注亦难吻合，可取者太少，不足为法。

叶注据经文气味归经是正确的，故所注主治各症，病机治则，基本属实，故可取者多。

陈注一切皆袭取叶注而成，补充者不过仲景之药法耳。陈氏长于伤寒水病，在补充中，故颇有心得发明，是杰出可取的。

而吴茱萸之本性，因时代变迁，气化异等，除《本经》所述辛温有小毒外，尝之有明显的苦味与膈气，故归经应为，气膈入肝经；气温入肝经；味苦入心经；味辛入肺胃与大肠经；色黄褐而黑，黑入肾经；黄褐入脾经，为入五脏胃肠，祛寒湿，通血脉，升清降浊之妙药。

仲景遵《本经》括时代变化而用药，绝不教条，堪称医圣。故

所拟吴茱萸汤，以吴茱萸辛苦而温，气膈定性，既得肝之气，心肺之味，最能温肝平肝而泄肝中郁火。肝乃阴尽阳生之经，中见少阳胆火，人之元气由肝而上升，所谓乙癸同源，再散入少阳胆与三焦网膜，主一身之气化，吴茱萸温肝降浊，对元气之升，多有齟齬，故必佐以人参助元气之升，使升降无忤；生姜散水降浊而止呕吐；大枣补中益气，促使肝脾之气皆升，胆胃之气皆降，则清升浊降，何呕吐逆乱之有哉！仲景用药组方如此，既遵《本经》，又有创造发明。

如：“食谷欲吐，属阳明也，吴茱萸汤主之；得汤反剧者，属上焦也”。按：“中焦有寒，其口多涎”，乃肝胃有寒，浊阴上泛所致，肝之寒邪进入胃中，胃因而寒，则胃阳衰而不降，故食谷欲呕，而又呕之不出，阳郁于浊阴之中，降不下，逆上不能，故成食谷欲呕之状，故曰“属阳明也。”治此者，非吴茱萸不能，其味辛可散浊，苦可降浊，温可散肝胃之郁阳，一物而兼数能。若用半夏，只能降逆散水，对浊阴郁阳则无功。

“少阴病，吐利，手足逆冷，烦躁欲死者，吴茱萸汤主之。”按：少阴寒化病，本为阴盛阳虚，乙癸同源，阴寒上逆，则肝寒而肝阳郁于中，寒气生浊，侮其所胜，肝将寒浊交于胃，胃阳被寒浊包围，上争而逆甚则吐；下争而降下则利；上下之阴阳相争，阳已疲累衰败，无能达于四肢，故手足逆冷；阴寒浊气弥漫，扩散于胸中，心阳受郁，无以伸展，故又烦躁欲死。此症虽危，只要阴邪离阳，故又可治，与以吴茱萸汤，助肝胃之阳，降浊升清则愈。

“干呕吐涎沫，头痛者，吴茱萸汤主之。”按：此条出自《伤寒论·厥阴篇》与《金匱·呕吐哕下利篇》，肝胃浊阴盛而阳郁，阳郁而伸，则干呕吐涎沫，浊阴弥漫上泛，上泛则头痛，吴茱萸汤，助肝胃之阳而祛寒，升清降浊，则神效无比，别无他法。

“呕而胸满者，吴茱萸汤主之。”按：此出《金匱》，肝胃浊阴

弥漫，上入胸中则满，阳郁而伸，顶浊阴上出则吐，吴茱萸汤助阳祛寒，升阳降浊，则邪去正复而全愈。

以上皆仲景妙用吴茱萸之范例，遵《本经》而有创建者也。

猪 苓

气味甘平无毒，主治痲疹，解毒虫症不祥，利水道。久服轻身耐老。

张隐庵曰：枫树之瘦，遇雷雨则暗长，以泥涂之即天雨，是秉水精所主之木也。猪苓新出土时，其味带甘，苓主淡渗，故曰甘平。

痲疹阴症也，主治痲疹者，秉水精之气，以奉春生，则阴症之邪，随生气而升散矣。

解毒虫症不祥者，苓秉枫树之精华，结于土中，得土气则解毒；秉精华则治虫症不祥也；味甘平而淡渗，故利水道。

久服则水精四布，故轻身耐老。

叶天士曰：猪苓气平，秉天秋凉之金气，入手太阴肺经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气味降多于升，阴也。

其主痲疹者，盖主太阴呕吐之湿痹也，猪苓入脾，脾以化气，则湿行而疹止也。

虫症不祥，皆湿热之毒，甘平渗利，所以主之。

肺主气，气平益肺，肺气化及州都，则水道利，所以利水。

久服则味甘益脾，脾统血，血旺故耐老；气平益肺，肺主气，气和故轻身也。

陈修园曰：猪苓气平，秉金气而入肺；味甘无毒，得土味而入脾，肺主治节，脾主转输，所以能利水道。

又考此物出土时带甘，久则淡然无味，无味则归于膀胱，膀胱为太阳，其说有二，一曰经络之太阳，一曰六气之太阳。何谓

经络之太阳，其腑在下而主水，得上焦肺气之化，中焦脾气之运，则下焦愈治，所谓上焦如雾，中焦如沤，下焦如渎，俾决渎之用，行于州都，则州都中自有云行雨施之景象，利水如神，有由来也。且不独利水道也，六气之太阳，名曰巨阳，应天道，居高而卫外，乃心君之藩篱也，凡风寒初感，无非先入太阳之界，治不得法，则留于膜原而为疟，久则为咳，即伤寒杂病，似疟非疟者，皆在此例。但得猪苓之通利水道，水行气化，水精四布，溱溱汗出，则营卫和而诸邪俱解，仲景五苓散、桂枝去桂加茯苓白术汤，非于此得其悟机乎。

若阳明之渴欲饮水，小便不利，少阴之咳呕而渴，心烦不眠，热疟多兼此症，总于利水道中，布达太阳之气，使天水循环，滋其枯燥，即仲景猪苓汤之义也。

且太阳为天，光明清湛，清湛则诸毒可解，光明则蛊不祥自除。

又云久服轻身耐老者，溺得阳明之化而始长，溺出不能远射，阳气衰于下也；溺出及溺已时，头摇者，头为诸阳之会，从下以验其上之衰也，此皆老态，得猪苓明太阳之气，而可耐之，然此特圣人开太阳之治法，非谓猪苓之平淡可耐也。

黄杰熙评：张注以无稽之谈开始，试问那种木又不秉水精而生长呢？故所注主治各症，仅是影响之谈，可取者不多。

叶注归经落实，阐述主治各症，基本可取，不过关于久服问题，值得商榷。

陈注实则在阐述太阳经脉与太阳气化之关系，用词不太直当，使人骤难理解，即欲深反晦。太阳之气，即水化之气，起于膀胱水中，循经脉而布护于皮表，即是卫气，同时认为猪苓味淡入膀胱，亦是错误，味淡应入脾，味咸才能归入膀胱，因为尿与汗皆是咸的。故陈注有些云山雾罩，隔靴搔痒。

猪苓乃菌类，寄生于枫树根或泥土中，形如干燥之猪屎，故

又名豨猪屎、豨彘、地乌桃，皮黑中白，色黑入肾与膀胱二经；味甘淡入脾经；色白气平入肺经，为肺脾肾膀胱渗利水液通小便之药，小便利则膀胱之气化行，太阳经脉与气化，布护于外，为消水肿利小便之专药。《本经》所述主治各症，不过利水去湿之功。久服水津必亏，虚火炎上，失去阴阳之平衡，故此物不宜久服。

仲景猪苓汤用之为君药，治阳明病与《金匱·消渴小便利淋篇》之“若脉浮发热，渴欲饮水，小便不利者，猪苓汤主之”。利小便，化气上腾，以治口渴，与皮表肺胃发热。

治“少阴病，下利六七日，咳而呕渴，心烦不得眠者，猪苓汤主之”。原理基本一致。

治《金匱》“夫诸病在脏，欲攻之，当随其所得而攻之。如渴者，与猪苓汤，余皆仿此”。之举例治病法。

仲景猪苓散，治《金匱》“呕吐而病在膈上，后思水者，解，急与之；思水者，猪苓散主之”。亦利水化气止渴之神功。

仲景五苓散、茵陈五苓散等汤用之，其功用皆不出利水化气而去湿之效力。

芫 蕒

气味辛平无毒，主治五内邪气，散皮肤骨节中浸淫，温行毒，去三虫化食。

张隐庵曰：芫蕒，山榆仁也，榆受东方甲乙之精，得先春发陈之气，秉木气也；其味辛，其嗅腥，其色黄白，其本有刺，秉金气也。

木能平土，故主治五内之邪气，五内者，中土也。金能制风，故散皮肤骨节中浸淫。温行毒，浸淫温行者，风动之邪也，风胜则生虫，去三虫，亦金能制木也。火衰则食不化，化食，乃木能生火也。

治中风牙关紧急，并治双单乳蛾。

皂角刺（附）

一名天丁，气味辛温无毒，火醋熬嫩刺作煎，涂疮癣有奇效，治痈肿妒乳风疔恶疮，胎衣不下，杀虫，小儿重舌，小便淋闭，肠风痢血，大风疔疡，痈疽不溃，疮肿无头，去风化痰，败毒攻毒，定小儿惊风发搐，攻痘疮起发，化毒成浆。

黄杰熙释：皂角刺之气味主治，出苏颂、李时珍之言，非《本经》之文。

皂角刺与皂荚之性相近，惟其刺锐利易入，破坚溃脓之功奇异，以其金利之性，为治疔风要药。余喜用此药，累建奇功，堪称异品。

皂荚子（附）

气味辛温无毒，炒春去赤皮，以水浸软，煮熟糖渍食之，疏通五脏风热壅。核中白肉，入治肺药；核中黄心，嚼食治膈痰吞酸。仁和血润肠，治风热大肠虚秘，瘰疬肿毒疮癣。治疗肿便痛，风虫牙痛，妇人难产，里急后重，肠风下血，腰脚风痛。治疝气辜丸肿痛。

黄杰熙释：皂荚子之气味主治，是从寇宗奭、苏颂、李东垣、李时珍等家，抄录而来，并非《本经》之文。

性近皂荚，子仁主降下润利，和血祛风杀虫，故有以上所述诸疗效。用法多与皂荚同。

肥皂荚(附)

气味辛温微毒，主治去风湿，下痢便血，疮癣肿毒。

张隐庵曰：近时疡医用肥皂肉捣簪无名肿毒；用核仁治鼠瘻疽痔；力士游医，用为吐药，治症瘕痞积。内科用者盖鲜焉。

黄杰熙评：肥皂荚出《本草纲目》，非《本经》之文。张氏录补《本经》之缺，只作说明，而非注解，鄙其不够级别也。

盖皂分三种，一种小如猪牙，称牙皂；一种长而枯燥，即皂荚；一种肥厚多脂，称肥皂荚，性用相似，而以多脂者良。外科多用肥皂荚，内科多用牙皂，然需炙存性研末，入丸散膏丹用，极少直入汤剂。

《普济方》治肠风下血，用独子肥皂一片，烧存性为末，糊丸，陈米汤饮下。

《乾坤生意》治下痢噤口，用肥皂荚一枚，以盐实其内，烧存性为末，以少许入白米粥内，食之即效。

秦皮

气味苦微寒无毒，主治风寒湿痹，洗洗寒气，除热，目中青翳白膜。久服头不白轻身。

张隐庵曰：秦木生于水旁，其皮气味苦寒，其色青碧，受水泽之精，具青碧之色，乃秉水木相生之气化。

秉木气而春生，则风寒湿邪之痹症，及肤皮洗洗然之寒气，皆可治也。

秉水气而生寒，故主除热。

目者，肝之窍，木气盛则肝气益，故治目中青翳白膜。

发者，血之余，水精足则血充，故久服头不白而轻身。

黄杰熙评：张氏在归经气化上欠全面，而所注主治各症，又基本可取，缘其解归经气化，有遗漏和清误之处。

秦皮之皮色土褐，泡入水中，则成青碧色，正是肝胆之正色，故入肝胆二经；味苦入心经；气寒入肾膀胱二经；色土褐入脾经，为清利湿热之要药，治湿热黄疸有奇功，治湿热眼疾与湿热痢疾，皆有味能。

仲景白头翁汤，用之愈湿热痢疾。

《证治准绳》秦皮散，治风毒赤眼，痛痒涩泪羞明，方用秦皮、滑石、黄连等分研末，开水泡，乘热洗眼，立刻见效。

余曾单用秦皮30克，水煎服，治黄疸型肝炎，一剂知，二剂已，名秦皮汤。

董 竹 叶

气味苦寒无毒，主治咳逆上气，溢筋急，消恶疮，杀小虫。

张隐庵曰：董竹叶凌冬不落，四季常青。凌冬不落者，秉太阳标阳之气也，太阳标阳本寒，故气味苦寒；四季常青者，秉厥阴风木之气也。

木主春生，上行外达，故主治咳逆上气。溢筋急者，肝主筋，竹叶秉风木之精，能滋肝脏之虚急也。

消恶疮者，恶疮主热，竹叶秉水寒之气，能清心脏之火热也。虫为阴类，竹叶得太阳之标阳，而小虫自杀矣。

黄杰熙评：张注归经欠周，仅以太阳厥阴为解主治各症，似欠周详，但基本可取。

盖董竹叶即竹叶，四散披离，四季常青，故有散风热之作用，归入足厥阴肝经；味苦入心清火去热；气寒入肾膀胱，滋水去热。

木火刑金，金不清肃下降，则咳逆上气；肝主筋，肝气溢而

不养筋，则曰溢筋急，竹叶味苦清火，肺金下降，则咳逆上气止；气寒滋肝养筋，故可治之。

诸疮痛痒，皆属于心，竹叶味苦清心火，故消恶疮。小虫乃风热所化，竹叶四散披离，四季常青，散风去热，故杀小虫。

《金匱》竹叶汤，治产后中风，发热，面正赤，喘而头痛。服汤后，其效如神。

《伤寒论》竹叶石膏汤，治伤寒解后，虚羸少气，气逆欲吐。饮汤后，覆杯而起。

竹 沥 (附)

气味甘，大寒无毒，主治暴中风，风痹，胸中大热，止烦闷，消渴劳复。

张隐庵曰：朱震亨云：“竹沥治痰，非助以姜汁，不能行。”

叶天士曰：竹沥气大寒，秉天冬寒之水气，入足少阴肾经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气味降多于升，阴也。

暴病皆属于火，火炽风生，以致僵仆，或偏痹不仁，竹沥甘寒，可以清热缓急，所以主之。

胸中者，太阴脾经经行之地，脾阴虚，则胸中大热矣，甘寒清热，所以主之。

肾者水也，心者火也，水不制火，则心中烦闷而消渴矣，其主之者，甘寒可以壮水而清火也。

劳复者，伤寒热病愈后，劳碌而复热也，其主之者，亦以甘寒能补能清耳。

黄杰熙评：张氏不注，而引丹溪之说，以明其用法。竹沥出自《别录》，《本经》未言及此，丹溪最善用竹沥，以其大寒伤胃，服之易犯泄泻，济以姜汁之辛温，缓和其寒，又能辛通而行药力，一举两得。但张氏所引不全，今补备之，丹溪云：“中风失音不语，

养血清痰，风痰虚痰在胸膈使人癫狂，痰在经络四肢，及皮里膜外，非此不达不行。”

叶氏俯而就下，以理实为依据，以解《别录》之文，归经主治，注之准确，给后学启无限法门，值得称颂。

《千金方》竹沥饮子，治风痲四肢不收，心神恍惚不知人，不能言。方用竹沥、生葛汁、生姜汁，和匀温服，有一定疗效。

《沈氏尊生》竹沥达痰丸，治痰火喘急，昏迷不省，厥逆惊痫等症，方用二陈汤加人参、白朮、大黄、黄芩、礞石、沉香，研为细末，以竹沥、姜汁和丸，亦具有一定效果。

竹 茹

气味甘微寒无毒，主治呕哕，温气寒热，吐血崩中。

张隐庵曰：呕哕，吐逆也；温气，热气也；竹茹，竹之脉络也。

人身脉络不和，则吐逆而为热矣；脉络不和，则或寒或热矣；充肤热肉，淡渗皮毛之血，不循行于脉络，则上吐血而下崩中矣，凡此诸病，竹茹皆能治之，乃以竹之脉络，而通人之脉络也。

叶天士曰：竹茹气微寒入足太阳寒水膀胱经；味甘无毒，得地中正之土味，入足太阴脾经。气味降多于升，阴也。

太阳者、寒水经也，冬日燥热，则太阳阴精不藏，感天燥热之气，至春木令，则为病温，火性炎上，故多呕哕，病在太阳，故发寒热，竹茹气寒，可以祛温火，味甘，可以缓火炎，所以主之也。

脾统血，血热妄行，非吐即崩，其主之者，甘寒可以清热也。

黄杰熙评：张氏全凭竹茹乃竹之脉络，而通人身之脉络为解，颇得竹茹之药性，故其注基本可取。

叶注归经正确，对主治病机之阐发，别具新义，不愧为温病学大师，故其注超然。

对竹茹药性之全面掌握，必合张叶二氏之注合勘之，则形质
气味主治病机治则皆全矣。

《金匱》竹皮大丸，治妇人乳中虚，烦乱呕逆，安中益气。方
用生竹茹、生石膏、桂枝、白薇、甘草组成，效果卓著。

石 膏

气味辛微寒无毒，主治中风寒热，心下逆气，惊喘，
口干舌焦不能息，腹中坚痛，除邪鬼，产乳，金疮。

张隐庵曰：石膏质坚色白，气辛味淡，纹理如肌腠，坚白若
精金，秉阳明金土之精，而为阳明胃火之凉剂宣剂也。

中风寒热者，风乃阳邪，感阳邪而为寒为热也，金能制风，故
主治中风之寒热。

心下逆气惊喘者，阳明胃络上通于心，逆则不能上通，致有
惊喘之象矣；口干舌焦，不能息，腹中坚痛者，阳明之上，燥气
治之，口干舌焦，燥之极也，不能息燥极，而阳明之气不和于上
也；腹中坚痛，燥极而阳明之气不和于下也，石膏质重性寒，清
肃阳明之热气，故皆治之。

秉辛气则有肃杀之能，除邪鬼。生产乳汁，乃阳明胃腑所生；
刀伤金疮，乃阳明肌肉所主，石膏清阳明而和中，故皆可治之。

《灵枢经》云：“两阳合明，是为阳明。”又云：“两火并合，故
谓阳明。”是阳明上有燥热之主气，复有前后之火热，故《伤寒》
有白虎汤，用石膏、知母、甘草、粳米，主资胃腑之津，以清阳
明之热；又阳明主阖，而居中土，故《伤寒》有越婢汤，石膏配
麻黄，发越在内之邪，从中土以出肌表。盖石膏质重，则能入里；
味辛则能发散；性寒则清热，其为阳明之宣剂凉剂者如此。

叶天士曰：石膏气微寒，秉天初冬寒水之气，入足太阳寒水
膀胱经；味辛无毒，得地西方燥金之味，入手太阴肺经、足阳明

燥金胃、手阳明燥金大肠经。气味降多于升，阴也。

中风者、伤寒五种之一也，风为阳邪，中风病寒热，而心下逆气惊喘，则已传阳明矣，阳明胃在心之下，胃气本下行，风挟之乘肺则喘，闻木声则惊，阳明燥津液，致口干舌焦，不能呼吸，故用石膏辛寒之味，以泻阳明实火也。

腹中，大肠经行之地，大肠为燥金，燥则坚痛矣，其主之者，辛寒可以清大肠之燥火也。

阳明邪实，则妄言妄见，如有神灵，若邪鬼附之，石膏辛寒清胃，胃火退而邪妄除，故云除邪鬼也。

产乳者，产后乳不通也，阳明之脉，从缺盆下乳，辛寒能润，阳明润，则乳通也。

金疮，热则皮腐，石膏气寒，故外掺合金疮也。

陈修园曰：石膏气微寒，秉太阳寒水之气；味辛无毒，得阳明燥金之味。

风为阳邪，在太阳则恶寒发热，然必审其无汗而喘者，可与麻桂并用；在阳明发热而微恶寒，然必审其口干舌焦，大渴而自汗者，可与知母同用。

曰心下气逆，即《伤寒论》气逆欲呕之互词；曰不能息，即《伤寒论》虚羸少气之互词，然必审其为解后里气虚而内热者，可与人参半夏竹叶麦冬甘草梗米同用。

腹中坚痛，阳明燥甚而生，将至于胃实不大便之症；邪鬼者，阳明邪实，妄言妄见，或无故而心惊，若邪鬼附之，石膏清阳明之热，可以统治之。

阳明之脉从缺盆下乳，石膏能润阳明之燥，故能通乳。

阳明主肌肉，石膏外掺，又能愈金疮之溃烂也。

但石品见火则成石灰，令人畏其寒而燬用，则大失其本来之性矣。

黄杰熙评：张氏以石膏之质色纹理及气味为依据，注解主治

各症，因剖析病机不彻，注多齟齬难合，注非正注，所取无多，只可权作参考而矣。

叶注归经正确，用以注解主治各症，触类而通，且剖析病机详实，治则吻合，叶注颇超，视为法程。

陈注是以叶注为基调，具体引入《伤寒论》白虎汤、竹叶石膏汤等，以弹奏而成，在注疏中，颇具新义，故其注与叶注，可以互补。

盖石膏色白入肺经；气微寒入肾膀胱二经；味辛入胃大肠二经，以其性寒能滋水清热，味辛能发散解肌，使郁热从毛孔徐徐透出，为治寒温燥热之无上妙药，有著手成春之功。

仲景白虎汤、人参白虎汤、竹叶石膏汤、竹皮大丸、白虎加桂枝汤、越婢汤、大青龙汤、小青龙加石膏汤、风引汤等，皆重用石膏，临床脉证相合，投之效如桴鼓，立起沉疴。

余师愚《疫疹一得》之清瘟败毒饮，重用石膏八两，以救垂危之温病，立起沉疴，真活人神方也。

近代人张寿甫喜用石膏，屡建奇功，视为药中第一神品。

余亦最喜用石膏，以治伤寒热入阳明，温病、热病，以及内妇儿科杂证，百发百中，救愈之疑难险症，数以万计，累计用石膏约两吨，最少用30克，最多达300克，无一有不良反应。

石膏分为两种，一是软石膏，即含水石膏，化学成份为含水硫酸钙（ $\text{CaSO}_4 \cdot 2\text{H}_2\text{O}$ ）；一是硬石膏，化学成份为无水硫酸钙（ CaSO_4 ），药用以软石膏为上品，碎之成针形，晶莹透彻，必须生用，其成份全，才有清燥热发表之作用，若煨之则硫酸和水飞去，只剩钙质，即石灰，用以点豆浆，可凝结成豆腐，若误服煨石膏多者，可将人身之血液津精凝结成块，迅速死亡，无法挽救，原因是，谁能将豆腐还原成豆浆？误服煨石膏少者，立刻病情加剧。人怕服石膏者，原来是误服了杀人不见血之煨石膏也。故病家见开有“生石膏”之方，必须亲自检点，看石膏是否成针形，晶莹

透彻而光亮，如是灰粉，必是煨石膏，事关人命，弃之勿用。如药已煎成，事先疏忽检点，倒出药汁后，再翻看壶底，如有凝结，必是煨石膏，弃之勿服，生命为贵也。

慈 石

气味辛寒无毒，主治周痹风湿，肢节中痛，不可持物，洗洗酸消，消除大热，烦满及耳聋。

张隐庵曰：慈石色黑、味辛、性寒，盖秉金水之精气所在。

周痹者，在于血脉之中，真气不能周也，慈石能启金水之精，通调血脉，故能治之。

风湿肢节中痛，不可持物，洗洗酸消者，风湿之邪，伤于肢节而痛，致手不能持物，足洗洗酸消不能行，酸消犹酸削也，慈石秉阳明太阳金水之气，散其风湿，故能治之。

除大热烦满，及耳聋者，乃水济其火，阴交于阳，亦慈石引针，下升上之义。

叶天士曰：慈石气寒，秉天冬寒之水气，入足少阴肾经；味辛无毒，得地西方之金味，入手太阴肺经。气味降多于升，阴也。

其主周痹风湿，肢节中痛，不可持物，洗洗酸消者，盖湿流关节，痛不可持物，湿胜金消也，湿而兼风，风属木，木曰曲直作酸，洗洗酸痛，所以为风湿周痹也，慈石味辛入肺，金能平木，可以治风；肺司水道，可以行湿也。

肾水脏也，水不制火，浊气上逆，则大热烦满，慈石入肾，气寒壮水，质重降浊，所以主之。

肾开窍于耳，肾火上升则聋，慈石气寒，可以镇火，所以主耳聋也。

黄杰熙评：张注从色味性入手，定为金水之精气，以注解主治各症，虽病机叙述欠畅，亦粗略可取。

叶注归经明确，虽仍属金水，但更兼切实可行，故所注主治各症之病机、治则，较张注为优。

盖磁石，即磁铁矿石，呈粒状或块状，其结晶者，多为八面体，少数为十二面体，吸铁性强。八为木之成数，故归入肝经；色黑性寒，归入肾经，滋水清火；味辛入肺经，平肝制风木，为金水木相生相制之奇药。

《本经》主治各症，亦不出金水木相生相制之理，叶氏注之颇详，兹不赘。但仍有剩义，磁石吸铁，铁元素是人身血液中之主要成份，磁石有磁场产生磁力线，人身中亦有生物磁场产生磁力线，人身生物磁场，寓于两肾间命门中，磁石粉末服后，以类相从，引入命门中补之助之，以吸引人身血液中所含之铁元素，使不上涌、外渗、下流，故能治吐血、损伤、崩漏；肺属金，又能吸引肺气归根，而宁喘息；质重降痰水，而止痰嗽等等。

《千金方》磁朱丸，即用磁石、朱砂、神曲研细末，水泛为丸制成，治瞳孔放大，视物成双，耳聋耳鸣，癫痫等症，皆有效验。

石 硫 黄

气味酸温有毒，主治妇人阴蚀疽痔恶血，坚筋骨，除头秃，能化金银铜铁奇物。

张隐庵曰：硫黄色黄，其形如石，黄者土之色，石者土之骨，遇火即焰，其性温热，是秉火土相生之气化，火生于木，故气味酸温。

秉火气而温经脉，故主治妇人阴蚀，及疽痔恶血。秉土石之精，故坚筋骨。阳气长，则毛发生，故主头秃。遇火而焰，故能化金银铜铁之奇物。

黄杰熙评：张氏从硫黄之质色气味入手，注解主治各症，颇得要领，故此注基本可取。

盖硫黄乃石之液凝聚而成，石者金也，含金水相生之妙义，气味酸温，得木之气与木之味，木生火，故其性热，火生土，故其色黄。

以其为石之液，故归入肾经；金石之性，归入肺经；气味酸温，归入肝经；遇火即焰，归入心经；色黄归入脾经，为温暖五脏，祛阴寒之妙药。《本经》主治各症，以外阴寒为患。其功用无外补火壮阳，杀虫；外用治疮癣疥癩；内服治阳痿，虚寒久痢滑泄，及老人虚寒便秘。

《证治准绳》硫黄散，治湿癣，痛痒不可忍。方用硫黄、龙脑、斑蝥、膩粉，为细末油调搽擦。

《局方》黑锡丹，治脾肾久冷，上实下虚，痰饮虚喘，阳痿尿频等症。方用黑锡、硫黄、附子、补骨脂、阳起石、肉桂、葫芦巴、金铃子、肉豆蔻、木香、沉香、茴香，为丸姜盐汤下。

《局方》半硫丸，治痿痹、冷气、冷秘、虚秘。方用半夏、硫黄，研细末，姜汁同熬，蒸饼米和匀为丸。

阳 起 石

气味咸微温无毒，主治崩中漏下，破子脏中血，症瘕结气，寒热腹痛，无子阳痿不起，补不足。

张隐庵曰：阳起石者，此山之石，乃阳气之所起也。故大雪遍境，而山无积白，有形之石，阳气所钟，故置之雪中，倏然灭迹，扬之日下，自能飞举。

主治崩中漏下者，崩漏为阴，今随阳气而上升也。破子脏中血，及症瘕结气者，阳长阴消，阳气透发，则症结破散也。妇人月事不以时下，则寒热腹痛而无子，阳起石贞下启元，阴中有阳，阴阳和而寒热除，月事调而生息繁衍。男子精虚，则阳痿不起，阳起石助阴中之阳，故治阳痿不起，而补肾精之不足。

黄杰熙评：张氏从阳起石之产地、气化、性能入手，以注《本经》主治各症，从阳升、阳长、阳起入于病机之中，迎刃而解，故此注颇超。

但阳起石，只出山东阳起山，产量很少，今已绝迹。其石坚硬，色白形似狼牙，秉金之性而入肺经；味咸入肾经，滋肾阴而补肾阳；气微温入肝经，温宗筋以兴阳道，为治阳痿及宫寒不孕之奇药，可惜此药，真者难得，伪劣品多。

《普济方》阳起散，治阴痿阴汗。方用阳起石煨为末，每服六克，盐酒下，功效卓著。

雄 黄

气味苦平寒有毒，主治寒热鼠瘻，恶疮疽痔死肌，杀精物恶鬼邪气，百虫毒，胜五兵。炼食之，轻身神仙。

张隐庵曰：雄黄色黄质坚，形如丹砂，光明焮焮，乃土精之气化，而散解阴毒之药也。

水毒上行，则身寒热而颈鼠瘻，雄黄秉土气而胜水毒，故能治之。

肝血壅滞，则生恶疮，而为疽痔，雄黄秉金气而平肝，故能治之。

死肌，肤不仁，精物恶鬼，乃阴类之邪，雄黄秉火气而光明，故治死肌，杀精物恶鬼邪气。

百虫之毒，逢土则解，雄黄色黄，故杀百虫毒。

胜五兵者，一如硫黄能化金银铜铁锡也，五兵五金也，胜五兵，火气盛也。

炼而食之，则转刚为柔，金光内藏，故轻身神仙。

黄杰熙评：张氏弃气味，专以色质为注，谓秉土精之气化，以解主治各症，颇得其要，故此注从形式上看，基本可取。

惟雄黄为砷矿斜方晶系之结晶矿石，砷有剧毒，若炼而服之，其毒析出，何能转“转刚为柔，金光内藏”呢！故此解不可取。

雄黄为末，多外用，内服极量为0.5克。

商品分为四种：一雄精，赤如鸡冠，明彻晶莹，品质最高；二腰黄，色黄质轻，半透明，稍次；三雄黄，色黄红，透明度不如腰黄，次品；四雌黄，色见暗黑，为最次。

雄黄气味辛温，有毒，与《本经》所言：“气味苦平寒有毒”有别，气温入肝经；味辛入肺、胃、大肠经，为燥湿杀虫，解蛇虫毒，劫痰制惊痫，外用治疥癣之妙药。

《本经》主治各症，无出乎辛温之作用。

《肘后方》治阴肿如斗，痛不可忍，用雄黄、矾石各二两、甘草一尺，水五升，煎成二升浸之立消，此燥湿杀虫之功也。

《普济方》治蛇缠恶疮，用雄黄末、醋调傅之；《十便良方》治百虫入耳，雄黄烧燃熏之自出，此解蛇虫毒也。

《直指方》治小儿诸痫，用砒黄、朱砂等分为末，每一克，猪心血入水调下，此劫痰治惊痫也。

《圣济录》治白秃头疮，用雄黄末和猪胆汁傅之，此外治疥癣者也。

《金匱》雄黄熏洗，治湿虫蚀肛门，此外治之肇始也。

雌 黄

气味辛平有毒，主治恶疮头秃，痂疥，杀毒虫虱，身痒邪气诸毒。炼之久服轻身，增年不老。

张隐庵曰：李时珍云“雌黄雄黄同产，但以山阴山阳受气不同分别，服食家重雄黄，取其得纯阳之精也，雌黄则兼有阴气，故不重。若治病，则二黄之功亦相仿佛，大要皆取其温中，搜肝、杀虫、解毒、祛邪焉耳。”

愚按：雄黄雌黄，气味宜同，今雄黄曰苦平；雌黄曰辛平，须知雄黄苦平而兼辛；雌黄辛平而兼苦，气味之同，难以悉举，故彼此稍异，以俟人之推测耳。

黄杰熙评：雄黄、雌黄本为一物，而品质不同，在“雄黄·评”中已述，气味相同，皆是辛温有毒，因雌黄品质最次，只宜外用，不宜内服。而李氏与张氏之说，宜作参考，不可作为定论。

水 银

气味辛寒有毒，主治疹痿痂疡白秃，杀皮肤中虱，堕胎除热，伏金银铜铁锡毒，熔化还复丹。久服成神仙不老。

张隐庵曰：水银气味辛寒，秉金水之真精，为修炼之丹汞，烧朱则鲜红不渝，烧粉则莹白可爱，犹人身中焦之汁，化血则赤，化乳则白，此天地所生之精汁也。

主治疹痿痂疡白秃者，秉水精之气，能清热而养血也。

杀皮肤中虱、堕胎者，秉金精之气，能肃杀而攻伐也。性寒，故能除热。

汞乃五金之精，故能杀金银铜铁锡毒。

水银出于丹砂之中，而为阳中之阴，若熔化则还复丹成，而为阴中之阳，一名灵液，又名姤女，乃天地所生之精汁，故久服神仙能成，得不死。

黄杰熙评：张注从秉金水之真精入手，倏忽修炼成丹汞，即灵砂、人造朱砂；倏忽升炼成烧粉，即轻粉，描绘得神龙变化，莫之可测，以之注解主治各症，更是隔靴搔痒，且有严重错误，所以张注“力求深奥，转多晦义”。

水银乃汞矿石提炼而成，气味辛寒质重有剧毒，严禁入口，犯则杀人，只可外用，治疮癣疥癬，杀虫杀菌毒有奇功。

末后“久服神仙、能不死”，简直一派胡言乱语，应说成服后

立死不货，以其性寒而具杀虫杀菌毒之奇功，可以养尸体，成为“木乃伊”。

《外科正宗》一扫光，用水银、苦参、明矾、枯矾、硫黄、轻粉、白砒、冰片、黄柏、烟胶、木鳖肉、枫子肉、蛇床子、点红椒，共研细末，猪油调匀，纱布包裹，搽擦患处，治一切疥疮湿疮，风湿皮痒，久久不愈者甚效。

铁 落

气味辛平无毒，主治风热，恶疮疡，疽疮，痂疥，气在皮肤中。

张隐庵曰：铁名黑金，生于西北，五金中之属水者也。

秉金气，故治风；秉水气，故治热。恶疮疡、疽疮，热也；痂痂、气在皮肤中，风也。以火煨转乌之金，而清热毒之疮，故治恶疮疡、疽疮。以皮肤所落之金，而杀皮肤之虫，故治痂，气在皮肤中。

《素问·病能论》有生铁落饮，言其“下气疾”也。今人以铁锈磨涂疔肿、汤火伤、蜈蚣咬、喜儿疮、口舌脚肿，正治风热恶疮之义。

叶天士曰：铁落又名铁衣，气平，秉天秋降之金气，入手太阴肺经；味辛甘无毒，得地金土之味，入足阳明燥金胃土。气味降多于升，性重色黑，阴也。

肝为风木，风热疮疽痂疥，肝火也，气平可以平肝，味甘可以缓热，所以主之也。

皮肤者，肺之合也，气在皮中，气不敛也，其主之者，气平可以敛气也。

《素问》用铁落治狂，狂者肝木之症，故取金气以制之也。

黄杰熙评：张氏从铁落之色质形气入手，得出金水之性，以

解主治各症，颇中肯启，末引《素问·病能论》之生铁落饮及时俗用铁锈之义，以互证之，理论与实践合一之注，较张氏之注水银，高超十倍。

叶注平易着实，归经正确，所解主治各症，简明扼要，击中要点，同引《素问》用铁落之文，叶注较张注简切，不兜圈子，故叶注最为可取。

盖生铁落以其气味辛平，秉金之气与金之味，为制风木之奇药；色黑质重，为堕痰清火热之妙品，为治狂症与痫风之无上圣药。

《素问·病能论》生铁落饮，治怒狂阳厥，铁落一味，煎汤服。制风与清热痰之效果。

时方：用三家磨刀水，或铁锈水，煎服，治小儿痫风如神，余屡用之，立见神功，亦以金制风动，理痰清热之效果。

犀 角

气味苦酸咸寒无毒，主治百毒蛊症，邪鬼瘴气，杀钩吻鸩羽蛇毒，除邪不迷惑魔寐。久服轻身。

张隐庵曰：犀色黑而形似猪，水之畜也，依木而栖，足三趾，一孔三毛，秉木气也；生于南粤，秉火气也，犀秉水木火相生之气化，故其角苦酸咸寒。

犀为灵异之兽，角具阳刚之体，故主治百毒蛊症邪鬼瘴气，如温峤燃犀，照见水中怪异之物是也。

犀食荆棘，不避毒草，故杀钩吻之草毒，钩吻草毒也，食之令人断肠，又曰鸩羽蛇毒，言不但杀钩吻之草毒，而鸩鸟毒蛇，亦能杀也。

犀秉水火之精，故除邪不迷惑魔寐。

久服水火相济，故轻身。

叶天士曰：犀角气寒，秉天冬寒之水气，入足少阴肾经；味苦酸咸无毒，得地东南北、木火水之味，入手少阴心经；手厥阴风木心包络经；足太阳寒水膀胱经。气味俱降，阴也。

百毒之性皆热，蛊疰亦感湿热而成，其主之者，苦寒可以清热散毒也。

气寒壮肾水，味苦清心火，火降水升，心肾相交，一身之天地位矣，所以能辟除邪杀鬼，不迷惑魔寐也。

气寒味苦，行天地肃杀之令，所以辟瘴，解钩吻鸩羽蛇毒也。

久服轻身者，心肾交，则阴阳和，心神清，则百脉理，所以轻身也。

陈修园曰：犀角气寒，秉水之气也；味苦酸咸无毒，得木火水之味也。

主百毒蛊疰邪鬼瘴气者，以犀为灵异之兽，借其灵气以辟邪也。

解钩吻蛇毒者，以牛属土，而犀居水，得水土之精，毒物投水土中而俱化也。

不迷惑魔寐轻身者，言水火既济之效也。

今人取治血症，与经旨不合。

黄杰熙评：张注从犀之形色习性入手，定为水木火相生之气化，主以灵异之品，及温峤燃犀之故事为佐证，以注解经文，颇通犀角之性能，故此注超然可取。

叶注根据犀角之气味，不尚新奇，着实归经，以论注主治各症，平易可取，据见叶氏朴实，功底深厚，治学严谨，堪称一代宗师。

陈氏之注与张注颇雷同，是摘张注而稍加水土之精以解毒物而成。至于取治血症非今人，首先见于古人也，若为血热吐血，用之亦对证，何得谓“与经旨不合”为由！

不过，犀角价过于昂贵，一般人用不起，且伪制品充斥，用

之不但无效，花大价钱而耽搁病情，根据其气味苦酸咸寒，完全可以用其他药品以代之。且效果卓著，因系真品也。

犀角分暹罗犀角与广犀角两个品种，两者价格相差约五十倍，暹角是正品，广角系伪品，广角即天马角也。还有一种伪制品，比广角更次，即牛角或其他兽角加工染色而成。辨认法很多，此难细说，此指出一种简而易者，真犀角有清香气，具体说即米之清香气；伪犀角是一股腥膻气，此法具体易行。

犀分黑白二种，其他兽角长于头顶上，独犀角长于鼻子上，有独角者，有上下长出两角者，鼻为肺窍，亦是土气之外现，故入手足太阴脾肺两经；气寒入肾与膀胱两经；味苦入心经；酸入肝经；咸入肾与膀胱两经，寒咸之品为清火热之奇药，因兼苦酸，为清心肝血分之火的神品，血分无火者，用之等于不用，白白浪费一切。如明代大名医陶华治一病人：“伤寒四、五日，吐血不止，医以犀角地黄汤、茅花汤治之，反剧。切其脉浮数而紧，遂用麻黄汤汗之而愈”。药价相差几千倍，可为喜服贵重药品之富贵老少爷妹们戒。同时说明犀角不能用于表症之例证。若气虚不能统血藏血者，亦非犀角凉血清火所宜，当补气养血为治。

《千金方》犀角地黄汤，方用犀角、生地、芍药、丹皮组成，治伤寒寒及温病，应发汗而不发汗，内蓄血者，衄血者，大便黑，面黑，消瘀血。

《湿热经纬》神犀丹，方用犀角、石菖蒲、板兰根、鲜生地、银花、连翘、玄参、花粉、紫草、粪清、香豉，将各药生晒研细，以犀角、地黄汁、粪清和捣为丸。用治湿热带、暑疫，神昏谵语，毒瘡毒重，夹带紫斑危证。

另外，紫雪丹、清宫汤等，虽不以犀角名方，内中皆以犀角为主药，用以治温病之热甚神昏谵语。

羚羊角

气味咸寒无毒，主明目益气起阴，主恶血注下，辟蛊毒恶鬼不祥，常不魇寐。

张隐庵曰：羚羊角气味咸寒，秉水气也；角心木胎，秉木气也。秉水气而滋养肝木，故主明目。

先天之气，发源于水中，从阴出阳，羚羊角秉水精之气，故能益肾气而起阴。

肝气不能上升，则恶血下注，羚羊角秉木气而助肝，故去恶血下注。

羚羊乃神灵解结之兽，角有二十节，以应天之二十四气，故辟蛊毒恶鬼不祥，而常不魇寐也。

叶天士曰：羚羊角气寒，秉天冬寒之水气，入少阴肾经；味咸无毒，得地北方之水味，入足太阳寒水膀胱经。气味俱降，阴也。

膀胱经起于目内眦，气寒可以清火，火清则水足而目明矣。

益气者，咸寒益肾气之不足也。起阴者，咸寒益肾，肾足则宗筋强也。味咸则破血，气寒则清热，故主恶血注下也。蛊毒，湿热之毒也，咸寒可以清湿热，所以主之。

羚羊性灵通神，故辟恶鬼不祥；咸寒益肾，肾水足则精明，所以常不魇寐也。

陈修园曰：羚羊角气寒味咸无毒，入肾与膀胱二经。

主明目者，咸寒以补水，水足则目明也。益气者，水能化气也。起阴者，阴器为宗筋而属肝，肝属木，木得烈日而萎，得雨露而挺也。

味咸则破血，故主去恶血。气寒则清热，故止注下也。蛊毒为血热之毒也，咸寒可以除之。

辟恶不祥常不魔寐者，夸其灵异通神之妙也。

黄杰熙评：张注从羚羊角之气味咸寒、秉水气；角心木胎，秉木气；神灵之解结，以注解主治各症，颇得要领，故此注基本可取。

叶注以气味归经为主，性灵通神为辅，注解主治各症，亦触类而通，故此注平淡可取。

陈注归经与叶注相同，注解主治各症，间有据实发挥，如水能化气，木得烈日而萎，得雨露而挺是也，故陈注似后来者居上也。

羚羊角基部大，上长越来越尖细，长约30至50厘米，基部直径约5至8厘米，中心黄褐色，称为木心，当中有一细线（实则为毛细管）直通顶端，俗呼为“通天眼”，角尖至中端，呈乳白色之半透明体，以下至基部逐渐暗下来，角质硬而富韧性，羚羊睡眠，以角挂树枝，吊直而眠，即“羚羊挂角，无迹可求”也。

其吊直而眠，则知其筋最直，角尤其是精气所聚，性又寒咸，功专滋水清火而舒筋，为治抽风、筋脉掣缩之神药，余遵用之，屡建奇功，百发百中，方用羚羊角一味，3至10克，水煎服之，取名曰“羚羊饮”。此药亦昂贵，伪品甚多，用之即无效，检认法，上已述之。

犀角与羚羊角之别，犀角治心火，愈神昏谵语；羚羊角治肝风抽搐。

殺 羊 角

气味咸温无毒，主治青盲明目，止惊悸寒泄。久服安心，益气轻身，杀疥虫。入山烧之，辟恶鬼虎豹。

张隐庵曰：羚羊角气味咸寒，殺羊角气味咸温，是羚羊秉水气，而殺羊秉火气也。

故《内经》谓“羊为火畜”，主治青盲明目者，阳光盛而目明也。

惊悸寒泄者，火之精为神，神宁则惊悸止，火胜则寒泄除也。

心为火脏，故久服安心；益气者，益阳气也，阳气盛则轻身，而阴类之疥虫可杀也。

夫羝羊属火，其角至明，入山则阴寒气多，故烧之而恶鬼虎狼可辟，亦敌不避强之义。

黄杰熙评：张氏以羝羊角秉火气解注经文，甚得其要，此注可取。

盖羝羊角，即公羊角，属阳秉火，其性光明磊落，主治各症，皆以光明驱黑暗也。

《圣惠方》治水泄多时，方用羝羊角一枚，白矾末填满，烧存性为细末，新汲水服六克。

《肘后方》治赤斑瘰子，身面卒得赤斑或瘰子肿起，不治杀人，方用羝羊角烧灰，鸡蛋清调涂，甚妙。

《普济方》治小儿痢疾，方用羝羊角烧存性，以酒调糊，温水送服少许。

獬 皮

气味苦平无毒，主治五痔阴蚀下血，赤白五色，血汗不止，阴肿痛引腰背。

张隐庵曰：獬形同鼠，毛刺若针，乃秉金水所生之兽，故能益肠解毒，清热平肝。

主治五痔，益肠也；治阴蚀，解毒也；治下血赤白五色，血汗不止，清热也；治阴肿痛引腰背，平肝也。

黄杰熙评：张氏之解獬皮，以形似鼠秉水气以制火，气平秉肺气以制肝，遗略味苦入心清火，只有苦味与寒水之气相结合，才

能清火热，否则应以补火论治。

其注解主治各症，简明扼要，故此注基本可取。

《本草衍义》治五痔下血，方用猬皮、穿山甲等分烧存性，入肉豆蔻一半，空腹热米饮服3克妙。

《肘后方》治肠痔有虫，猬皮烧末，生油调涂。

《千金翼》治蛊毒下血，猬皮烧末，水服方寸匕，当吐出毒。

鳖 甲

气味咸平无毒，主治心腹症瘕，坚积寒热，去痞积、息肉、阴蚀、痔核、恶肉。

张隐庵曰：鳖生池泽，随日影而转，在水中必有津沫上浮。盖秉少阴水气，而上通于君火之日，又甲介属金，性主攻利；气味咸平，秉水气也。

主治心腹症瘕坚积寒热者，言心腹之内，血气不和，则为症为瘕，内坚积而身寒热，鳖秉水阴之气，上通君火之神，神气内藏，故治在内之症瘕坚积。

又曰去痞疾者，言症瘕坚积身发寒热，若痞疾则身无寒热，而鳖甲亦能去也。

夫心腹痞疾，病藏于内；若息肉、阴蚀、痔核、恶肉，则病见于外，鳖甲属金，金主攻利，故在外之恶肉阴痔，亦能去也。

叶天士曰：鳖甲气平，秉天秋收之金气，入手太阴肺经；味咸无毒，得地北方之水味，入足少阴肾经。气味俱降，阴也。

心腹者，厥阴肝经经行之地，积而有形可征谓之症，假物而成者谓之瘕，坚硬之积，致发寒热，厥阴肝气凝聚，十分亢矣，鳖甲气平入肺，肺平可以制肝，味咸可以软坚，所以主之也。

痞者，肝气滞也，咸平能制肝而软坚，故亦主之。

息肉、阴蚀、痔核、恶肉，一生于鼻，鼻者肺之窍也；一生

二便，二便肾之窍也，入肺肾而软坚，所以消一切恶肉也。

陈修园曰：鳖甲气平，秉金气而入肺；味咸无毒，得水味而入肾。

心腹者，合心下大腹小腹，以及肋肋而言也，症瘕坚硬之积，致发寒热，为厥阴之肝气凝聚，鳖甲气平，可以制肝，味咸可以软坚，所以主之也。

痞者，肝气滞也，咸平能制肝而软坚，故亦主息肉、阴蚀、痔核、恶肉也。

黄杰熙评：张氏之解鳖甲，除甲介属金，性主攻利；气味咸平，秉水气也，可取外，余无多大意义，类多无稽之谈。

盖鳖生池泽，昼伏夜出，何能随影而转？惟其昼伏夜出，故能入症瘕坚积、痞疾、息肉、阴蚀、痔核、恶肉等阴凝坚结之处而攻利之也。

叶注归经准确，以之注主治各症，病机治则，着实可探，故叶注基本可取。

陈注乃精简叶注而来，无多大补充说明，可有可无之注也。

鳖甲攻破之性特强，生鳖甲嚼服少许，顿感心慌意乱，肌肉惕动，故气虚血弱之人，绝对禁用。

《金匱》鳖甲煎丸，治疟邪结为症瘕，名曰疟母。

至于《温病条辨》之“青蒿鳖甲汤”、“二甲复脉汤”、“三甲复脉汤”，以及顾秋园之“保阴煎”等方，在脉症如此虚弱情况下，竟用鳖甲攻破之，岂不落井下石，余甚怀疑以上诸方立方之用意。

蟹

气味咸寒有小毒，主治胸中邪气热结痛，隔壁面肿，能败漆，烧之致鼠。

张隐庵曰：今人以蟹为肴饌，未尝以之治病，惟面有漆疮，多

用蟹黄敷之。

黄杰熙评：张解切实，蟹黄敷漆疮神效。

而蟹之气味咸寒入肾滋水清火有效，故主治胸中邪气热结痛，水火既济也；煎水服之，亦治漆疮。

蟹 壳（附）

烧存性，蜜调涂冻疮，及蜂蚕伤。久服治妇人儿枕痛，及血崩腹痛消积。

张隐庵曰：今外科多用蟹壳，捣细筛末，为铁箍败毒散。大抵蟹壳为攻毒散风，消积行瘀之用，学者以意会之可也。

黄杰熙评：张注数语，道出蟹壳外用内服之真谛。医者意也，岂止意会蟹壳而已。

蟹壳秉金刚之性，善于攻坚消积；咸寒之气味，长于清火解毒也。

蚱 蝉

气味咸甘寒无毒，主治小儿惊痫夜啼，癩病寒热。

张隐庵曰：蝉感秋气而生，应月周而去，秉金水之气化也，金能制风，水能清热，故主治小儿惊痫；昼鸣夜息，故止小儿夜啼。

水火不交，则癩病寒热，蝉秉金水之精，能启下焦之水气，上合心包，故治癩病寒热。

陈修园曰：蚱蝉气寒，秉水气，味咸得水味，而要其感凉风清露之气以生，得金气最全。

其主小儿惊痫者，金能平木也。

蚱蝉日出有声，日入无声，故止夜啼也。

癩病寒热者，肝胆之风火也，蚱蝉具金水之气，金能制风，水

能制火，所以主之。

黄杰熙评：张陈二氏之解，基本相同，用词稍异，可互证定其取舍。总嫌其欠全面透彻，另注之如下：

蚱蝉整蝉药用也，以其饮风露而生长，只小便不大便，秉金水之气化而制风清热，故治小儿惊痰。昼鸣夜不鸣，故治小儿夜啼，物性相通如此。“重阳狂，重阴癫”，癫病乃阴盛之疾患，蝉日出则鸣，日落则不鸣，得阳而兴奋，遇阴而休息，正与癫病相反，是为正治也。阴阳不颠倒，则寒热除，此亦物性相感应之治也。

《圣惠方》治百日发惊，方用蚱去翅足炙三分、赤芍三分、黄芩二分，水二盏，煎一盏，温服。

《圣济总录》治头风疼痛，方用蚱蝉二枚生研，入乳香、朱砂各半分，同研细末，水丸小豆大，每用一丸，随左右纳鼻中，出黄水为效。

余治小儿夜啼，用蝉一枚，烤乾研细末，乳头蘸喂五到六次，即愈。

蝉 蛻 (附)

气味咸甘寒无毒，主治小儿惊痫夜啼，去三虫，妇人生子不下，烧灰水服治久痢。

张隐庵曰：古人用身，后人用蛻，蛻者，退脱之义，故眼膜翳障，痘瘡不起，皮肤隐疹，一切风热之症，取而用之。

学者知蝉性之本原，则知蝉蛻之治疗矣。

黄杰熙评：蝉蛻之性，主要在一个“蛻”字上，故张氏之解，颇合其义。不过以皮达皮，还有发汗退烧之作用，此出《别录》，主治各症，纯是下退去之作用。

《证治准绳》蝉衣散，治肝经风热，上攻眼目，翳膜遮睛，赤

肿疼痛。方用蝉蜕、甘菊、羌活、防风、川芎、黄芩、栀子、谷精草、白蒺藜、密蒙花、草决明、荆芥穗、木贼草，以上各等分，研为细末，每服6克，茶清或荆芥汤入茶少许调下。

《沈氏尊生》治风热，蝉蜕、薄荷，各等分，研为细末，每服6克，酒水调下。

白 僵 蚕

气味咸辛平无毒，主治小儿惊痫夜啼，去三虫，灭黑黥，令人面色好，男子阴痒病。

张隐庵曰：僵蚕色白体坚，气味咸辛，秉金水之精也。

东方肝木，其病发惊骇，金能平木，故主治小儿惊痫。

金属乾而主天，天运循环，则昼开夜合，故止小儿夜啼。金主肃杀，故去三虫。

水气上滋，则面色润泽，故主灭黑黥，而令人面色好。金能制风，咸能杀痒，故治男子阴痒之病，阴，前阴也。

又云：蝉蜕、僵蚕，皆秉金水之精，故《本经》主治，大体相同。但蝉饮而不食，溺而不粪；蚕食而不溺，何以相同？《经》云：饮食入胃，上归于肺；谷入于胃，传之于肺。是饮食虽殊，皆由肺气之通调，则溺粪虽异，皆秉肺气以传化矣。

又凡色白而秉金气之品，皆不宜火炒。僵蚕具坚金之体，故能祛风攻毒，若以火炒，则全体消败，何能奏功。后人不体物理，不察物性，而妄加炮制者，不独一僵蚕已也。如桑皮炒黄，麻黄炒黑，杏仁、蒺藜皆用火炒，诸如此类，不能尽述，皆由不知药性之原，扭于习俗之所致也。

陈修园曰：僵蚕气平为秋气；味辛为金味、味咸为水味，秉金水之精也。

治惊痫者，金平木也。能治夜啼者，金属乾而主天，天运旋

转，昼开夜合也。杀三虫者，虫为风木所化，金主肃杀也。灭黑黓令人面色好者，俾水气上滋也。治男子阴痒者，金能制风，威能除痒也。

徐灵胎曰：“僵蚕感风气而僵，凡风气之疾，皆能治之，盖借其气以相感也。或问因风以僵，何以反能治风？曰：邪之中人也，有气而无形，穿经透络，愈久愈深，以气类相反之药投之，则拒而不入，必与之同类者，和入诸药，使为乡道，则药力至于病所，而邪与药相从，药性渐发，或从毛孔出，或从二便出，不能复留矣，此即从治之法也。风寒暑湿，莫不皆然，此神而明之之道，不专恃正治奏功也。”

黄杰熙评：张氏之注白僵蚕从形色到气味主治各症，是理顺了的，颇中肯启，堪称好注。其与蝉蜕药性之比较，亦颇得其要，以及论述制药之道，必遵崇物性原理，不得胡作非为，可说洽中时弊，值得赞赏。

陈注除稍似精简外，可说是张注之重复再现，证明“天下文章一大抄”，古今相同。

而末引徐灵胎之注僵蚕，别具一格，能得僵蚕之性能者，徐氏灵胎也，徐氏为医中之杰，名实相副也。

《本草衍义》治小儿惊风，方用白僵蚕、蝎梢等分，天雄尖、附子尖各三克，微炮为末，每一克或一克半。以姜汤调灌，治慢惊风有效。

《圣惠方》治偏正头风，与夹头风，连两太阳穴痛，方用白僵蚕为末，葱茶调服方寸匕。

《斗门方》治卒然头痛，方用白僵蚕为末，开水送服六克，立瘥。

《外台秘要》治项上瘰癧，白僵蚕为末，水服二克，日三次，十日瘥。

原 蚕 沙 (附)

气味甘辛温无毒，主治肠鸣，热中消渴，风痹瘾疹。

黄杰熙释：此出《别录》，《本经》无此。原蚕沙，即晚蚕屎也，食桑叶，尿而不尿，得桑之精气入浊道而驱风胜湿。气温入厥阴肝与心包络二经，温通血脉，血行则风息。味辛入肺、胃、大肠三经，驱风胜湿，味甘入脾补土制水湿，且辛甘发散为阳，使风湿从毛窍而汗出。

其主肠鸣者，水湿郁滞不行则肠鸣，蚕沙味辛燥湿，气温散水，故可以治愈之。

热中消渴者，热邪中人，耗水津，津液不升，则消渴引饮，蚕沙味甘益脾，味辛属金，金生水，气温升阳，化水为气，以滋润之，使热散津升，故可以治之。蚕屎而不尿，其屎干润，是为神奇之动物，燥而不极，使水气上滋外达，故有斯效。

风痹瘾疹者，受风而阻其血脉之行畅，郁于肌皮之下而成也，蚕沙气温行血，味辛制风，味甘达肌皮，故可以治之。

《圣惠方》治风瘙瘾疹作痒成疮，方用蚕沙一斤，水五斗，煮取一斗二升，去渣，洗浴避风。

《斗门方》治消渴饮水，方用晚蚕沙焙干为末，每用冷水服下六克，不过数服愈。

拙著《对症神方》治肠鸣，用晚蚕沙 30 克，再用白酒一两拌之，加水三杯，煎成一杯，温服之即愈。

樗 鸡

气味苦平有小毒，主治心腹邪气，阴痿，益精强志，生子色好，补中轻身。

张隐庵曰：樗鸡生于木上，味苦色赤，秉木火之气化。

主治心腹邪气者，秉火气以治心，秉木气以治腹也。

治阴痿者，火气盛也。益精强志，水火相济也。生子色好者，木生火也；补中轻身者，火生土也。

黄杰熙评：张氏以樗鸡生于木上，味苦色赤，秉木火之气化，即以五行之木火二气，以注解主治各症，触类能通，且甚简便，似可作为参考。

盖樗即臭椿树，樗鸡即臭椿树上所长之飞虫，状似蚕蛾，故又称红娘子、灰花蛾，翅两层，外层灰花，内层色红，以其飞跃而色红，故入血分破瘀逐血；气平入肺经而益金气；味苦入心补火行血气，是为通经化瘀行血之妙品。

主治心腹邪气者，通经化瘀行血之功也。

治阴痿者，味苦入心补火，火气随血脉下交于肾中，以壮肾阳而起阴痿也。益精强志者，肾阳壮则精生，阳生阴长也。肾藏志，肾气足则志强。心主色，心火足，肾气强，则生子色好。

肾气足则中气得补，补中则五脏六腑身躯百骸受益，故轻身。

余治妇女经闭，用调经药不效时，于原方加红娘子五至七枚，立效。

麀 虫

气味咸寒有毒，主治心腹寒热洗洗，血积症瘕，破坚下血闭，生子大良。

张隐庵曰：《金匱》方中治久病结积，有大黄麀虫丸，又治痞痞有鳖甲煎丸，及妇人下瘀血汤方，并用之。今外科、接骨科亦用之，乃攻坚破积行血散痞之剂，学者以意会之可也。

黄杰熙评：张氏此条非注，乃是引据《金匱》三方等说明而矣，说明麀虫是攻坚破积行血散痞之药。

蟻虫亦称地鳖、土鳖、土虫、簸箕虫，雄虫有翅能飞，形似蜚蠊，雌虫翅退化，体扁平呈卵圆形，头胸腹共十节，足三对，大小相等，雌虫供药用，喜居墙下松土中。

蟻虫紫褐色，乘厥阴之气化，入足厥阴肝经、手厥阴心包络经；光滑明亮，乘金刚之气，入手太阴肺经；气味咸寒，得少阴寒水之气与味，入足少阴肾经。为滋水清热，行血化瘀之品。

主治心腹寒热洗洗者，心腹血结则为寒，气流行不通，撞击之则发热，撞击摩擦则汗出洗洗，蟻虫入厥阴经行血化瘀则驱寒，气味咸寒以清热，故可以治之。

治血积症瘕，破坚下血闭者，以其行血化瘀之力，战必胜，攻必克也。

妇人无症瘕血积之患，气血调和流畅，故生子大良。

除张氏引据《金匱》三方外，尚有《金匱》土瓜根散，治妇人带下经水不利，少腹满痛，经一月再见者，方用土瓜根、芍药、桂枝、蟻虫，研末酒调服。

虻 虫

气味苦微寒有毒，主逐瘀血，破血积坚痞症瘕寒热，通利血脉及九窍。

张隐庵曰：虻乃吮血之虫，性又飞动，故主逐瘀血积血，通利血脉九窍。

《伤寒论》太阳病，表不解，随经瘀热在里，抵当汤主之，内用虻虫、水蛭、大黄、桃仁。

近时儿医治痘不起发，每加牛虻，此外未之用也。

黄杰熙评：张注虻虫，于理可通，亦与余注拙著《伤寒金匱方证类解》抵当汤之义，颇相近似，可谓不谋而合，证明从理论上之见地是相同的，并非臆说，因当时尚未读过张氏此注也。

后见近代人张寿甫论蛇虫，谓实验之无效，引起余之特别注意，经余单独多次用之实验，服后无任何感觉，于己于人，皆是如此，证明张说不诬。

蛞 蝓

气味咸寒无毒，主治贼风喎僻，跌筋及脱肛，惊痫挛缩。

张隐庵曰：蜒蚰感雨湿之气而生，故气味咸寒，主定惊，清热解毒，舒筋。

寇宗奭曰：蛞蝓能解蜈蚣毒。近时治咽喉肿痛，风热喉痹，用簪脚捡之，内入喉中，令吞下即愈。

黄杰熙评：张氏对蛞蝓亦非注，只是说明与引据补明而矣，但亦可取，以其非缪说也。

蛞蝓，亦名蜒蚰螺、蚰蝓、土蜗、托胎虫、鼻涕虫，形似蜗牛而无壳，各处湿地皆有，秉水湿之气而生长，蜈蚣秉燥气而生长，水湿至而燥气除，故蜈蚣畏蛞蝓，而蛞蝓制蜈蚣毒奇效。

蛞蝓气味咸寒，秉水之气与味，故入足少阴肾经。气味俱降，阴也。

主治贼风喎僻者，肝虚筋失其养，贼风骤至，筋失功能而喎眼喎僻，蛞蝓咸寒滋肾水而养肝筋，且虫形蠕动而恢复筋之功能，故可以治之。

跌筋及脱肛，惊痫挛缩，皆肝筋失养所形成，故蛞蝓皆可主治之。

《急救方》治脚胫烂疮，臭秽不可近。用蜒蚰十条，瓦焙研末，油调傅之，立效。

蜗 牛

气味咸寒有小毒，主治贼风喎僻，脱跌，大肠脱肛，筋急及惊痫。

张隐庵曰：蜗牛，一名蜗羸，感雨湿化生，而成介虫之类。气味咸寒，能消热解毒，甲虫属金，能去风定惊，大肠属阳明，寒则收缩，热则纵弛，故主治如此。

黄杰熙评：张氏此注，一不能与蛞蝓对比；二蜗牛有小毒，又怎样去解毒，还是加毒？三寒则收缩，热则纵弛，此物性也，寒凉之药很多，难道通能治脱肛乎？且筋急乃收缩而成，服之不是更加收缩乎？以上问题，张注无法理顺，故此注所取者不多。

盖蜗牛性同蛞蝓，主治亦相似，以解蛞蝓之文移于此，亦可解蜗牛也，故此不作赘解。

《圣惠方》治大肠脱肛，乃大肠久积虚冷，每因大便脱肛，用蜗牛一两烧灰，猪脂和傅立缩。

露 蜂 房

气味甘平有毒，主治惊痫瘈瘲，寒热邪气，颠疾鬼精蛊毒，肠痔。火熬之良。

张隐庵曰：蜂房水土结成，又得雾露清之气，故主祛风解毒，镇惊清热。

仲景鳖甲煎丸用之；近医用之治齿痛褪管，攻毒解毒，清热祛风，解者以意会之可也。

黄杰熙评：张注囿囿不实，非注经体裁，故所取者不多。

盖露蜂房乃黄蜂之窠，结于树上或人家之屋檐下，由窗纸经

蜂咀粘液结成，纯木质纤维构成之六角体，色黄褐或灰褐之半透明体。

而张氏谓“蜂房水土结成”，纯系理想之谈，不足取也。

露蜂房气平入手太阴肺经；味甘入足太阴脾经、足阳明胃经；木质纤维入足厥阴肝经；形似牙床，故入齿槽，使邪毒从齿槽而流出。

主治惊痫瘈瘲者，惊痫瘈瘲，皆肝经风动之疾患，露蜂房气平制风，故主治之。

寒热邪气者，肝为阴尽阳生之经，阴盛则寒，阳生则热，寒热错杂，谓之邪气，露蜂房入肝而补益之，使阴阳各安其宅，互不相扰，故主治寒热邪气。

颠疾鬼精盛毒肠痔者，阴盛则颠，鬼精盛毒生焉，阴者肝阴也，肝阴过盛，阳不足以和之，所生之疾患；肠痔乃肺火郁于魄门所致，露蜂房为蜂之窠穴，体阴用阳，以阳和阴，以阴济阳，使阴平阳秘，故主治之。

其能治牙痛者，以其入齿槽，而逐走寒热邪气也。

《袖珍方》治风虫牙痛，用露蜂房，醋煮乘热漱之。

《证治准绳》蜂房膏，治瘰癧，方用露蜂房、蛇蛻、玄参、蛇床子、黄芪、杏仁、乱发、铅丹、蜡，共熬膏外敷。

从以上二方证之，露蜂房，火熬之良。

乌 贼 鱼 骨

气味咸微温无毒，主治女子赤白漏下经汁，血闭，阴蚀肿痛，寒热症瘕无子。

张隐庵曰：乌贼鱼骨，秉金水之精金能平木，故治血闭肿痛，寒热症瘕；水能益髓，故治赤白漏下，女子无子。

《素问》治年少时有所失脱血，或醉入房，中气竭肝伤，故月

事衰少不来，病曰血枯，治以四乌鲂骨、一茹芦为末，丸以雀卵，大如小豆，每服五丸，饮以鲍鱼汁。

叶天士曰：乌鲂鱼骨，气微温，秉天春和之木气，入足厥阴肝经；味咸无毒，得地北方之水味，入足少阴肾经。气味升多于降，阳也。

女子以血为主，肝为藏血之脏，肝血不藏，则赤白漏下，其主之者，气温以达之也。

肝藏血，血枯则血闭，其主之者，味咸以通之。

肾为藏精之脏，主阴户隐曲之地；肝为厥阴，其经络阴器，其筋结阴器，二经湿浊下注，则阴蚀肿痛，其主之者，气温可以燥湿；味咸可以消肿也。

寒热症瘕者，症瘕而发寒热也，乌鲂骨咸可通，温可散寒热也。

男子肾虚，则精竭无子；女子肝伤，则血枯无子，咸温入肝肾，通血益精，令人有子也。

黄杰熙评：张注囿囿，并无深义，以秉金水之精金能平木为解，洽与所举四乌鲂骨一茹芦丸之治则矛盾，此丸治肝伤之病，既肝伤，何能平之，岂不落井下石耶？故张注理路不通，不可取。

叶注平易可取，归经肝肾，完全正确。所注主治各症，病机治则，基本正确，惟对“味咸以通之”及“咸不通”之说，似欠考虑，咸入肾而滋水精，咸可软坚而消肿，经有明义，味辛才主通，故叶氏用词于此，是有错误的，应以滋水精以润血枯，咸软坚而祛症瘕，并通月闭为解。

乌鲂鱼骨是滋补肝肾虚损之妙药，其能止血能通血者，肝肾功能恢复之效果也。

《内经》四乌鲂鱼骨一茹芦丸，茹芦即茜草，为末，以雀卵为丸，大如黄豆，每服五丸，以鲍鱼汤送下，“治伤肝之病，时时前后血”。具体症状应为：胸胁支满，四肢清冷，厌食，漏血，大便

带血，女子血枯经闭。

《沈氏尊生》治目翳，用乌贼骨加冰片少许，研细末点眼。

文 蛤

气味咸平无毒，治恶疮，蚀五痔。

张隐庵曰：蛤乃水中介虫，秉寒水之精，故主治恶疮蚀；感燥金之气，主资阳明大肠，故治五痔。五痔解，见黄芪条下。

《伤寒·太阳篇》曰：病在阳，应行汗解之，反以水渍之，若灌之，其热被郁不得去，弥更益烦，肉上粟起，意欲饮水，反不渴者，服文蛤五两为末，每服方寸匕，沸汤下，甚效。文蛤外刚内柔，象合离明，能燥水湿，而散热邪也。

黄杰熙评：张注简明扼要，颇合文蛤之本义，故此注基本可取。

张氏所举之例乃《伤寒论》上之“文蛤散”，而遗《金匱》之应用，《金匱·消渴小便利淋篇》曰：“渴欲饮水不止者，文蛤散主之”，与《伤寒》所论，洽为对子。此为心移热于肺之膈消症，水入即化气而腾出，虽多饮不断饮，亦不能止渴，用一味文蛤粉，沸汤和服，本金刚之质，同气相招而入肺金，以其苦以清热；咸为心经对宫之药，以水制火，则心肺膈上之火热去，病根除，渴欲饮水自止。余曾多次用之，神效。

《金匱》文蛤汤，方用文蛤，麻黄、杏仁、石膏、甘草、生姜、大枣组成，治“吐后，渴欲得水而贪饮者，文蛤汤主之。兼主微风，脉紧头痛”。

综上所述，文蛤之应用明矣。

盖文蛤即海蛤壳之有文理者，《本经》云“气味咸平无毒”，尝之还有明显之苦味，苦以泄热，咸可软坚，滋离中水精；生于海中而秉金刚干燥之性，故又能燥湿利小便，归入心肺肾膀胱四经。

统观此药之性，勿外清热利湿，化痰散结之功，用治口渴、心烦、皮肤结核、咳逆喘满等症有奇效。

发 鬣

气味苦温无毒，主治五癰，关格不通，利小便水道，疗小儿惊，大人瘥，仍自还神化。

张隐庵曰：发者血之余，血者水之类，水精奉心，则化血也。又《经》云：“肾之合骨也，其荣发也”，是发乃少阴心肾之所主，故气味苦温，苦者火之味，温者火之气也，水火相济，则阴阳和合，故主治五癰，及关格不通。又曰利小便水道者，言秉肾气，益膀胱，则利小便；秉心气而益三焦，则利水道也。

心虚则惊，肾虚则瘥，发乃少阴心肾之所主，故疗小儿惊，大人瘥。小儿天癸未至，故病惊；大人天癸已至，故病瘥也。

发鬣炼服，能益水精而滋血脉，故曰“仍自还神化”，谓仍能助水精，而颠倒心脏之神，以化其血也。凡吐血、衄血之症，皆宜用血余也。

黄杰熙评：发名血余，张注从少阴水火，即水与血入解，颇合经义，故所解经文，基本可取。

然此注之重点仍在“自还神化”四字，张注理路未清，其解不真。兹引《本草问答评注》六十六问唐容川之说以阐明之，唐氏曰：“制发为药，可以补血，以其为血之余也；又能利下水，以其为气所化也。《本经》言仍‘自还神化’四字，无人能解，不知神者心所司，谓发之性，能还心为神，复能化血以下交于水，相为循环也”。即发之性，能自还于心为神，又能补血，并下交于水以化气，而气又生神，相为循环不已也。

《金匱》滑石白鱼散，治小便不利，方用滑石、乱发、白鱼，研为散，清水调服。

《圣惠方》三奇散，治鼻血不止，方用乱发灰、人中白、麝香，研末搐鼻。

本 经 下 品

附 子

气味辛温有大毒，主治风寒咳逆邪气，寒湿痿躄，拘挛膝痛，不能行步，破症坚积聚，血瘕金疮。

张隐庵曰：附子秉雄壮之质，具温热之性，故有大毒。《本经》下品之药，大约有毒者居多，《素问》所谓毒药攻邪也，夫攻其邪，而正气复，是攻之即所以补之。

附子味辛性温，生于彰明赤水，是秉大热之气，而益太阳之标阳，助少阴之火热者也。

太阳阳热之气，不循行于通体之皮毛，则有风寒咳逆之邪气，附子益太阳之标阳，故能治也。

少阴火热之气，不能行于肌阙之骨节，则有寒湿痿躄拘挛，膝痛不能行步之症，附子助少阴之火热，故能治也。

症坚积聚，阳气虚而寒气内凝也；血瘕乃阴血聚而为瘕；金疮乃刀斧伤而溃烂，附子具温热之气，以散阴寒；秉阳火之气，以长肌肉，故皆治之。

《经》云：“草生五色，五色之变，不可胜视；草本五味，五味之美，不可胜极。天食人以五气，地食人以五味。”故在天时，宜司岁备物；在地利有五方五土之宜。附子以产彰明赤水者为胜，盖得地土之专精。夫太阳之阳，天一之水也，生于膀胱水腑，而

彰明于上；少阳之阳，地二之火也，生于下焦之火，而赤日行天，据所出之地曰彰明、曰赤水，盖有巧符者矣，学者欲知物性之精微，而五方生产之宜，与先圣命名之意，亦当体认毋忽也。

今陕西亦时植附子，谓之西附，性辛温，而力稍薄，不如生于川中者，土厚而力雄也。又今药市中零卖制熟附子，皆西附之类，盖川附价高，市利者皆整卖不切片卖，用者须知之。

凡人火气内衰，阳气外驰，急用炮熟附子，助火之原，使神机上行，而不下殒，环行而不外脱，治之于微，奏功颇易。奈世医不明医理，不识病机，必至脉脱厥，心神去魂魄离，方谓宜用附子。夫附子治病者也，又何能治命。甚至终身行医，而终身视附子为蛇蝎，每告人曰：附子不可服，服之必发狂，而九窍流血；服之必发火，而痛毒累身；服之必内烂五脏，今年服之，明年毒发。嗟嗟！以若医而遇附子之症，何以治之？肯后利轻名，而自谢不及乎！肯自居庸浅，而介贤以补救乎！必至今日药之，明日药之，神气已变，然后覆之，斯时虽有神丹，莫之能救。贤者于此，或且热衷，不忍立视其死，间投附子以救之，投之而效，功也；投之不效，亦非后人之过。前医惟恐后医奏功，只幸其死，死后推过，谓其死由饮附子而死。噫！若医而有良心者乎，医不通经旨，牛马而襟裾，医云乎哉！

如用附子，本身有一两余者，方为有力，侧子分两须除去，土人欲增分量，用大桮将侧子敲平于上，故附子重一两五六钱者方好。土人又恐南方得种，生时以戎盐腌之，然后入桮敲平，是附子本无咸味，而以盐腌之故咸也。

制附子之法，以刀削去皮脐，剖作四块切片，用滚水连泡二次，去盐味毒味晒半燥，于铜器内炒熟用之。

盖上古司岁备物，火气司岁，则备温热之药，《经》曰：司岁备物，专精者也；非司岁备物，气散者也。后世不能如上古之预备，故有附子火炮之说，近医以童便煮之，乃因讹传讹，习焉不

知其非耳。

陈修园曰：《素问》谓以毒药攻邪，是回生妙手，后人立补养等法，是摩棱巧术，究竟攻其邪而正气复，是攻之所以补之也。

附子味辛气温，火性迅发，无所不到，故为回阳救逆，第一品药。

《本经》云：“风寒咳逆邪气”，是寒邪之逆于上焦也；“寒湿痿蹙拘挛，膝痛不能行步”，是邪气着于下焦筋骨也；“症坚积聚血瘕”，是寒气凝结，血滞于中也，考《大观本草》，“咳逆邪气”句下，有“温中金疮”四字，以中寒得暖而温，血肉得暖而合也。

大意上而心肺，下而肝肾，中而脾胃，以及血肉筋骨营卫，因寒湿而病者，无有不宜，即阳气不足，寒自内生，大汗大泻，大喘中风卒倒等症，亦必仗此大气大力之品，方可挽回，此《本经》言外意也。

又曰：附子主寒湿，诸家俱能解到，而仲景用之，则化而不可知之谓神，且夫人之所以生者，阳也，亡阳则死。亡字分二义，一无方切、音忘，逃也，即《春秋传》“出亡”之义也；一微夫切、音无，无也，《论语》“亡而为有”，《孟子》“问有余，曰亡矣”之义也。误药大汗不止为亡阳，如唐之幸蜀，仲景用四逆汤、真武汤等法以迎之；吐利厥冷为亡阳，如周之守府，仲景用通脉四逆汤、姜附汤以救之。且太阳之标阳，外呈而发热，附子能使之交于少阴而热已；少阴之神机病，附子能使自下而上而脉生，周行通达而厥愈；合苦甘之芍药而补虚；合苦淡之苓芍而温固，元妙不能尽述，按其立法，与《本经》之说不同，岂仲景之创建欤！然《本经》谓“气味辛温有大毒”七字，仲景即于此悟出附子之大功用，温得东方风木之气，而温之至则为热，《内经》所谓“少阴之上，君火主之”是也，辛为西方燥金之味，而辛之至则反润，《内经》所谓“辛以润之”是也。

物性之偏处则毒，偏而于无可加处则大毒，因“大毒”二字，

知附子之温为至极。辛为至极也。仲景用附子之温有二法，杂于苓芍甘草中，杂于地黄、泽泻中，如冬日可爱，补虚法也；佐以姜桂之热，佐以麻辛之雄，如夏日可畏，救阳法也。用附子之辛，亦有三法，桂枝附子汤、桂枝附子去桂加白术汤、甘草附子汤，辛燥以祛除风湿也；附子汤、芍药甘草附子汤，辛润以温补水脏也；若白通汤、通脉四逆汤、加人尿猪胆汁，则取西方秋收之气，保复元阳，则有大封大固之妙矣。

黄杰熙评：张氏以附子秉雄壮之质，具温热之性，以注解经文主治各症，颇得其要，故其注基本可取。

而张氏注后，所附议论颇多，类多有见地者，亦可取。惟对制附子及火炮之议论，纯系错误与偏见，容后再一一评正之。

陈氏以附子味辛气温，火性迅发，无所不到，故为回阳救逆，第一品药为注，注解主治各症，病机治则，触类而通，并解到《本经》言外之意，弦外之音，可谓善注者也。

陈氏不愧为《伤寒》名家，对仲景发明《本经》之义，与创造性应用附子之义，从药性到组方，阐发得淋漓尽致，其所论述，精辟极了，学者宜再三研习之，对医理医术之提高，大有助益焉。

惟对附子之炮制，未曾论及，在应用上欠周详，不无遗憾。

盖附子为辛温大毒之品，其辛为大辛则润，入手太阴肺经、足阳明胃经、手阳明大肠经；其温为大温则火热，入命门、肝经与手少阴心经及胆与三焦经，以其火热迅发之性，通行十二经脉，筋骨皮肉，无所不到，为补阳、回阳、救寒逆之第一要药。

惟其有大毒，中其毒者，迅速死亡，迄今尚无药可救，化学分析，为“乌头碱”中毒死亡。

盐腌、尿煮、水泡、火炮等法，皆为去其毒也。但盐腌、尿煮、水煮，水泡等法，联合用之，皆去毒难尽，用之每致人死亡，故上法不善，最好停用。惟火炮最宜，称炮附子，但火炮之附子，如饮片中留白心者，即火炮去毒未净，服之亦可致人死亡，其毒

之大，可知而知也。

但《伤寒论》、《金匱》两书上，用生附子、生乌头之方不少，如四逆汤、四逆加人参汤、通脉四逆汤、通脉四逆加猪胆汁汤、干姜附子汤、白通汤、白通加猪胆汁汤等等，皆用生附子；乌头汤、乌头桂枝汤等，皆用生乌头，迄今皆属疑案，历代医家，谁敢用生附子、生乌头、生天雄呢？不是以炮附子、炮乌头、炮天雄代替之。孟子曰：“尽信书，不如无书。”对《内经》、《难经》、《本经》、《伤寒》、《金匱》等五大经书，亦应如是观，等而下之，更不足论矣，决不能读书死于句下，误己误人，损己害人。

天 雄

气味辛温有大毒，主治大风寒湿痹，历节痛，拘挛缓急，破积聚邪气，金疮，强筋骨，轻身健行。

张隐庵曰：天雄、附子，《本经》主治稍异，而旨则同，故不加释。

黄杰熙释：张氏不释，以其主治稍异而性同也。

按：宋朝人杨天惠《附子记》云：“绵州（今四川绵阳）乃故广汉地，领县八，惟彰明出附子，彰明领乡二十，惟赤水、廉水、昌明、会昌四乡产附子，而赤水为多，每岁以上田熟耕作壅，取种子龙安、龙州、齐归、木门、青璉、小坪诸处。十一月播种，春月生苗，其茎类野艾而泽，其叶类地麻而厚，其花紫瓣黄蕊，长苞而圆。七月采者，谓之早水，拳缩而小，盖未长成也；九月采者乃佳，其品凡七，本同而末异，其初种之小者为乌头，附乌头而旁生者为附子；又左右附而偶生者为鬲子；附而长者为天雄；附而关者为天雄；附而上出者为侧子；附而散生者为漏篮子，皆脉络连贯，如子附母，而附子以贵，故专附名也。”

漏篮子即雷斅所谓“木鳖子”；《大明》所谓“虎掌”也。

鬲子即“乌啄”也。

天雄即天雄之类，可以同用。气味与附子相同，一本七出，其形各辛，天雄附而长，其气最足，其形质最俊壮，故主治各症，应优于其母乌头与诸兄弟姊妹也。

《金匱》天雄散，方用炮天雄、白朮、桂枝、龙骨，杵为散，酒服半钱匕，日三服，不知，稍增之。治失精家，少腹弦急，阴头寒，目眩，发落，脉极虚芤迟，为清谷亡血失精者，用之颇有效验。

乌 头 (附)

气味辛温有毒，主治诸风，风痹血痹，半身不遂，除寒冷，温养脏腑，去心下坚痞，感寒酸痛。

黄杰熙释：乌头为附子、天雄、乌啄等之母也，生子繁多，精华殆尽，即老阴之不能生育者也。

气味辛温有毒，而非大毒，精华殆尽之验也；味辛入肺、胃、大肠三经；气温入肝与心包络二经。

主治诸风、风痹、血痹、半身不遂者，辛能制风；温能温通血脉、筋骨、肌肉，故主治之也。

除寒冷，温养脏腑，去心下坚痞，感寒酸痛者，温能除寒，温散之力也。

《金匱》乌头汤，治病历节，不可屈伸，疼痛；脚气疼痛，不可屈伸。方用川乌、麻黄、芍药、黄芪、炙甘草，以蜜二升煎川乌得一升，即出乌头；其余四味，加水三升，煎取一升，去滓，内蜜煎中，更煎之，服七合，不知，尽服之。

按：川乌即乌头，为人工种植者；另有一种“草乌”，为野生乌头，川乌、草乌，毒性皆大，蜜煎何能去之，应火炮去毒为宜，

参看附子条下即知。

《金匱》还有乌头桂枝汤治寒疝，腹中痛，逆冷，手足不仁，苦身疼痛，灸刺，诸药不能治，抵当乌头桂枝汤主之，以及乌头赤石脂丸治心痛彻背，背痛彻心。证明仲景用药，悉遵《本经》，并有创造发明者也。

乌 啄 (附)

气味辛温有大毒，主治中风恶风，洗洗出汗，除寒湿痹，咳逆上气，破积聚寒热，其汁煎之名射网，杀禽兽。

张隐庵曰：乌啄虽亦名乌头，实乃土附子也，性劣有毒，但能搜风胜湿，开顽痰，破坚积，治顽疮。以毒攻毒，不能如附子，益太阳之标阳，助少阴之火热，而使神机之环转，用者辨之。

黄杰熙评：张氏不明乌啄之来路，妄断为乌头，又妄云乃土附子也。

其性介于天雄与附子之间，医方鲜用之，药材商早已混入附子中出售。欲明其来路与用法，请参阅天雄与附子条下之评即明，兹不赘。

大 黄

气味苦寒无毒，主下瘀血，血闭，寒热，破症瘕、积聚、留饮、宿食，荡涤肠胃，推陈致新，通利水谷，调中化食，安和五脏。

张隐庵曰：大黄味苦色黄，气寒嗅香，乃肃清中土之剂也。

其性走而不守，主下瘀血、血闭。气血不和，则为寒为热，瘀血行而寒热亦除矣。不但下瘀血、血闭，且破症瘕积聚，留饮宿

食。夫留饮宿食，在于肠胃；症瘕积聚，陈垢不清，故又曰荡涤肠胃，推陈致新。夫肠胃和，则水谷通利；陈垢去，则化食调中，故又曰通利水谷，调中化食也。

《玉机真脏论》云：“五脏者，皆秉气于胃，胃者，五脏六腑之本也，胃气安，则五脏亦安。”故又曰安和五脏。愚按：大黄抑阳养阴，有安和五脏之功，故无毒。

而《本经》名曰“黄良”，但行泄太迅，下瘀破积，故别名“将军”，而列于下品。

西北之人，土气敦厚，阳气伏藏，重用大黄，能养阴而不破泄；东南之人，土气虚浮，阳气外泄，稍用大黄，即伤脾胃，此五方五土之有不同也。又总察四方之人，凡秉气厚实，积热留中，大黄能养阴而推陈致新，用之可也，若素秉虚寒，虽据证当用大黄，亦宜量其人而酌减，此因秉气之有不同也。至《伤寒·阳明篇》中，三承气汤，皆用大黄，大承气、调胃承气与芒硝同用，所以承在上之火热，而调其肠胃，使之下泄也；小承气汤但用大黄，不用芒硝，所以行肠胃之燥结也，燥结行而阴阳上下内外皆和。今人不知《伤寒》精义，初起但发散而消食，次则平胃而挨磨，终则用大黄以攻下，不察肌表经脉之浅深，不明升降出入之妙义，胸膈不舒，便谓有食，按之稍痛，更云有食，外热不除，必绝其谷，肠虚不便，必下其粪，处方用药，必至大黄而后已。夫秉质敦厚，或感冒不深，虽遭垂害，不即殒躯，当一二日而愈者，必至旬日；当旬日而愈者，必至月余。身愈之后，医得居功，若正气稍虚，或病虚猖獗，亦以此医治之，此医但知此法，解不至死，噫！医所以寄死生，可以盲瞽不明者，而察秋毫之末乎！不思结网，但知羡鱼，耻也！旁门管窥，居之不疑，耻更甚焉！

叶天士曰：大黄气寒，秉天冬寒之水气，入手太阳寒水小肠经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经、手少阳相火三焦经。气味俱降，阴也。浊阴归六腑，味厚则泄，兼入足阳明胃

经、手阳明大肠经，为荡涤之品也。

味厚为阴，则入阴分，血者阴也，心主者也，血凝则瘀，大黄入心，味苦下泄，故下瘀血。血结则闭，阴不和阳，故寒热生焉，大黄味苦下泄，则闭者通，阴和于阳，而寒热止矣。症瘕积聚，皆有形之实邪，大黄所至荡平，故能破之。小肠为受盛之官，无物不受，传化失职，则饮食留积矣，大黄入小肠而下泄，所以主留饮宿食也。味厚则泄，浊阴归六腑，大黄味厚为阴，故入胃与大肠，而有荡涤之功也。消积下血，则陈者去而新者进，所以又有推陈致新之功焉。

以滑润而能通利水谷，不使阻滞肠胃中也，肠胃无碍，则阳明胃与太阴脾，调和而食消化矣，饮食消化，则阴之所以本自五味，五脏主藏阴，阴生而脏安和矣。

陈修园曰：大黄色正黄而嗅香，得土之正气正色，故专主脾胃之病，其气味苦寒，故主下泄。

凡血瘀而闭则为寒热，腹中结块，有形可徵曰症，忽聚忽散曰瘕，五脏为积，六腑为聚，以及留饮宿食，得大黄攻下，皆能治之。

有荡涤肠胃下五句，是申明大黄之效，末一句是总结上四句，又大申大黄之奇效也。意谓人只知大黄荡涤肠胃，功在推陈，即所以致新乎？人知大黄通利水谷，功在化食，抑知化食，即所以调中乎？且五脏皆秉气于胃，胃得大黄运化之功而安和，而五脏亦得安和矣，此《本经》所以有黄良之名也。

黄杰熙评：张注以味苦色黄，气寒嗅香为依据，注解经文，顺理成章，通则能通，但不无遗蕴，容后再议。

至于谈到四方及秉气厚实与浅薄之人，量用大黄，必须慎重斟酌，确实垂戒之言，可以取法。

关于《伤寒论·阳明篇》中，三承气汤皆用大黄之义，其阐发之言，类多可取。其批驳庸医不知伤寒精义，治感冒三法，今

则累见不鲜，害人不浅，批驳洽当，申张正义之言也。

叶注归经全面而准确，所解主治各症，病机治则，简明洽当，故其注基本可取。

陈注简切，突出重点，专主脾胃之病，功主下泄。实则精简张注之义而成注，别无新义。

盖大黄气味苦寒无毒，主下泄，而黄连、黄芩、黄柏等，皆气味苦寒无毒，为什么不主下泄，反而能厚肠胃、止泄痢之功呢？对比之下，张、陈二氏根本不明此义；叶氏有“以滑润而能通利水谷，不使阻碍肠胃中也”之注，道其然，而未道其所以然也。

四黄皆色黄味苦气寒，乃火生土，退出火色而成土之正色，其能清者，正如离（☲）卦，退出上下之阳爻，剩下中间之阴爻水也，故气寒而能清火。味苦入心与小肠；色黄入脾胃大肠；气寒入肾膀胱，此四黄之共同疗效也。

其不同者，黄连、黄芩、黄柏，干枯而无油滑之质，故守而不走；大黄油滑多汁，以气香而行滑润，故走而不守，所以前者厚肠胃止泄痢；后者专主下泄，其理在此。

《伤寒》三承气汤皆主用大黄，调胃中气汤治胃之燥结；大承气汤治大肠之燥结，手足阳明，皆属燥经，故必须加入芒硝引水润燥。小承气汤治小肠燥结，小肠属手太阳寒水之经，无须引水润燥，故不须加入芒硝。

半 夏

气味辛平有毒，主治伤寒寒热，心下坚，胸胀欬逆，头眩，咽喉肿痛，肠鸣下气，止汗。

张隐庵曰：《月令》五月半夏生，盖当夏之半也。《脉解篇》云“阳明者午也，五月盛阳之阴也。”

半夏生当夏之半，白色味辛，秉阳明燥金之气化。主治伤寒

寒热者，辛以散之也。阳明胃络，上通于心，胃络不通于心，则心下坚；胸者肺之部，阳明金气平合于肺，金气不和于肺，则胸胀咳逆，半夏色白属金，主宣达阳明之气，故皆治之。

金能制风，故治头眩，以及咽喉肿痛。燥能胜湿，故治肠鸣之下气而止汗也。

叶天士曰：半夏气平，秉天秋燥之金气，入手太阴肺经；味辛有毒，得地西方酷烈之金味，入足阳明胃经、手阳明大肠经。气平味辛，阳也。

主伤寒寒热心下坚者，心下脾肺之区，太阴经行之地也。病伤寒寒热而心下坚，湿痰在太阴也，半夏辛平消痰去湿，所以主之也。胸者肺之部也，胀者气逆也，半夏辛平，辛则能开，平则能降，所以主之也。

咳逆头眩者，痰在肺则气不下降，气逆而头晕眩也。东垣曰：“太阴头痛，必有痰也”，半夏辛平消痰，所以主之。咽喉太阴经行之地，火结则肿痛，其主之者，辛能散结，平可下气，气下则火降也。肠鸣者，大肠受湿，则肠中切痛而鸣濯濯也，辛平燥湿，故主肠鸣下气者，半夏入肺，肺平则气下也。阳明之气本下行，上逆则汗自出矣，平能降气，所以止汗也。

陈修园曰：半夏气平，秉天秋金之燥气，而入手太阴；味辛有毒，得地西方酷烈之味，而入手足阳明。辛则能开诸结，平则能降诸逆也。

伤寒寒热心下坚者，邪结于半表半里之间，其主之者，以其辛而能开也。咽喉肿痛，头眩上气者，邪逆于巅顶胸膈之上，其主之者，以其平而能降也。肠鸣者，大肠受湿，则肠中切痛而鸣濯濯也，其主之者，以其辛平能燥湿也。

又云止汗者，另著有辛中带湿之功也。仲景于小柴胡汤用之，以治寒热；泻心汤用之，以治胸满肠鸣；少阴咽痛亦用之；《金匱》头眩亦用之，且呕者，必加此味，大得其开结降逆之旨，用

药悉遵《本经》，所以为医中之圣。

又曰：今人以半夏功专祛痰，概用白矾煮之，服者往往致吐，且致酸心少食，制法相沿之陋也。古人只用汤洗七次去涎，今人畏其麻口，不敢从之。余每年收干半夏数十斤，洗去粗皮，以生姜汁甘草水浸一日夜，洗净，又用河水浸三日，一日一换，搥起蒸熟晒干切片，隔一年用之甚效。盖此药是太阴、阳明、少阳之大药，祛痰恰非专长，仲景诸方加减，俱云呕者加半夏，痰多者加茯苓，未闻以痰多加半夏也。

黄杰熙评：张注以半夏色白味辛，定为阳明燥金之气化，以解经文主治，通则勉强能通，但不无遗义。

叶注详于归经，并以“消痰去湿”为重点，以注解经文，较张注有进一步之发挥，故基本可取。

陈注取叶注之精华，去其祛痰之说，且以仲景诸方为佐证，突出“开结降逆”之功，末论半夏之制法，颇合经旨与实际，最为可取，似后来者居上。

关于半夏，《礼记·月令》曰：“五月半夏生”，以其生当夏之半而得名。药用其根，而根成于八月，既秉火气而生，故其性温，而非平；得金气而成，故其味辛，正合金火之气味也，《本经》年远代湮，抄写或有遗误，今特正之。

五月乃阳入阴之时，故凡阳不入阴之病，皆可借用。如歧伯曰：“卫气行于阳，阳气满；不得入于阴，阴气虚，故目不瞑。治法：饮以半夏汤一剂，阴阳既通，其卧立至。方用：流水千里者八升，扬之万遍，取清五升煮之，炊以苇薪，大沸入秫米一升，半夏五合，煮汁一升半，饮汁一升，日三，以知为度。新病发者，覆杯则卧，汗出则已；久者三饮而已”。此为《内经》治阳不入阴而失眠之神方，其中主要借用半夏之性，其以阳入阴之力而入睡，后人以为祛脾胃之痰湿而入睡，所论隔靴搔痒矣。

再则，半夏降逆止呕之力，亦取其由阳入阴之性，非取其辛

温之气味也。盖具辛温气味之药很多，如细辛，不但不能降下，反能升散足少阴经之寒湿。而半夏之辛温，主要是入脾燥湿祛痰，同时辛还可利肺气，故列为治因寒咳嗽之良药，仲景小青龙汤与《局方》二陈汤用之，均此义也；辛又主润，故《局方》半硫丸，用以治老人虚秘，大便燥结。

以其阳入阴之性，与胃气下行为顺之义吻合，故半夏成为降胃气上逆，止呕吐之圣药，仲景诸方呕加半夏，咳加茯苓，其义在兹。

汤泡七次以制半夏为宜，制者去其毒也，非为其他。

连 翘

气味苦平无毒，主治寒热鼠痿，瘰疬痈肿，恶疮瘰瘤，结热蛊毒。

张隐庵曰：连翘味苦性寒，形象心肾，秉少阴之气化。

主治寒热鼠痿瘰疬者，治鼠痿瘰疬之寒热也。夫痿有内外二因：内因曰鼠痿，外因曰瘰疬，其本在脏，其末在脉，此内因而为水毒之痿，故曰鼠痿也；陷脉为痿，留连肉腠，此外因寒邪薄于肉腠之痿，故曰瘰疬也。

是鼠痿起于肾脏之毒，留于心主之血脉。瘰疬因天气之寒，伤人身之经脉，连翘形象心肾，故治鼠痿瘰疬也。

痈肿恶疮，肌肉不和；瘰瘤结热，经脉不和，连翘味苦，其气芳香，能通经脉，而利肌肉，故治痈肿恶疮瘰瘤结热也。

受蛊毒者在腹，造毒者在心，苦寒泄心，治造毒之原，芳香醒脾，治受毒之腹，故又治蛊毒。

叶天士曰：连翘气平，秉天秋平之金气，入手太阴肺经；味苦无毒，得南方之火味，入手少阴心经、手厥阴心包经。气味俱降，阴也。

心包络者，臣使之官，喜乐出焉，其经别属三焦，出循喉咙，出耳后，合少阳，郁则包络之火上炎经络，而成寒热鼠痿瘰癧矣，连翘清苦而轻扬之，因而越之，结者彻而寒热愈矣。痈肿恶疮，皆生于心火，连翘味苦清心，所以主之。瘰癧结热，亦心内包络之郁结火也，其主之者，轻扬有散结之功也。蛊毒因湿热而成，湿热则生虫也，连翘平能清而苦能泄也，热解湿化而虫自消也。

《灵枢·寒热论》：“岐伯曰：鼠痿寒热之毒气也，留于脉而不去者也，其本在于水脏，故曰鼠；上通于心主之脉，颈腋溃烂，故曰痿”。鼠痿寒热之毒气者，言鼠痿水毒而为寒，上合于心包而为热也，主治寒热鼠痿者，治鼠痿者，治鼠痿之寒热也。今人不解《本经》，只事抄袭，以寒热二字句逗，谓连翘主治寒热，出于神农之言，凡伤寒、中风之寒热，一概用之，岂知风寒之寒热，起于皮肤；鼠痿之寒热，起于血脉，风马牛不相及也，嗟嗟！为医者可不知《内经》乎！《灵枢》论营卫血气之生始出入，脏腑经脉之交合贯通，乃医家根本之学，浅人识为“针经”而忽之，良可惜也。

黄杰熙评：张注易《本经》“气味苦平”为味苦性寒，虽悖经文，但与实际相合，故可取法。而形象心肾，秉少阴之气化即归经之义，以之注解主治各症，基本合拍，所以此注可取。

叶注遵经注解，难免拘挛之处，如气平入手太阴肺经，在主治上根本用不着，显然有误，而提出入手厥心包络经，及属三焦合少阳，确实可取，可补张注之不足。所注主治各症，别开溪径，与张注互参，互补性很强，可证经义涵盖无穷矣。所引《内经》之文，益极恰当，可弥补前注之失，明明有足少阴肾，在归经中拘于“平”字，使注解大为减色，能引经缀补之，可见其遵经之苦心孤诣也。末后之批判今人不解寒热二字，切中时弊，犹其是识《灵枢》为“针经”，是浅人以别《内经》之话也，恰当无比。

二氏之注连翘，互补后好则好矣，不无遗蕴。盖连翘味苦气

寒，但气味皆薄，味苦入手少阴心经，气寒入足少阴肾经，气味皆薄有发散经邪与透表逐邪之功。形似心脏与心包络，中有小房似三焦隔膜，故又入手厥阴心包络经，少阳三焦与胆经。质轻扬具上升外达之力，碎之有油质与清香气，故入足太阴脾经与足厥阴肝经，以解郁热而发汗，具油质则发汗之力绵长，可达十二个小时之久。

其主治寒热鼠疫，瘰疬痈肿，恶疮癰瘤，结热蛊毒者，皆以其能内达脏腑，外至经络皮肤，清热解毒，开门逐盗之功也。《局方》凉膈散用之治温病表里实热；《温病条辨》银翘散用之治温病初起发热无汗，或有汗不多，但热不恶寒、头痛、口渴、咳嗽、咽痛者，均取其清热解毒，透达汗解绵长之功也。

翘 根

气味甘寒平有小毒，主治下热气，益阴精，令人面悦好，明目。久服轻身耐老。

黄杰熙释：翘根即连翘根，仲景谓之“连轺”，气寒入足少阴肾经；气平，秉天秋平之金气，入手太阴肺经；味甘入足太阴脾经。气味俱降，阴也。

主治下热气者，气平能降，气寒能清热，能使热气从大小便而下出也。阴精者，肾精也，连轺味甘补脾，脾精足则阴精足也；气平益肺，肺为水之上源，金生水，肾水足则阴精受益也。

令人面悦好者，金水相生，水色现于面而悦好也。

明目，肾主瞳子，阴精足则明目，视物辨形一清二楚也。

久服肺气足则轻身；肾为五脏六腑身軀百骸之根，肾精足则耐老。

《伤寒论》麻黄连轺赤小豆汤，治伤寒瘀热在里，身必黄。以连轺清热透表下热气，外从汗解，内从二便出。不过今之药房无

连翘，多以连翘代之，效用相似。

桔 梗

气味辛微温有小毒，主治胸胁痛如刀刺，腹满肠鸣幽幽，惊恐悸气。

张隐庵曰：桔梗，根色黄白，叶毛味辛，秉太阴金土之气化；味苦性温，花茎紫赤，又秉少阴火热之气化。

主治胸胁痛如刀刺者，桔梗辛散温行，能治上焦之胸痛，而旁行于胁腹，能治少阳之胁痛，而上达于胸也。

腹满肠鸣幽幽者，腹中寒则满，肠中寒则鸣，腹者土也，肠者金也，桔梗秉火土金相生之气化，能以火而温腹满之土寒，更以火而温肠鸣之金寒也。

惊恐悸气少阴病也，心虚则惊，肾虚则恐，心肾皆虚则悸，桔梗得少阴之火化，故治惊恐悸气。

愚按：桔梗治少阳之胁痛，上焦之胸痹，中焦之肠鸣，下焦之腹满，又惊则气上，恐则气下，悸则动中，是桔梗为气分之药，上中下皆可治也。张元素不参经义，谓桔梗乃舟楫之药，载诸药而不沉，令人熟念在口，终身不忘，夫以元素杜撰之言为是也，则《本经》几可废矣！

一门豪杰之士，阐明神农之《本经》，轩歧之《灵素》，仲祖之《论略》，则千百方书，皆为糟粕，设未能也，必为方书所囿，而蒙蔽一生矣，可畏哉！

叶天士曰：桔梗气微温，秉天初春稚阳之木气，入足少阳胆经；味辛有小毒，得地西方惨阴之金气，入手太阴肺金。气味俱升，阳也。

胸者，肺之分也；胁者，胆之分也，胆气不升，肺气不降，则滞于胸胁，痛如刀刺矣，其主之者，辛以散之，温以达之也。

足之三阴，从足走腹，太阴行气于三阴者也，肺亦太阴，通调上下相传之职，太阴不能通调，则腹满饱矣，其主之者，辛以调气，温以行气也。

大肠者，燥金之府也，大肠湿热则鸣幽幽，肺与大肠为表里，桔梗辛以益肺，肺通调水道，则湿热行而肠鸣自止。

胆为中正之官，胆者担也，胆气伤则不能担当而惊恐悸矣，桔梗辛温，则扶苏条达，遂其生发之性，复其果敢之职，而惊恐自平也。

黄杰熙评：张注从桔梗之根色叶毛花茎入手，以定归经为火土金三脏，确实形象思维第一流，而以之论主治各症，亦能步步合拍。

尤其末后之按语，是该注之精华。桔梗是气分药，能理三焦之气，气行则血行，气血流畅，则主治各症迎刃而解。而张元素谓为诸药之舟楫，确属杜撰。若根据仲景药法，具开提肺气之功可证实。

最后乃张氏舒怀之作，业医者若不精研《内经》、《本经》、《伤寒》、《金匱》四大经典著作，撷拾方书而速成的话，终身不过庸医尔。

叶注遵经注解，归入足少阳胆经，手太阴肺经，比张注更为具体实在。以之注解主治各症可谓得心应手，触类旁通，使人口服心服，所以说叶注超然，较之张注高出一筹。

但桔梗确兼苦味，《本经》未提及，因有苦味入手少阴心经，才导致性微温的，有温肺宣泄肺气之殊功，《伤寒论》桔梗汤，桔梗、甘草二味，水煎服，治少阴病咽痛；《金匱》用其方治“咳而胸满振寒，脉数、咽干、不渴，时出浊唾腥臭，久久吐脓如米粥者为肺痈”。《伤寒》与《金匱》白散，桔梗、巴豆、贝母三味组成，《金匱》上所治者为肺痈，经文与上文完全相同，一字不差；《伤寒》所治者为“寒实结胸，无热证者，与三物小陷胸汤；白散

亦可服”。仲景用药悉遵《本经》，但不是教条主义者，根据实际情况，必有所发明创造，利用其辛散温通功效，以宣泄肺气之力也。

白 头 翁

气味苦温无毒，主治温疟，狂易寒热，症瘕，积聚，瘰气，逐血，止腹痛，疗金疮。

张隐庵曰：白头翁无风而摇者，秉东方甲乙之气，风动之象也；有风则静者，得西方庚辛之气，金能制风也。

主治温疟者，温疟之邪藏于肾脏，秉木气则能透发母邪也；狂易寒热，温疟病也。

治症瘕积聚瘰气逐血者，秉金气则能破积聚而行瘀也。止腹痛乃腹中之病，有由于积滞去，痛止也。疗金疮，是去血瘀之效。

黄杰熙评：张注白头翁之形象思维与实际完全脱节，故不可取。

盖白头翁味苦气寒，非温也。可能是《本经》年远代湮，传写之误。

白头翁通身披白毛，高尺余，山野自生，初夏自基部抽出花茎，呈总苞状，茎端开花，微向下垂，萼六片，呈深紫色，甚美丽，而宿存之花柱，上有白毛寸余，俏似白头老翁，因而得此名。

其花茎之基部甚软，上则呈木质甚硬，无风，即微风中则来回摇动；有风，则偏于一边，无回荡之力，故有风不动。张氏不深探物性，依旧说而胡谄，以讹传讹，不足取也。

白头翁通身披白毛具金性可以平风木之动；花色紫而味苦，得地南方之火色火味，入手少阴心经；气寒得天北方之寒气，入足少阴肾经；花茎呈木质，茎基又甚软，花色紫，呈水生木，木生火之象，故又最能畅达肝气，使不郁于中。

主治温疟，狂易寒热者，温疟是但热不寒之疟，藏于手少阴心，非足少阴肾，经厥阴、太阳、传入少阳经有狂易寒热之象，白头翁畅达木火之气，苦寒清热，故可治之。

症瘕、积聚、瘕气者，皆血凝气聚之症，白头翁疏达肝气与心血之聚，故可治之。逐血者，气行则血行也。

腹痛乃足太阴脾土之血行不畅所致，白头翁木能疏土，苦能生土，土气不壅，血行流畅，故能止腹痛。

金刃创伤而成疮，白头翁能疏通气血，清热解毒，故能疗金疮。

从仲景药法上看，白头翁气味苦寒，而非苦温。

白头翁汤，治“下利欲饮水者，以有热故也，白头翁汤主之”；“热利下重者，白头翁汤主之”；“产后下利虚极，白头翁加甘草阿胶汤主之”。纵观以上三症，岂可抱薪救火，以温治热者乎！白头翁气味苦寒，千真万确，毫无疑义。

甘 遂

气味苦寒有毒，主治大腹疝瘕，腹满，面目浮肿，留饮宿食，破症坚积聚，利水谷道。

张隐庵曰：土味曰甘，经直曰遂。味苦之甘遂，以其泄土气而行遂道，故名甘遂。

土气不和，则大腹隧道不利，则病疝瘕、大腹，则腹由于土不胜水，外则面目浮肿，内则留饮宿食，甘遂治之，泄土气也。为疝为瘕，则症坚积食，甘遂破之，行隧道也。水道利则水气散，谷道利则宿积除，甘遂行水气而通宿积，故利水谷道。

黄杰熙评：张注从甘遂之名字，用五行之性以解经文，基本可取，但不够完全，运用起来必多扞格。

甘遂是泄水湿痰涎之猛药，有剧毒，毒在其所含油质上，用

时须用面裹煨烤，使油吸入面中，方可运用。

据曹颖甫《经方实验录》云：“此药须煨透，服后始不作呕，否则吐泻并作，颇足惊人，曾屡次试验而知。”

《十八反》中，大戟、芫花、甘遂、海藻反甘草，为什么反甘草，在拙著《本草问答评注》之《评注》中，论之颇详，请参阅，兹不赘。但古方多有同用者，如仲景甘遂半夏汤中，却是甘遂与甘草同用，取其相互激战以去留饮，若识力不及，又不愿担此风险者，最好不用为妥。

前三药不入煎剂，皆为散剂调服，以减小上吐下泄之反应。如仲景十枣汤，乃芫花、甘遂、大戟三味分别捣为散，调入十枣所煎汤中服；大陷胸汤，乃大黄、芒硝、甘遂三味组成，以水六升，先煮大黄，取二升，去滓，内芒硝，煮一两沸，内甘遂末，温服一升，得快利，止后服。

天 南 星

气味苦温，有大毒，主治心痛，寒热结气，积聚伏梁，伤筋痿拘缓，利水道。

张隐庵曰：天南星色白根圆，得阳明金土之气化；味苦性温，又得阳明燥烈之气化，故有大毒。

主治心痛，寒热结气者，苦先入心而清热，温能散寒而治痛结也。

积聚伏梁者，言不但治痛积无形之气，且治有形之积聚伏梁，所以然者，秉金气而能攻坚破积也。

伤筋痿拘缓者，言受伤而痿拘能缓也，夫小筋受伤而弛长为痿，犹放纵而委弃也；大筋受伤而软短为拘，犹缩急拘挛也，阳明主润宗筋，束骨而利机关，故伤筋痿拘能缓，缓，舒缓也。

利水道者，金能生水，温能下行也。

黄杰熙评：张注以形象思维取胜，色白属金，根圆又是乾金之象，所以归经入阳明，但味苦性温，应归入手少阴心、足厥阴肝经，而竟胡语为“又得阳明燥烈之气化，故有大毒”，是理路不清，还是主观武断，姑不必论。

但在主治心痛，寒热结气上，又以“苦先入心清热”，而不知苦之本味是火，岂有用火去清热的！苦之极味，物极必反，变为水性，才能清热之理。因天南星还兼有辛味，辛散温通，苦味入心而主治心痛，寒热结气的。

五脏为积，六腑为聚，心积曰伏梁，是有形之气血凝积而成，张注解此囹圄，隔靴搔痒。同理是苦入心散寒，辛散气，温通血凝之效果。

至于其注“伤筋痿拘缓者”，基本可取。但忘记了肝主筋，辛味入肝补筋续接，伤者复，何筋痿拘缓之有哉！亦金平木之效应也。

其能利水道者，肺为水之上源，辛散温通，三焦网膜利，膀胱气化则能出矣。

天南星味苦辛，气温有大毒，生尝之麻辣味特强，顿时口噤气闭，呼吸麻痹，口不能言，制之以生姜，可去其毒，市售之生南星是用白矾水泡制的，与制半夏之法相符。

还有一种饮片叫“胆南星”是用牛苦胆泡制的，以去其温热性，作用比较和缓，但嗅味较烈，用治风湿之痰，比较理想。所治之风痰、痰厥、眩晕、惊痫，均是由湿引起的，确有效果。

《本事方》玉真散，南星、防风，各等分，研细末，生姜汁和酒或童便调服，亦可外敷。治破伤风，及打扑伤损，项强口噤，疗效可靠。

《局方》三生饮，生南星、川乌、附子、木香，研末加姜煎服。治卒中昏不知人，口眼喎斜，半身不遂，并治痰厥、气厥。适用于真中风，类中风（高血压、脑溢血）误服之，立刻死亡。

《沈氏尊生》开关散，生南星、冰片，研末擦牙。治中风口噤。

大 戟

气味苦寒，有小毒，主治蛊毒，十二水，腹满急痛，积聚，中风，皮肤疼痛，吐逆。

张隐庵曰：大戟生于西北，茎有白汁，味苦气寒，皮浸水中，其色青绿，乃秉金水木相生之气化。

水能生木，则木气运行，故主治蛊毒者，土得木而达也。

金能生水，则水气运行，故主治十二水。十二经脉，环绕一身，十二水者，一身水气不行而肿也。

腹满急痛、积聚，言蛊毒之病，则腹满急痛，内有积聚，大戟能治之。中风、皮肤疼痛，言十二经水之病则身中于风，而皮肤疼痛，大戟亦能治之。吐逆者，腹满急痛积聚，则土气不和；中风，皮肤疼痛，则肤表不通，皆致吐逆，而大戟皆能治之。

黄杰熙评：张注大戟从形象思维到金水木相生之气化，以解主治，通则通矣，不无捭格之处，按其根源，未言气味归经之失也。

盖大戟多生于两广、苏浙、豫、秦、晋等省，是西北乎？开口便错，茎高一到二尺，有细毛，叶互生，呈长椭圆形披针状，边缘有不明显之细锯齿，茎与叶断之皆有白汁，初夏从茎梢分枝开黄绿色环状花，果实扁球形，不平滑而有疣状突起。

根供药用，商品有二种：一曰红毛大戟，或称红芽大戟、紫大戟，南方所产，为正品、上品；一曰绵大戟，或称草大戟、北大戟，北方所产，无红毛，呈紫褐色或灰褐色，为次品、劣品，此品多不堪用。

大戟味苦入手少阴心经；气寒入足少阴肾经。气味俱降，阴也。

主治蛊毒者，山风为蛊，为湿热盘踞脏腑，腐化生虫之大肚症，大戟苦以燥湿，寒行清热，故能治之。

十二水者，十二经脉为水所困，全身悉肿之症，大戟苦寒入手足少阴，心为君主之官，肾为行水之脏，令行禁止，邪水从大小便走，故治十二水。

至于腹满急痛、积聚，皆水湿在内之症状；皮肤疼痛，水湿在外之症状；中风，水湿、热结成痰，肝气不能舒展、痰厥之症状；吐逆，水湿积满，下行不通，上出之症状，大戟苦寒入少阴心肾，皆能驱之使从二便而出，邪去正复，故随即而统治之也。

仲景十枣汤，大戟、芫花、甘遂三味分别为捣为末，八十枣所熬之汤调服，祛邪补正，效如桴鼓。治“太阳中风，下利呕逆，表解者，乃可攻之。其人漐漐汗出，发作有时，头痛，心下痞硬满，引胁下痛，乾呕短气，汗出不恶寒者，此表里未和也，十枣汤主之”。“病悬饮者，十枣汤主之”；“咳家，其脉弦，为有水，十枣汤主之”；“夫支饮家，咳烦，胸中痛者，不卒死，至一百日，或一岁，宜十枣汤”。此皆铁腕手段，庸医一生望而生畏，不敢一试；愚累用之，救人于殒服已备之时，覆杯而起，得“神医”之溢名。

泽 漆

气味苦微寒无毒，主治皮肤热，大腹水气，四肢面目浮肿，丈夫阴气不足。

张隐庵曰：泽漆五枝五叶，白汁白根，秉金土之精，故能治其水，盖金生水而土制水也。

气味之苦寒，故主治皮肤热。土能制水，故治大腹水气，四肢面目浮肿。金能生水，故治丈夫阴气不足。

《金匱》有泽漆汤，治咳逆上气。咳而脉浮者，厚朴麻黄汤主之；咳而脉沉者，泽漆汤主之。

黄杰熙评：张注从形象思维注泽漆秉金土之精，故能制其水，颇得其要，兼以气味苦寒，注解主治各症，得心应手，基本可取。

《金匱》泽漆汤，泽漆三升，以东流水五斗，煮取一斗五升，半夏半升，紫参五两、一作紫苑，白前五两，桂枝、人参、黄芩、甘草各三两，生姜五两。右九味哎咀，内泽漆汁中，煮取五升，温服五合，至夜尽。

煮法服法都极讲究，用治咳逆上气，面目四肢浮肿，脉沉者，依法煎服之，其效若神。

但对泽漆必须作进一步之研究认识，才能掌握好此药之真实性能。

泽漆功类似大戟，江湖郎中货之治水蛊、脚气，一味细末投之，多有速效，用以困财；若不急补中土，旋即反复，治之颇难，以致害命。盖不知人身之气化，只知去病谋利，不读圣经之过也！不晓“邪之所凑，其气必虚”之真理。

《本草纲目》云：“泽漆又名猫儿眼睛草、绿叶绿花草、五风草。”《别录》及《大明》误为大戟之苗与花，李时珍已非之。《药学大辞典》云：“泽漆属大戟科，俗名奶奶草、五苔草、灯台草。”盖此草有毒，随地生长，常偃伏地边，茎五、六寸，叶互生，呈卵圆形，略有锯齿，色绿而俏似猫眼，故称猫眼草；茎与叶断之，有白色奶汁，故称奶奶草；初夏茎顶轮生五叶，故称五苔草，又象灯台，又称灯台草；在五叶中间，发出五枝，枝上开出单性小花，呈淡黄色，故称五风草。至于开出绿花者，未曾见，乃时珍所见者，想因地势、气候、条件不同，可能有之。但大戟之花是绿色，长象颇似泽漆，而大戟茎高一、二尺，叶是长椭圆形，乃二者之别，所以《别录》、《大明》皆误认为大戟之苗与花是泽漆。《纲目》之“绿叶绿花草”，恐亦误为大戟之苗与花，待考。由此可知，欲辨药物之真，非亲身经历考察不可，不然虽鼎鼎名家，亦难免张冠李戴。

泽漆逐水消肿，有神奇之功，《金匱》泽漆汤，又疗效显著，故赞此以提高注意力。

常 山

气味苦寒有毒，主治伤寒寒热，热发温疟鬼毒，胸中痰结吐逆。

张隐庵曰：恒山，北岳也，后以汉文帝讳恒，遂改名常山，亦名恒山。李时珍疑其始出于常山，故得此名。余以此思常山之草，盖秉西北金水之化，而气出于东南。

主治伤寒之寒热者，从西北之阴，而外出于阳也。

热发温疟者，乃先发热之温疟，温疟病藏于肾，常山从西北而出于东南，则温疟可治也。神气乃浮，则鬼毒自散。阳气行外，则胸中痰结自消。痰结消，而吐逆亦平矣。

愚按：伤寒寒热，言伤寒之病，先寒后热；伤寒发温疟，言温疟之病，先热后寒也，言不尽意，读者以意会之。

《阴阳离合论》云：“圣人南面而立，前曰广明，后曰太冲，太冲之地，名曰少阴，少阴之上，名曰太阳。”是太阳之气，根于少阴，主于肤表，常山从少阴而达太阳之气以外出，所谓因于寒，欲加运枢，起居如惊，神气乃浮者是也。

黄杰熙评：张注常山，从名词上下功夫，从阴阳上注主治，深则深矣，不无晦义，故此注只可作为参考，不可作为定论。

盖常山味苦入手少阴心经；气寒入足少阴肾经；茎圆披黄色之毛刺，具金刚之性，入手太阴肺经、足太阴脾经；花色淡蓝带毛，有凤毛之象，入足厥阴肝经。为搜刮催吐风痰、老痰结块之妙药。

主治伤寒寒热者，常山入肺、入肝，疏解皮毛经脉以散寒，苦寒清热之功也。

发热温疟鬼毒，疟为顽痰壅结经络之病，发热者壅结拥挤之热也，常山苦寒清热祛痰，故可治之。鬼毒者，阴毒也，顽痰去，经隧通，阳气出，故鬼毒消。

胸中痰结吐逆，心火旺，熬炼津液成痰，痰结满则吐逆以平衡之，常山苦寒清热，釜底抽薪；肺肝脾之气旺，必催而吐出之，故治胸中痰结吐逆。

《局方》常山饮，常山、知母、贝母、槟榔、苹果、乌梅，右六味加姜枣煎，疟发前温服。治疟久不愈者，有截疟之功效。

蜀 漆

气味辛平有毒，主治疟，及咳逆寒热，腹中坚症，病痞积聚，邪气蛊毒鬼疟。

张隐庵曰：蜀漆能通金水之气，以救火逆，又能启太阳之阳，以接助其亡阳，亦从阴出阳之药也。

故《伤寒·太阳篇》云：“伤寒脉浮，医以火迫劫之亡阳，必惊狂起卧不安，桂枝去芍药加蜀漆牡蛎龙骨救逆汤主之。”又《金匱论》云：“疟多寒者，名曰牝疟，蜀漆散主之。”

李时珍曰：“常山、蜀漆，有劫痰截疟之功，须在发散热邪，及提出阳分之后，用之得宜，神效立见；用失其法，真气必伤。”愚谓疟乃伏邪，有留于脏腑募原之间，而为三阴疟者；有藏于肾脏，而为先热后寒之温疟者；有气藏于心，而为但热不寒之瘧疟者，常山主通少阴太阳之气，从阴出阳，自内而外，则邪随气出，所谓“有故无殒”；若邪已提出阳分，反用攻利之剂，岂不妄伤正气乎？李蕲阳数十年苦心，始成《纲目》，而其间发明议论，有与经旨不合者，长于纂集，而少于参究故也。

黄杰熙评：张氏补充常山由少阴出太阳之义，而非注蜀漆之实也。

所引仲景两方，似注非注，欲深反晦。其末后批判李时珍之言，确别具只眼，可取。

盖蜀漆乃常山之苗，生发之力锐不可当，其催吐上焦顽痰之力，数倍于常山也。味辛入手太阴肺经；气平亦入手太阴肺经。味辛气平，阳也。

主治疟及咳逆寒热者，疟邪滞于经络，熬化成痰，必经肺窍而吐出，则邪随痰去，故可治之。痰阻肺窍，呼吸短气，必咳逆，阴盛则寒，阳盛则热，蜀漆味辛散寒，气平制热，使之平衡，故可治寒热。

腹中坚症，病痞积聚者，有形可征谓之症，坚症者，硬如石块，气血凝聚不散之症也；痞者地痞，中土之虚，寒热互结之象；五脏之气血凝结为积；六腑之寒热互结为聚，蜀漆之辛散气与寒，平生水以治热与和血，故可以统治之。

邪气蛊毒鬼疟者，邪者斜也，凡是不得其正之气，皆谓之邪气；湿热踞于中土，腐化生虫之众多者，称为蛊毒；阴邪盛，阳气不能达之处，称鬼疟，即“脱阳者见鬼”之义也。蜀漆辛平，辛散平清，有驱邪、行湿热、通达阳气之殊功，故皆能治之。

至于张氏所引仲景两方，所治之症，第一方是加蜀漆透驱阴邪之积，使心胸空旷，万里无云；第二方以蜀漆名方，因疟为痰块瘀阻而成，蜀漆乃苗，上升之力尤大，借以上顶痰块而吐出之，疟邪随痰而去，故可治疟。

葶 苈 子

气味辛寒无毒，主治症瘕积聚结气，饮食寒热，破坚逐邪，通利水道。

张隐庵曰：葶苈花实黄色，根白味辛，盖秉土金之气也。

秉金气，故主治症瘕积聚之结气。秉土气，故主治饮食不调

之寒热。

破坚逐邪，金气盛也。通利水道，土气盛也。

叶天士曰：葶苈子气寒，秉天冬寒之水气，入足太阳寒水膀胱经、手太阳寒水小肠经；味辛无毒，得地西方之金味，入手太阴肺经。气味降多于升，阴也。

其主症瘦积聚结气者，气结聚而成积，有形可征者谓之症，假物成形者谓之瘦，葶苈入肺，肺主气而味辛，可以散结也。

小肠为受盛之官，饮食入肠，寒热之物皆从此运转，如调摄失宜，则寒热之物积矣，葶苈气寒，可以去热，味辛可以散寒。

下泄膀胱，葶苈入肺入膀胱，辛寒下泄，所以通利也。

陈修园曰：葶苈滑润而香，专泻肺气，肺为水源，故能泻肺，即能泻水，凡积聚寒热，从水气来者，此药主之。

大黄之泻，从中焦始；葶苈之泻，从上焦始，故《伤寒论》中，承气汤用大黄，而陷胸汤用葶苈也。

黄杰熙评：张氏以葶苈秉土金之气为注脚，虽不尽然，但亦可勉强通达，仅可作为注经之参考耳！

叶注讲究规矩准绳，注不破经，归经准确，解主治亦条理鲜明，但难免拘谨而有失实之处。

陈注是注重补充实际，言简而务实，倘似注经之叛逆者。

葶苈野草耳，春风吹又生，茎高不满尺，叶互生呈长椭圆形，无叶柄，边缘有粗锯齿，茎叶俱生细绒毛，仲春开黄色小花，总状花序，结果呈长椭圆形，内含褐橙色小种子甚多，种子供药用，称葶苈子。

味辛苦，气大寒，专泻肺气而行水，非实证绝对禁用。味辛入手太阴肺经；味苦入手少阴心经、手太阳小肠经；气大寒入足少阴肾经、足太阳膀胱经。

主治各症，皆为水邪凝结之实症，用葶苈子辛散水气之雄力，以治寒凝；苦寒清热之雄功，以治热结，药到病除，用之得当，神

奇无比。

《伤寒论》大陷胸丸，乃葶苈子与大黄、芒硝、杏仁，每服如弹丸一枚，别捣甘遂末一钱匕，白蜜二合，煮取一升，温顿服之，一宿乃下；如不下更服，取下为效。用治“病发于阳，而反下之，热入因作结胸；病发于阴，而反下之，因作痞也。所以成结胸者，以下之太早故也，结胸者，项亦强，如柔痉状，下之则和，宜大陷胸丸”。

《金匱》葶苈大枣泻肺汤，葶苈熬令黄色，捣如弹丸大，大枣十二枚，先以水三升，煮枣取二升，内葶苈煮取一升，顿服。用治“肺痛，喘不得卧，葶苈大枣泻肺汤主之”；“肺痛，胸满胀，一身面目浮肿，鼻塞清涕出，不闻香臭酸辛，咳逆上气，喘鸣迫塞，葶苈大枣泻肺汤主之”；“支饮不得息，葶苈大枣泻肺汤主之”。

《金匱》己椒苈黄丸，防己、椒目、葶苈（熬）、大黄各一两，右四味末之，蜜丸如梧子大，先食饮服一丸，日三服，稍增。口中有津液、渴者，加芒硝半两。用治“腹满，口舌干燥，此肠间有水气，己椒苈黄丸主之”。

按上所例，葶苈子为峻药，制服法都极讲究，且用量很小。余行医数十年，见时医用葶苈子，没有一例不出事故者，深为痛心，盖不研读经书之过也。赘此数语，以醒今后。

菟 花

气味苦寒有毒，主治伤寒温疟，下十二水，破积聚大坚、症瘕，荡涤胸中留癖饮食，寒热邪气，利水道。

张隐庵曰：《诊要经终论》云：“五月六月，天气高，地气盛，人气在头。”菟花味苦寒，花于炎夏，秉太阳本寒之气，而合太阳之标阳，故苦寒有毒。

伤寒者，寒伤太阳，菟花气合标阳，故治伤寒。温疟者，病

藏于肾，薏花气秉寒水，故治温疟。

膀胱水气，藉太阳阳热而运行于周身，则外濡皮毛，内通经脉，水气不行，则为十二经脉之水，薏花合太阳之阳，故下十二水，且破阴凝之积聚，及大坚之症瘕。

太阳之气，从胸膈以出入，故荡涤胸中留滞，痰饮类也。不但荡涤胸中留滞，且除饮食之内停，寒食邪气。水气得阳热以运行，故利水道。

《伤寒论》云：“伤寒表不解，心下有水气，乾呕发热而咳，若微利者，小青龙汤加薏花如鸡子大，熬令赤色”。大如鸡子，形圆象心也；熬令赤色，取意象火也，是薏花气味虽属苦寒，而有太阳之标阳，恐后世不能司岁备物，故加炮制如是尔。

黄杰熙评：张氏从薏花气味苦寒，花开炎夏，秉太阳本寒之气，而合太阳之标阳入手以注解薏花之主治各症，可谓触类旁通，颇为超妙，故此注在字面上可取，但薏花究系为何物？未加深考，又颇为遗憾。

盖薏花久已失真传，世无此药。陶宏景曰：“形似芫花而极细，白色。”苏恭曰：“苗似胡荽，茎无刺，花细黄色，四月五月收，与芫花全不相似也。”又加以否定。李时珍曰：“按苏颂《图经》言，绛州所出芫花黄色，谓之黄芫花，其图小株，花成簇生，恐即此薏花也，生时色黄，干则如白，故陶氏言细白也。或言无薏花，以桃花代之，取其利耳。”又曰：“薏花盖亦芫花之类，气味主治大略相近。”莫衷一是，模棱两可，《本经》明言是两物，何可混一，如牡丹花、菊花等，花色植株久有不同，皆同是牡丹、菊花也。

张氏末引《伤寒论》之文，前后割裂，拼凑不真而成，在“发热而咳”句下，“小青龙汤主之”句前，应插入“或渴；或利；或噎；或小便不利，少腹满；或喘者”，五个症状之词。“若微利者”是方组下之词，且无“者”字，原文是“若微利，去麻黄加薏花，如鸡子大，熬令赤色”，又把“去麻黄”拉掉，硬插入正文

中，引经上极不严肃。而菟花与芫花，功用相似，皆为去利水邪之峻药，若微利用此大泄其水，乃“通因通用”之义，先大泄，绝水之源，似与本症未合，不宜用此药。同时麻黄治喘，而喘者，反去之，似更不合，张氏割去“去麻黄”三字，用心可能在此，但经文毕竟是经文，不能私心篡改。陈修园注伤寒时，意谓菟花今无，以茯苓代之，到还颇合实际，余遇此症时，皆不去麻黄，而以茯苓代菟花，累投之，皆获奇效。

芫 花

气味辛温有小毒，主治咳逆上气，喉鸣喘，咽肿短气，蛊毒鬼疟，疝瘕痈肿，杀虫鱼。

张隐庵曰：草木根莖之在下者，性欲上行；花实之在上者，性复下降，此物理之自然也。

芫花气味辛温，花开赤白，秉金火之气化，主行心肺之气下降，故治咳逆上气，喉鸣而喘，以及咽肿而短气；秉火气，故治蛊毒鬼疟；秉金气，故治疝瘕痈肿；辛温有毒，故杀虫鱼。

黄杰熙评：张注以芫花秉金火之气化，即归入肺心二经为注，简明扼要，突出五行生克之运用，可谓善注也，故此注可取。

然芫花、甘遂、大戟三药，皆为逐水之峻药，皆反甘草，应合观之以求其全，芫花轻扬，以逐上焦之水为主；甘遂以逐经络之水为主；大戟以逐脏腑之水为主，皆峻泄之药，非实症者，决不可用。仲景十枣汤三味同用之，对水邪之实症，取其决战而胜之，一举成功也，还必用十枣煎汤送服，扶正逐邪，立身于不败之地，处方选药，以及煎服法之讲究，尽于医圣仲景矣。后之学者，欲成名成家者，何不多究心于仲景之著作乎！

篇 蓄

气味苦平无毒，主治浸淫、疥瘙、疽痔，杀三虫。

张隐庵曰：《金匱要略》曰：“浸淫疮从口流向四肢者可治；从四肢流来入口者不可治。”

盖口乃脾窍，四肢属脾，篇蓄秉火气而温土，故主治脾湿之浸淫。充肤热肉之血，不淡渗于皮毛，则为疥瘙，篇蓄秉东方之木气，故主治疥瘙。浸淫可治，则疽痔亦可治矣；疥瘙可治，则三虫亦可治矣，缘其秉木火之气如此。

黄杰熙评：张氏以五行木火之气注解主治各症，通则勉强，但与实际不符，一派想象之言，不可取也。

盖篇蓄味苦入手少阴心经；气平入手太阴肺经。

主治浸淫者，浸淫，俗呼黄水疮，乃湿热为患，腐烂肺主之皮毛出黄水，水到之处，糜烂随之，故仲景云：“浸淫疮，从口流向四肢可治；从四肢流来入口者，不可治”。舌为心之苗，口为脾之外候，从口流向四肢者，乃心火脾湿结合之毒外散，相反则毒入心脾，使神君中毒，何能治之？篇蓄味苦清心火，则热消；气平入肺达皮肤而行水湿，故可治之。

疥瘙、疽痔，皆湿热为患之病，《素问·至真要大论》云：“诸痛痒疮，皆属于心。”篇蓄味苦入心清火，气平入肺通行水湿，故可治之。

三虫者，蛔虫、蛲虫、钩虫也，皆湿热为患而滋生之物，篇蓄去湿清热，绝其滋生之根源，故杀三虫。

仲景治浸淫疮，是用黄连粉，此方已遗，其中有无篇蓄，不得而知。

后人不专心研读《本经》，其用不过为通淋利小便而矣。如《局方》八正散，车前子、木通、瞿麦、篇蓄、滑石、甘草梢、梔

子、大黄，八味共研末，加灯心煎服。主治：膀胱结热，热淋，血淋，甚至大便闭塞者。

余治浸淫疮，以篇蓄为细末，调香油敷之，与单独用黄连粉比较，效果基本相同。

商 陆 根

气味辛平有毒，主治水腫，疝瘕，癰疽，除痲腫，杀鬼精物。

张隐庵曰：商陆秉金土之气化，故气味辛平，以根花白者为良。

主治水腫者，辛走气，土胜水，气化则水行，火散则肿消也。

治疝瘕者，疝瘕乃厥阴肝木之病，而金能平之也。

癰疽犹言熨脾，肌肉闭癰，商陆熨而治之，火温土也。

治痲腫者，金主攻利也。杀鬼精物者，金主肃杀也。

黄杰熙评：张氏以五行金土之气化，注解商陆主治各症，基本能通，但不无遗义，应补明，便于理解与运用。

商陆味苦辛气寒，与大戟之功用相似，为逐水峻药。味苦入手少阴心经；辛入手太阴肺经；气寒入足少阴肾经、足太阳膀胱经。

主治各症，皆为峻泻水湿，兼以辛散之殊功，不必细论，皆可知之。

惟饮片特大，直径在二寸以上，中心白色者，俗称：“白母鸡”，毒小可用，为正品，若中心赤色者，毒峻不可用，误用之重则杀人，轻则吐泻交作，瞑眩数日，死去活来，十分吓人。用醋泡制后，毒性可再减小。

《疡医大全》商陆膏，商陆、牛蒡子、防风、金银花、荆芥、当归尾、连翘、赤芍、苍术、甘草、麻油二斤，蒸枯去渣，用密

陀僧一片；收成膏。每用少许，涂于布上，贴于患处，治疮拔毒，多建奇功。

《济生方》疏凿饮，商陆、羌活、秦艽、槟榔、大腹皮、茯苓皮、椒目、木通、泽泻、赤小豆，加姜皮清水煎服。治实症遍身水肿，喘呼口渴，大小便闭，多建奇功。

藜 芦

气味辛寒有毒，主治蛊毒，咳逆，泄痢肠澼，头疡，疥痒恶疮，杀诸虫毒，去死肌。

张隐庵曰：藜芦气味辛寒，其根黄白，外皮黑色，秉土金水相生之气化。

土气运行，则能治蛊毒。金气流通，则能治咳逆。水气四布，则能治泄痢肠澼也。

治头疡疥痒，金制其风也。治恶疮，水济其火也。杀诸虫毒，土胜湿而解毒也。土主肌肉，故又去死肌。

黄杰熙评：张氏从藜芦根之颜色上定论，秉土金水相生之气化，以注解主治各症，颇得其要，故此注基本可取。

不过藜芦还具苦味，气味应为苦辛寒有毒，味苦入手少阴心经；味辛入手太阴肺经、足阳明胃经、手阳明大肠经；气寒入足少阴肾经，足太阳膀胱经。用以注解主治各症，更能得心应手，兹不赘。

再则，藜芦是涌吐风痰之剧药，《本经》未言，而且反人参、党参、元参、紫参、丹参、苦参、沙参及细辛、白芍，歌诀曰：“诸参辛芍反藜芦”，为什么反之原理，在拙著《本草问答评注》之“四十七问”《评注》中有答案，解千百年之惑，请参阅，兹不赘。

《证治准绳》藜芦膏，藜芦、苦参、松脂、雄黄、白矾，先捣藜芦、苦参为粗末，入猪脂一斤，和合煎十余沸，次入研细末之

余药，搅令匀即成。外用治 疮生虫，实验可靠。藜芦有剧毒，《别录》云：“不入汤用”，王肯堂遵而如此用，盖有所本。

《圣惠方》三圣散，防风、瓜蒂、藜芦，研细末，用咸菜卤送服。治头风胸中痰涎壅塞，缠喉风等症，用之亦颇有涌吐显效。

旋 覆 花

气味咸温、有小毒，主治结气，胁下满，惊悸，治水，去五脏间寒热，补中下气。

张隐庵曰：花名旋覆花者，圆而覆下也；草名金沸草者，得水露之精清，肺金之热沸也，又名“盗庚”者，开黄花白茸，长于夏、金伏之时，盗窃庚金之气也。气味咸温有小毒，盖乘太阳之气化。

夫太阳之气，从胸胁以出入，故主治胸中结气，胁下胀满。太阳不能合心主之神气以外出，则惊；寒水气动于中则悸，旋覆花能旋转于外，而覆冒于下，故治惊悸。

太阳为诸阳主气，气化则水行，故除五脏水。如五运之在地，天气旋覆于地中，则五脏之寒热自去也。去五脏间寒热，故能补中。治结气、胁满、惊悸、除水，故能下气也。

叶天士曰：旋覆花气温，秉天春和之木气，入足厥阴肝经；味咸有小毒，得地北方阴惨之水味，入足少阴肾经。气味降多于升，阴也。

温能散结，咸能软坚，故治结气，胁下满也。

水气乘心则惊悸，咸温下水，所以并主惊悸也。

去五脏间寒热者，五脏藏阴者也，痰蓄五脏，则脏阴不藏而寒热矣，咸温可以除痰，所以去寒热也。

补中者，中为脾胃，水行痰消，则中宫脾胃受补也。

下气者，咸能润下也。因有小毒，所以服之必烦也。

陈修园曰：旋覆花气温，乘风气而主散；味咸得水味，润下而软坚，味胜于气，故以味为主。

唯其软坚，故结气胁下满等症，皆能已之。唯其润下，故停水惊悸，及五脏郁滞而生寒热等症，皆能已之。藉咸降之功，上者下之，水气行，痰气消，而中气自然受补矣。

黄杰熙评：张氏从旋覆花之形象色味入手，归根于太阳之气化为注，调于高一点，通则能通，算一种注经方式，为百家争鸣中之一家可也。

叶注遵经，平易近人，归经，主治，注解得恰到好处，故叶注可法而可取。

陈氏生于张、叶二氏之后，读其书取其长而掺合己意以注之，做到简明扼要，说明问题，故此注亦可取。

盖旋覆花，又名“金沸草”，非其植株，即“草名金沸草”，张氏此说有误，《尔雅》名“盗庚”，俗呼“六月菊”，在阴历六月开黄色小盘花，菊开于七月，故其预盗七月庚金之气化，而名之曰“盗庚”。

归经、主治应以叶氏之注为标准，总之，是下气，消痰行水，软坚消痞之圣药。

《伤寒论》旋覆代赭汤，旋覆花、代赭石、半夏、人参、炙甘草、生姜、大枣，右七味，以水一斗，煮取六升，去渣，再煎取三升，温服一升，日三服。选药定方，煎法、服法都极讲究，其理详余所著《伤寒金匱方证类解》中，兹不赘，请参阅。用治“伤寒发汗、若吐、若下，解后，心下痞硬，噎气不除者，旋覆代赭汤主之”。不但治上症奇效，以之通治贲门癌亦见效果。

青 箱

气味苦寒无毒，主治邪气、皮肤中热，风瘙身痒，杀

三虫。子气味同，主治唇口青。

张隐庵曰：青箱开花结实于三秋，得秋金清肃之气，故主清邪热，去风瘙，杀三虫。

《辨脉篇》云：“唇口反青，四肢热极者，此为肝绝也。”青箱花开黄白，结黑子于深秋，得金水相生之气化，以养肝木，故子治唇口青，肝气得其生化也。故今时又用以明目。

黄杰熙评：张氏注青箱以得秋金清肃之气；子得金水相生之气化，以解主治，五行制化之运用颇佳，故亦注经之一法焉！可作参考。

盖青箱亦名野鸡冠、鸡冠苋；子亦名草决明。田野自生，茎直立、高二、三尺，叶互生呈长椭圆形或披针形，先端尖，具叶柄。夏秋间，茎端抽出长椭圆形穗状花序，花小而密集，萼五片，初开时呈淡紫红色，入秋后变白色；结子后，外皮黑色而光滑，中心凹下，略似肾脏，直径约一分，种仁白色、粉质。此与张氏所说者有异，足证张氏观察之粗，研究之略也。

青箱气寒入足少阴肾经；味苦入手少阴心经；花夏时色淡紫红，入秋即变为白色，得秋金之气化，故又入手太阴肺金。

主治邪气，皮肤中热者，邪气乃不正之气，肺主皮毛，心肺气达，何邪之有耶！苦寒清热，故可治之。

风瘙身痒者，肺不清肃，心血不畅，导致肝风内动之象，青箱得秋金之气化，金能制风，苦寒能清热以息风，肝得滋与制，故可治之。

三虫是湿热之滋生育长，青箱金能燥湿，苦能清热，寒能清能导之从二便出，故杀三虫。

青箱子气味同于青箱，且形似肾，滋肾之功强，有滋肾养肝之殊功。

肝木横行，克伐脾土，脾之外候口唇也，木气郁于中，外候木之色则口唇青，青箱子滋肾养肝，肝气条达不郁，故治唇青。

以此类推，青箱子有明目聪耳，坚筋骨之功效，不过瞳孔散大者禁用，因其兼有疏散肝气，使瞳孔放大之作用也。

贯 众 根

气味苦微寒有毒，主治腹中邪热气，诸毒，杀三虫。

张隐庵曰：贯众气味苦寒，色多赤黑，盖秉少阴水火之气。

主治腹中邪热气、诸毒者，秉水气也；杀三虫，秉火气也。

黄杰熙评：张氏以少阴水火之气注解贯众，通则勉强能通，但不知五行相反相成之理。贯众味苦入手少阴心经，火之味苦，应为火之性，而苦之极则变为水性，物极必反之真理也。既离(☲)卦，退去上下之阳爻，变为阴爻一样，张氏不精通此道，故论象数，有此之失也。

贯众根，又名贯仲、贯节、黑狗脊。味苦入手少阴心经；气寒入足少阴肾经。

主治腹中邪热气者，苦寒清热之功也。火之极为毒，苦寒下火清热，故治诸火热造成之毒。湿热相蕴，而生三虫，贯众苦燥湿，寒清热，故能杀三虫。若以火论，则抱薪救火，安危利灾矣。

蛇 含 草

气味苦微寒无毒，主治惊痫，寒热邪气，除热，金疮疽痔鼠瘻，恶疮头疡。

张隐庵曰：蛇含草始出西川，气味苦寒，花开黄色，西川金也，苦寒水也，黄色土也，秉土金水之气化。

金能制风，则惊痫之寒热可治也。寒能清热，则邪气之热气可除也。土能生肌，则金疮可治也。秉土金水之气而和在下之经脉，则治疽痔。秉土金水之气而和在上之经脉，则治鼠瘻、恶疮、

头伤。

黄杰熙评：张氏以蛇含草秉土金水之气化，注解主治各症，得心应手，颇合经义，故此注可取。

蛇含草叶细似龙牙，叶背紫色，故又称紫背龙芽，手足少阴之药，具清热解毒之功效。

《斗门方》小龙芽根一握，浓煎服之，治产后泻痢甚效，即蛇含草根是也。

《直指方》治身面恶癣，用紫背草入生矾研，傅之二、三次断根。

狼 毒 根

气味辛平、有大毒，主治咳逆上气，破积聚，饮食寒热，水气恶疮，鼠瘻疽蚀，鬼精蛊毒，杀飞鸟走兽。

张隐庵曰：狼毒草有大毒，秉火气也；气味辛平，茎叶有毛，入水则沉，秉金气也。

秉金气，故主治肺病之咳逆上气；金能攻利，故破积聚、则饮食壅滞，而为寒为热之病，亦可治矣。

水气，水寒之气也，水气而濡，则有恶疮、鼠瘻、疽蚀，并鬼精、蛊毒之病，狼毒秉火气而温脏寒，故皆治之。

又言其毒能杀飞鸟走兽，草以狼名，殆以此故。李时珍曰：“视其名则知其毒矣。”

黄杰熙评：张氏以狼毒秉五行火金之气化，以解主治各症，颇得要领，故此注超然，可取。

《肘后方》用狼毒二两、附子半两，捣筛，蜜丸梧子大，一日服一丸，二日二丸，三日三丸止，又从一丸起，至三丸止，周而复给，以瘥为度。治心腹连痛作胀，因于寒者，颇有效验。

《圣惠方》治积年乾癣，生疮，搔之黄水出，每逢阴雨即痒，

用狼毒末涂之，数次可愈。

狼 牙 根

气味苦寒有毒，主治邪气热气，疥瘙恶疡疮痔，去白虫。

张隐庵曰：狼性灵智，此草根如兽之牙齿，而专取狼名者，疑取其上下灵通之义。

寒水之气上行，则能散其表之邪气热气，以及皮肤之疥瘙恶疡；苦寒之气下泄，则能除在下之疮痔，以及在内之白虫。

《金匱要略》曰：“少阴脉滑而数者，阴中即生疮，阴中蚀疮烂者，狼牙汤洗之。”此草气味苦寒，秉性纯阴，故能治少阴之火热烂疮也。

黄杰熙评：张注狼牙根取其苦寒之性与寒水之气，上下灵通之义，巧妙注解出主治各症之机转，可谓善注，基本可取。

末引《金匱》狼牙汤，说明其义，可称合拍。

再者，《肘后方》治疗金疮出血，取狼牙草茎叶，熟捣贴之。可以立即止血而愈疮之肿胀。

揆之以上两方之运用，狼牙根也好，草也好，最适于外用，以毒攻毒，而清热化腐止血生肌，以治疮烂。

羊 蹄 根

气味苦寒无毒，主治头秃，疥瘙，除热，女子阴蚀。

张隐庵曰：羊蹄，水草也，生于川泽，及近水湿地，感秋气而生，经冬不凋，至夏而死。

盖秉金水之精气所生，金能制风，故治头秃疥瘙；水能清热，故除热；苦能生肌，故治阴蚀。

黄杰熙评：张注运用五行生克，恰到好处，以之注解羊蹄根，秉金水之精气所生，兼之以气味，注释主治各症，得心应手，一气呵成，可称超妙，完全可取。

《肘后方》治头上白秃，用独根羊蹄，勿见妇女、鸡犬、风日，以陈醋研如泥，生布擦亦傅之，日一次。

《外台秘要》治疥癣有虫，羊蹄根捣和猪脂，入盐少许，日涂之。

羊 踯 躅 花

气味辛温、有大毒，主治贼风在皮肤中淫淫痛，温症恶毒诸痹。

张隐庵曰：羊踯躅花色黄，气味辛温，秉火土金相生之气化。羊乃火畜而兼土金，南方赤色，其畜羊，火也；在辰为未，土也；在卦为兑，金也。此花大毒，亦秉火土金之气化，羊食之，则同气相感，而受其毒，是以踯躅而死。

金主皮毛，土主肌肉，火主血脉，主治贼风在皮肤中淫淫痛，治金主之皮毛，土主之肌肉，乃以毒而攻毒也。

疔邪随经内薄，治温症恶毒，治火主之经脉也。诸痹，乃皮脉肉之痹，而踯躅亦治之也。

黄杰熙评：张氏以火土金相生之气化，注解羊踯躅花之主治性能，不出以火攻火，即以毒攻毒之治法也，确以托出羊踯躅花性能之奥秘，故此注基本可取。

不过，羊踯躅花有大毒，不但能毒死羊，毒死人也极快，今则未见人敢用也。而古方多用之，如“赤丹”、“四满丸”、“鲁王酒”、“将脚汤”、“踯躅花散”等等用之，以治“时行”、“五嗽”、“风湿”、“蛊毒下血”等等，不过用量很少，以起火上浇油之作用，激发病邪倾巢出动，聚而歼之之法也。但此举非常危险，掌握稍

失法度，弄得全军覆没，置患者于死地，即国破家亡人亡也。

此花又名闹羊花、惊羊花、老虎花、玉枝花、黄踯躅、黄杜鹃、羊不食草等，多生于山谷，树高二至四尺，叶似桃叶，花黄似瓜花，品种有多种，以此种为最毒，即真正之羊踯躅花也，希采药者注意，切莫轻尝也。

瓜 蒂

气味苦寒有毒，治大水，身面四肢浮肿，下水，杀蛊毒，咳逆上气，及食诸果、病在胸腹中，皆吐下之。

张隐庵曰：甜瓜生于嵩高平泽，味甜嗅香，色黄，盖秉天地中央之气化，其瓜极甜，其蒂极苦，合火土相生之气化，故治大水，及身面四肢浮肿，所以然者，秉火土之气，达于四旁，而能制化其水湿，故又曰下水。

土气运行，故杀蛊毒。苦主下泄，故治咳逆上气。苦能上涌，又主下泄，故食诸果，病在胸腹中者，皆可吐下也。

黄杰熙评：张氏以火土相生之气化，注甜瓜蒂之药性主治，颇合经旨，故此注基本可取。

盖甜瓜是先长蒂而后长瓜，蒂极苦而瓜极甜，是火生土之明证。瓜蒂气寒入足少阴肾经；味苦入手少阴心经；色黄入足太阴脾经、足阳明胃经。

色黄入脾胃，苦燥湿，寒清热，为涌泄湿热之圣药，主治《本经》所例湿热为患之病症。其涌吐之力优于下泄，若与藜芦相比较：瓜蒂吐湿热之痰饮，藜芦吐风热之痰饮，以此分别之。仲景善用此药，既可治伤寒，又可愈杂病。

仲景瓜蒂散，瓜蒂一分、熬黄，赤小豆一分，右二味，分别捣筛，为散已，合治之，取一钱匕，以香豉一合，用热汤七合，煮作稀糜，去渣，取汁和散，温顿服之，不吐者，少少加，得快吐，

乃止。诸亡血虚家，不可与瓜蒂散。用治“病如桂枝症，头不痛，项不强，寸脉微浮，胸中痞硬，气上冲咽喉，此为胸中有寒也，当吐之，宜瓜蒂散”；“病人手足厥冷，脉乍紧者，邪结在胸中，心中满而烦，饥不能食，病在胸中，宜须吐之，宜瓜蒂散”；“少阴病，饮食入口则吐，心中温温欲吐，复不能吐，始得之，手足寒，脉弦迟者，此胸中实，不可下也，当吐之；若膈上有寒饮，干呕者，当温之，宜四逆汤”。此条“当吐之”下，未出方，推之宜瓜蒂散无疑。《金匱》“宿食在上脘，当吐之，宜瓜蒂散”。

仲景瓜蒂汤，瓜蒂二十个，右剉，以水一升，煮取五合，去渣，温服。用治“太阳中暈，身热疼重，而脉微弱，此以夏月伤冷水，水行皮中所致也，一物瓜蒂汤主之”；“诸黄，瓜蒂汤主之”。

莨菪子

气味苦寒有毒，主治齿痛，出虫，肉痹拘急。久服轻身，使人健行，走及奔马，强志益力，通神见鬼。多食令人狂走。

张隐庵曰：莨菪子气味苦寒，生于海滨，得太阳寒水之气，故治齿痛；太阳上乘寒气，下有标阳，阳能散阴，故能出虫；太阳阳热之气，能温肌腠，又太阳主筋所生病，故治肉痹拘急。肉痹，肌痹也；拘急，筋不柔和也。

久服轻身，使人健行，走及奔马者，太阳本寒标热，少阴本热标寒，太阳合少阴而助跷脉者，盖阳跷者，足太阳之别，起于跟中，出于外踝；阴跷者，足少阴之别，起于跟中，循于内踝，莨菪子秉太阳少阴标本之精，而助跷脉，故轻身健走若是也。

秉阴精之气，故强志益力。秉阳热之化，故通神及见鬼。

下品之药，不宜久服，故又曰多食令人狂走，戒之也。

黄杰熙评：莨菪子气味苦寒有毒，张氏以其秉太阳寒水之气





风木胆经之症，气味轻清，少阳也。太阳主表，表邪外入，则太阳有病，而恶寒发热也。

瘰疬鼠瘻，皆少阳胆经风热之毒，夏枯草秉金水气味，所以专入少阳，解风热之毒也。

头乃太阳经行之地，膀胱湿热则生头疮，其主之者，气寒清热，味苦燥湿。

凡积聚而有形可征，谓之症，乃湿热结气也，味辛可以散结，味苦可以燥湿，所以主之也。

瘰亦少阳之症，其主之者，以夏枯草专治少阳之病，而有辛散之功也。

湿邪伤下，脚肿湿痹，无非湿也，苦能燥湿，所以主之，且入肺与膀胱，而有祛湿之力。湿胜则身重，既有祛湿之功，所以又能轻身也。

黄杰熙评：张氏以夏枯草秉金水之气，与得一阳之气，即少阳之气而生，注解主治各症，简明扼要，击中关键之所在，故此注基本可取，遗憾的是对味苦之由来，未加运用。

叶注归经准确，突出秉金水之气独全，决定为主治少阳相火风木胆之症，较之张注有进一步之发挥，遗憾的是未推出乘风木之肝经来，属美中不足。其对主治各症之注解，亦比张注有深一层之阐发，但只解到了症，而未提到瘰。瘰者，假也，气结而假物以成形，推之可移，时有时无之谓也，味辛可以散之，而未论及，不无遗珠之憾。

合观二氏之注，并加入余之补充以认识夏枯草之性能与主治，则更能掌握该药之运用矣。

《医宗金鉴》夏枯草膏，夏枯草、当归、白芍、元参、乌药、浙贝、僵蚕、昆布、桔梗、陈皮、香附、川芎、红花、甘草，加白蜜熬膏。治肝旺血燥，瘰疬坚硬，每晨用该膏一匙，冲白开水喝，一月有效。

《张氏医通》夏枯草散，夏枯草、当归、白芍、玄参、炙甘草，研末煎服。治肝虚，目珠疼痛，至夜尤剧。按：夏枯草本来是用花穗，而《医通》处方是“夏枯草花”，故将花字去了。此方用之，有一定疗效。

夏枯草治肝阳上亢之高血压，颇有奇效，因其苦寒清肝火，辛平肝风之故也。

蚤 休

气味苦微寒有毒，主治惊痫，摇头弄舌，热气在腹中。

张隐庵曰：一者水之生数也，七者火之成数也，三者一奇二偶、合而为三也。蚤休三层，一层七叶，一花七瓣，秉先天水火之精，故主治惊痫摇头弄舌，乃小儿胎惊胎痫也，胎惊胎痫，乃热毒之气，得于母腹之中，故曰热气在腹中。

愚按：蚤休，一名河车，服食此草，又能辟谷，为炼修元真胎自长生之药，故主治小儿先天受热之病。学者得此药而推广之，则大人小儿后天之病，亦可治也。

黄杰熙评：张氏注蚤休，从《河图》生数、成数说起，兜了一个大圈子，决定秉先天水火之精，以注主治之症。简言之，蚤休不过是清热解毒消肿之药而已，张注欲深反晦，不足取也。

蚤休，亦名草河车、紫河车、重楼、重楼金线、三层草、七叶一枝花、草甘遂、白甘遂等等，不胜枚举。

山野自生，多见于幽谷之地，茎高一尺余，叶长椭圆形全绿，一茎直上，叶围茎生，有一层者、二、三、四、五层者不等，每层叶数有六、七、八片者不等，立夏后叶中间抽花茎，茎顶开花，呈淡黄绿色，花八片，分两层，外层长大，内层短小，各为四片，中心抽出花蕊，长约四、五寸，呈金黄色，即“金线”也；层层轮生之叶，即“重楼”也。由此观之，张引河图之数以论定，诸

多不确，不足取也。

药用其根，其形略似干姜而带紫色，气微寒入足少阴肾经；味苦入手少阴心经；紫者，水火之间色，故得先天水火之气化也。

主治惊痫，摇头弄舌，热气在腹中者，妇人怀胎，受惊吓，惊则气下，坠入子宫中，胎受其气，久则发热，出生后，热发风生，头为诸阳之本，上头则摇头；舌为心之苗，入舌则弄舌，皆似风动之象，称为惊痫，按其根源是热在腹中之故，蚤休具先天水火之象以生，入肾滋水养肝木以息内风；苦寒清热，以治热气在腹中，风火平戢，故可治以上诸病也。

后世本草，多谓蚤休能治蛇咬、痈肿、疮毒，实验之亦有效应。而俗谚云：“七叶一枝花，深山是我家，痈疽如遇着，一似手拈拿”。是歌颂蚤休功德之词，虽然过誉，但具一定效果。

《卫生易简方》用蚤休为末，每服半钱，用温开水或奶头蘸药末喂下，治小儿胎风，手足搐搦，每见功效。

《集简方》治中鼠蟻毒，用蚤休磨水服即愈。

白 芨 根

气味苦平无毒，主治痈肿恶疮，败疽伤阴死肌，胃中邪气，贼风鬼击，非缓不收。

张隐庵曰：白芨气味苦平，花红根白，得阳明少阴之气化，少阴主藏精，而精生于阳明，故主治痈肿恶疮，贼风非缓诸症。

黄杰熙评：张氏以少阴阳明之气化注白芨，注得敷衍塞责，简直不成样子，是注经中之低下者，不可取。

白芨自生于山溪阴湿之地，亦有盆栽观赏者，地下有类圆形、或鹰爪形之块根白色，初春自根抽出剑鞘形之平行脉叶片，中心长出花茎，茎上亦出同样之叶片，茎端分枝，枝上开紫红色花，似兰花，甚艳丽，排列呈总状花序，花后结蒴果，根供药用。

色白气平入手太阴肺经；味苦入手少阴心经。为心肺气血之药物，有活血化痰，止血生肌之殊功。

主治痈肿恶疮，败疽伤阴死肌者，“诸疮痛痒，皆属于心”。味苦入心，气平入肺，气血流畅，生新化痰之效也。

气血流畅，正气沛然，则胃中邪气自去；贼风鬼击，无容身之地；痲缓不收，中贼风鬼击之结果，贼风鬼击去，气血畅达，则肢体康复矣。

白芨是治肺空洞出血之要药，有填空止血之特效。

《验方》独圣散，白芨研末，糯米汤调服，治吐血、咯血。

鼻衄不止，白芨末津调涂山根上，并水调3克服之，立止。

白芨反乌头、乌喙。

白 菱 根

气味苦平无毒，主治痈肿疽疮，散结气止痛除热。目中赤，小儿惊痫，温疟，女子阴中肿痛，带下赤白。

张隐庵曰：敛者，取秋金收敛之义，古时用此药敷敛痈毒，命名盖以此，有赤白二种，秉赋与白芨相同。

故主治无甚差别，白菱得阳明少阴之精汁，收藏阴精，是以作糊稠粘；白菱乃蔓草，性惟上延，而津液濡上，故兼除热清目，小儿惊痫，及女子阴中肿痛，带下赤白。

又治温疟者，主清下焦之热，其性从下而上也。

黄杰熙评：张注白菱之性与白芨相同，惟其是藤菱，性惟上延以别之。此说可取，不过其解白菱之性能不准，应以余之补解阐之则确矣。

白菱多用于外科之围药敛药，内科用之很少，因其有毒尔。反乌头。

《肘后方》治发背初起，水调白菱末涂之；《圣惠方》治疗疮

初起，亦用是方，疗效可靠。

《千金方》治风痹，筋急肿痛，屈转异常。方用：白藜二分、熟附子一分，为末，每酒服半刀圭，日二服，以身中热行为候，十日便觉，忌猪肉冷水。

鬼 白

气味辛温有毒，主治杀蛊毒鬼疰精物，辟恶气不祥，逐解百毒。

张隐庵曰：鬼白以九白为良，故名九白。九，老阳之数也，阳者，天气也，故《别录》名天白。

气味辛温，秉太阳阳热乾金之气，故主杀蛊毒鬼疰精物，及恶气不祥，并逐邪解百毒。

《金匱》方治伤寒今愈不复者，助太阳之气也。盖阳气者，若天与日，此花随天旋转，而又不見天日，犹天德惟藏，不自明也。

黄杰熙评：张注以鬼白俱九个白为良，九又为老阳之数，决定其气味辛温，是秉太阳阳热乾金之气，用以注解主治各症，可谓欲求深奥，反多晦义之佐证。

末引《金匱》方用鬼白之理，亦是如此晦涩难通。

盖鬼白生于深山岩谷石上，一年生一茎，茎顶长一叶，似荷叶而小巧，茎间出花序，花开色红，为其叶所蔽，不见天日，一年长一茎，二年新茎出，老茎即枯死，茎基成一白，十年十白，百年百白，以此纪岁，其根似射干，世售之鬼白，皆射干伪充，真者已无，欲得真者，只有到幽谷悬崖自采。以其茎之新成代谢论，又名害母草；以其叶论，又名独脚莲、独荷草、山荷叶、旱莲；以其叶形论，又名八角盘、唐婆镜；以其花论，又名羞天花等等。

鬼白气湿入足厥阴肝经；味辛入手太阴肺经。为金木相克生成之间气药，故其花与叶，随日出日落而转移，其花有风不动，无

风自摇。其原理与白头翁同。

主治蛊毒鬼疰精物者，蛊毒乃风湿之患；鬼疰精物乃阴邪之盛也，鬼白之辛以制风，温以燥湿，故治蛊毒；辛又为乾天之象，花叶随日往来，得阳精最足，故可治鬼疰精物之阴邪，阴谋鬼祟，怕见天日阳光也。

辟恶气不祥，逐解百毒者，亦乾天日光逐邪，辛散温通之力也。

《金匱》紫石英寒食散方，治伤寒今愈不复。方组：紫石英、白石英、赤石脂、钟乳研碎、栝蒌根、防风、桔梗、文蛤、鬼白各十分、太一余粮十分烧、干姜、附子炮去皮、桂枝去皮各四分，右十三味，杵为散，酒服方寸匕。

其中鬼白能逐恶邪不祥之气。

梓 白 皮

气味苦寒无毒，去三虫。

张隐庵曰：梓楸同类，梓从辛，楸从秋，秉金气也；气味苦寒，秉水气也。

秉水气，故主治热毒。秉金气，故主杀三虫。

《阳明篇》云：“伤寒瘀热在里，身必发黄，麻黄连翘赤小豆汤主之。”内用梓白皮，义可知矣。

黄杰熙评：张注梓白皮，秉金水之气，既杀虫又治热毒，未引仲景方以应用之，可谓言简意赅，故此注可取。

柳 花

气味苦寒无毒，主治风水黄疸，面热黑。

张隐庵曰：柳性柔顺，喜生水旁，受寒水之精，感春生之气，

故纵横顺逆插之皆生。

得春气则能助肝木以平土，故主治风水黄疸。得水精则能清热气而资面颜，故治面热黑。

黄杰熙评：张注柳花得寒水之精，感春生之气，即得水木之性以解主治，水滋木，木动生风，岂不是以风治风，以水治水了吗？黄疸是湿热、湿寒郁滞熏蒸之病，风燥湿，寒清热，治湿热熏蒸之黄疸，到还勉强说得通，注湿寒则不行。面热黑，热者火之气，黑者水之色，亦湿热上蒸之病尔，柳花味苦燥湿，气寒清热，花性又主散，故可治之。

水与湿同类，尚流行者为水，着而不行者为湿，风水者，汗出风入，水停皮肤，尚未成湿之病也，柳花色白轻扬，金制风木，轻扬散风，苦燥湿，寒入肾经而行水，故可治之。

张氏理路未透澈，故其注似通非通，火候不到之故尔。

柳花成熟时称柳絮，又称杨花。

《摘元方》治脚多汗湿，以杨花着鞋及袜内穿之，效验非常。

《外台秘要》治金疮出血，以柳絮封之即止。

《普济方》治面上脓疮，以柳絮腻粉等分，用灯油调涂。

柳 叶 (附)

气味苦寒无毒，主治恶疥痂疮马疥，煎汁洗之立愈。又疗心腹内血止痛。（《别录》）

黄杰熙释：柳叶色青细长，随风飘荡，得风木之和气，入足厥阴肝经；气寒入足少阴肾经；味苦入手少阴心经。

主治恶疥痂疮马疥者，“诸疮痛痒，皆属于心”，柳叶色青疏风，苦寒入心清热之功也。

疗心腹内血止痛者，得肝木之和气，可以疏散血滞，血行畅达，则痛止，气寒滋水，味苦清热，则血清和而不滞结，故可疗

心腹内血止痛也。

《肘后方》治卒得恶疮，或面上恶疮，用柳叶或柳皮水煮汁，入盐少许，频洗之，以愈为度。

《集简方》治小便白浊，用清明柳叶煎汤代茶饮，以愈为度。按：他时之新出嫩柳叶亦有效。

杨柳枝及根白皮（附）

气味苦寒无毒，主治痰热淋疾，可为浴汤，洗风肿痒痺，煮酒漱齿痛。（《唐本草》）；近今以屋檐下插柳经风日者，煎汤饮，治小便淋浊痛，通利水道。（《民俗集验方》）

黄杰熙释：杨柳枝及根白皮，气味归经与柳花相同。

主治痰热淋疾者，苦寒清热解毒，利水通淋之功也。

可为浴汤，洗风肿痒痺者，祛风清热之效也。煮酒漱齿痛者，酒体阴而用阳，入柳枝、柳根皮之祛风清热燥湿药，则散邪之功更宏也。

屋檐下插柳，经烟火人迹之喧染，风吹日晒之锻炼，其性格更柔和，气味更浓郁，用之治小便淋浊痛，通利水道之功，效力更速也。

《外台秘要》治黄疸初起，用柳枝煮浓汁半升，顿服。

《本事方》治痔疮如瓜，肿痛如火者。“柳枝煎浓汤洗之，多灸三、五壮，王及郎中病此，驿吏用此方灸之，觉热气入肠，大下血移至痛，一顷遂消，驰马而去”。余曾用此方此法治乡友陈友梅病此，证明效果准确。

郁李仁

气味酸平无毒，主治大腹水肿，面目四肢浮肿，利小便水道。

张隐庵曰：李乃肝之果，其仁当治脾。郁李花实俱青，其味酸甘，其气芳香，甲己合而化土也，土气化，则大腹水肿，四肢面目浮肿自消，小便水道自利。

黄杰熙评：张注以甲己化土，土气化，解郁李仁之主治各症，通则通矣，但开始即误，谬种流传也。

若以天干配脏腑，脏为阴，肝应配乙木，胆配甲木，乙庚化金，肝与大肠化合；甲己化土，胆与脾化合，一阴一阳相化合之理，见于《易经》、《内经》，故曰张氏开始即误也。证实张氏欲求深奥，超凡脱俗，每多晦义，误己误人之处也。

盖郁李仁气平，得天秋平之金气，入手太阴肺经；味酸，得地东方之木气，入足厥阴肝经。味酸气平，降多于升，阴也。

主治大腹水肿，面目四肢浮肿者，大腹、四肢，脾之外候；面，脏腑之外候，目，肝之外候，脾土衰不能制水，洪涝灾害作矣，波及所有脏腑受其害之症状也。郁李仁味酸泄肝，肝主疏泄，水有出路也；气平益肺，肺气降，三焦膀胱，水道通畅，决渎而去之也，故可以治之。

至于利小便水道者，不过言其疏通决渎之功能也，是治水肿之注脚词也，措施也，方法也，手段也。

《独行方》治脚气浮肿，心腹满，大小便不通，气急喘息者，方用：郁李仁十二分，捣烂水研绞汁，薏苡捣如粟米大三合，同煮粥食之。

巴 豆

气味辛温有毒，主治伤寒温疟寒热，破症瘕结聚坚积，留饮痰癖大腹，荡练五脏六腑，开通闭塞，利水谷道，去恶肉，除鬼毒蛊疟邪物，杀虫鱼。

张隐庵曰：巴豆生于巴蜀，气味辛温，花实黄赤，大热有毒，其性慓悍。

主治伤寒温疟寒热者，辛以散之，从经络而外出于肌表也。破症瘕结聚坚积留饮痰癖大腹者，温以行之。

从中土而下泄于肠胃也，用之合宜，有斩关夺门之功，故荡练五脏六腑，开通闭塞，闭塞开通，则水谷二道自利矣。其性慓悍，故去恶肉。气合阳明，故除鬼毒蛊疟邪物，杀虫鱼。《经》云：两火合并，是以阳明。巴豆味极辛，性大温，具两火之性也，气合阳明，故其主治如此。

愚按：凡服巴霜，即从胸肋大热达于四肢，出于皮毛，然后复从肠胃而出。《伤寒论》有白散方，治伤寒寒实结胸，用此，古人称为斩关夺门之将，用之得当，真瞑眩瘳疾之药；用之不当，非徒无益，而反害矣。

黄杰熙评：张氏以巴豆气味辛温为注，兼之以气合阳明为解，而巴豆确属肠胃之药相合，故此注基本可取。末举服巴豆霜之反应属实，乃《伤寒论》白散治寒实结胸之例证，可谓比较全面之注经方法，值得赞许。

不过，巴豆是辛温大热有毒之药，其毒在其种仁之油质上，服上0.1克，足以大泻不止。去毒之法，将巴豆炒香碾面，包入吸油之草纸数层中，压之以去油，草纸吸油已透，再换新纸压吸之，换至纸上压之无油迹为止，这就是精制之巴豆霜，其大泻之力，基本去掉，用治主治各症，更能起到搜刮消磨之效果。

李中梓治王肯堂之痰喘痼疾，濒临绝气身亡之际，李用巴豆霜投之，立起沉疴，从此两位大名医结为挚友，传为医林佳话。

雷 丸

气味苦寒有小毒，主治杀三虫，逐毒气，胃中热，利丈夫，不利女子。

张隐庵曰：雷丸是竹之余气，感雷震而生。竹茎叶青翠，具东方生发之气，震为雷，乃阳动于下。

雷丸气味苦寒，秉冬令寒水之精，得东方震动之气，故杀阴类之三虫，而逐邪毒之气；得寒水之精，故清胃中热；震为雷为长男，故利丈夫，不利女子。

黄杰熙评：张注雷丸，主要取《易经》震卦之象与辞，兼之气味苦寒为解主治之症，取法准确，故注起来得心应手，故此注可取。

不过，雷丸属于菌藻类多孔菌科，所以又称竹苓，多寄生于竹根，亦有寄生于竹管内者，是杀肠管内寄生虫之要药。

《经验方》下寸白虫，用雷丸水浸去皮，切焙为末，五更初，食炙肉少许，以稀粥送服一钱匕，甚效。

代 赭 石

气味苦寒无毒，主治鬼疟贼风蛊毒，杀精物恶鬼，腹中毒邪，女子赤沃漏下。

张隐庵曰：赭石铁之精也，其色青赤，气味苦寒，秉水石之精，而得木火之化也。

主治鬼疟贼风蛊毒者，色赤属火得少阳火热火气，则鬼疟自

消也；色青属木，木得厥阴风木之气，故治贼风蛊毒也。

杀精物恶鬼腹中毒邪者，能治鬼疰贼风蛊毒，即能杀精物恶鬼腹中毒邪也。

赭石，一名血帅，能治冲任之血，故治女子赤沃漏下。

叶天士曰：代赭石气寒，禀天冬寒之水气，入足少阴肾经；味苦无毒，得地南方之火味，入手少阴心经。气味俱降，阴也。

天地者，阴阳之体；水火者，阴阳之用也。肾为坎水，代赭石气寒益肾，则肾固而一阳上升；心为离火，代赭石味苦益心，则心中一阴下降，水升火降，阴阳互藏其宅，而天地位位矣，故鬼疰邪气，精魅恶鬼贼风毒邪，不能相干，即或有邪，亦必祛逐也；寒可清热，苦可泄邪，所以又主蛊毒，及腹中邪毒也。

肾主二便，心主血，血热则赤沃漏下，苦寒清心，心肾相交，所以主女子赤沃漏下也。

陈修园曰：代赭石味苦益心，则心中一阴下降，水升火降，阴阳互藏其宅，而天地位位矣，故鬼疰贼风精魅恶风，以及蛊毒腹中邪毒，皆可主之。

肾主二便，心主血，血热则赤沃漏下，苦寒清热，心肾相交，所以主女子赤沃漏下。

仲景代赭旋复花汤，用之极少，后人昧其理而重用之，且赖之以镇纳诸气，皆荒经之过也。

黄杰熙评：张注赭石，虽然提到秉水石之精，而得木火之化，实则仅以木火为注，所以注之不够全面透彻，仅得其偏也。

叶注据气味以归经，而遗色质，以迷归经主治，遵经可嘉，而不敢越雷池半步，岂不过于拘谨乎！

以天地阴阳水火为体用，坎离交以喻心肾，用之注解代赭石的主治各症，颇中肯綮，堪称善注，较之张注则具体可靠也。

末以血热注女子赤沃漏下，可谓得其要也，若能兼纳张注所提出之冲任，则全面透彻也。

陈注是抄袭精简叶注而来，读叶注则知陈注之用心也。

末引仲景方，亦将方名前后易位，不成样子，批评之语，亦不切实际，姑置之而不可信也。

盖赭石是炼生铁前之铁矿石，结晶者，谓之辉铁矿赭石；半结晶者，谓赤铁矿赭石，以出产于山西代州者，品质最高，称代赭石，此石表面有疣状突起，似钉头，又称钉头赭石，可入药，无付作用，若误用其他赭石，立即心烦恶心，胃内翻腾，引起呕吐，使镇吐之药，反成引吐之药，其状十分可怕，希望运用此药者，提起注意，免遭意外医疗事故之毁谤。

代赭石系金属铁矿石，与肺金为同性，故入手太阴肺经；色深红而味苦，入手少阴心经；气寒入足少阴肾经，质沉重而下坠，为治诸气血上逆之呕吐，即治邪气上干之呕吐的圣药，用之得当，既药为正品，分量适当者，可愈险症与怪病。

《伤寒论》旋复代赭石汤，旋复花、代赭石、半夏、人参、甘草、生姜、大枣，右七味，以水一斗，煮取六升，去渣，再煎取三升，温服一升，日三服。用治“伤寒发汗，若吐若下，解后，心下痞硬，噎气不除者，旋复代赭石汤主之”。按：此方煮法、煎法、服法，都极讲究，对症遵法服药者，可说神效无比，累用之，从不一误。稍作加减，治食道癌，亦获奇功。

《普济方》代赭石，火煨醋淬七次，研末白汤送服三钱，治妇人血崩，亦颇奏效。

铅 丹

气味辛微寒无毒，主治吐逆反胃，惊痫癩疾，除热下气。炼化还成九光，久服通神明。

张隐庵曰：铅丹火金水之精，得火，化而变赤，气味辛微寒，盖秉金质而得水火之气化。

主治吐逆反胃者，火温其土也。治惊痫者，水济其火也。治癩疾者，火济其水也。

气味辛寒，寒能除热，辛能下气也。

炼化还成九光者，炼九转而其色光亮，还成黑铅也，炼化还光而久服，则金水相生，水火相济，故通神明。

愚按：铅有毒，炼铅成丹则无毒。铅丹下品，不堪久服，炼铅丹而成九光，则可久服，学者所当意会者也。

黄杰熙评：张注以铅丹得火金水之气化，兼气味辛寒，用注主治各症，颇中肯启，故此注可取，但问为什么？确属囫圇。

最后强解“炼化还成九光，久服通神明”，在按语中又加以推翻，推翻了又肯定，反复无常，不知是非，证明其思想之矛盾糊涂，难得也。

盖铅丹又名黄丹、丹粉、朱粉，是用黑铅与硫黄、硝石制炼而成。铅属金，硫磺属火，硝石属水，故曰得火金水之气化也。气味辛咸微寒，味辛入手太阴肺经；咸入足太阳膀胱经；微寒入足少阴肾经。咸是心经之对宫药，外用可以解毒生肌，内服可以坠痰镇心，是治疗癩病惊狂之妙药。《本经》未言咸味，但尝之确具咸味，应以实验为准。

若用铅丹炼化还成九光，则硝黄飞去，剩下的仍是黑铅而发金属光泽，铅有毒，中其毒者齿龈发黑，膀胱内结成铅丸，堵塞尿道，小便不出，成尿中毒而死亡，何能久服？

《伤寒论》柴胡加龙骨牡蛎汤，柴胡、半夏、人参、黄芩、生姜、桂枝、龙骨、牡蛎、铅丹、茯苓、大黄、大枣，右十二味，以水八升，煮取四升，内大黄，切如棋子，更煮一、两沸，温服一升。用治“伤寒八、九日，下之、胸满烦惊，小便不利，谵语，一身尽重，不可转侧者，柴胡加龙骨牡蛎汤主之”。其中用铅丹者，坠痰镇惊也。

铅 粉

气味辛寒无毒，主治伏尸毒螫，杀三虫。

张隐庵曰：伏尸者，伏于泉下之尸，相痲而为传尸鬼疰之病，铅粉从黑变白，从阴出阳，故主治伏尸；秉水气而性寒，故消螫毒；秉金气而味辛，故杀三虫。

愚按：黄丹、铅粉，皆本黑锡（即铅）所成，而变化少有不同，变白者，得金水之气，而走气分；变赤者，得火土之气，而走血分，黄丹秉火土之气，故入膏丹，主痲疽恶疮之用，今时则用铅粉收膏药，以代黄丹。

黄杰熙评：张注铅粉，简明扼要，因铅由黑变白，即由水色变为金色，故得金水之气化，以解主治之法也，而得其结果，未得其如何变化之过程，不无遗憾之处。

盖黄丹、铅粉，皆由铅制作而成，黄丹之制法，是用铅一斤，土硫磺十两（十六两称），硝石一两，熔铅成水，下醋点之，滚沸时下硫磺一块，少顷下硝石少许，待沸定再点醋，照前下少许硝磺，如此下完为止，待为末则丹成，色黄赤，故得火土之气化，而走血分。铅粉之制法，是将铅切成薄片，悬入缸中，缸中放醋一瓶，使之氧化成白色铅霜，扫下和以蛤粉、豆粉而作成，妇女化妆，擦脸使白净之用，铅由黑变白，故得金水之气化，而走气分。张氏不明造化之过程，故解多不彻。

《千金方》治蠹螬尿疮，用酢和胡粉（即铅粉）涂之。

《圣惠方》治鼻衄不止，用胡粉炒黑，醋服一钱，即止。

戎 盐

味咸寒无毒，主明目目痛，益气坚肌骨，去毒蛊。

张隐庵曰：戎盐由海中咸水，凝结于石土中而成，色白青赤，是秉天一之精，化生地之五行，故主助心神而明目；补肝血而治目痛；资肺金而益气；助脾肾而坚肌骨；五脏三阴之气，交会于坤土，故去蛊毒。

黄杰熙评：张氏以色白青赤，是秉天一之精，化生地之五行，以注戎盐，颇得其要，故此注可取。

但认为戎盐是海水盐，则错矣。戎者西戎，古称蛮夷即少数民族聚居之山石地，不经熬炼，自然产出之盐，又称胡盐、羌盐，味咸而臭者真，臭似臭鸡蛋气味，今药房售者，均以粗制海盐块充之，真者绝少。

《金匱》茯苓戎盐汤，茯苓、白术、戎盐，右三味，先将茯苓、白术，以水五升，煮取三升，入戎盐再煮，分温三服。用治“小便不利，蒲灰散主之；滑石白鱼散、茯苓戎盐汤并主之”。其中戎盐，咸寒润下，引苓术并水湿入肾达膀胱，利下小便。

《普济方》治风眼烂弦，用戎盐化水点之，颇见功效。

石 灰

气味辛温有毒，主治疽疡疥瘙，热气恶疮，癩疾死肌，堕眉，杀痔虫去黑子息肉。

张隐庵曰：石者土之骨，以火煨石成灰，色白，味辛性燥，乃秉火土之气，而成燥金之质，遇风即化，土畏木也；遇水即化，火畏水也。

秉金气而祛风，故治疽疡疥瘙。秉土气而滋阴，故治热气恶疮，癩疾死肌。秉性燥烈，服食少而涂抹多，涂抹则堕眉杀痔虫，去黑子息肉。

黄杰熙评：张氏以五行生克制化，以注石灰，可谓一气呵成，淋漓尽致，此注妙哉！完全可取。

《孙真人方》用石灰淋汁，洗疥疮有虫，数次即愈。

《集玄方》治白带白淫，用风化石灰一两、白茯苓三两，为细末，水糊为丸梧子大，每服二、三十丸，空心米汤下，极妙。

天 鼠 屎

气味辛寒无毒，主治面痈肿，皮肤洗洗时痛。腹中血气，破寒热积聚，除惊悸。

张隐庵曰：蝙蝠形极类鼠，而飞翔空中，故曰天鼠，身有翼而昼伏，故曰伏翼，乃蚊蚋乳石之余精，气味辛寒，感阳明太阳金水之气化。

主治痈肿者，面属阳明也，皮肤洗洗时痛者，皮肤属太阳也，痈肿则则气血不和，阳明行身之前，而治面之痈肿，而腹中血气之病，亦可治也。皮肤洗洗，则身发寒热，皮肤时痛，则寒热积聚，太阳主通体之皮肤，而治皮肤洗洗之时痛，则治发寒热，而邪凝积聚者，亦可破也。

肝病则惊，心病则悸，除惊悸者，秉阳明金气，而除风木之惊；秉太阳水气，而除火热之悸也。

黄杰熙评：张氏从天鼠屎气味之辛寒，定为感阳明太阳金水之气化，是正确的，故据此注解之主治各症，亦触类而通，所以此注可取。

天鼠屎，药房名“夜明砂”，据李时珍修治法：“凡采得以水淘去灰土恶气，取细砂晒干，焙用，其砂乃蚊蚋眼也。”用治眼病障翳青盲颇效。

《直指方》治内外障翳，用夜明砂末，化入猪肝内煮食，饮汁效。

《圣惠方》治青盲不见，夜明砂糯米炒黄一两、炙柏叶一两，为末，牛胆汁和丸梧子大，每夜卧时，竹叶汤下二十九，至五更

米饮下二十丸，瘥乃止。

虾 蟆

气味辛寒有毒，主治邪气，破症坚血，痈肿阴疮，服之不患热病。

张隐庵曰：虾蟆生于阴湿坡泽，能作土遁，其色黄黑，气味辛寒，盖秉土金水之气化所生。

主治邪气者，辛以散之也。秉金气故破症坚血。秉土气，故治痈肿阴疮；秉水气，故服之不患热病。

黄杰熙评：张注据其色黄黑，气味辛寒，定虾蟆秉土金水之气化，颇切实际，故所注主治各症，言简意赅，与五行生克制化相合，故可取。

虾蟆能作土遁，妇孺皆知，余少年时，持怀疑态度，捉虾蟆数个，用搪瓷盆叩于屋内坚硬平整之土地上，上压以砖石，次晨慢慢揭盆观之，皆不知去向，空空如也，如此实验几次，一次比一次严密可靠，结果皆是如此，始信物之奇特有如此者。稍长读王安石《字说》云：“俗言虾蟆怀土，取置远处，一夕复还其所，虽或避之，常慕而返，故名虾蟆，或作蛤蟆，蛤言其声，蟆言其班也。《尔雅》作蟿蟿”。余亦好奇而作过实验，证明此说不诬也。如此灵变之物，取之作药饵，效果显然。

《活幼全书》治头上软结，用虾蟆剥皮贴之，收毒即愈。此病小儿最常见，余累用之，皆一贴而消散，大者吸脓血于皮上，结痂而愈。

《外台秘要》治风热邪病，狂言鬼语，用虾蟆烧灰、朱砂等分为末，每服3克，酒服日三，甚有神验。

蜈蚣

气味辛温有毒，主治鬼疰蛊毒，啖诸蛇虫鱼毒，杀鬼物老精，温疟，去三虫。

张隐庵曰：蜈蚣色赤性温，双钳两尾，头尾咸红，生于南方，秉火毒之性，故《本经》主治，皆以火毒而攻阴毒之用也。

愚按：蛇属金，蜈蚣属火，故能制之。鸡应昴宿，是太阳出而燭火灭之义矣。

黄杰熙评：张注蜈蚣，根据是秉火毒之性，全错，故此注应推翻。

蜈蚣气温，入足厥阴肝经；味辛入手太阴肺经、手阳明大肠经、足阳明胃经，秉燥金之气化，身黑，头足尾金黄色，发出闪闪电光，亦燥金闪闪发光之明验也。

主治鬼疰蛊毒者，鬼疰乃十疰之一，鬼邪之气，注人身体，令人寒热淋漓，精神错乱，无处不恶，或沉默不知所苦，积年累月，渐至萎顿而死，既死复传于人，甚至灭门。乃湿阴之毒为患，极似今之爱滋病；蛊毒乃风木克伐脾土，土气无权，湿滞不行，郁而生虫之大肚病，蜈蚣气温暖土；味辛平风木以燥湿，故可治之。既可治鬼疰蛊毒，则能杀鬼物老精而去三虫，乾天之金一照，群魔尽扫也。

啖诸蛇虫鱼毒者，蛇属风木之虫，其行曲屈如风，鱼乃龙蛇之同类，蜈蚣属金，金克木，故可治之。

温疟藏于少阴，发于少阳，先热后寒，热多寒少，水火相乱之病，蜈蚣味辛，金生水，水寒之气可以治热，气温可以散寒，故可治之。

蜈蚣之药效全在其头，用时不可去之，如去之则无效。

《儒门事亲》张子和治破伤风，蜈蚣头、乌头尖、附子底、蝎

稍，等分为末，每用一字或半字，热酒灌下，药末贴创上，取汗愈。

《海上方》治小儿秃疮，大蜈蚣一条、盐一分，入油内浸七日，取油搽之，极效。

蚯 蚓

气味咸寒无毒，主治蛇瘕，去三虫伏尸鬼疰蛊毒，杀长虫。

张隐庵曰：蚯蚓冬藏夏出，屈而后伸，上食稿壤，下饮黄泉，气味咸寒，宿应轸水，秉水土之气化。

主治尸疰蛊毒，盖以泉下之水气上升，地中之土气上达，则阴类皆从之而消灭矣。

蜈蚣属金，名曰天龙；蚯蚓属水，名曰地龙，皆治鬼疰蛊毒者，天地相交，则水火相济，故秉性各不同，而主治乃不相殊。

黄杰熙评：张注蚯蚓，以其秉水土之气化，而有选择性的注解主治之症，虽然持之有理，但已片面追求，不象注经的模式，更谈不上严肃认真，故此注不可取。

前注蜈蚣，明言“属火”，此注蜈蚣又言“属金”，到底属火、还是属金，他也定不下来，信口开河，“天地相交，则水火相济”，不是金水相济，文不对题，胡诌一起。稍加分析，则漏洞百出，所以此注评为下等。为了发明圣《经》之义，不得不越俎代庖，为之闡注以明之。

蚯蚓，商品名“地龙”，既得龙名，说明此物变化莫测，最灵异，是一无须花钱投资建设的气象台。天将雨时，则出土；天将晴时，则夜歌，其歌声啾啾悦耳，因而得“歌女”之雅名，《尔雅》叫“啾螾”，取其声以命名也。

蚯蚓，取其白颈者始可入药，又叫“白颈蚯蚓”，以其毒小也，

非无毒，其咬人，不知解法，中毒可以致死人命。《经验方》云：“蚯蚓咬人，形如大风，眉须皆落，惟以石灰水浸之良。昔浙江将军张韶病此，每夕蚯蚓鸣于体中，有僧教以盐汤浸之，数遍遂瘥。”《本草衍义》云：“此物有毒，崇宁末年，澧州兵士暑月跣足，为蚯蚓所中，遂不救；后数日，又有人被其毒，或教以盐汤浸之，并饮一杯，乃愈也。”

蚯蚓生活于土中，其行屈曲，南方人又呼之曰“螭螭”，能疏松土壤，木能疏土，故得风木之气化，入足厥阴肝经；颈白得秋金之气化，入手太阴肺经；身红得南方地火之气化，入手少阴心经；气寒得北方水精之气化，入足少阴肾经；味咸得海水之气化，入足太阳膀胱经。又以得水精为主，以盐撒之，遂化为水，是其验也。

主治蛇瘕者，人误食蔬菜上布有蛇精卵，而未洗净者，聚于腹中或头身四肢，时隐时现如蛇形之瘕，蛇属风木，蚯蚓以其金性，故可克而制之。

去三虫伏尸鬼疰蛊毒者，蛔虫、烧虫、绦虫曰三虫，皆湿热蕴生；伏尸鬼疰传染病，阴邪为患；蛊毒风湿酿成。蚯蚓气味咸寒清热，秉金气而燥湿祛风，秉火气而祛阴邪，生于土而秉土气补土运四方，五行具备之灵物，左宜右有，前后上下齐具，而战胜各方扑来之敌，故可以统而治之。

至于杀长虫者，长虫乃风木之虫，秉金气以杀之，秉木气以诱之，除之必净也。

《肘后方》治中蛊下血，如烂肝者，以蚯蚓十四条，苦酒三升，渍至蚓死，服之，垂死者，皆可治。按：苦酒即醋也。

《圣惠方》救木舌肿满，不治杀人者，蚯蚓一条，以盐化水涂之，良久渐消。

蛇 蛻

气味咸甘平无毒，主治小儿百二十种惊痫，蛇痫，癩疾瘰疬，弄舌摇头，寒热肠痔蛊毒。

张隐庵曰：蛇蛻色白如银，至洁，气味咸平，秉金水之气化。金能制风，故治小儿百二十种惊痫、蛇痫之症，癩疾瘰疬，惊痫病也；弄舌摇头，蛇痫病也。

水能清热解毒，故主治大人寒热肠痔，及蛊毒之寒热也。

愚按：痫症惟一，既曰惊痫，复曰蛇痫，则痫症不止一端，若以内之七情，外之形象求之，不啻百二十种，先圣立言，当意会也。

黄杰熙评：张注蛇蛻，以其秉金水之气化为注，金用上了，水也用上了，用得挺得体，可谓善注。对病症百二十种，也补白清楚了，可谓全面。

但《本经》明言“蛇蛻气味咸甘平”，独独不提味甘，甘是土之味，应该说：秉土金水之气化才对，从表面上看，好象“土”用不上，靠边站去，张氏采用实用主义姿态，故隐而不提，与其名“隐安”是相符的，隐去了又不交待，到底是《本经》错了，该隐呢？应交待明白，没有这样作，实在不好，不象注圣《经》之诚恳老实态度，至低限度不完全象。

盖土主镇静，对主治百二十种病症，有镇静而使之不癩倒瘰疬，摇头弄舌之效，以治其标；金能制风，以治其本，是标本兼治的良药。

至于寒热肠痔蛊毒，是土气衰败，风寒湿三邪，因伏为患之病，味甘补土，又是治其本，土气有权，邪不能留；水能清热解毒，乃治其标也。

张氏研究蛇蛻不深不透，半瓶子晃荡，自以为是，在注经上，

造成有得有失之结果也。

痲风白驳：《外台秘要》用蛇蛻摩数百遍，令热，弃草中，勿回顾；《圣惠方》用蛇蛻烧灰，醋调涂。

《圣济总录》治石痛无脓，坚硬如石者，用蛇皮贴之，经宿即愈。

斑 蝥

气味辛寒有毒，主治寒热鬼疰蛊毒，鼠瘻恶疮，疽蚀死肌，破石癰。

张隐庵曰：斑蝥喜食豆花，气味辛寒有毒，色兼黄黑，盖秉金水之气化，而为毒虫，故主散恶毒，消恶疮，攻死肌，破石癰，乃以毒而攻毒也。

黄杰熙评：张注斑蝥，是秉水金之气，以毒而攻毒为注，丢三拉四，囫圇吞枣，稀里糊涂之注也。

斑蝥，《太平御览》引《神农本草经》云：“春食芫花为芫青；夏食葛花为亭长；秋食豆花为斑蝥；冬入地中为地胆。”一虫因饮食不同而四变，春夏气候温热，故芫青、亭长之气味辛温有毒；秋冬凉冷，故斑蝥、地胆之气味辛寒有毒，四药之效用，基本相同，就是有寒温之别，量其病之寒热，相反相成以用之。

斑蝥气寒入足少阴肾经、手太阳小肠经、足太阳膀胱经；味辛入手太阴肺经、手阳明大肠经、足阳明胃经，总之是秉金水之气化也。

主治寒热鬼疰蛊毒者，斑蝥味辛有毒，以辛辣之味而散寒；气寒以治热；金为乾天之象以制鬼疰阴邪；辛以燥湿，寒以清热，而治湿热蕴蒸之蛊毒。

鼠瘻恶疮，乃少阴水火变蒸之病，斑蝥气寒以清热宁心，味辛燥湿以平风木，湿热去，风木平，水火各安其宅，则鼠瘻恶疮

愈。

金主削之，水主润之，疽蚀死肌，削之润之，则复其常也。

石瘕者，膀胱结石而瘕闭，尿之不出也，斑蝥味辛，具金刚之性，破而碎之，无堵塞膀胱口之患，故曰破瘕闭。

后世多用斑蝥治疯狗咬伤和顽癣，效验可靠。

《广利方》治瘰疬经久不瘥，用斑蝥一枚，去翅足、微炙，以浆水一盏，空服吞之；用蜜水亦可，重者不过七枚，瘥也。

《卫生易简方》治疯狗咬伤，云：此乃九死一生之病，急用斑蝥七枚，以糯米炒黄、去米，为末，酒一盏，煎半盏，空心温服，取下小肉狗三、四十枚为尽；如数少，隔数日再服，七次无狗形，永不再发也，累试累验。

《外台秘要》治积年癣疮，用斑蝥半两，微炒为末，蜜调敷之；《永类方》用斑蝥七个，醋浸，露一夜，搽之。

蛭 螂

气味咸寒有毒，主治小儿惊痫瘈瘲，腹胀寒热，大人癫疾猖狂。

张隐庵曰：蛭螂甲虫也，出于池泽，以土包转而成生育，气味咸寒，是甲虫而秉水土之气，甲虫属金，金能制风，故主治小儿惊痫瘈瘲；秉土气，故治腹胀之寒热；秉水气，故治大人之癫疾猖狂。

黄杰熙评：张注蛭螂，是据秉土金水之气化为注，解得有条不紊，击中关键，故此注可取。

蛭螂亦名蛭蛭，《庄子》云：“蛭蛭之智在于转丸。”喜入粪土中取屎丸，而推弄之，故俗名推丸、推屎爬、屎克螂。抨击对方说脏话时之歇后语是“屎克螂打喷嚏，满嘴喷粪”。蛭螂之脏，处污秽而有转丸排污之作用，外科利用其特性，排脓核于溃烂脓肿

之外，有特效。

《验方》治小儿惊风，不拘急慢，用蛭螂一枚，杵烂，以水一小盏盛药，入百沸汤上荡滚，去渣饮之。

《外台秘要》治痲痲风病，取涂死蛭螂杵烂，揩疮令热，封之，一宿瘥。

鼠 妇

气味酸温无毒，主治气癃，不得小便，妇人月闭血癥，痲痲寒热，利水道坠胎。

张隐庵曰：鼠妇感阴湿而生，气味酸温，秉太阳寒水、厥阴风木之气化。

太阳水气行于肤表，则气癃而不得小便者，可治也。厥阴木气上行外达，则妇人月闭而为血癥，可治也。

膀胱气癃在内，则不得小便；在外，则有痲痲寒热之病，鼠妇治气癃，则痲痲之寒热亦可治也。不得小便，则水道不利，鼠妇治不得小便，则水道亦可利也。

妇人恶血内闭，则为血癥；新血内聚则为妊娠，鼠妇治妇人月闭血癥，则坠胎亦其验也。

黄杰熙评：张注鼠妇，秉太阳寒水与厥阴风木之气化，是正确的，故所注主治各症是合拍的，病机与推阐之注，亦切实际，故此注可取。

鼠妇，《尔雅》作“鼠负”，言鼠在坎中，其身常负此虫，今作“妇”字，是以讹传讹；《诗》作“蚴蟊”，《诗》云“蚴蟊在室”，俗呼“潮虫”、“湿生虫”，具调寒热，破症癥，通经利小便与坠胎之功。

《金匱》鳖甲煎丸，鳖甲、乌扇、黄芩、柴胡、鼠妇、干姜、大黄、芍药、桂枝、葶苈、石苇、厚朴、牡丹、瞿麦、紫葳；阿

胶、蜂窠、赤硝、蛭螂、桃仁、半夏、人参、麝虫，右二十三味，为末，取煨炆灰一斗，清酒一斛五斗、浸灰，候酒尽一半，着鳖甲于中，煮令泛烂如胶漆，绞取汁，内诸药煎为丸，如梧子大，空心服七丸，日三服。用治“病疟，以月一日发，当以十五日愈，设不瘥，当月尽、解；如其不瘥，当云何？师曰：此结为疟瘕，名曰疟母，急治之，宜鳖甲煎丸”。按：其中用鼠妇，是调寒热，入血分破疟瘕，入气分利尿，使气血两分，皆得通利。

水 蛭

气味咸苦平有毒，主逐恶血瘀血月闭，破血症积聚，无子，利水道。

张隐庵曰：水蛭乃水中动物，气味咸苦，阴中之阳也。

咸苦走血，故主逐恶血瘀血，通月经；咸软坚，苦下泄，故破血症积聚；及经闭无子；感水中生动之气，故利水道。

仲祖《伤寒论》，治太阳随经，瘀热在里，有抵当汤，内有水蛭，下瘀血也。

黄杰熙评：张注水蛭，只取气味咸苦，而遗弃气平不提，以咸苦走血，咸软坚，苦下泄为解主治之症，通则勉强，遗义与不通之处存焉，故此注欠佳，可取者不多。

盖水蛭生于水中，游行缓慢，遇人与兽体，则迅速贴上，锐而善入，利用腹下吸盘，吮吸其血，此与人身血液流行，遇瘀阻而贴上以破之无以异，故为逐恶血瘀血月闭，破血症积聚之妙药，瘀血恶血瘀瘕积聚去，子宫与卵巢及输卵管，干净畅通，使无子之妇女，可以受孕而有子，是治无子之妙药，非如张氏之解，摩挲两可，治月闭无子也。血行气达，故可以利水道，气化行，江河决也。

至于咸苦走血，咸软坚，苦下泄，以及气平削坚结等等之解，

皆层次低下之注释也。

后世药书谓，水蛭须炒用、灸用，如服生水蛭入腹，可生许多小水蛭吸人之血等等，皆无稽之谈，而水蛭之药效，全在生用上，炒熟则失效用，用之等于不用，兹举一例以明之。

张寿甫曰：“曹治邑（河北盐山）城西傅家庄傅寿朋夫人，经血调和，竟不生育，细询之少腹有症瘕一块，遂单用水蛭一两，香油炙透为末，每服五分（若入煎剂，当用二钱），日再服，服完无效；后改用生者，如前服法，一两犹未服完，症瘕全消，逾年即生男矣。此后屡用生者，治愈多人，惟气血亏损者，宜用补助气血之药佐之。”

雀 瓮

气味甘平无毒，主治寒热结气，蛊毒鬼症，小儿惊痫。

张隐庵曰：雀瓮多生榴棘树上，夏月羽化而出毛虫，有毒，雀瓮则无毒矣。气味甘平，感木火土之气化，土气和于内外，则寒热结气可治矣；木气条达，则土气疏通，而蛊毒可治矣；火气光明，则鬼症及小儿惊痫，皆可治矣。

黄杰熙评：张注雀瓮，云感木火土之气化，以解主治之症，到还得心应手，但气味甘平，甘为土之味，平为金之气，那末，木气何来？火气又何来？凭空捏造，以注经文，该当何罪！是实用主义影响之恶果也。

盖雀瓮是毛虫未出壳时之茧房，南方屋内梁上壁上，及屋外之树上多有之，尤以榴棘树上为最多，毛虫有毒，人身接触之，立即红肿痛痒难忍，故每逢阴历四月初八，乡人书写红纸架成十字拱条以嫁之，上写四句顺口溜曰“佛生四月八；毛虫今日嫁；嫁到深山去，永世不归家。”而嫁了毛虫架之人家，毛虫就是少得多，甚至到无，采架者照例多。人相仿效，流传迄今而不绝也。今普

遍使用杀虫剂后，雀瓮可能灭绝，物以稀为贵，雀瓮身价千倍、万倍，成了名贵药材了。

毛虫茧壳却无毒，因雀儿喜食此茧，《本经》名“雀瓮”；《蜀本草》名“雀儿饭瓮”；《图经》名“天浆子”；《纲目》名“红姑娘”等等。雀瓮气平入手太阴肺经；味甘入足太阴脾经；色红属火，入手少阴心经；多浆汁属水，入足少阴肾经；其茧多寄生于木上得木气，入厥阴肝经。秉金木水火土五行之气化，故主治寒热结气，以火治寒，以水治热，以金木疏治结气。又以金火治蛊毒鬼症；更以金平火照之气化，治小儿惊痫。

《圣惠方》治撮口噤风，用棘树上雀儿饭瓮，未开口者，取内物和乳汁研灌之，神效。

《验方》治乳蛾喉痹，用天浆子，即红姑娘，徐徐嚼咽，迅即消散。

萤 火

气味辛微温无毒，主明目。

张隐庵曰：润下作咸，其臭腐，腐草为萤，秉水气也；萤为火宿，名曰萤火，秉火气也；生于七月，其大火流西，故气味辛温，水之精，火之神，共凑于目，故《本经》主明目；而《别录》又云通神明。

黄杰熙评：张注萤火，主要以水之精，火之神，共凑于目，以解主治。论水平还勉强可以，就是捉襟见肘，丢三拉四，使人见丑。

张氏提到了“生于七月，大火流西，故气味辛温”，就是没有下文，不知气味辛温，是干什么的。

萤火气温，入足厥阴肝经；味辛入手太阴肺经；色黄入足太阴脾经；其腹部发火，秉火气入手少阴心经；生于腐草之中，腐

气属水，秉水气入足少阴肾经。

肝开窍于目，眼之五轮，瞳仁属肾水；黑睛属肝木；白睛属肺金，眼角之红肉及血管属心火；眼皮属脾土，萤火气温入肝，而秉金木水火土之气化，以调整和滋养五轮，使之各尽职守，故主明目而通神。

《神仙感应篇》云：“务成子萤火丸，主辟疾病恶气，百鬼虎狼蛇蝎蜂蛋诸毒，五兵白刃盗贼凶害。

昔汉冠军将军、武威太守刘子南，从道士尹公受得此方，永平十二年，于北界与虏战，败绩，士卒略尽，子南被围，矢下如雨，未至子南马数尺，矢辄堕地，虏以为神，乃解去。子南以方教子弟，为将皆未尝被伤也。汉末青牛道士得之，以传安定皇甫隆，隆以传魏武帝，乃稍有人得之，故一名冠军丸，又名武威丸。

用萤火、鬼箭羽、蒺藜各一两，雄黄、雌黄各二两，羖羊角煨存性一两半，矾石火烧二两，铁锤柄入铁处烧焦一两半，俱为末，以鸡子黄、丹雄鸡冠一具，和捣千下，丸如杏仁，作三角绛囊盛五丸，带于左臂上，从军系腰中，居家挂户上，甚辟盗贼也。”

宋·庞安时《总病论》云：“曾试用之（指萤火丸），一家五十余口，俱染疫病，惟四人带此者不病也。”许叔微《伤寒歌》云：“余亦恒欲试之，因循未暇耳！庞翁为苏（东坡）黄（山谷）器重友，恕不虚言。”庞苏黄许四人，皆同一时代之名人，是君子非小人，故其事迹可考，其言可信。余青年时常入山采药，一怕狼群虎豹、蛇蝎毒虫所伤；二怕匪徒劫盗所害，欲自制萤火丸佩带之，诸药可备，就是寻不到鬼箭羽，药房没有，药市场没有，入山自采没有，又不敢进山更深更远，怕受到伤害，只好作罢。详记于此，愿天下制药厂商，有志济世活人者，组织人力物力，研制出“务成子萤火丸”来，为防病御敌，立一大功劳，解放军战士、武警公安干警，捉拿敌犯时，佩戴上，比穿防弹衣方便安全多矣，推而广之，全世界六十亿人，每人佩戴五丸，作为预防灾病之用，每

年要节省下多少钱财来搞建设与改善人民生活呀！既作了莫大善事，销售巨增，经济效益也是非常可观的，有志者，不妨先小批量生产出来，试销一下好吗！

《圣惠方》治劳伤肝气目暗，明目方，用萤火二七枚，纳入大鲤鱼胆中，阴干百日，为末，每点少许，极妙。

《便民图纂方》黑发方，七月七日夜，取萤火虫二七枚，捻发自黑也，多人试之，效果颇佳。

衣 鱼

气味咸温无毒，主治妇人疝瘕，小便不利，小儿中风，项强背起摩之。

张隐庵曰：衣鱼色白，碎之如银，秉金气也；命名曰鱼，气味咸温，秉水气也。

水能生木，故治妇人之疝瘕，妇人疝瘕，肝木病也；金能生水，故治小便之不利，小便不利，水不行也。

小儿经脉未充，若中于风，日久不愈，则项强背起，乃督脉为病，督脉合肝部，属太阳，衣鱼秉金水之气化，故当用以摩之。

黄杰熙评：张注衣鱼，以秉金水之气化为解，注主治之症，似通非通，颇为尴尬。如衣鱼气味咸温，咸可属水，温能秉水气吗？明显有误。

盖衣鱼生于棉花衣服或古旧书中，又名蠹鱼、白鱼，专门以纤维纸片为食。其色银白，秉金气入手太阴肺经；味咸秉水气，入手太阳小肠经、足太阳膀胱经；气温秉春木之气，入足厥阴肝经。

主治妇人疝瘕，小便不利者，疝瘕是厥阴肝经之病，肝寒气结，小肠下坠，嵌入腹腔壁隙之病，衣鱼气温入肝经，温散寒气之结，使小肠上提出腹腔隙，故可治之；色白入肺，肺为水之上源，肺气通调，膀胱气化行，故治小便不利，而使之通利。

小儿中风，风气通于肝，循太阳经脉上行，则项强背起，衣鱼秉金气以制风；秉水木之气，以滋管经脉，使之柔合，摩之则患部直接吸收，既制之，又滋营之，攻补相济，故能治之。

《金匱》滑石白鱼散，滑石、白鱼、乱发烧、各二分，右三味，杵为散，饮服方寸匕，日三服。用治“小便不利，蒲灰散主之；滑石白鱼散、茯苓戎盐汤并主之”。

《外台秘要》治偏风口喎，取白鱼摩耳，左喎摩右，右喎摩左，正乃已。